

ラブライブ～9人の女神と戦うDr.ライダー達～

ハイパームテキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日子供をかばって死んでしまった。

そんな自分の前に突如現れた神様。

「ある世界に転生してバグスターウィルスと戦って欲しい。」

そう言われ、9人の女神がいる世界、『ラブライブ!』の世界に転生することになった。

転生した世界で出会う女神たちと共に戦う仲間達。

そして姿を表すバグスター。

果たして、転生したライダーたちは9人の女神を支えながら、世界を守ることができ
るのか!?

G
A
M
E
&
M
U
S
I
C

S
T
A
R
T
!!

目次

プロローグ | 1

第1話 初変身!! I、m a 仮面ライ

ダー | 5

第2話 初戦闘と説明 | 13

第3話 原作始動!! 少女達との出会い

22

第4話 スクールアイドルと新たなる不

穏な影 | 33

第5話 結成! スクールアイドル!!

44

第6話 穂むらでの作戦会議と2人目の

転生者 | 54

第7話 誕生! μ's!! | 71

第8話 試験生と新たな2人のライダー |

第9話 ファーストライブ!! | 89

第10話 CR | 117

第11話 まきりんはな | 131

第12話 ブレイブ レベルアップ | 141

166

第13話 ポッピーパーポパポによるバグ

スターとゲーム病の説明 | 191

第14話 にこ、襲来! | 198

第15話 レーザー初陣! | 218

第16話 センターは誰だ!?! | 245

!

第35話 海未の秘密

659 624

第36話 Newライダーの参戦

665

第37話 打倒Mのパラドクス

696

プロローグ

「……うーん、ここは？」

目を開けるとそこは真つ白い空間だった。

……なんだ、ここ？

確かコンビニに買い物に行つて、その帰りに公園の前を通りかかった時に子供が飛び出して来て、

トラックに轢かれそうになつて居ても立っても居られずに飛び出したんだっけ。

「……もしかして、死んだ？」

と考えていると、いきなり目の前に白い服を着た神様っぽい女の人が見えた。

……誰？

「初めまして、私は神です。」

……訂正。神様っぽい人ではなく神様だった。

「あまり驚かないのですね。普通は驚く所だと思うのですけど。」

「いや、十分驚いてますよ。……神様と言う事は、やっぱり僕は死んでるんですか？」

「はい、あなたはもう死んでいます。」

「ですよね… 僕が助けた子は無事でしたか？」

「はい。あなたがトラックからかばったおかげであの子の命は無事救われました。」

「実は、あなたに頼みたい事があります。」

「頼みたい事？」

「実は、我々神の手違いである世界にあつてはいけない物が流れてしまったのです。」

…ある世界にあつてはいけない物？

「それはいったいなんですか？」

「仮面ライダーエグゼイドに登場するバグスターウイルスです。」

…バグスターウイルス!? なんてそんな物が!?

…まさか僕に頼みたい事って

「その通り、あなたにはその世界に転生してバグスターウイルスと戦ってもらいたいのです。」

やっばり!!

「…なんで僕なんですか？」

そんな大事そうな役割をなんで僕に？ 僕はそこに疑問を感じた。

「まず一つ目の理由としては、あなたが自分の命を投げ捨ててまで子供を助けたからです。」

この頼み事には勇気が必要です。そしてあなたにはその勇気がある。もう一つの理由はあなたは前世で天才ゲーマーMとやばれていたからです。だから、あなたに頼みました。」

なるほど。だったら断るわけにもいかないな。

「わかりました。その頼み事引き受けます。」

そう言うのと神様は安心したような顔をした。

「ありがとうございます。それでは転生する際の特典を3つ好きな物をどうぞ。」

特典か。3つか、じゃあ。

「それじゃあ1つ目に頭をよくしてください。2つ目に身体能力を高くしてください。

3つ目にある程度のお金をお願いします。」

「わかりました。また、バグスターウィルスと戦うためにゲーマードライバーとマイティ

アクションXのガシヤットを渡します。他のガシヤットは今現在用意ができていな

いので出来次第渡していきます。それでは、今から転生してもらいます。心の準備は

いいですか？」

「そういえば、転生先はどこなんですか？」

「あなたの転生先は「ラブライブ」の世界です。それでは、頑張つて下さい！」

次に瞬間自分の足元に大きな穴があいた。・・・!?

「うわあー！！」

第1話 初変身!! I、m a 仮面ライダー

???
side

「ふああ。もう朝か。」

僕はあの後、無事に転生する事ができ、1週間が経過した。

この1週間は特に何もなく、家の周りの散策をしていた。

それにしても驚いた。神様に落とされたらいきなり家に着いた。

しかも、家がかかりでかい。一人暮らしなんだけどな。

そうそう、家の中を見て回っていたら大きなアタッシュケースと手紙があった。

手紙を確認すると、

『無事に転生できた様ですね。一緒に送ったアタッシュケースの中にゲームドライバーとガシャット、それとゲームスコープが入っています。お金は月1に50万お送りします。あなたには2週間後から国立音ノ木坂学院に通ってもらいます。詳しい事は

編入書に書かれているのそちらをお読み下さい。それでは、第2の人生を楽しんで下さい。』

と書かれていた。

50万つて、多すぎだと思ふ。ある程度つて言ったのに。

アタツシケケースの中を確認すると、手紙に書いてあつた通り、ゲームドライバーとマイティアクションXのガシャット、ゲームスコープが入つていた。(ゲームスコープは説明書付き)

また、机の上には神様が言つていた編入書があり、名前が書いてあつた。

「宝生永夢、か。僕がこの世界で名乗る名前だな。」

紙には自分の名前と音ノ木坂学院の詳しい事が書かれていた。

「えつと、音ノ木坂学院はと…え？」

音ノ木坂学院について読んでいたら驚く事が分かつた。

なんと音ノ木坂学院は女子校らしい。

そういえば、この世界はラブライブの世界つて言つてたな…あれ？

(何も思い出せない?)

そう、前世の事、それもラブライブや仮面ライダーの事が。

(ゲームドライバーやガシャットの使い方はわかるのに)

どうして思い出せないのか、詳しい事はわからないので今度神様にあった時に聞く事にした。

さて、とりあえず学校に通うまで後1週間あるけど何するか。

学校に必要な物は全て神様が用意してくれてるから問題は無い。

「ププププププププププ」

「!!」

今日何をしようか考えているときいきなり大きな音が鳴り出した。

この音の発信源はゲームスコープ。バグスターウイルス感染症、通称ゲーム病が発症した時に今の様な音が鳴り知らせてくれる。この機能は本来なら無い機能だが、この世界にはゲーム病が発症した時に緊急通報する所が無い。自分がいる地域内でゲーム病が発症した時に知らせてくれる機能が追加されている。

そのゲームスコープが鳴ったという事はこの地域内のどこかでゲーム病が発症したという事だ。

僕はすぐにゲームスコープを手に取り、場所の確認をする。(この機能も神様が追加した物だ。)

僕はゲーム病の治し方、ゲーマドライバー、ガシャットの使い方を確認しながらその場所、家から少し行った所にある公園に向かった。

永夢 side out

.....

???
side

私は今、部活が終わり家に向かっています。

今は春休みですが、来週から学校も始まり、高校2年生になります。

そんな事を考えながら歩いていると、急に子供がぶつかってきました。

「きゃー！」

そのまま私は後ろに倒れてしまいました。

「痛たた。だ、大丈夫ですか？」

私はぶつかってきた子供に声をかけました。

ですが返事は無く、ずっと顔を下に向けていました。

子供の様子がちよつと気になった私は、近くの公園のベンチにその子連れで行き話を聞いてみました。

「どうしたのですか？」

途中の自販機で買ったジュースをその子に渡し、声をかけました。

「・・・」

ですが、返事は返ってこず、しばらくそのままでした。

(この場合一体どうすればいいのでしょうか?)

いままでこの様な事を経験した事が無く、途方にくれていると、

「…だ」

「え?」

「お母さんと喧嘩しちゃったんだ、僕。それで家の飛び出して…」

それで走ってたら私とぶつかったという事ですな。

「それではお母さんが心配しますよ。家に帰って仲直りしましょう?」

「やだ!! 家になんか帰りたく無い!!」

「そんな事言わずに、今のままもいやでしょう?」

「別にいい!! っう!!」

すると突然この子が苦しみ出し、体にはノイズの様なものが現れ始めました。

「!! だ、大丈夫ですか!!」

「うう、うわぁー………!!!!」

「!!」

するといきなり子供の体が粒子の様なものに包まれ、大きくなりました。

「な、なんですかこれは!?!」

子供を包んだその物体は周りの木々を倒し始めました。

「ど、どうすれば…。」

「はあ、はあ、やつと着いた。」

「?。」

???
side out

.....

永夢 side

ゲームスコープが鳴って急いで公園に向かうとすでにバグスターウイルスがバグスターウイルスユニオンとなり暴れていた。

「はあ、はあ、やつと着いた。」

公園に辿りつき入り口で少し休み、前を見る。

すると、こちらを怪訝そうな顔で見る青いロングヘアーの少女がいた。

「そこで何をしているの。そこにいたら危ないよ。」

そういうと、少女は「はっ!」としてすぐに、

「そ、そういうあなたこそなぜここに?。」

と返してきた。

なので僕は懐からゲームドライバーを取り出し、

「僕？僕はオペをしにきたんだ。」

と返した。

少女は「？」という顔をするが僕は気にせず、取り出したゲームドライバーを腰に装着し、ガシャットを手に取りボタンを押した。

『MICHTY ACTION X!!』

この音声と共にゲームエリアが出現する。

「患者の運命は、俺が変える!!」

そして俺はガシャットを持った右手を左側に持つていき、大きく弧を描く様に右に戻す。

「変身!!」

そして俺はガシャットを回転して左手に持ち替え上に持つていきゲームドライバーの右側のくぼみに差し込んだ。

『ガシャット!!』

『レッツゲーム!!メツチャゲーム!!ムツチャゲーム!!ワツチャネーム!!I、m a 仮面ライダー!!』

鳴り響く音声と同時に出てきたパネルのうちの1つを右手で押す。

そしてパネルが自分と重なり光がやむとそこにはピンク色の頭と白い体を持った存在がいた。

仮面ライダーエグゼイド・レベル1

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!!」

第2話 初戦闘と説明

???
side

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!!」

い、一体なんなのでしょうか? あれは。

先ほどまで話していた子が粒子の様な物に取り込まれ、いきなり現れた少年がベルトのバックルみたいなのを腰につけて、ピンク色のカセット?のボタンを押したら、後ろにゲーム画面が現れ、何かが広がりました。そして、バックルにそのカセットをさして次の瞬間には三頭身のゆるキャラみたいな姿になっていました。何が起きているのでしょうか?

???
side out

.....

永夢 side

俺は今、初めて仮面ライダーに変身してバグスターユニオンと対峙している。

なんにせよ、これが初めての戦闘だ。気をつけて戦おう。

「さあ、行くぜ！」

俺はジャンプをし、バグスターユニオンの頭を踏みつける。するとバグスターユニオンは右手を振り上げ俺を潰そうとする。俺はそれを側転でよけ、そのままバグスターユニオンの周りをぐるぐると回る。バグスターユニオンは俺を追おうとし自身も回る。だが、バグスターユニオンの方は目を回し、よろよろとする。俺はその瞬間を流さず一気に蹴りを叩き込む。するとバグスターユニオンの体は破裂し、中から感染者と思われる子が出てきた。

「よつと。」

俺はその子をジャンプしてキャッチし、そのまま少女の方に連れて行く。

「この子を頼む。」

「も、もう大丈夫なのですか？」

「いや、まだだ。まだ患者とバグスターを分離しただけだ。」

俺がそう言うとはほぼ同時に、背後に分離したバグスターが現れる。

俺が使っているガシャットのゲーム、マイティアクションXのバグスター、ソルティバグスターだ。そしてその周りに大量のバグスターウイルスも現れる。

「さあて、ここからだ本番だ！」

そう宣言して俺は手を左右に広げ左手を右側に、右手をドライバーのレバーに添えた。

「大変身!!」

そして俺はドライバーのレバーを開いた。

『ガッチャーン!』

『レベルアップ!』

『マイティジャンプ!マイティキック!マイティマイティアクションX!!』

その瞬間、俺は等身大で全身ピンク色の姿になった。

仮面ライダーエグゼイド・アクションゲーマーレベル2

「ゲームならこの俺に任せろ！」

『ガシヤコンブレイカー』

俺はガシヤコンブレイカー・ハンマーモードでバグスターウイルスを叩いて行く。

バグスターウイルスはそれに耐えきれずに爆発して行く。

「さあ、あとはお前だけだぜソルティ！」

俺はガシヤコンブレイカーのAボタンを押して剣モードにする。

そしてソルティに剣撃をしていく。

ソルティイの方は左腕についている武装、ソルティイナツクルでガードし攻撃しようとするが、俺はそれを腕をクロスしてガードする。

「くそっ！」

「へへっ！おらー！」

「ぐあー！」

ソルティイは俺の攻撃で吹き飛ばされる。

「Finishは必殺技で決まりだ！」

俺はドライバーの差し込んであるガシヤットを取り出し、右手に持って一度息を吹きかけてから左手に持ちかえ、ドライバーの左側にあるキメワザホルダーにセット、横のスイッチを一度押す。

『ガシヤット！』

『キメワザ！』

俺は中腰になり右足を前に出す体勢になる。そしてもう一度スイッチを押す。

『MICHTY！ CRITICAL STRIKE！』

そして俺の右足にエネルギーがたまると、俺はソルティイに向かってジャンプキックをする。

「ふっ、はっ、おらー！」

でも大丈夫?」

「え!?!」

「?どうしたの?」

「いい、いえ大丈夫です。」

「そう?なら行こう。」

.....

「さて、まずは自己紹介からしようか。僕の名前は宝生永夢。永夢でいいよ。よろしくね。」

「は、はい。私の名前は園田海未です。こちら海未で構いません。こちらこそよろしく願います。」

僕の家に辿りつき少し落ち着いてから話を切り出した。さて、どこから話すか。」

「とりあえず、さっきの質問に1つずつ答えていくね。」

「はい、願います。」

「最初にさっき僕が戦った敵について。あれはバグスターウイルスと呼ばれる人に感染する新種のコンピュータウイルスなんだ。マイクロサイズのバグスターウイルスが人間に感染し、体内である程度増殖すると感染者にバグスターウイルス感染症、通称ゲーム病と呼ばれる症状が現れるんだ。そして感染者の体は透明になって行き、治療を

行わなければ消滅してしまう。」

「そ、そんな。」

「そしてその治療方が、さつき僕が使ったこのゲーマドライバーとガシヤットの使うんだ。さつき使ったようにこの2つのアイテムを使って変身し、実際にバグスターウイルスと戦うことがゲーム病の治療法なんだ。」

とりあえずこんな感じかな。バグスターとゲーマドライバー、ガシヤットのことを説明できたし。」

「でも、今までなぜそのような恐ろしい病気が伝えられていなかったのでしょうか？普通ならもつと有名な病気になると思うのですか。」

あ、そっか。そこはなんて説明しよう。まさか「神様が間違つてこの世界にバグスターウイルスを流してしまった。」

なんて言えないし。」

「その理由はおそらくつい最近発見されたばかりのウイルスだからかもされない。」

「そうなのですか？」

「そう。そして僕はある人に頼まれてゲーム病の治療を行なっているんだ。まあ、その人に関しては詳しいことは言えないけどね。とりあえず僕が知ってることはこのぐらいかな。こんな感じの説明で大丈夫かな？」

「はい。わかりました、ありがとうございます。それとあと一つ気になったことがあるのですが…」

「ん？何かな？僕がわかることであれば答えるよ？」

「えっと、永夢がさつき戦ってたときと、今の口調が違うなと思ったのですが…」
あゝそのことか。

「それに関しては僕自身も詳しいことは分からないんだけど、ゲームをやってる最中は人が変わるってよく言われるんだ。」

実はこの1週間、よくこの近くのゲーセンに行ったり、家でゲームをしてたんだけど、誰かが見ると「ゲームをやってる最中と終わったあとじゃ人が違う。」って言われるんだよね。なんでだろう？

「ゲームですか？」

「うん。僕はゲームが好きでね。ここに引越してきたのは最近だけど昔からよくゲーセンとかにいくんた。まあ、いろんなゲームをやるんだけど、なぜか天才ゲーマーMと呼ばれるようになったんだ。」

「天才ゲーマー!?す、すごいですねそれは。」

「そうなのかな？」

「そうだよ永夢く〜!!」

「ん？」

「今の海未ちゃんの声？」

「い、いい違いますよ!？」

「だとしたら今の声は誰？僕は一人暮らしたから他に人がいるわけないし…」

「ここだよ永夢！スマホの画面を見て！」

「スマホの画面？」

スマホの画面を見るとその声に言われたので僕はスマホを取り出した。そこには…

「えっ!？」

「初めまして二人とも！私の名前はポッピーピポポ！ドレミアアビートのバグスターで、今日から永夢の手伝いをする事になったからよろしくね〜!!」

「ええ〜〜〜!!」

第3話 原作始動!! 少女達との出会い

永夢 side

僕が初めて変身し、バグスターを倒してから1週間が経過した。

あのあと海未ちゃん家は家に帰り、ポッピーは僕のスマホやパソコンから現実世界に出てきたり、ゲーム内に戻ったりしている。

現実世界にいるときは人間の姿になり、その時は仮野明日那と名乗っている。本人にそう呼ぶように言われた。

「さて、今日から学校だけど僕は試験生だから少し早めに行って理事長に挨拶に行かないや。」

そう。あれから1週間が経過し、今日から学校に通うのだが、僕は試験生として通うため初日は理事長のところへ挨拶に行く必要がある。

だから少し早めに行く必要がある。(そう紙に書いてあった。)

とりあえず朝ごはんを作り、身支度を整えよう。そう思い僕はキッチンに行つて朝ごはんを作り始める。

まあ、朝ごはんといっても簡単なものでお茶漬けだけどね。

さて、次に学校の制服に着替えて荷物を持つ。といっても初日だからほとんどないけどね。

「永夢、おはよう。準備できた？」

「あ、ポッピー。おはよう。準備は大丈夫だよ。」

「今日から学校だよな？色々大変だと思うけど頑張つてね〜！」

「うん!!それじゃあいつてくるね!!」

「いつてらしゃ〜い！」

.....

「ふう、着いた。ここか。」

家を出てから歩いて数分。目的地の音ノ木坂学院に辿り着いた。とりあえず警備員さんに事情を話し理事長室に案内してもらう。

「ここが理事長室だ。」

「どうやら着いたようだ。」

「ありがとうございます。」

警備員さんと別れ理事長室の扉をノックする。

『どうぞ。』

「失礼します。」

返事が返ってきたので僕は中に入る。

そこにはベージュ色の髪の優しそうな女性がいた。

「初めまして。私は音ノ木坂学院の理事長を勤めている南比奈と言います。」

「こちらこそ初めまして。今日から試験生としてこちらの学校に通うかとなった宝生永夢です。これからよろしくお願いします。」

「よろしくね。まずはあなたがこの学院の最初の試験生ということで、なぜ共学化することになったのかを説明します。実はこの学院は今年で生徒募集を打ち切り廃校になります。」

「えっ、廃校?!」

「はい。ですが、そう簡単に廃校にするつもりはありません。そのための共学化であり、試験生なのです。」

なるほど、共学化にして男子学生も取り入れて廃校を阻止しようという事か。

「事情は分かりました。」

「飲み込みが早くて助かります。生徒達にはまだ廃校の件と共学化、そして試験生のことは知らせていません。今日の朝礼の時に話す予定です。あなたにはその時に生徒

の前で話してもらいたいのですが構いませんか？」

確かにいきなり男子生徒がいるとみんな驚くと思うから話した方がいいだろう。

「構いません。あまり生徒を混乱させるわけにもいきませんしね。」

「ありがとうございます。それではそろそろ時間なので体育館の方に移動しましう。」

.....

移動してここは体育館。

今は生徒会長が話しをしている。

『続きまして、理事長の挨拶です。理事長先生お願いします。』

おっと、理事長の番のようだ。

『みなさん、お久しぶりです。春休みはいかががお過ごしでしたでしょうか。さて、今日
はみなさんに大事なお知らせがあります。実は、この学院は廃校になります。』

そう理事長がいった瞬間、体育館の中が騒ぎ出した。

『お静かに願います。みなさん驚かれたと思います。もちろんすぐにというわけ
ではありません。少なくとも今の1年生が卒業したらになります。そしてもう一つ。
今回の廃校になる件に対して考えた結果、この学院を共学化することにしました。』

再び騒がしくなる。それもそうだろう。今まで女子校だったこの学校の伝統を壊し

ているんだから。

『そのためにも今年は一人の男子生徒を試験生としてきてもらいました。それでは彼に挨拶してもらいましょう。壇上に上がってください。』

お、呼ばれた。それじゃ行ってくるか。僕は壇上に上がり挨拶する。

『みなさん初めまして。今日から試験生としてこの学院に通うことになりました、宝生永夢です。』

永夢 side out

.....

海未 side

初めてバグスターと遭遇し、永夢と会い、ゲーム病の存在を知ってから1週間が経過しました。

今日から高校2年生になります。

「お〜い、海未ちゃん！」

「ことり！」

彼女は私の幼馴染の一人、南ことり。ページユ色の髪のおしとやかな女の子です。

「穂乃果ちゃん、遅れるって。」

「どうせまた寝坊したのでしょう。いきましよう、こことり。」

穂乃果というのは私のもう1人の幼馴染で、元気いっぱいな女の子なのですがよく寝坊したりするんです。これ自体はよくあることなので私たちは先に学校に向かいます。

.....

学校に着き、私たちは今体育館にいます。春休み明けなので朝礼があります。今は生徒会長のお話が終わり理事長がお話をしているのですが、理事長から驚くことを言われました。

『この学院は廃校になります。』

そう、この音ノ木坂学院が廃校になる、ということです。まさか自分の通っている学校が廃校になるとは思いもしないので、体育館の中な一気に騒がしくなります。しかも、それだけではなく、

『今年は1人の男子高生を試験生としてきてもらいました。』

今年は男子高生が1人、通うみたいです。どういう人なのでしょう。私はその人を見てまた驚きました。

『みなさん初めまして。今日から試験生としてこの学院に通うことになりました、宝生永夢です。』

その男子生徒は1週間前に会い、ゲーム病について教えてくれた永夢だったからで

す。

海未 side out

.....

永夢 side

僕は今、2年1組の教室の前にいる。あのあと担任の先生に挨拶をし、この教室の前で待つてるように言われたため呼ばれるまで待つている。

朝礼の挨拶？それは軽い挨拶で済ませたよ。

「さて、みんな知つてると思うが、今日からこのクラスに試験生が通うことになる。一応の挨拶はさつきしたが、念のためもう一度してもらおう。宝生！入つてくれ！」

先生の声がして僕を呼んでくる。もう一度挨拶か。なんて言おうかな。

そんなことを考えながら僕は教室に入る。

「初めまして。先ほども言いましたが、僕の名前は宝生永夢です。趣味はゲームで、夢は医者になることです。男子生徒が僕だけで少し不安なところもありますが、今日からよろしく願います。」

とりあえずこんな感じかな。

「うーん、普通だがまあいいだろう。」

「いや、先生は何を求めていたんですか。」

「それじゃあ宝生は、園田の隣な。園田！手をあげてくれ。」

「は、はい。」

あ、海未ちゃんだ。まさか同じクラスだとは。

「あいつの隣な。何かわからないことがあれば、園田に聞いてくれ。」

「あ、はい。分かりました。」

僕はそう言つてその席に移動する。

「久しぶり、海未ちゃん。」

「はい。久しぶりですね、永夢。」

「よし、今日のところはこのぐらいだな。これでHRを終わりにする。それじゃあ。」

どうやらこれでHRは終わりのようだ、そう思ったら周りのみんなが立ち上がり一気に僕の周りになる。転校生にとって最初の試練みたいなものだろう。すごい質問攻めにあっている。内容は「前はどこに住んでたの？」だとか、「好きな食べ物は？」とかそういう質問だった。僕はそれを一つ一つ答えていく。

質問もある程度落ち着いたので、学校内の少し探検することにした。今日は特に授業はないし、開始時間まではある程度時間があるからね。

そう思い廊下を歩いていると、掲示板を見かけ、そこには何枚もの廃校のお知らせが貼つてあった。こんなに同じ紙を貼る必要はないと思うけど。

そんなことを考えていると、視界の端に見知った人がはいる。青い髪、海未ちゃんだ。隣の2人は友達かな?と思つているとその内の1人が急に倒れた。え?

「ほ、穂乃果!」

「穂乃果ちゃん!」

それを見て何があつたか氣になつた僕な話かけることにした。

「う、海未ちゃん?何があつたの?」

「あ、永夢!すいません、少し手伝つてください!」

「え?あ、うん。」

その後、僕は彼女たちと共に倒れた子を保健室に連れていき、教室に戻る。

「とりあえず、挨拶しようか。もう知つてると思うけど僕は宝生永夢。よろしくね。」

「は、はい。私は南ことりです。こっちもよろしくね。」

彼女の名前は南ことり。どうやら海未ちゃんとは幼馴染らしい。それにしてもどつつかで見たような。どこだっけ?

「ところで少し氣になつただけど、」

「うん?何?」

「海未ちゃんとは知り合いだったの?なんかお互いすでに知つてるような感じだったから。」

「ああーそのことね。海未ちゃんとは1週間前にあつてね、引越してきたばかりで道に迷ってたところを助けてくれたんだ。」

「実際のところは違うけど本当のことは言えないからね。」

「そうなんですか。」

「そうそう。あ、あと名前は永夢でいいよ。海未ちゃんにもそう呼ばれているし。」

「分かった。それなら私のこともことりでいいよ。」

「分かった。ところで、さつきの子は？なんで倒れてたの？」

「彼女は私たちの幼馴染の子で、今日は寝坊して朝の朝礼に出席していません。」

「それはそれで問題のような気がする。あれ？でもそれって、」

「朝礼に出席してなかったので理事長の話を聞いておらず、廃校の張り紙を見て気を失った、というところですよ。」

なるほどね。

「それだけこの学校が好きだったのか？」

「いえ、あれは勘違いしているんです。」

「？」

するとそのタイミングでさつきの子が帰ってきた。・・・すごいなだれて。

そのまま椅子に座ると頭を机に突っ伏す。

「うううどうしよう!!全然勉強してな〜い!!」

「はっ。」

いきなりどうしたのかと思った。ことりちゃんも僕と同じ反応で、海未ちゃんは「やっぱり。」って顔をしている。

「廃校つてことは別の高校に入らなきゃいけないってことでしょ!?編入試験とか受験勉強とか!」

どうやら本当に理事長の話を聞いてないらしく、海未ちゃんのいうとおり勘違いをしていた。

「落ち着きなさい穂乃果!!」

「海未ちゃんのことりちゃんはいいいよー!勉強ができるから。成績もいいし、それに比べて穂乃果は〜!」

「だからちゃんと話を聞きなさい!!私たちが卒業するまで廃校にはなりません!!」
「ホエ?」

どうやらまずはその説明からだな。と、ため息をつきながら思う永夢だった。

第4話 スクールアイドルと新たなる不穏な影

◎ side

ここはとあるビルの屋上。そこでは1人の青年がゲームをしていた。

「ここにいたのか。」

その青年に近づくと一つの人影。だが、その影は人の形ではなかった。人よりも怪物。龍の姿を彷彿させるような姿だった。

「よう、グラフィアイト。」

その怪物の名はグラフィアイト。緑色の体を持ち、右腕に装着された黒色のデバイスを用いてバグスターウイルスの散布を行ったり、感染者の状態監視を行うバグスターだ。

「バグスターウイルスの散布の調子はどうだ？」

「すこぶる順調だ。今も1人ゲーム病に感染している。」

「ふつ、そうか。今度は仲間が増えるといいな、グラフィアイト。」

青年はそういってゲームクリアと書かれているゲーム機を置いて立ち上がる。

「そうだな、パラド。」

パラド、と呼ばれた青年は遠くを見て不敵な笑みを浮かべた。

© side out

.....

永夢 side

今僕がいるのは音ノ木坂学院の中庭。

今現在、昼休みのためここで作ってきた弁当を食べている。ちなみに海未ちゃんたちも一緒だ。

あのあと海未ちゃんところりちゃんが廃校についてイマイチ理解していなかった穂乃果ちゃんに説明をして、穂乃果ちゃんの方も分かったみたいだ。

その穂乃果ちゃんはというと、

「いや〜今日もパンがうまい!」

と言って口いっぱいパンを含んでいた。

「また、パンなのですか?」

「またってことはいつもパンなの。」

「うん、そうだよ。パンは美味し・・・」

「ん? どうかした?」

「だ、男子生徒がいる〜?!」

「「え?」」

な、なんかすごい今更なことだ驚かれた。っていうかさつき海未ちゃんが試験生のこと言ってるなかつたっけ？

「穂乃果！さつき説明したでしょ！彼は試験生です！」

「あ、そういえばさつき言ってたね！」

その言葉に海未ちゃんが深いため息をついた。いつも苦労してそうだ。

「と、とりあえず自己紹介するよ。僕の名前は宝生永夢。よろしくね。」

「私、高坂穂乃果！よろしくね！あ、あと名前呼びでいいよ！」

「分かった、穂乃果ちゃん。こつちも名前呼びでいいよ。」

と、こんな感じで自己紹介を済ませるとそこに、

「ちよつといいかしら？」

と声をかけられた。声がした方向を向くとそこには金髪ポニーテールの女子生徒と紫髪でツインテールの女子生徒がいた。っていうか金髪の人は生徒会長だ。紫髪の人は誰だろうか？

「誰？この人たち？」

「知らないのですか？金髪の方は生徒会長で、もう一人は副会長ですよ。」

ふくん。副会長だったのか。ていうか穂乃果ちゃんはなんで知らないの？

「南さん。あなた確か理事長の娘さんよね？何か今日のこと聞いてない？」

「い、いえ。私も今日知ったばかりなので・・・」

え？ことりちゃん、理事長の娘だったの!?!でもそう言われれば納得できるね。さつきことりちゃんをどつかで見たことあると思ったけど、理事長のことだったのか。

「そう。ならいいわ。あと、あなたが試験生の宝生永夢君よね？」

「あ、はい。そうです。」

「試験生として、しっかりと考えて行動してください。それじゃあ。」

「ほな〜」

そう言っこの場を離れようとする生徒会長たちを穂乃果ちゃんが呼び止める。

「あ、あのー!」

「?」

「その、本当に学校なくなっちゃうんですか？」

と、穂乃果ちゃんが質問するが、

「・・・あなたたちには関係ないわ。」

と言っ、今度こそこの場を去っていく。

.....

あのあと僕たちは教室に戻り、海未ちゃんたちは廃校阻止のために色々考えている。そこに穂乃果ちゃんの提案で、この学校のいいところを探すことになり、各々でいいと

ころを挙げているところだ。

「じゃあ、穂乃果から！えつとー、歴史がある！」

「なるほど。他には？」

「他？伝統がある！」

「それは最初と同じことです・・・」

「えく!?じゃあことりちゃん！」

「うーん？強いていうなら、古くからあるってことかな？」

「ことりちゃん、海未ちゃんの話、聞いてた？」

なんともまあ不安な内容だ。

「あ、でも調べて部活動でもいいところ見つけたよ！」

「本当!?!」

「と言っても、あまり目立つ内容じゃあないけど」

そう言って資料を出す。

「珠算関東大会6位」

「かなり微妙だな。」

「合唱部地区予選奨励賞」

「もう一声欲しいですね。」

「ロボット部、書類審査で失格」

「どうやったら書類審査で失格になるの？」

「てか、最後のダメじゃん！」

「そもそも話、目立つ部活があれば廃校になんてならないよ。」

「それもそうですね。」

話あつた結果、3人はため息をついた。

「私、この学校好きなんだけどな・・・」

「ことりも・・・」

「私もです・・・」

そう言つて落ち込む3人。

その3人に対して僕は何もできず、ただ見てることしかできなかつた。そして、その

日はお開きになつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ただいま」

「おかえり。学校どうだった？」

「あ、明日那さん。それがですね・・・」

僕は家に帰つて出迎えてくれた明日那さんに廃校になることを伝えた。

「だから共学化になるんだ。」

「うん。それで今日海未ちゃんと海未ちゃんの幼馴染2人と一緒に廃校阻止するため何かできないか色々考えたけど何も思いつかなくて、それで落ち込む3人を見てるしかできなかつたんだ。一体どうすればいいのか。」

「永夢。」

「うん?」

「あなたは今日から学校に通い始めたの。まだ何もできなくて当たり前。これからゆつくりできることを見つけなければいいの。どんなことでも、あなたがやりたいことなら、私はそれを応援するよ。」

「!」

明日那さんの話を聞いてわかった。そっか。これからゆつくりと考えて行けばいいんだ。僕はそのことに気づかせてくれた明日那さんに笑顔でお礼をいう。

「ありがとう、明日那さん。」

明日那さんはそれを聞くと、安心したような顔で僕をみる。

「ほら、この話は一旦お終い。早く着替えておいで。」

明日那さんにそう言われ、僕は自分の部屋に戻る。この日はあとご飯食べたり明日那さんとゲームして終わった。

翌日、支度を終えて僕は家を出て、しばらく歩くと穂乃果が走つてるところを見かけた。ただ、1つ気になったのが穂乃果ちゃんが向かっている方向が音ノ木坂学院方向じゃないということだ。気になった僕はそのまま穂乃果ちゃんのあとを追う。

「おーい、穂乃果ちゃん！」

僕が声をかけると穂乃果ちゃんはこつちを向く。

「あ、永夢君！おはよう！」

「うん、おはよう。こつちは学校の方向じゃないけど、どこに向かっているの？」

僕が聞くと、穂乃果ちゃんは手に持っていたパンフレットを見せてきた。

「UTX学院？」

「うん。ここ最近人気上昇中の学校なんだ。どうやって生徒を集めているのか気になって、今から確かめに行くんだ。」

なるほど。最近人気の学校に行つて情報収集か。確かにいい方法だ。

「それなら僕も一緒に行くよ。」

「本当!？」

「うん！」

そして僕らはUTX学院に向かう。

しばらく歩いて着いたのだが、

「これ、本当に学校!？」

僕たちの目の前にあるのはガラス貼りのビルでも学校と思えない容姿だった。

穂乃果ちゃんも驚いているのかガラスに顔を貼り付けている。・・・はたから見たら危ない人だよな、あれ。

その瞬間、すぐ近くから歓声の声が聞こえた。

気になった僕たちは声が聞こえた方向に向かう。

声が発せられた場所はUTXの入り口についている大画面のモニターがあるところで、そのモニターにはUTXによるこその感で宣伝している3人の女の子が映っていた。

僕はもちろん、穂乃果ちゃんも知らないようで、「何あれ?」みたいな感じに見える。すると、たくさんの人だかりが再び歓声を上げた。

何ごとかかと思っていると穂乃果ちゃんの隣に、春先とはいえ暑いはずのコートにグラサン、マスクをした小柄なツインテールの女の子が来た。

・・・何これ? どう見ても不審者なだけだ。正直怖い。穂乃果ちゃんも絶句しているよ。

と、思っていたがあらうことか穂乃果ちゃんはその不審者に

「あのお〜」

と話しかけた。・・・嘘でしょ。

話しかけられた少女の方は「何!?今忙しいんだけど」と不機嫌そうに返してくる。

穂乃果ちゃんは気になっていたことを質問する。

「あの、質問なんですけど・・・あの友達、芸能人か何かですか?」

すると少女は「はあ!?!」と驚きの声をあげ、穂乃果ちゃんは「ヒイ!?!」と怯えた声です。

「あんたそんな事も知らないの!?!そのパンフレットに書いてあるわよ!?!どこ見てんの!?!」

「す、すみませ〜ん!」

「はあ、A—RISEよ、A—RISE。スクールアイドル」

「アイドル?」

なるほどスクールアイドルか。確か前にニュースで見たな。学生だけで結成されたアイドルって。

しばらくA—RISEのPVを見ていると隣からパサッて音がした。

見ると、穂乃果ちゃんがパンフレットを落としたりらしい。

その顔は衝撃に彩られていた。

僕は「穂乃果ちゃん？」と声をかけるが返事がなく、代わりに聞こえて来たのは「これだ」という声。

次の瞬間、穂乃果ちゃんは顔を上げ、「これだあゝ!!」と叫んでいた。

第5話 結成！スクールアイドル！！

海未 side

今私達は、昼休みで教室にいます。今朝少し遅れて来た穂乃果はとてもニコニコしていて、廃校阻止にいい方法を思いついたみたいです。ただ、一緒にきた永夢の方は不安そうな顔でした。一体なにを思いついたのでしょうか？

「海未ちゃん、ことりちゃん！聞いて、聞いて！解決策見つけて来たよ！」

そういうと穂乃果は机の上に大量の雑誌やチラシをおきます。内容は・・・

「穂乃果ちゃん、これは？」

「スクールアイドルだよ！最近有名じゃん!!」

ま、まさか穂乃果の案は・・・

「穂乃果ちゃんも今朝まで知らなかったじゃん。」

「永夢君それ言わないでよ！」

永夢と穂乃果が何か言っていますが、今の私には全く聞こえません。私は最悪な案を予想し、バレないようにこの場を立ち去ります。ですがすぐにバレ、教室前の廊下で穂乃果に呼び止められます。

「まだ話は終わってないよ!」

「はあ、どうせ『私達でスクールアイドルをやる!!』とでも言い出すつもりでしょう?」

「うわ!海未ちゃんエスパー!?!」

「誰でも想像つきます!!」

「だよね。」

全く穂乃果は。

「だったら話は早いね。今から生徒会に行つてアイドル部を・・・」

「お断りです。」

私は穂乃果の案を却下する。

「なんで!?!」

「思いつきで始めたところでうまくいくわけないでしょう!」

私は思った事を穂乃果に伝えます。

「だってこんなに可愛くてキラキラしてて楽しそうなんだよ!こんな可愛い服着て、みんなの前で歌うとか普通はできないんだよ!」

「私はそんな事を言っているのではありません!こんな事で本当に生徒が集まると本気で思っているのですか!?!」

「そ、それは・・・人気が出ればだけど・・・」

「その雑誌にあるスクールアイドル達もプロと同じ努力をし、真剣にやって来た人たちです。穂乃果のように好奇心だけで始めてうまくいくはずありません！」

「うううう〜」

「とにかく、アイドルはなしです!!」

私は言いたい事を穂乃果に伝えてこの場を去ります。

海未 side out

.....

穂乃果 side

「やっぱりアイドルはダメなのかな〜?」

放課後、私は屋上で肩を落とす。

海未ちゃんことりちゃんと一緒にやろうと思ったけど、2人ともあまり乗り気じゃなかったし。いい案だと思ったんだけどな。

「~~~~~」

「?」

そんな事を考えているとどこかから歌声が聞こえる。歌声と一緒に音楽室のピアノの音も。

私は気になって音楽室に向かった。音楽室には赤髪の女の子がいた。彼女がピアノ

を演奏している。私はそのピアノの音と、彼女の歌声に引き込まれた。

ピアノの演奏が一段落したところを見計らい、拍手をする。

「ヴェエエエエエエ!?」

彼女は私に気づくとすごい驚いた。私はそれを気にせず音楽室に入り感想を言う。

「すごいすごい!!とても綺麗な歌声だね〜!ピアノを上手だし!!それにアイドルみたいに可愛い!!」

「えっ!?ま、まあ…….それほどでも」

決めた!アイドルに誘おう!

「ねえ、あなた!!一緒にスクールアイドルやらない!?!」

「ぶえええ!?! . . . ナニソレ!イミワカンナイ!!」

彼女はそう言っ出て行ってしまった。

「あははだよね」

穂乃果 side out

.

海未 side

私は今弓道場に来ているのですが集中できません . . .

原因は穂乃果がスクールアイドルと一緒にしようと言った事です。その事がなかなか

か頭から離れません。

「い、いけません。集中しなければ・・・」

『みんなのハートを打ち抜くぞ♡ばあさん♡』

私が打った矢は的に当たりませんでした。

「わ、私は今何を・・・／＼／＼」

「外したの!? 珍しい。」

見ていた先輩にそう言われました。集中です。園田海未!!

『ラブアロ♡シユ♡ト♡』

再び矢を放つも、また的に当たりませんでした。

その後、何回もやるもその度に想像してしまい、結局一度もできませんでした・・・。
すると、

「おおい。海未ちゃん!」

誰かが私を呼んでいます。

ことりと永夢?

.....

私はことりと永夢と一緒に穂乃果がダンスの練習をしている場所に向かいます。

穂乃果は今現在、一人で練習しているようで気になったのです。

「全く、穂乃果には困ったものです。」

「あはは……でも海未ちゃん、後悔した事ある?」

「それは……」

私は考えます。確かに穂乃果は私やことりだけでは尻込みしてしまう場所でも、私達を無理矢理連れて行ってくれます。そして、素晴らしい景色を見せてくれます。

「海未ちゃん。」

「ここで永夢が私に話しかけて来ます。」

「昨日、僕は何をすればいいのか分からず、色々悩んでいたんだ。でも、家に帰って、明日那さんと話してこう言われたんだ。『永夢がやりたい事であれば、応援する。』って。だから僕も、君たちがもしやりたくてスクールアイドルをするのなら、全力で応援するし、サポートするよ。それが僕のやりたい事だから。」

と、永夢は私に言ってくれました。

「海未ちゃん。私……スクールアイドルやってみようかな。」

「ことり?」

「海未ちゃん、あれ見て。」

ことりの視線の先では穂乃果がダンスの練習をしていました。

それを見て私は1つ決心しました。

「永夢、ことり。私もやってみようと思います。」

「海未ちゃん。」

「うん。」

海未 side out

.....

穂乃果 side

私はあの後、1人でダンスの練習をしていた。けど、どうしてもうまくいかず転んでしまう。するとそこに、海未ちゃんとかことりちゃん、永夢君が来た。

「全く。1人で練習しても意味ありませんよ？やるならやっぱり3人でやらないと。」

「海未ちゃん……うん!!」

やった！海未ちゃんとかことりちゃんが一緒にやってくれる！これで「後、」？

「僕のこと、忘れないで。僕は君たちと一緒にアイドルをするわけじゃないけど、サポートすることはできる。僕にも手伝わせてよ。」

なんと、永夢君も手伝ってくれるらしい。

「それじゃあ、永夢君はマネージャーだね！これから頑張ろう！みんな!!じゃあ、早速4人で申請書を提出しに、生徒会に行こっか」

私は満面の笑顔で言った。

穂乃果 side out

.....

永夢 side

僕と海未ちゃん、ことりちゃん、穂乃果ちゃんの4人は生徒会室に来た。生徒会室の中には昨日会った生徒会長と副会長がいた。

「これは？」

「アイドル部設立の申請書です。」

「それは見ればわかります。」

「では、認めていただけますね？」

「いいえ。部活の設立には最低5人以上の部員が必要です。」

「ええ！そうなんですか!？」

「待つてください。部活動は5人以下でも活動しているところもあります!」
「ここで海未ちゃんが疑問に思った意見を言うが、

「それは元々5人以上やったのが、設立後に5人以下になったんや。だから裏を返せば5人揃えば設立できる。後、1人やな。」

「後1人.....。わかりました。みんな行く？」

穂乃果がそう言うって退出しようとするが、

「待ちなさい。どうしてこの時期にアイドル部を始めるの？あなたたち2年生でしよう？」

と聞いて来た。それに対し穂乃果ちゃんは、

「廃校をどうにかしたくて！スクールアイドルって今すごく人気があるんですよ？だから……」

「だったら尚更、部員が5人以上集まっても認めるわけにはいかないわね。」

「!?!」

生徒会長の言葉に3人は驚き、僕は疑問に思ったことを聞く。

「それは、どうしてですか？」

「部活は生徒を集めるためにやるものじゃないの。思いつきで行動してところで状況が変わるとは思わないわ。」

そして申請書を穂乃果ちゃん達に押し返し、

「こんな事を考えてないで残りの2年、自分のために何をすべきかちゃんと考えるべきよ。それとあなた。」

生徒会長は僕に話しかけてくる。

「あなたは試験生よね？この子達と一緒にこんな事する必要はあなたにはないはずよ。それよりもやるべき事があるんじゃないの？」

「・・・僕は確かに試験生です。ですが、僕がやる事は僕が決めます。やりたいからやる。ただそれだけです。」

そう言っつて僕は海未ちゃんたちの方を見て、

「もう行こう。失礼しました。」

と言っつて生徒会室を後にした。

第6話 穂むらでの作戦会議と2人目の転生者

永夢 side

翌日、僕たちは再び生徒会室に来了。目的は1つ。講堂の使用許可をもらうためだ。昨夜、僕たちは電話で話し合い、講堂でライブを行うことにした。ただ、正直に「ライブをするため!」と言ってもあの生徒会長が許可をくれるとは思えないので、ライブのことは伏せて許可をもらおうつもりだ。

絵「……………これは?」

穂「講堂の使用許可をもらいに来了ました。」

海「講堂は部活動関係なく使用できると、校則にも書いてありました。」

希「日には、新入生歓迎会の時やな。」

そう。僕らが決めた日には、新入生歓迎会がある日の放課後だ。

絵「……………何のために?」

海「そ、それは……………」

穂「ライブをするためです!」

え!?何でライブのこと言っちゃやうの、穂乃果ちゃん!?

こ「まだ、やるって決まったわけじゃ・・・」

穂「ええええ!!やるよ!!」

このやり取りを見た生徒会長が

絵「そんな調子で大丈夫なの?歓迎会は遊びじゃないのよ?」

と聞いてくる。

ご「ごもつともな意見です。

しかし、そこで副会長が

希「まあまあ、落ち着いてエリチ。生徒会は生徒のやることに口出しすることはでき

ひんよ。」

という副会長の言葉で使用許可がおりた。た、助かった。

そして僕たちは生徒会室を後にする。

永夢 side out

.....

絵里 side

私は、あの子たちが出て言ってから希に気になったことを聞く。

絵「希はどうしてあの子たちの肩を持つのか?」

希「肩を持った覚えはないんよ。それに。」
絵「？」

希は立ち上がると窓まで歩いていく。

希「何度占つても、同じ答えが出るんよ。」

そして希は窓を思いつきり開ける。

私はその言葉を聞いて机の上に置いてある、希のタロットカードを見る。

その瞬間、突風が部屋の中に吹き荒れる。

希は目をカッと見開き、

希「カードが、うちにそう告げるんや!!」

と叫ぶ。

カードは風によつて壁の方に散らばる。

私はそれを黙って見ていた。

絵里 side out

.....

永夢 side

海「ちゃんと言ったじゃないですか！アイドルのことは伏せて、借りるだけ借りよ

うと！」

穂「ふあんふえ？」

僕たちは中庭に移動し、海未ちゃんは穂乃果ちゃんに説教するが、肝心の穂乃果ちゃんの方はパンをかぶりついている。

海「また、パンですか。」

穂「ほら、うち和菓子屋だからパンが珍しいの知ってるでしょ？」

永「え、穂乃果ちゃんの家って和菓子屋なの？」

穂「うん!!」

と、ここで穂乃果ちゃんに声をかける人が。

「3人とも、ポスターみたよ!!」

クラスメイトのヒデコ、フミコ、ミカの3人だ。

「・・・ん？ポスター？」

「穂乃果はともかく、まさか海未ちゃんに宝生君までやるなんてね。」

「頑張つてね!!」

その言葉を聞いたあと、何となく海未ちゃんの方を見ると、頭に「？」が浮かんでいた。

海「・・・・・・・・え？」

・・・・・・・・

海「勝手すぎます!!」

今現在、海未ちゃんは憤怒していた。

原因は1つ。穂乃果ちゃんが勝手にライブの宣伝ポスターを掲示板に貼ったからだ。

確かに宣伝は大事だけど、勝手にやるのはな・・・

そうこうしているうちに教室にたどり着く。

こ「うくん、こう・・・かな？」

中ではことりちゃんが何かをやっていた。何かを書いているようだ。

永「ことりちゃん。何やっているの？」

こ「あ、永夢くん!今ね、ライブの衣装を考えてたんだ!」

永「へへ。すごいね!」

こ「できた!ほら、見て!」

ことりちゃんが見せてきたノートには、アイドルらしい可愛い衣装が描かれていた。

穂「ことりちゃん凄いや!可愛いよ!」

こ「ありがとう!!頑張って作るね!」

2人のやり取りを見ていると、僕の隣にきた海未ちゃんが浮かぬ顔をしていた。どうしたんだろう?

海「こ、ことり?」

こ「なあくにく?」

海「こ、このスーと伸びているのは?」

こ「足よ♪」

海「す、素足にこの短さですか?」

こ「だってアイドルだもん♪」

海未ちゃんの疑問にことりちゃんはさも当然のように答える。

すると海未ちゃんのはしきりに自分の足を見てもじもじしていた。ど、どうしたんだ?

穂「大丈夫だよ!!」

海「ひゃあ!」

穂「海未ちゃん足綺麗だし!!」

あ、そういうことか!

海「穂乃果も人のこと言えるのですか!？」

海未ちゃんがそういうと、穂乃果ちゃんも自分の足を触って、

穂「よし、ダイエツトだ!」

と宣言した。それにことりちゃんは苦笑いする。

永「大丈夫だと思っよ。3人とも可愛いし!」

僕がそういうと3人とも顔を赤くした。え？いきなりどうしたの？

永「と、とりあえず最初に決めなくちゃいけないことがあるでしょ？」

僕がそういうと穂乃果ちゃんが考える。すると、思いついたのか

穂「そうだ！サインとか街中での変装とか！」

永「違うよ。グループ名決めてないでしょ。」

僕がそういうと3人とも「あゝ」と言った。思いつかなかったのか。

．．．．．

その後、僕たちは図書室に行つて考えたが出てきたのは3人の名前を合わせた漫才師のようなのか兵隊のようなもので全く思いつかなかつた。結果。

穂「これでよし！」

廊下に置いてある机の上に投票箱を置く。

永「結局全て丸投げかあ。」

海「ですね．．．」

まあ、これはこれでいいかもな。

．．．．．

次に、練習場所として空き教室を借りるために職員室に行く。

担任の先生に話すと、

「空き教室を？何のために？」

穂「えっと、スクールアイドルの練習に……」

穂乃果ちゃんが少し言いづらそうに説明すると、担任は穂乃果ちゃんたちを見て、

「お前らが……アイドル……?」

と首を傾げたあとに、「ふっ」と鼻で笑った。

穂「ああ!?!鼻で笑った!?!」

これは無理だな。

……

教室を借りれなかった僕たちは学校内を見て回った結果、屋上ですることになった。

雨が降ったら使えないけど贅沢は言えないしね。

そして、穂乃果ちゃん、海未ちゃん、ことりちゃんが歌の練習のために一列に並ぶ

が……

「……」

永「……?」

こ「……歌は?」

海「私は知らないですよ?」

穂「……私も……」

永「僕も……。」

曲がなかった。大丈夫かな、これから。

……

この日は学校では何もできないため、家に帰ることにしたのだが、

穂「私の家で作戦会議しよう！」

と穂乃果ちゃんが言ったため、僕は一旦家に帰ってから穂乃果ちゃんの家に向かう。ただ場所がわからないため、途中で部活帰りの海未ちゃんと合流して行くことにした。

公園で待っていると、

？「すいません。」

永「？」

声が聞こえた方向を向くとそこには僕と同じぐらいの男の子がいた。

？「最近引越してきたばかりで、まだ地形がわからないんです。道をお聞きしてもよろしいですか？」

永「ああ、どこに行きたいんだ？」

僕が聞くとポケットからメモらしきものを取り出した。ただ、その時に水色のカセツトらしきものが見えた。あれって……。

？「ここなんです……？どうかしましたか？」

永「あ、ごめん。気にしないで。それで、どこに行きたいの?」

? 「西木野総合病院です。」

永「病院だね。それなら・・・。」

僕が道筋を説明したあと、一つ気になったことを聞くことにした。

永「一つ気になったことがあるんだけど、聞いていい?」

? 「? なんですか?」

永「もしかして、君転生者?」

? 「!?」

永「さっきポケットからメモを取り出したときに目に入ったんだ。水色のゲームカセットみたいなのが。もしかしてそれってライダーガシャットじゃない?」

? 「ど、どうしてその事を・・・?」

永「僕も転生者で仮面ライダーだから。」

? 「!? そ、そうなのですか?」

永「ああ。証拠にほら。」

そして僕はマイティアアクションXのガシャットを見せる。すると相手も信用したのか、ポケットからガシャットを取り出す。

? 「俺が持っているガシャットはこれです。」

彼が持っているガシヤットには『タドルクエスト』と書かれていた。

永「僕の名前は宝生永夢。転生者同士、これからよろしくね。」

？「俺は鏡飛彩。こちらこそよろしくお願ひします。」

この後、飛彩君は西木野総合病院に向かい、僕の方は海未ちゃんと合流して穂乃果ちゃんの家に向かう。

.....

海「ここです。」

着いた場所は老舗『穂むら』。僕の家からもそう遠くない場所だった。

永「ここが穂乃果ちゃんの家なんだ。」

僕がそう呟くと海未ちゃんが入って行く。

海「お邪魔します。」

永「お邪魔します。」

「あら、いらつしやい海未ちゃん。それと・・・後ろの子は？」

永「あ、自己紹介が遅れました。音ノ木坂学院に試験生として転入した宝生永夢です。」

「ああ、あなたが。娘がお世話になってます。穂乃果の母です。」

お母さんか。ことりちゃんのお母さんといい、若すぎないか？

「そうだ、穂むまん食べる？この店の名物なの。」

永「あ、いただきます。」

僕はありがたくいただく。

「海未ちゃんはどう？」

海「いえ、私はいいです。ダイエットしますの。」

と、海未ちゃんは断る。

そして2階に上がり海未ちゃんが穂乃果ちゃんの部屋に入る。そこには、お菓子を食べている穂乃果ちゃんのことりちゃんの姿があった。・・・ダイエットは？

海未ちゃんも同じ事を思ったらしく、

海「あなたたち・・・ダイエットは？」

と聞く。2人は忘れてたらしく2人揃って「「ああああ!!」」と言った。

大丈夫かな・・・？

なにせよ作戦会議。

永「それでライブするはいいけど、曲や歌詞はどうするの？」

穂「それがね、音楽室に歌とピアノが上手な子がいたから作曲ができるか明日聞こうと思うの。」

永「それじゃあ、その子ができたら作曲は問題ないね。あとは歌詞だけ・・・」

穂「それがね、もし作曲してくれるっていたら歌詞の方も何とかかなりそうだねって2人がくる前にことりちゃんと話してたの！ね、ことりちゃん！」

こ「うん！」

歌詞も何とかなる？もしかして、穂乃果ちゃんに詩人の知り合いが？

そう思っている穂乃果ちゃんのことりちゃんのことりちゃんの2人が海未ちゃんに詰め寄って行った。・・・まさか。

穂「海未ちゃんさあ、中学の時ポエムとか描いてたよねえー・・・？」

海「ええっ・・・!?」

永「え、そうなの!?」

こ「読ませてもらった事も・・・あつたよねー・・・？」

ことりちゃんがすごい笑顔で徐々に海未ちゃんを追い詰めて行く。

海「・・・！！」

穂「あ、逃げた!!」

穂乃果ちゃんのことりちゃんの口撃に耐えきれなくなつたのか、海未ちゃんは無言で部屋から逃走する。

ただこのままだと話しが進まないのでドアのところまで両腕を掴み捕まえる。

海「離してください、永夢!!」

永「だめだよ。話しが進まないし。」

そう言つて海未ちゃんも部屋に連れ戻す。

・・・・・

海「お断りします!!」

海未ちゃんを部屋に連れ戻したはいいが、歌詞を作る事を断る。まあ気持ちはわからなくはないけど・・・。

穂「えー!?何でー!!」

海「絶ツツツツツツツツツたいいやです!!中学のときのだって恥ずかしくて思い出したくないのですよ!」

穂「いいじゃんいいじゃん。アイドルの恥は掻き捨てつて言うし。」

海「言・い・ま・せ・ん!!」

僕も聞いた事ないな・・・。

海「それなら穂乃果が作詞すればいいじゃないですか!」

穂「あー・・・。それはー・・・。」

?なんか歯切れ悪いな。何かあつたのかな?

後日海未ちゃんから聞いたらどうやら小2の国語の授業参観のときに作文を作った

らしいんだけど、その作文の内容が、

穂「おまんじゅう、うぐいすだんご、もう飽きた。」

らしい……。

こんな事があつたからか、

こ「無理だと……思わない？」

海「……」

海末ちゃんは黙つてしまう。

海「そ、それならことりが……!!」

こ「ごめんね、海末ちゃん。ことりはきつと衣装を作るので精一杯になると思うか

ら……」。

海「そ、それでは永夢が……!!」

ここで海末ちゃんは僕の名前を出した。だけど……

永「ごめんね海末ちゃん。手伝う事はできるけど、一人で作るのは苦手で……」。

海「……」

これで嫌が応でも海末ちゃんが作詞を担当するしかなかった。

穂「お願い！海末ちゃんしか頼れる人がいないの!!」

こ「ことりも時間があるときは手伝うから!!」

永「僕もできる限りは手伝うよ！」

海「うううううう……!!」

これでも海未ちゃんはまだ渋る。

すると、いきなりことりちゃんが着ていた制服のブレザーを脱いでから目に涙を貯め、頬を少しだけ赤くする。そして握られた小さな右手をその膨やかな胸に持つていく。

な、なにをする気だ……？

こ「海未ちゃん……、おねがぁいつ!!」

海「んなあつ!!……もう、ことりはずるいです。」

何と海未ちゃんが頷いた！でも、確かに今の頷くしかない!!僕も頷くだろう。

海「但し、練習メニューは私が作らせていただきます！」

そう言った海未ちゃんは僕たちにノートパソコンの画面を見せる。

そこにはA―RISEの動画が写っていた。

海「見てください。楽しく踊っているようでも、かなりの体力を使います。穂乃果、ちよつと笑顔で腕立て伏せをしてください。」

そう言われて、穂乃果ちゃんはやるが、次第に笑顔が歪んでいく。最終的には床に顔からダイブする。うわ・・・痛そう・・・。

海「これから穂乃果とことりには何曲も笑顔で歌って踊れる体力をつけてもらいます。いいですね!？」

こうして作戦会議は終わった。

第7話 誕生!μ's!!

永夢 side

翌日、僕たちは近くの神社、神田明神に集まって朝練をしている。

僕がストツプウオッチを持ってタイムを測定、海未ちゃん、ことりちゃん、穂乃果ちゃんの3人が走っているのだが・・・

海未ちゃんは部活もしているためか体力があるけど、他の2人は全くと言っていいほどない。

神田明神の高く長い男坂を走り終えて、穂乃果ちゃんは大の字に寝転び、

穂「はぁーはぁー、も、もう、ダメ・・・」

といい、ことりちゃんはお尻をついて、

こ「私も、・・・もう・・・無理・・・」

と弱音を吐いている。

だけどそこに海未ちゃんは容赦無く、

海「何言ってるんですか!?これを朝と放課後にやります!!さらに、ここで歌と踊りの練習の他にも、2人の基礎体力をつけるための練習をしてもらいます!!分かったら、も

うーセットです!!」

穂「はぁ〜い。」

穂乃果ちゃんとかとりちゃん、2人はだいたい辛そうにしているが、海未ちゃんはもう1セット走ると言い出す。

僕はとりあえず3人に水筒を渡す。

永「とりあえず水分補給をしなよ。こまめに補給しないと危ないよ?」

穂「ありがとう!!永夢君!」

こ「永夢君、ありがとう!!」

海「ありがとうございます、永夢。」

と、そこに

「君達。」

と誰かに呼ばれた。

振り返ると、そこには副会長がいた。

巫女服を着て。

何故?

同じことを思ったのかみんなも、

こ「副会長さん?」

穂「その格好は？」

と聞く。その質問に副会長は答える。

希「ここでバイトさせて貰つとるんよ。神社は色んな気が集まるスピリチュアルな場所だからね。それに、ここの坂を使わせて貰つとるんやから、お参りぐらいしとかんかね。」

副会長の言葉を聞き、僕たちはお参りをする。

穂（初ライブが成功しますように）

海・こ・永（しますように）

その光景を見た副会長は、

希「あの子達、本気みたいやね。」

と静かに呟いた。

.....

「お断りします!!」

さて、今現在僕達がいるのは学校の屋上。

あの後、朝練を終えた僕達は学校に行った。

その後、1年生の教室に行き、穂乃果ちゃんが言っていたピアノができる子を探したのだが見つからず、帰ろうとしたところではちょうどその子が入って来たため、屋上に連

れていき作曲を頼んだのだが・・・

穂「お願い!!あなたしかいないの!」

「お断りします!!」

結果はこの通り、頑なに断り続けている。

永「もしかして歌うだけで、作曲はできないとか?」

「なっ!?そ、そんな訳ないでしょ!!」

僕が少し煽ると見事に反応した。

みた感じツンデレみたいだからね。この方法が一番効果的だ。

「ただ・・・やりたくないだけなんです・・・」

穂「どうして!?学校に生徒を集めるためだよ!?その歌で生徒が集まれば・・・」

「興味ないです!!」

彼女はそういうと屋上を出て行った。

・・・名前聞くの忘れてたな。

穂「お断りしますって、海未ちゃんみたい・・・」

海「あれが普通の反応です。」

確かにね。でも、あそこまで頑なに断るなんて。何かあるのかな?

穂「あくあ・・・せつかく海未ちゃんがいい歌詞作って来てくれたのに・・・」

海「ちよっ!?なんで持っていますのですか!?返してください!」

穂「ええろ!?なんで!?どのみち歌って知られるんだからいいじゃん!!」

永「ていうかもうできたの!?早くない!」

なんと海未ちゃんが作詞担当に決まったその日の内に完成したらしい。

す、すごい。

そう思っていると屋上のドアが開き、生徒会長が来た。

絵「ちよつと、いいかしら?」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

今、穂乃果ちゃんは自分の席で考え込んでいる。

多分、さつき生徒会長の言葉を気にしているのだろう。

会長は『スクールアイドルが今までなかったこの学校でやってみただけどやっぱりダメ

でしたとなったら、みんなどう思うかしら?』と行って来た。

会長も本気でこの学校をどうにかしたいと思っっているのだと思う。

だからこそ、僕達に簡単に考えて欲しくないのだろう。

穂「やつぱり、甘かったのかな・・・」

海「やつと気付いたのですか?」

穂「でもふざけてやろうって言った訳じゃないよ?海未ちゃんの練習メニュー全部こ

なしているし、おかげで足は筋肉痛だけ……」

海「確かに頑張つてはいますけど、生徒会長の言葉はちゃんと受け取らないと。」
海未ちゃんの言う通り、確かに穂乃果ちゃんは頑張っている。

けど、生徒会長が言いたいことも分かる。

どうすればいいのか分からないまま、学校のチャイムが鳴った。

……

穂「あつたよー!! 1枚!!」

あれから時間が経ち、今は放課後。

設置したグループ名投票箱の中を確認しに行った穂乃果ちゃんが戻って来た。

どうやら1枚入っていたらしい。

海「なんと書かれていますか?」

穂「えつとねく……何これ?……ユーズ?」

紙には μ , s と書かれていた。

だけど穂乃果ちゃんは読めないみたいだ。

海「おそらく、ミューズかと。」

穂「ああ……石鹸の?」

海「違います!!」

穂乃果ちゃんが言った言葉を、海未ちゃんは即座に否定する。

永「多分、神話の女神からつけたんだらうね。」

穂「へえく……」

こ「いいと思う!私は好きだな!!」

穂「よし、私達は今日からμ'sだー!!」

こうしてグループ名が決まった。

……

その後、僕と穂乃果ちゃんはもう一度作曲を頼むために1年生教室に来ていたのだが……

すでに放課後だからか教室には誰もいなかった。

穂「ああ、誰もいないね。」

永「一足遅かったね。」

すると、僕達の後ろから「にゃん?」と声がした。

振り返ると、そこにはオレンジ色の短髪の少女と眼鏡をかけた少女がいた。

穂「ねえ、あの娘知らない?」

「あの娘?」

するとオレンジ色の髪の少女の後ろにいた眼鏡の少女が

「西木野さんのことですよね？歌の上手い。」

へえ、彼女、西木野さんっていうんだ。

穂「もう流石に帰っちゃったかな？」

と、穂乃果ちゃんが問いかけると今度はオレンジの髪の少女が

「音楽室じゃないですか？」

と答える。

「あの娘、あまり他の子と喋らないから。」

成る程……。

永「ありがとうね2人共。行ってみるよ。」

と僕は2人にお礼を言ってここから立ち去ろうとすると、眼鏡の少女が

「あ、あの……アイドル、頑張ってください……。」

と小声で言ってきた。

穂「うん!!ありがとう!!」

穂乃果ちゃんもお礼をして、今度こそ立ち去る。

……

あの後、僕達は音楽室に向かった。

近いていくとだんだん歌声が聞こえてきた。

どうやらビンゴらしい。

音楽室についてドアから中を覗くと彼女、西木野さんがピアノを弾きながら歌っていた。

その歌声はとても綺麗だった。

歌い終わったのか、西木野さんがピアノを弾くのをやめたとき、隣にいた穂乃果ちゃんは拍手をする。

西木野さんは驚いたのか「うええええええ!!」と驚いた。

・・・なに、今の驚き方。

・・・

「何の用ですか?」

穂「やっぱりもう一回頼もうと思って。」

「しつこいですね!!」

穂「あはは、よく海未ちゃんにもそう言われて怒られるんだー。」

と、穂乃果ちゃんは苦笑いをする。

「私、ああ言うアイドルみたいな曲、一切聴かないから。聴くのはクラシックとかジャズとか。」

穂「へえ、どうして?」

「軽いからよ!!なんか薄っぺらくて・・・遊びみたいで・・・。」
それを聞いた穂乃果ちゃんは、

穂「私も最初はそう思ってたんだ。」

と西木野さんに言った。そして、スクールアイドルは祭りみたいにパーッと盛り上がって楽しく歌ってれば良いかな、と自分も思っていたと伝えた。

穂「でもね、結構大変なの。ねえ、腕立て伏せできる?」

「はあ!」

唐突に言われ、西木野さんは声を上げるが、

穂「あつ、できないんだ。」

と煽る。

ニヤケ顔で言われたためか、イラついた西木野さんは、

「それくらいできるわよ!!」

と言つて上着を脱ぎ、腕立てをする。

「1、2、・・・どう!?!これでいいでしょ!?!」

その様子を見た穂乃果ちゃんは、

穂「おおうすごい!私よりもできる!!」

と感心の声を上げる。

それを聞いた西木野さんは、

「当然でしょ!?!これでも私は……」

と、自慢げな顔をするも、

穂「ねえ、それで笑ってみて?」

「えっ?何で?」

と聞いてきた。

しかし、それを聞いた穂乃果ちゃんは、

穂「良いから!」

と言いつつ西木野さんは笑顔でやり始める。が、次第にその笑顔は崩れていく。

穂「ね?大変でしょ?」

「何のことよ!?!」

成る程……、アイドルの大変さを身をもって教えたのか。

穂乃果ちゃんは海未ちゃんが作った歌詞カードを西木野さんに渡す。

穂「はいこれ。一度読んでみてよ?」

「だから私は……!」

穂「読むだけなら良いでしょ?今度また聞きにくるから!その時ダメって言われたら

スツパリ諦める!!」

それを聞いた西木野さんは、

「……………答えが変わることはないと思いますけど……………」

と言って歌詞カードを受け取ってくれた。

それを聞いた穂乃果ちゃんは、

穂「だつたらそれでいい！そしたらまた歌を聴かせてよ！」

と言った。

西木野さんは驚いたのか「えっ？」と声を上げる。

穂「私、西木野さんの歌大好きなんだ!!」

永「確かにすごく綺麗な歌声だったしね。僕もまた聴きたいよ。」

穂「だよね！」

そして僕達は、朝と夕方に神田明神で練習しているからよかつた来て欲しいと伝えて

音楽室を立ち去る。

……………

音楽室を立ち去った後、僕達は海未ちゃんことりちゃんと合流して神田明神にい

き、練習をする。

朝と同じように、海未ちゃん達が走り、僕はタイムを測定する。

1セット目が終わり3人が休んでいると、下から「きやああああ!!」と叫び声が聞

こえて来た。

僕はみんなにここにいるように伝えて様子を見に行く。
そこにいたのは・・・

西木野さんと彼女の胸を揉んでいる副会長だった。

・・・どういう状況？

希「まだ発展途上ってところやな。」

永「いや何やっているんですか？」

思わずツツコム。

「ほ・・・ほんとに、なにすんのよ!？」

西木野さんは自分の胸を押さえながら副会長にいう。

だが、副会長はそれを軽くスルーし、

希「けど大丈夫。望みは捨てなくてもええよ。大きくなる可能性はある。」
とか言っている。

「何のことよ!!」

希「恥ずかしいんなら、こっそりという手もあると思うんよ。」

「だから、何の……」

希「わかるやろ。」

副会長はそう言って階段を登って行く。

……本当に何だったんだ？

永夢 side out

……

西木野真姫 side

私は神田明神で先輩達の練習風景を見た後、家に帰った。

正直、私は迷っている。

先輩達に頼まれた作曲をどうするか。

私はなかなか答えを出せず、ベットに寝っ転がる。

？「真姫？どうかしたか？」

ちようどその時、私の部屋のドアをノックする音が聞こえ、同時にある人の声も聞こ

える。

真「飛彩。・・・うん、ちよつとね。」

私はドアを開ける。そこにいたのは鏡飛彩。先週からこの家に居候している同い年の少年。

飛「何か迷っている顔をしているな。俺でよければ相談に乗るぞ?」

飛彩は私にそう言つて来た。私は少し迷つたのち、相談することにした。

通つている学校が廃校になること。その廃校阻止のために2年の先輩がスクールアイドルを結成したこと。そして私に作曲を頼んで来たこと。

真「ねえ飛彩。私はどうすればいいと思う?」

私がそう聞くと、飛彩は少し考え、

飛「それは真姫がやりたいと思うのであれば、やった方がいいだろう。逆にやりたくないと思つているのであればやらない方がいい。それは頑張つているその先輩達に對して失礼だからな。やるか、やらないか。重要なのは真姫自身の気持ちだ。」

飛彩は私にそう言つて来た。私自身の気持ち・・・

私はしばらく考えていると、

飛「まあ、何にせよ、真姫がやりたいのであれば、俺はそれを応援する。それだけだ。」
と言つてくれた。

私は考え、作るか、作らないか、とうとう決めた。

真「ありがたい、飛彩。おかげで答えを出せたわ。」

飛「役に立ったようで何よりだ。それにしても真姫にお礼を言われるとはな。」

真「ぐえええ?!と、当然でしょ!私だってお礼ぐらいするわよ!!」

私はそう言ってしばらく沈黙が訪れるが、すぐにお互い笑ってしまった。

飛・真「ははははっ!!」

真姫 side out

.....

穂乃果 side

翌日、私は朝練に向かおうと朝早くに起きて家を出る。

そこに、2階にいる、妹の雪穂から、

雪「お姉ちゃん!これ!」

と呼びかけて来た。

穂「なにそれ?」

雪「分かんないけど、ポストに入ってたの!なんか、μ sって書いてあるけど?」

それを聞いて私はすぐにそれを受けとった。

それは1枚のCDだった。

穂「これって……」

……

穂「じゃあ、かけるよ!」

海「はい!」

こ「うん!」

今は屋上で差出人不明のCDをかけている。

そして聴こえてきたのは、海未ちゃんが書いた歌詞に合わせて流れてくる曲と歌声だった!

穂「これ……もしかして……」

私の隣にいる海未ちゃんとかとりちゃんもその歌を聴いて、

こ「私たちの……」

海「私たちの曲……!」

私はこの曲を聴いて、勢いよく立ち上がる。

穂「よし、さっそく練習しよう!!」

海・こ「うん!!(はい!!)」

穂乃果 side out

第8話 試験生と新たな2人のライダー

永夢 side

朝、僕らはいつも通りに神田明神で練習をしている。

今は階段ダツシユだ。

僕はタイムを測定しながら、転生してからの日々を思い出す。

転生してからだいぶ時間が経ったけど、今のところ倒したバグスターは1体。

基本、平和な日々だ。

あの戦い以降、ゲーム病の反応もなし。

対々、戦いの事を忘れてしまいそうだ。

でも、やっぱり平和が一番だね。

そんなことを考えていると階段ダツシユを終えたみたいで、3人共帰ってきた。

僕はいつも通りに水筒とタオルを渡す。

永「お疲れ様。みんな。」

穂「ありがと〜！」

海「いつもありがとうございます。」

穂「それにしても疲れた〜。やっと終わった〜。」

海「まだ放課後の練習がありますよ?」

こ「でも、随分とできるようになったね♪」

ことりちゃん言う通り、確かに最初の頃に比べてだいぶできるようになっている。

海「2人がここまで真面目にやるとは思いませんでした。」

永「まあ、聞いてた限り、よく寝坊するかと思っただけどね。」

穂「大丈夫!!その分授業中にぐっすり寝てるから!!」

永「いや、それじゃあダメじゃん!!」

それじゃあ本末転倒だよ。

そんな会話をしていると、階段の方に西木野さんの姿が見えた。

見られた事に気付いたためか、急いでこの場を離れようとする。

だけど、穂乃果ちゃんの方も気づいたようで、離れようとしている西木野さんに声をかける。

穂「おーい、西木野さ〜ん!真姫ちゃ〜ん!!」

と、大声で。

その声に反応した西木野さんは、早足でこちらに来る。

真「大声で呼ばないで!!」

と穂乃果ちゃんに怒る。

それを聞いた穂乃果ちゃんは、

穂「ん? どうして?」

と聞く。

真「恥ずかしいからよ!!」

ま、そうだよね。

誰だつて大声で名前言われたら恥ずかしいよね。

けど、穂乃果ちゃんはそんな西木野さんをスルーし、

穂「そうだ!!あの曲・・・」

真「!？」

穂「3人で歌ってみたら、聴いてみて!」

と言つてイヤホン付きの音楽プレーヤーを取り出し、西木野さんに渡す。

それに対し、西木野さんは、

真「はあく?なんで?」

と聞いてくる。

穂「だつて・・・真姫ちゃんが作ってくれた曲でしょ?」

真「!？」

どうやら凶星のようだね。

まあ、どう考えても西木野さんしかいないんだけどね。

真「だ、だから私じゃないって何度も……！」

海「まだ言っているのですか？」

否定しようとしたところを海未ちゃんに遮られる。

そしたら突然、穂乃果ちゃんが「クカカカカ……」と言い出し、次の瞬間に、

穂「ガオーーーーー!!」

と叫びながら西木野さんに抱きつく。

……はたから見たらただの危ない人だよね、これ。

さらに穂乃果ちゃんは西木野さんの耳に顔を近づける。

それもあつて西木野さんは恐怖する。

真「はあ……!?何やってんの!？」

穂「うっひっひっひっひっひっひ……」

そんな西木野さんに穂乃果ちゃんは悪い笑顔で笑う。

真「い、イヤアアアアア!!」

とうとう叫ぶ西木野さんだが、次の瞬間に耳にイヤホンをつけられ、「えっ!？」と呆気

にとられる。

穂「よおし、作戦成功！」

真「!？」

穂「結構上手く歌えたと思うんだ。いくよ。」

海「μ, s」

こ「ミュージック」

「「スタート!!」」

.

朝練が終わり、僕達は学校に登校する。

穂「ふああああ」

海「寝る気満々ですね。」

穂乃果ちゃんはいぶ眠そうだ。

すると、後ろから「ねえ、あの子達じゃないという声がする。

後ろを見ると、そこには先輩2人がいた。

「あなた達って、もしかしてスクールアイドルやってるっていう」

そう質問される。

それに対し、ことりちゃんが質問に答える。

こ「あつ はい! μ, s っていうグループです!!」

「μ、s・・・? ああ・・・石鹸？」

海「違います！」

海未ちゃんが即座に否定する。

「そうそう、うちの妹がネットであなた達の事を見かけたって・・・」

穂「ほんとですか？」

「明日、ライブやるんでしょ？」

こ「はい！放課後に!!」

「どんな風に踊るの？ちよつとここで踊ってよ！」

こ「えっ・・・!?ここでですか!?!」

ことりちゃんは戸惑う。

それもそのはず。この場所は校門。

生徒もたくさんいる。

どうするか考えていると、

穂「うふふふ、いいでしょう。明日のライブにもし来てくれるのなら、少しだけ見せ

ちゃいます。」

「本当!?!」

穂「さらに、お友達を連れて来てくれるのであれば、さらにもう少し・・・!」

「行く行くー!」

穂「やったろ!!」

宣伝に成功し、飛び跳ねる穂乃果ちゃん。

まさか上手くいくとは。

穂「それでは、頭の部分を少しだけ・・・」

「あれ?もう1人の子は?」

穂乃果ちゃんがダンスの頭の部分をやろうとした時に、先輩にそう言われる。

周りを見渡すと、海未ちゃんがいなくなっていた。

・・・どこ行った?

穂「・・・ふえ?」

・・・

海未ちゃんを探し始めて数分、屋上で発見した。

海未ちゃんは体育座りをしていた。

海「無理です・・・」

弱々しい声でそういう海未ちゃん。

海未ちゃんはかなり恥ずかしがりだからね。

穂「ええええ、どうして!?海未ちゃんならできるよ!!」

海「できます・・・」

穂・永「「えっ?」」

海未ちゃんの予想外の言葉に僕と穂乃果ちゃんの声がハモる。

海「歌もダンスもこれだけ練習してきましたし・・・。でも、人前で歌うのを想像すると・・・」

こ「緊張しちゃう?」

海「・・・」(コクツ)

無言で頷く海未ちゃん。

成る程、そういう事か。

永「でも、人前で歌わないと意味がないよ?」

海「分かっています。ですが・・・」

穂「そうだ!!そういう時はお客さんを野菜だと思えつて、お母さん言ってた!!」

海「・・・野菜?」

穂乃果ちゃんにそう言われ、想像する海未ちゃん。

〈想像中〉

大量の大きめの野菜に囲まれながら、ステージに立つ。

海「みんな、いづくよ!!」

『わあああああああ!』

〈想像終了〉

海「私1人に歌えと!？」

穂「えっ!？」

永「一体何を想像したの？」

意味不明な事を言う海未ちゃん。

ほんとに何を想像したんだ？

穂「はあく、困ったな。」

こ「でも、海未ちゃんが辛いんだったら、何か考えないと。」

海「ひっ、人前じゃなければ大丈夫なんです!!人前じゃなければ・・・」

永「だからそれじゃあ意味ないって。」

すると、穂乃果ちゃんが急に海未ちゃんの手を掴み立ち上がらせる。

穂「いろいろ考えるより、慣れた方が早いよ!!」

穂乃果ちゃんに何か案があるみたいだ。

ここは穂乃果ちゃんに任せよう。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

場所は変わって秋葉原。

放課後、僕は穂乃果ちゃんについて行ってここに来た。

どうやら、ここでライブの宣伝のためにチラシを配ろうと言う事だ。

それと同時に海未ちゃんにも慣れてもらおうという算段だ。

確かに、これなら海未ちゃんの練習にもなるし、ライブの宣伝もできて一石二鳥だ。

そして僕はチラシを配り始める。

永「お願いしまーす!!」

穂「ライブやりまーす！お願いしまーす!!」

こ「よろしくお願いしまーす!!」

僕と穂乃果ちゃん、ことりちゃんの3人は通行人に声をかけながらチラシを配る。

ふと横目で海未ちゃんを見ると、目をつぶって「お客さんは野菜、お客さんは野菜…

！」とつぶやいている。

大丈夫かなと心配していると「永夢？」と声をかけられる。

声がした方を見ると、そこには明日那さんがいた。

永「明日那さん!?!どうしてここに？」

明「ちよつとね。街をいろいろと見て周りたくて。」

永「ふくん。」

僕が明日那さんと話していると、

穂「永夢君、その人は？」

穂乃果ちゃんが話しかけてくる。

そっちの方を向くと、穂乃果ちゃんとことりちゃんがこつちを見ていた。

そういえば2人は会った事なかったね。

永「彼女は仮野明日那さん。訳あって同じ家に住んでいる僕の姉さんみたいな存在の人なんだ。」

明「初めまして。仮野明日那です。」

穂「初めまして！私は高坂穂乃果です!!」

こ「初めまして。私は南ことりです！」

お互いの自己紹介が終わったあとに明日那さんが僕らに聞いてくる。

明「みんなは、ここで何をやっているの？」

永「明日、学校でライブやる事はもう知っていますよね？」

明「うん。それは前に永夢から聞いたよ。」

穂「それでライブの宣伝をしているんです！」

明「へえ、頑張ってるね！私も明日いけるかな？」

こ「はい!!入校許可をもらえれば!!」

永「入校許可に関しては、僕達でどうにかするから。明日、ぜひ来てみて！」

明「本当!?! それじゃあ明日はライブを見に行こうかな。ところで・・・」

永・穂・こ「「?」」

明「一つ気になったんだけど、あれって・・・」

明日那さんが指さす方向では海未ちゃんが無言でガチャガチャを回していた。

海「・・・あ、レアなのでたみたいですよ。」

穂「ちよつと、海未ちゃん!?!」

それを見て僕は思わずため息をついてしまった。

・・・大丈夫かな、これ。

・・・

場所は変わり学校の校門前。

明日那さんと別れた僕達は、海未ちゃんでもよく知っている場所に移動した。

理由としては、よく知っている場所なら海未ちゃんでも大丈夫だろうと考えたからだ。

そして再びチラシを配り始める。

永「お願いしまーす。」

穂「ライブやりまーす!」

こ「よろしくお願いしまーす!!」

海「えっと、よ、よろしくお願いします!」

目の前に1人通りかかった時に、海未ちゃんは勇気を出してチラシを出したが、「ふん。」と言われる。

穂「海未ちゃん、ダメだよそんなんじゃない!!」

海「穂乃果はいいですよ。店の手伝いで慣れてると思いますし。でも私は・・・」

永「ことりちゃんだってちゃんとやってるよ?海未ちゃんも頑張らなきゃ。」

穂「そうだよ海未ちゃん!それ、全て配り終えるまでやめちゃダメだからね!!」

海「そんな!無理ですよ!!」

穂乃果ちゃんに言われて海未ちゃんは反論する。

しかし、

穂「ねえ海未ちゃん、私が階段5往復できないって言った時、なんて言ったか覚えてる?」

海「えっ!」

穂「確か、『やるからにはちゃんとしたライブをやります』だったよね?」

海「っ!」

そう。以前海未ちゃんの練習メニューを見た時、穂乃果ちゃんが「無理だよ!」と言っ

た時、海未ちゃんはそう言って練習を始めた。

まさか自分が言った事を言われるなんて思ってたらしく、海未ちゃんは焦る。

海「わ、わかりました！やります!!μ's ライブやりまーす！お願いしまーす!!」

覚悟を決めたらしく、さつきよりも大きな声でチラシを配り始める海未ちゃん。
するとそこに、

「あ、あのお・・・」

永「ん?・・・あ、君はあの時の。」

「は、はい。小泉花陽です・・・。」

以前、1年生教室の前で出会った少女がいた。

永「どうかしたの?小泉さん。」

「ライブ、見に行きます。」

穂「本当!」

こ「来てくれるの!」

小泉さんの言葉に、穂乃果ちゃんときどちちゃんが反応して喜ぶ。

海「では、1枚2枚と言わず、これ全部・・・!」

穂・永「海未ちゃん?」

どさくさに紛れてチラシを全て渡そうとする海未ちゃんに、穂乃果ちゃんと2人で注

意する。

.....

その後、明日のライブについて話し合いをするために穂乃果ちゃんの家集合する。ちなみにことりちゃん衣装を取りに行っていない。

今はA—RISEの動画を見ている。

穂「やっぱり、動きのキレが違うね。」

そう言つて立ち上がると、

穂「こう・・・? こう?」

と言いながら色々なポーズをとる。

そんな事していると急にパソコンの画面に変化が起こる。

その変化に穂乃果ちゃんが気づく。

穂「あっ!!」

海「ど、どうしました!？」

穂「ランクが上がってる!!」

永「きつとチラシを見てくれた人が投票してくれたんだよ。」

海「嬉しいものですね!」

こ「お待たせ」

ちようどその時、ことりちゃんが部屋に入ってくる。

穂「あ、ことりちゃん！見て見て！！」

こ「わっ！！すごい！！」

永「ことりちゃん、それ衣装？」

こ「うん♪さつきお店で最後の仕上げをしてもらったの♪」

そう言つて持つて来た袋から衣装を取り出す。

こ「じゃあ〜ん♪」

穂「わ〜・・・」

永「すごい・・・」

海「なっ・・・」

ことりちゃんが見せて来た衣装は、十分アイドルとして可愛らしい桃色のミニスカートの衣装だった。

穂「可愛い！！本物のアイドルみたい！！」

永「ことりちゃんすごいよ！！」

こ「えへへ〜♪ありがと〜♪」

穂乃果ちゃんは手を上にあげて喜び、僕は驚きの声をあげる。

だけど、衣装を海未ちゃんは口を開けっぱなしにしている。

永「海未ちゃん、どうかした？」

僕が海未ちゃんに聞くと、海未ちゃんはことりちゃんに聞く。

海「ことり。」

こ「なあゝに？」

海「その、スカート丈は？」

こ「え？・・・あつ・・・」

あつ・・・そつか、思い出した。

あれは衣装を決める時、

海『いいですか!?スカート丈は最低でも膝下でなければ履きませんよ!?いいですね

!?’

こ「は、はいいいいいいいい!!」

と、鬼のような顔でことりちゃんに迫っていた。

そして、今現在も・・・

海「言ったはずですが・・・!最低でもスカート丈は膝下でなければ履かないと・・・!!」

こ「ひいいいいいい・・・」

目の前の光景はあの時とデジャブっていた。

穂「だ、だつてしょうがないよ・・・。アイドルだもん・・・。」

海「アイドルだからといって、スカートは短くないといけない決まりはないはずです!!」

あまりにも海未ちゃんが穂乃果ちゃんのことりちゃんを責めるため、僕は海未ちゃんを落ち着かせようと声をかける。

永「まあまあ海未ちゃん。落ち着い」永夢は黙っていてください!!」・・・はい。」
こ、怖い。おもわず黙ってしまった。

でも、今の海未ちゃんには逆らってはいけない気がする・・・!

穂「それは、そうだけど・・・」

こ「今から直すのは、さすがに・・・」

永「そ、そうだよ海未ちゃん。」

僕たちで海未ちゃんを説得すると、海未ちゃんは立ち上がり、

海「そういう手は卑怯です!!でしたら、私は一人だけ制服で歌わせてもらいます!!」

永「それはそれで恥ずかしくない・・・?」

一人だけ制服は、正直浮くよ?

こ「ええ!!」

穂「そんな!」

海「そもそも3人が悪いんです!!私に黙って結託するなんて・・・!!」

永「いや、衣装に関してはほとんど関わっていないんだけど……」

穂「だって……成功させたいんだもん!!」

あ、スルーされた。

穂「歌を作って、ステップを覚えて、衣装も揃えて、ここまで頑張ってきたんだもん……」

穂乃果ちゃんは思っている事を次々と口にしていく。

穂「4人でやってよかったって、頑張つて来てよかったって、そう思いたいのに!」

穂乃果ちゃん……そんな事を思つてやってたんだ……。

すると、何を思ったのか、穂乃果ちゃんは急に立ち上がり、窓を開けると、

穂「思いたいのおおおおおおおおおとおおとおおとおお!!」

と叫ぶ。

海「何をしているのですか!?!」

永「近所迷惑だよ。」

こ「それは私も同じかな……」

海・永「「えっ?」」

ことりちゃんが穂乃果ちゃんの意見に同意する。

こ「私も4人でライブを成功させたい!!」

海「ことり・・・」

永「海未ちゃん。2人はそれだけ本気なんだよ。僕達4人でライブを成功させる。今日までそれを目標に頑張つて来たんだ。その中で、1人だけでも違うことをしてしまえば、その目標は一生達成しなくなってしまう。それは、僕もいやだな。最後までみんなで一緒に頑張つていこう?」

僕は自分の気持ちを正直に、包み隠さず海未ちゃんに伝える。

海「永夢。・・・はあ、わかりました。」

僕の気持ちを聞いた海未ちゃんは一度ため息をつき、了承を声を上げる。

それを聞いた穂乃果ちゃんは満面の笑みを浮かべ、

穂「海未ちゃん・・・!だあい好きいいいい!!」

海「ひゃあ!」

と海未ちゃんに抱きつく。

その光景を見た僕とことりちゃんは顔を見合わせて笑う。

・・・

今僕たちは神田明神に来ている。

目的は練習・・・ではなく神頼みだ。

穂「どうかライブが成功しますように!いや大成功しますように!!」

海「緊張しませんように。」

こ「みんなが楽しめますように。」

永「少なからずライブを見に来てくれる人がいますように。」

穂「よろしく願いしまーす!!」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

絵「以上で新入生歓迎会を終わります。各部活とも体験入部を行なっているので興味があればどんどん覗いてみてください。」

翌日、新入生歓迎会が終わり、僕たちはライブのチラシを配る。

だが、昨日に比べて確実に受け取ってくれる人は少なくなっている。

他の部活も勧誘をし出している。

穂「むむむ・・・他の部活に負けてられないよ!!」

永「そうだね。」

僕は穂乃果ちゃんに返事をした後、海未ちゃんの方をみる。

今現在、海未ちゃんは講堂の入り口前で堂々とチラシを配っている。

海「お願いしまーす!午後4時からです!お願いしまーす!」

昨日とはまるで別人のようだ。

ちようどその時、チャイムがなる。

『2年生の宝生永夢さん。至急、理事長室にお越しください。繰り返します。2年生の宝生永夢さん。至急、理事長室にお越しください。』

永「?何だろう?ごめん、ちよつと行つてくるね。」

海「理事長からの呼び出しですね。こっちは私達でやっておきますから、急いで行つて来てください。」

永「ごめんね。ライブには間に合わせるから!!」

僕は海未ちゃん達にそう行つて、急いで理事長室に向かう。

.....

永「失礼します。」

僕は理事長室のドアをノックする。

ここに来るのは転入初日以来だね。

『どつぞつ』

中から理事長の声がし、僕は扉を開けて中に入る。

「久しぶりね。学校生活の調子はどう?」

永「大丈夫ですよ。だいぶ慣れましたし。」

「そう。よかつたわ。」

永「それで、ご用件は?」

「その用件をいう前に、あなたに紹介したい人がいるの。入って来て。」

理事長がそう言うのと、部屋のドアが開き、外から1人の少年が入って来る。

・・・つて、この人！

永「飛彩君!？」

飛「永夢さん!？」

入って来たのは何と、以前町で出会った鏡飛彩君だった！

「あら？あなた達、知り合いだった?？」

永「あ、はい！以前町で・・・」

「ふふ、ならよかった。」

永「?」

「実はね、彼は明日からこの学校に通う2人目の試験生でね、同じ男子生徒同士、仲良くしてもらいたいなの。」

永「そうだったんですか。」

明日からこの学校に通い始めるのか。

やった！2人目の男子生徒だ！

「それであなただを呼んだ理由はね、これからこの学校の内部を案内してもらいたいなのよ。もちろん、できる範囲でいいわ。今日があなたにとって大事な日であることを知ってい

るから。ライブ開始時間になれば、そっちに行ってもいいわ。」

永「わかりました。できる範囲でいいのなら、お引き受けいたします。」

「お願いね。」

そうして、僕と飛彩君は理事長室から出る。

永「まさか、ここでまた会うことになるとはね。」

飛「それはこつちも予想外でした。俺の他にも試験生がいる事は聞いてましたが、まさか永夢さんだったとは。」

永「ははっ。」

僕達は歩きながら会話をする。

教室や音楽室、生徒会室などに案内し、今は中庭に移動している。

ちよつと周りからの視線が気になるが・・・

飛「そういうえば、一つ気になったのですが、さつき理事長が言っていたライブって……？」

永「ああ、実はね、僕のクラスメートの3人が廃校阻止のためにスクールアイドルを始めてね、僕はそれに協力しているんだ。そして今日はそのファーストライブ。時間帯的には、あと10分ぐらいだね。」

飛「そうなんですか。それなら、行きませんか？」

と僕に聞いて来る。

永「えっ? いいの?」

飛「はい。正直、俺も気になるんです。」

永「それなら行こうか。講堂でやる予定だからそこに向かおう。」

そう言つて僕が立ち上がったその時・・・!

『stage select』

永・飛「!?!」

という音声と共に僕たちの場所は別の場所へ移動する。

飛「こ、ここは・・・?」

永「今の音声・・・まさか!?!」

その場所で周りを見渡す飛彩君。

だけど、僕には今聞こえた音声から何が起こったのかが分かり、奥の方を見る。

僕が見た方向からは、白い体で黒い顔をし、腰に紫色のガシヤットが刺さっている

ゲーマードライバーを巻いたゆるキャラのような存在がこちらに向かって歩いて来ていた。

飛「お前は何者だ!」

飛彩君はその存在に僕も思った疑問を問いかける。

しかし、相手は無言でゆっくりとドライバーのレバーを開く。

『ガツチャ〜ン!』

『レベルアップ!』

『マイティジャンプ!!マイティキック!!マイティ〜アクションX!!』

相手はレベルアップし、その体は等身大になる。

その姿はまるで……

永「黒い、エグゼイド……?」

僕が変身するエグゼイド。その色を黒くしたような外見だった。

僕らはその姿を見て呆気にとられていると、黒いエグゼイドはその右手に装着した紫色のABボタンがあるパッドのような物を掴み、その向きを逆にしてチェンソーの形をした方で攻撃して来る。

永「あぶな!!」

飛「くっ!」

僕たちはその攻撃を横に飛んで避ける。

飛「いきなり攻撃して来た!?!」

永「とにかく、僕たちも変身しよう!」

そうやって僕はゲームドライバーを取り出し、腰に巻く。

そしてガシヤットを取り出し、スイッチを押す。

『MICHTY ACTION X』

後ろに画面が出現し、ゲームエリアが広がるとブロックが広がる。

ガシヤットを持った右手を左に持っていき、右に大きく回転する。

永「変身!!」

そしてガシヤットを左手に持ち替え、ゲームドライバーの右側の窪みにはめる。

『レッツゲーム!メツチャゲーム!ムツチャゲーム!ワツチャネーム!? I、m a

仮面ライダー!!』

エ「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!!」

俺は仮面ライダーエグゼイド・レベル1に変身する。

その様子を見た飛彩は自身のゲームドライバーを取り出し、俺と同じように腰に巻く。

そして水色のガシヤットを取り出し、そのスイッチを押す。

『TADDLE QUEST』

音声が始ると、同じように背後に画面が出現、ゲームエリアと宝箱が広がる。

そして、右手をゆっくりと左側に持っていく。

飛「変身。」

左側に持つていったガシヤットを逆さにし、俺と同じ場所に差し込む。
ゲームドライブバーから出てきたパネルの一つを左手で左側に押す。

『レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャゲーム！？ I、m a
仮面ライダー!!』

その姿は、俺と同じように白い体で、頭は水色、左手に水色の盾を持つ、騎士のよう
な顔のライダーがいた。

仮面ライダーブレイブ・レベル1

ブ「これより、黒いエグゼイド切除手術を開始する。」

第9話 ファーストライブ!!

海未 side

私達は今、講堂にある更衣室で衣装に着替えています。

これから私達μ'sのファーストライブがあります。

今までの練習した成果をみせるときです。ですが・・・

海「実際に着てみると・・・やっぱり恥ずかしいです／＼」

昨日はみんなに言われて覚悟を決めました、やっぱりいざ着てみるとすごく恥ずかしいです／＼

穂「おい！海未ちゃん!!いつまで着替えてるのー?」

私が恥ずかしがっていると、外から穂乃果の声がありました。

海「ちよつと待つてください!!」

穂乃果に返事をした後、私はジャージをスカートの下に履いて穂乃果とことりの前に
行きます。

穂・ここ「おお〜!・・・お?」

2人の視線が上から下に移動し、ジャージの所で止まりました。

海「ど、どうでしょうか？」

私が聞くと、2人は呆れた顔をして、

穂「海未ちゃん……往生際が悪いよ……」

こ「そうだね……」

そう言ってきました。

海「やっぱり恥ずかしいです／＼」

穂「昨日の海未ちゃんはどこ行つたの!? えいつ!」

穂乃果がジャージを無理やり脱がします。

海「いやああああ!!」

穂「隠してどうするの!? スカート履いてるのに!」

海「で、ですが／＼」

こ「海未ちゃん、可愛いよ?」

海「えっ?」

ことりがそう言い、穂乃果が私を鏡の前に連れて行きます。

そこには、青い衣装に身を包む私の姿がありました。

そして、私の横に穂乃果とことりも並びます。

こ「ほら、似合ってるよ!」

穂「そうだよ海未ちゃん！それに、3人で並べば恥ずかしくないでしょ？」
穂乃果の言う通り、確かに3人で並ぶと、先ほどの恥ずかしさはなくなっていきました。

海「そうですね・・・確かにこうしていると・・・」

穂「でしょ!?!それじゃあ最後にもう一回練習しよう?」

こ「うん!!」

穂乃果がそう言つて、私達は講堂に移動します。

海未 side out

.....

◎ side

ここは、黒いエグゼイドが広げたステージ。

そこではレベル1のエグゼイドとブレイブが、レベル2の黒いエグゼイドと相対していた。

『ガシャコンブレイカー!!』

エグゼイドがガシャコンブレイカーを出現させ、ブレイブの方は錆びたような剣を出現させる。

エ「おりゃ!!」

最初に動き始めたのはエグゼイド。装備したガシャコンブレイカー・ハンマーモードで黒いエグゼイドに攻撃する。

黒エ「・・・・・・・・・・」

エ「ぐわっ!?!」

だがその攻撃を黒いエグゼイドは無言でよけ、逆にエグゼイドのボディに蹴りを入れる。

ブ「ふっ!!」

その黒いエグゼイドにブレイブは剣で斬りかかる。

黒エ「・・・・・・・・・・」

ブ「な、何!?!」

黒いエグゼイドは右手に装着していた武器、ガシャコンバグバイザーのチェンソーで防御する。

そしてがら空きのブレイブのボディに、エグゼイドと同じ様に蹴りを入れる。

エ「大丈夫か?ブレイブ。」

ブ「くっ。大丈夫と言いたい所だが、正直きつい!!」

エ「思ったけど、お前もしかしてこれが初陣か?」

ブ「あ、ああ。」

エ「マジかよ……」

エグゼイドとブレイブが会話をしている時、黒いエグゼイドがブレイブにバグバイザーで攻撃を仕掛ける。

ブ「!?!?・くっ!」

ブレイブはその攻撃をとっさに剣で防御する。が……

黒エ「……………」

ブ「なっ!?!」

黒いエグゼイドの攻撃に耐えきれなかったのか、ブレイブの剣が真つ二つに折れる。

エ「剣を真つ二つにするとか……ありかよ!」

その様子を見た黒いエグゼイドはドライバーからガシャットを抜き、横のキメワザスロットホルダーにセットし、スイッチを押す。

『ガシャット!!』

『キメワザ!!』

そして蹴りの態勢にはいると、再びスイッチを押す。

『M I C H T Y C R I T I C A L S T R I K E!!』

複眼が光ると、黒いエグゼイドは高くジャンプし、ある程度の高さまで上がるとエグゼイド達の方に足を向け、そのままキックする。

エ・ブ 「ぐわああああああ!!」

『会心の一発!!』

エグゼイドとブレイブはダメージの受けすぎにより、強制的に変身が解除される。

それを見た黒いエグゼイドはそのままその場を立ち去り、場所は音ノ木坂学院の中庭に戻る。

永 「ひ、飛彩君。大丈夫かい……?」

飛 「はあ、はあ。な、なんとか……」

永 「あいつ……一体何者なんだ?」

飛 「永夢さんも知らないですか……」

敗北した2人の頭の中は黒いエグゼイドへの疑問で一杯だった。

……

穂 「リハーサルも大丈夫だったね!」

こ 「うん!!」

海 「いよいよですね……やっぱり、緊張します……」

穂 「大丈夫!! 私達ならできる!!」

リハーサルを終え、幕が降りているステージの上で並ぶ3人。
そして開始のブザーがなり、ゆっくりと幕が上がっていく。
そして客席には……

……誰もいなかった。

音ノ木坂の生徒はもちろん、絶対に見に来ると行った花陽も、ここまで一緒に協力し

てきていた永夢も、

誰一人としていなかったのだ。

予想外の光景に啞然とする穂乃果たち。

「ごめん……頑張ったんだけど……」

途中からチラシ配りをしてくれていたミカが言う。

この光景を目にした3人の目に涙が滲む。

海「穂乃果……」

こ「穂乃果ちゃん……」

穂乃果は顔を俯かせるが、すぐに顔をあげ、

穂「そりやそうだ！世の中そんなに甘くない!!」

と笑顔で叫ぶ。だが、その目には涙が滲んでいる。

悔しそうに唇を噛みしめる穂乃果だったが、その瞬間に講堂の扉が開く。

明「ああ、やっと着いた。……って、ライブは？」

明日那だ。どうやら学校内で少し迷ったらしく、遅れて到着したらしいのだが、客が

いない状況に目を見開く。

海「明日那さん……」

穂「……」

明日那が来てはどうすればいいのかわからず、黙ったままの3人。
そこに………

永「歌ってよ！3人共!!」

「!?!?!」

永夢と飛彩だ。黒いエグゼイドとの交戦のあと、しばらく動けずにいたが、永夢がライブの事を思い出し、2人でここに来たのだ。

海「永夢……」

永「確かにお客さんは全然こなかったかもしれない。けど、1人でもお客さんがいる。そのお客さんに……僕達に見せてよ！ライブを!!」

穂「永夢君……」

そこに、再び講堂に駆け込んで来る人影が。

花「はあ、はあ。あ、あれえ？ライブは？」

穂「花陽ちゃん……」

花「あれえ？あれえ？」

開始時間が過ぎていても関わらず行われていないライブを目の辺りにし、戸惑う花

陽。

だが、それにより穂乃果達は光を取り戻す。

穂「やろう!!」

こ「へっ?」

穂「歌おう!全力で!!」

海「穂乃果……」

穂「だって、そのために今日まで頑張ってきたんだから!!」

海「こ!!」

穂乃果の言葉を聞いて、顔を明るくする2人。

こ「穂乃果ちゃん……。海未ちゃん!!」

海「ええ。やりましょう!!」

そして、音楽が流れ始め、3人は踊り出す。

少ない数ではあるが、客のために全力で。

(♪START:DASH!!)

穂乃果達は踊る。

笑顔で。全力で。

そのダンスを一生懸命眺める花陽。

その横に、以前永夢達とあったオレンジ色の髪の子、星空凜が来る。

彼女は花陽を探してここに来たが、一心不乱にステージを見ている友達を見て、自分もステージを見る。

講堂の入り口付近には希と真姫がいて、

音響室には絵里、

別の入り口近くには、ツインテールの少女がいた。

今ここに、近い将来『9人の女神』と呼ばれる少女が全員集まっていた。

© side out

.....

永夢 side

曲が終わり、講堂内から拍手が巻き起こる。

3人は肩で息をしているが、その顔はとても晴れやかな笑顔だ。満ち足りた表情をしている。

しばらくして拍手が鳴り止むと、階段から誰かが降りてくる音がする。

そつちの方を見ると生徒会長がこちらに向かつて歩いてきていた。

穂「生徒会長……」

絵「どうするつもり？」

穂「続けます!!」

絵「何故？これ以上やっても意味ないと思うけど……？」

穂「やりたいからです!!」

生徒会長が穂乃果ちゃん達に質問を投げつける。

でも、そのくらいじゃあ穂乃果ちゃんは絶対に折れない。

穂「私、もつと歌いたい!!もつと踊りたい!!そう思ってます!!こんな気持ち、初めて

なんです!!」

穂乃果ちゃんが思っていることを正直にぶつける。

穂「だから今はこの気持ちをそのまま真っ直ぐに信じてみたいんです!確かにこのまま見向きもされないかもしれない、誰からも理解されないかもしれない……でも!一生懸命頑張つて、私たちがとにかく頑張つて、この想いを届けたい!今、私たちが届けたい……この想いを!!」

絵「でも、結果は……」

永「生徒会長。」

まだ何かを言おうとする生徒会長に話しかける。

永「確かに今回の結果は失敗かもしれない。でも、失敗したからダメというわけでは無い。失敗から繋がる事もある。今回の結果を生かし、今後につなぐ事ができる。敗北からのスタート。僕はそれもいいと思います。僕はこれからもμ'sを支え続けます。誰になんと言われようと、絶対に!μ'sの運命は、僕が変わる!!」

僕がそう宣言すると、生徒会長は驚いた顔をし、すぐに講堂から出て行った。

こうして、μ'sのファーストライブは終わりを迎えた。

永夢 side out

.....

◎ side

ここは、とある廃墟ビルの中。

そこにはエグゼイドとブレイベを倒した黒いエグゼイドがいた。

? 「よお、どうだった?」

そんな黒いエグゼイドに話しかける一人の青年と、その近くにいての緑色の怪物。

パラドとグラフィイトだ。

パラドに話しかけられた黒いエグゼイドはドライバーのレバーを戻し、ガシヤットを

抜く。

すると、変身が解除され、変身者が姿の表す。

そこには、黒い髪の毛、永夢達より少し年上ぐらいの青年がいた。

？「まあまあだったな。それほど強くもなかったしな。」

パ「でも、心が踊っただろ。ゲンム。」

ゲンム。それが黒いエグゼイドの名前。

ゲンムと呼ばれた青年はその言葉を聞くと、

ゲ「ああ。心が踊ったよ。だが、それと同時に恐ろしいよ。この私の才能があ。」

と、不敵な笑みを浮かべていた。

第10話 CR

永夢 side

ファーストライブから早数日。

今日は土曜日だ。

普段だったら暇で、おそらくゲームセンターに行っていただろう。

だが、今日はそういうわけにも行かない。

何故なら今日はk『ピンポン』・・・おっと、どうやら来たようだ。

僕は玄関に行つてドアを開ける。

永「はい。」

穂「おはよう永夢君!!」

こ「おはよう!」

海「おはようございます。永夢。」

永「いらつしやい、みんな。どうぞ、上がつて。」

そう。今日は海未ちゃん達が家に来る日なのだ。

なぜこうなったのかというと・・・

〈回想〉

穂「ねえねえ、永夢君の家ってどういふところ？」

永「ん？僕の家？」

突然穂乃果ちゃんが僕の家を聞いて来た。

穂「うん。今まで永夢君の家のこと聞いてなかったから。」

こ「そういえばそうだね。ことりも気になるな。」

永「そっか。2人はまだ来た事なかったっけ。」

穂「ん？2人は？」

永「うん。海未ちゃんは既に僕の家に来た事あるよ。ね？海未ちゃん。」

海「はい。なので私は既に永夢の家については知っています。」

穂「ええ？？なんで？私も行きたーい！」

こ「私も行ってみたいな！」

行きたいって言われてもな。うん……

永「それじゃあ、次の土曜日に来る？うちの方は問題ないし。」

穂「いいの!？」

永「うん。」

穂「やったー!!」

こ「楽しみだね、穂乃果ちゃん!!」

穂「うん!」

海「本当に大丈夫なのですか? 永夢。」

永「大丈夫だよ海未ちゃん。明日那さんには事前に言っただけで問題ないし。」

海「そうですか。」

〈回想終了〉

という事があった。

穂「結構大きいね。」

こ「ねえ。」

永「そんなに?」

僕はもうこの家に慣れちゃったしなく。

明「あ、いらっしやいみんな。」

穂「明日那さん!!」

海「おはようございます。明日那さん。」

明「今日はゆっくりしていいね。」

こ「ありがとうございます。」

明日那さんが来てみんなと挨拶する。

とりあえずみんなにはリビングに移動してもらい、その間に僕は飲み物を用意する。

永「はい、お茶どうぞ。」

穂「わーい!!」

海「ありがとうございます永夢君。」

こ「ありがとうございます永夢君。」

リビングにある椅子に座ってそれぞれのお茶を飲む。

永「さて、何をする？」

穂「うーん、そうだな。」

永「ゲームならたくさんあるよ？」

穂「ゲーム!? やりたいやりたい!!」

こ「いいね♪」

海「そうですね。みんなですみますし。」

永「それじゃあ、早速やろうか！」

穂「やったー!!」

僕はマリ○カー○の電源を入れ、コントロールをみんなに渡す。

穂「まっけないよ〜！」

永「僕も負ける気はないよ!!」

海「私もです！」

こ「私も！」

そして、ゲームが開始された。

・
・
・
・
・
・

永「よっしゃー！また、俺の勝ち！」

穂「ああくまた2位だ〜・・・」

こ「私も3位だ〜・・・」

海「なぜ、なぜ・・・！」

結果はみての通り。全て俺が1位だ！

永「へへ、これが天才ゲーマーMの力だ!!」

穂「強すぎるよ〜」

海「なぜ毎回ビリなのですか・・・！」

穂・こ「「ひっ！」」

海未は毎回ビリで終わっている。

その結果に納得ができないのか手に持っているコントローラーに力を込めてひびを

入れる。

永「ちよつ、海未ちゃんコントローラー壊さないで！」

海「もう一回、もう一回です……！次こそは……！」

明「はい、そこまで。もうお昼だよ？用意したから、みんな食べて。」

穂「やったー！」

こ「お腹すいた。」

永「それじゃあゲームをやめてお昼にしようか。ほら、海未ちゃん。」

海「そうですね。そうしましょう。」

……

お昼を食べ終えた後、僕達はある扉の前にいる。

理由としては、先ほどのお昼中に……

海『永夢、一つ聞きたいのですが……』

永『ん？なに？』

海『以前、私が出来た時、あそこにドアなんてありませんでしたっけ？』

永『え？扉？……あれ？あんな所になかったと思うけど……』

と、いう事があり、それに興味を示した穂乃果ちゃんが「行ってみよう！」と言い出し、中をみる事になった。

永「それじゃあ、開けるよ？」

海「は、はい。」

穂「うん！」

僕は扉を開けて中を確認する。

中には階段があり、下に向かっていた。

こ「階段？」

永「この家に地下なんてあったっけ？」

海「どうしますか？」

穂「行ってみようよ！」

永「そうだね。行ってみよう。」

僕たちは階段を降りて行く。

下につくと、大きな扉があった。その扉に近づくと、扉が自動で開く。

穂「結構広いね。」

永「家の地下にこんな空間があったんだ。」

そこには、壁が白い空間があり、真ん中には大きな画面と、その目の前にベッドがある。

永「なんだろう、この空間。」

海「すごく広いですね。」

僕と海未ちゃんが呆気にとられていると、

穂「ねえねえ、ここにまた階段があるよ。」

こ「ほんとだ〜」

という会話が聞こえて来た。

そっちの方を向くと確かに階段があった。

永「ここはどこに繋がっているんだ？とにかく行ってみよう。」

僕はそう言っただけで階段を登って行く。

階段は螺旋状になっており、上には先ほどの空間よりも小さい空間があった。

その部屋の中には机や椅子、モニターなどがたくさんあり、モニターの全てに『CR』という文字が浮かんでいる。

壁には窓が設置されており、見るとさっきの広い空間が見えた。

また、部屋の端にはピンク色で彩られた空間があり、そこにはまたモニターがあった。

ただ、他のモニターと違う点はモニターの前にゲームのコントローラーのようなものがある事だ。

モニターの上には『ドレミファビート』と書かれている。

永「ドレミファビート？それって確か、ポッピーが言ってた……」

初めてポッピーと出会った時に、彼女は自分がドレミファビートをバグスターだと
言っていた。つまりこれは……

永「ゲーム？」

そう考えていると、海未ちゃんが、

海「永夢。ここにあなた宛の手紙がありますよ？」

永「えっ？ 僕宛の？」

机の上に置いてある手紙を確認すると、そこには確かに僕の名前が記されていた。

永「一体誰だろう？」

僕は誰なのか考えるが、心当たりが全くない。

そもそも僕は転生者だから、この世界では手紙のやり取りをするほど親しい人はいないし……あつ。

永（もしかしてこの手紙……神様から？）

この手紙が僕を転生させた神様からだと考えた僕はすぐに内容を確認する。

『お久しぶりです。最近の調子はどうですか？ 今回は新たなガシャットを渡す事はできませんが、ゲーム病が発症した患者を保護する場所として、電脳救命センター、通称CRを家に地下に設立しましたので、ご自由にしようしてください。』

と書かれていた。

CRか・・・今のところは使わないだろうけど、部屋の中を把握してかないとな。その後、部屋の中を見て回り、他には特に何も無いことを確認して地上に戻る。

・・・・・・・・

地上に戻ると、時間もそれなりに経っており、だいぶ地下にいたことがわかった。

海「それじゃあ、そろそろ帰りますか。」

こ「そうだね、時間も時間だし。」

穂「それじゃあ永夢君。今日はありがとう！」

永「どういたしまして。それじゃあ、また月曜日にも。」

海「はい、今日はありがとうございました。お邪魔しました。」

穂・こ「お邪魔しました〜」

永「帰り気をつけてね！それじゃあ！」

こうして、僕達の土曜日は終わりを迎えた。

第11話 まきりんばな

永夢 side

家の地下にCRを発見した日から数日。

部員を集めるために、チラシを配ろうとして、校舎裏に来ている。

なぜかというと……

こ「ふええええ♪」

この学校には白と茶色のアルパカがおり、今現在ことりちゃんがアルパカに夢中だからだ。

穂「ことりちゃん、最近毎日来てるよね？」

永「そうだね……」

海「急にハマったみたいですね。」

穂「ねえ、チラシ配りに行くよ？」

穂乃果ちゃんがことりちゃんに声をかけるが、

こ「後、ちよつと♪」

駄目だね。全然動こうとしないや。

穂「もう〜」

海「5人にして部として認めてもらわなければ、ちゃんとした部活はできないのですよ。」

こ「う〜ん。そうだねえ〜」

永「海未ちゃん、これ絶対聞いてないよ。」

海「はあ〜、困りましたね。」

穂乃果ちゃんがアルパカをみて、

穂「う〜ん。可愛いかな？」

と呟く。

その言葉に茶色の方のアルパカが反応し、唸る。

穂・海「「ひっ!?!」」

ことりちゃんが穂乃果ちゃんに抗議する。

こ「え〜!?!可愛いと思うけどなく、首の辺りがフサフサしてるし〜♪」

穂・海「「う〜ん．．．?」」

やっぱり2人は納得できないみたいだ。

こ「はあ〜、幸せ〜♪」

ことりちゃんはそう言いながら、アルパカの首を撫で回す。

穂「ことりちゃん、駄目だよ!!」

海「危ないですよ!!」

注意する2人。

こ「ええく?大丈夫だよくくくくはあう!!」

そういつた瞬間、アルパカがことりちゃんの頬を舐める。

こ「うわああああ!!」

尻餅をつくことりちゃん。

穂「ことりちゃん!」

海「ああ!?どうすればくくくくそうだ!ここは一つ弓でくくく!」

永「駄目だよ海未ちゃん!」

ここでもまた茶色のアルパカが唸る。

それもさつきよりも大きく。

「ブルルルルルル!!」

穂「海未ちゃんが変なこと言うから!」

穂乃果ちゃんが海未ちゃんに文句を言う。

そこに、体操服を着た花陽ちゃんが来た。

そして、茶色のアルパカを優しく慰める。

穂「大丈夫？ことりちゃん。」

こ「うん。嫌われちゃったかな？」

花「平気です。ただ、楽しく遊んでただけだと思うから……」

そう言つて、アルパカの水を替える。

穂「アルパカ使いだね。」

花「あつ、私飼育委員なので……」

穂「ふくん……あつ！ライブに来てた花陽ちゃん!!」

永「今気づいたの!？」

花「へ!?あつ、あの……その……」

こ「駆けつけてくれた1年生の!」

永「ことりちゃんも!？」

まさか気づいていなかったとは……

すると、穂乃果ちゃんが花陽ちゃんの肩を掴み、

穂「ねえ!」

花「は、はい!」

穂「アイドルやりませんか？」

こ「穂乃果ちゃん、いきなりすぎ……」

ほんとにね。花陽ちゃん怯えちゃってるよ。

穂「君は光っている！大丈夫！悪いようにはしないから！」

永「それ悪者がいうセリフじゃない？」

穂「でも、少し位強引に行かないと・・・」

花「あ、あの、西木野さんが・・・」

花陽ちゃん何かを言ったが、声が小さかったため聞き取れなかった。

穂「ごめんね。もう一回いい？」

花「に、西木野さんが、いいと思います。すごく、歌、上手なんです・・・」

穂「そうだよね！私も大好きなんだ！あの娘の歌声！」

永「だったらスカウトしに行かないの？」

穂「行つたよ。そしたら『お断りします！』って断られちゃって。」

花「ご、ごめんなさい。私、余計なことを・・・」

穂「だ、大丈夫だよ！気にしないで！」

凜「かーよちーん！早くしないと授業遅れちゃうよー！」

声が見ると、花陽ちゃんのお友達の星空凜ちゃんがいた。

花「今行くね。し、失礼します・・・」

そう言って、花陽ちゃんは凜ちゃんの方に去って行った。

永「僕達も教室に戻ろうか。」

そう言つて、僕達も教室に戻つて行つた。

永夢 side out

.....

◎ side

凜「かーよちーん！決まった部活？今日までに決まるつて、昨日言つてたよ？」
帰りの支度をしていた花陽に、凜が話しかける。

花「そ、そうだっけ？・・明日決めようかな？」

凜「そろそろ決めないと、みんな始めてるよ？」

花「う、うん・・。」

花陽は狼狽える。

花「凜ちゃんは、どこに入るの？」

凜「凜は陸上部かな。」

花「陸上・・かあ。」

そこで、凜は閃いたように花陽に質問する。

凜「もしかして、スクールアイドルに入ろうと思つてたり？」

花「え、ええええええ!!」

どうやら凶星らしく、慌てる花陽。

花「そんなこと、ない……」

指先を合わせる花陽。

だが、凜は嘘だと気付き、

凜「ふ〜ん。やっぱりそうなんだ〜！」

花「そんな事……」

凜「駄目だよ〜かよちん。嘘つく時、必ず指先合わせるから、すぐわかっちゃうよ〜

！

花陽の口を人差し指で塞ぎ、指摘する凜。

凜「凜も一緒に行つてあげるから、先輩のところに行こう！」

花「え、ええええ!?!」

花陽の腕を引っ張り、連れて行こうとする凜。

花「あつ、ち、違うの! 本当に……私じゃ、アイドルなんて……」

凜「かよちんそんなに可愛いんだよ? 絶対人気出るよ〜！」

そう返して、凜は連れて行こうとする。

花「待って、待って！」

花陽は凜を止める。

凜「うん？」

花「あ、あのね。凜ちゃんに我儘言っても良い？」

凜「しようがないな、なに？」

花「もしね？私が、アイドルやるって言ったら……一緒にやってくれる？」

凜「うん？凜が？」

花「うん……」

凜「無理無理無理無理！凜はアイドルなんて似合わないよ。ほら、女の子っぽくないし、髪もこんなに短いんだよ？」

花「そんな……凜ちゃんは可愛いよ！」

凜「そんな事無いよ！ほら、昔も……」

昔の事を思い出す二人。

〈回想中〉

花「うわあ〜！すごい似合ってるよ！可愛いよ凜ちゃん!!」

凜「えへへ／＼そうかな？」

花「うん!!」

二人が小学生の時。

この日、凜は珍しくスカートを履いてきていた。

花陽はそんな凜をみて、可愛いと褒めていた。

そんな時、二人の後ろからクラスメートらしき男子が数人きた。

「あっ!? スカート履いてる!」

「いつもはズボンなのに!」

「スカート持ってたんだー!!」

スカートを履いた凜をからかう男子達。

凜「や、やっぱり・・・着替えてくるね?」

そう言つて凜は家に帰つて行つた。

花「凜ちゃん・・・」

〈回想終了〉

凜「アイドルなんて・・・凜には絶対無理だよ・・・」

凜は頭を掻きながらそう言う。

それを見た花陽は、

花「凜ちゃん・・・」

としか言えなかつた。

◎ s i d e o u t

・ ・ ・ ・ ・

飛彩 s i d e

俺がこの学校に入学してから数日。

俺は学校の廊下を一人で歩いていた。

・ ・ ・ ・ ・別に友達がいなくて無いです。

少なくとも永夢さん達スクールアイドルのグループや、真姫とは仲良くしている。

廊下を歩いていると、前に辺りを見回している少女を見つける。

確か、あの子は同じクラスの ・ ・ ・ ・

飛「おい。」

花「は、はい!! ・ ・ ・ あ、あなたは確か ・ ・ ・」

飛「鏡飛彩だ。お前は確か、小泉花陽だったか？」

花「は、はい。そうです。」

飛「そうか。こんなところで何をしている？」

花「あ、あの ・ ・ ・ これ ・ ・ ・」

そう言っって手に持っている物を見せてくる。

飛「これは ・ ・ ・ 真姫の ・ ・ ・」

それは真姫の生徒手帳だった。

花「この場所に、落ちてて・・・」

真姫のやつ、生徒手帳を落としたのか。

ここにはμ'sのチラシやポスターがあった。

まさか、真姫は・・・いや、今は生徒手帳の方が先だ。

飛「小泉。悪いが、今からこれを真姫のところに届けないか？」

花「え!？」

飛「都合が悪いのなら、良いんだが・・・」

花「い、いや・・・大丈夫だけど・・・」

飛「そうか、なら頼む。」

花「う、うん・・・」

よし、なんとかなったな。

学校に来て分かったが、真姫は普段一人でいる。

真姫に聞いても、

真『別にいらない!!』

って言われたしな。

だが、さすがに高校生で友達がないというのはどうかと思う。

これを切つ掛けに真姫にも友達が増えると良いんだが。

飛「よし。それなら行くぞ。」

花「え？行くつて、どこへ？」

飛「何を言っている？真姫の家に決まっているだろう。」

花「え、ええええええ!!？」

俺の言葉に驚く小泉。

・・・そんなに驚くことか？

・・・

学校を出て数分。

俺達は今真姫の家の前にいる。

花「ふえく・・・大きい！」

小泉は家の大きさに驚いている。

確かに真姫の家は大きい。

今でこそ慣れたが、俺も初めて来たときはその大きさに驚愕した。

飛「ここが真姫の家だ。」

花「へく。鏡君、迷わずついたよね？よく来るの？」

飛「来るも何も、俺はこの家に居候しているからな。」

花「えっ？」

飛「俺には生みの親の記憶がなくてな。最近まで独り身だったんだが、真姫の父親と会って、ここに居候する事になった。」

花「ご、ごめんね・・・いやなこと、思い出させちゃって・・・」

飛「謝る必要はない。もう吹っ切れたからな。気にするな。」

花「そ、そう？」

俺はインターホンを鳴らす。

すると、すぐに若い女性の声がする。

『は〜い。』

飛「ただいま帰って来ました、小姫さん。それと・・・」

花「同じクラスの小泉花陽だす・・・」

『あら飛彩君。お帰りなさい。』

インターホンが切れると門が開く。

俺達は中に入る。

飛「ほら、入るぞ。」

花「お、お邪魔します・・・」

俺達は家の中に入る。

「いらつしやい。」

出迎えてくれた女性は美姫さん。真姫の母親だ。

「ささ、入って入って。」

小姫さんは俺達を中に誘導する。

花「トロフィーとか沢山あるね・・・」

飛「全て真姫のらしい。」

花「え!? そうなの!?!」

飛「詳しい事は知らないがな。」

そう答えながら、リビングのソファアに座る。

すると、小姫さんが紅茶を淹れてくれる。

飛「ありがとうございます。小姫さん。」

花「す、すみません・・・」

「いいのいいの♪でもよかったわ。あの子、高校に入ってから全然友達連れてこないから、心配してたのよ。」

そう小姫さんが言っていると、真姫が帰って来た。

真「ただいま。」

「あら、おかえり〜。真姫。」

真「ママ、誰か来てるの? ……って……」

飛「遅かったな、真姫。」

花「こ、こんにちは……」

真姫は驚いた顔でこちらを見ている。

「真姫の紅茶淹れて来るわね。」

そう言つて小姫さんはリビングに向かう。

真「何の用?」

飛「真姫、彼女はお前の落とし物を拾つてくれたんだ。ちゃんとお礼をしろ。」

真「落とし物?」

花「これ、落ちてたから。西木野さんの、だよね?」

小泉が生徒手帳を渡すと、真姫は驚いた顔をした。

真「どうしてあなたが持つてるの?」

花「ご、ごめんなさい……」

真「どうして謝るのよ。あ、ありがとう……」

俺は二人の会話を黙って聞いている。

花「μ'sのチラシ、見てたよね?」

真「うえ!? ひ、人違いじゃないの?」

花「でも、手帳もそこに落ちてたし……。それ、μ'sのチラシだよね？」

真「ち、違つ、これは……！」

不意をつかれたのか、真姫は突然立ち上がり、机に足をぶつけ、座っていたスファアールごと後ろに倒れる。

飛「はあ。大丈夫か？真姫。」

俺は真姫に手を差し出す。

真「あ、ありがとう、飛彩。」

真姫は素直に手を取る。

花「ぶつ、……くすくす……」

すると、笑い声が聞こえて来た。

声の方を見ると、小泉が笑っていた。

真「も、もう！笑わないで!!」

花「ご、ごめんね。……くすくす……」

真「むう……」

みた感じ、二人の距離が縮まったように感じる。

まあ、よしとしよう。

しばらく立ち、小泉の笑いが止まったところで話出す。

真「私がスクールアイドルに？」

花「うん、私、いつも放課後音楽室に行ってたんだ。西木野さんの歌が聴きたくて。」

真「私の歌？」

花「うん、ずっと聞いていたくらい、好きで、だから・・・」

真「そう・・・でもね、私、大学は医学部って決まっているの。」

花「そうなんだ・・・」

真「だから、私の音楽は終わっているの・・・」

そう言った真姫の顔には少し寂しさが見える。

確かに、真姫の家は大きな病院を経営している。

だから、一人娘である真姫が継ぐのは道理だが・・・

真「それより、あなた・・・アイドルやりたいんでしょ？」

真姫は自分の話題を打ち切り、小泉の話に移す。

花「ふえ？」

真「この間のライブ、夢中で見てたじゃない。」

花「えっ？西木野さんもいたの？」

真「うえ!?!い、いや、私はたまたま通りかかっただけで・・・」

たまたま通りかかる場所じゃないんだがな、講堂の場所は・・・

真「まあ、いいわ。．．．あなた、やりたいんならやればいいじゃない。そしたら、少しは応援してあげるから。」

花「西木野さん．．．」

飛「真姫の言う通りだ。やりたいならやった方がいい。俺も応援してやる。」

花「鏡君も．．．ありがとう。」

小泉は俺にもお礼を言つて来た。

飛彩 side out

．．．．．

◎ side

花「みんな、色々あるんだな。」

真姫の家からの帰り道、花陽は考える。

真姫の事情を知り、自分がどうしたいのか。

だが、考えても答えは出ず、思いふけつていいる時、目の前に老舗の和菓子屋『穂むら』を見つける。

花「お母さんにお土産でも買つていこうかな．．．」

花陽はお店の中に入る。

穂「あつ、いらつしやいませ〜！」

レジの所には割烹着を着た穂乃果がいた。

花「先輩？」

.....

あの後花陽は穂乃果に連れられ、家の中専用の出入り口に移動する。

花「お邪魔します・・・」

穂「私、店番があるから、先に私の部屋に行って待ってて。」

穂乃果はそう言い、二階を指差す。

花陽は二階に上がるが、穂乃果の部屋が分からず、慌てる。

花「えっと・・・」

迷った花陽は覚悟を決め、一番近くを扉を開ける。

そこには・・・

雪「ふつにににに!!こ、これくらいになれば・・・!!」

裸の上にバスタオル一枚の雪穂がいた。

さらに言うとう、顔にパックをつけ、胸を寄せている。

花「・・・・・・・・・・」

花陽はしばらく呆然とし、無言で扉を閉める。

そして、もう一つの部屋が穂乃果の部屋だと思い、その扉を開ける。
中には・・・・・・・・

海「ららららら〜ん♪・・・・・・・・じゃあ〜ん!!ありがとう♪」

歌い、アイドルのポーズをとっていた海未がいた。

花「・・・・・・・・・・」

再び扉を閉める花陽。

花「ど、どうしよう・・・?」

予想外の二つの光景の狼狽える花陽。

その時、二つの扉が同時に開き、鬼のような形相で海未と雪穂が出てくる。

花「ひいひいひい!!」

そして、二人は同時に、

海・雪「見ました．．．．．?」

と聞いてくる。

花陽は腰を抜かし、その場に座り込む。

花「あわわわわわわ．．．．」

．．．．．

花「ご、ごめんなさい．．．」

穂「ううん。こっちこそごめんね?」

永「大丈夫だった?花陽ちゃん。」

あの後、穂乃果の家にやって来て二階に上がった永夢があの場面に遭遇し、海未と雪穂を落ち着かせた。

なんとか二人を落ち着かせたタイミングで店番を終わらせた穂乃果が上がってきて穂乃果の部屋に入り、今に至ると言うわけだ。

穂「それにしても、海未ちゃんがポーズの練習をしていたなんてね♪」

海「穂乃果が店番でいなくなるのが悪いんです!!」

永「いやいや、穂乃果ちゃんのせいにしちや駄目だよ、海未ちゃん。」
海未の文句に永夢が正論で返す。

花「あ、あの・・・!?!」

こ「お邪魔します〜す♪」

花陽が何かを言おうとした時にことりが部屋に入ってくる。

花「あ、お邪魔してます・・・」

こ「え?!もしかして本当にスクールアイドルに!?!」

永「落ち着いてことりちゃん。」

穂「たまたまお店に来てくれたから、ご馳走しようと思つて・・・。穂むら名物の穂

むら饅頭、略して『穂むまん』。美味しいよ?」

穂乃果は花陽に店の名物である穂むまんを差し出す。

こ「あつ、穂乃果ちゃん。パソコン持つて来たよ。」

穂「ありがとう!肝心な時に壊れちゃうんだ〜。」

ことりがパソコンを出し置こうとすると、花陽が机の上の物をどかす。

こ「あ、ごめん・・・。」

花「い、いえ・・・」

海「それで、ありましたか?動画は・・・」

こ「まだ確かめてないけど、多分ここに……」

穂「あつた！」

永「本当にあつたんだ……」

海「どこですか？」

四人はパソコンの画面を覗き込む。

そこには、μ'sのファーストライブの動画が写っていた。

花陽は邪魔にならないように後ろから観る。

こ「誰がとつてくれたのかな？」

海「すごい再生数ですね！」

穂「こんなに見てもらったんだ。あ、このところ綺麗にいったよね！」

穂乃果達は動画をみて感想を言っていく。

それを他所に、花陽は夢中で観ている。

それに永夢が気づく。

永「ごめんね、花陽ちゃん。そこじゃあ見辛いよね？」

声をかけるが、花陽は返事をしない。

その様子に四人は顔を見合わせ頷く。

海「小泉さん。」

花「は、はい!!」

海未が声をかけ、花陽は現実を意識を戻す。

穂「スクールアイドル、本気でやってみない?」

穂乃果が再び花陽を勧誘する。

しかし、その勧誘に対し花陽は、

花「嬉しいですけど、私アイドルに向いてないし・・・」

それを聞いた海未達は、

海「それを言うなら私は人前に立つ事が苦手です。とてもアイドルに向いてるなんて

思いません。」

こ「ことりも歌忘れちゃうところもあるし、運動も苦手だし・・・」

穂「穂乃果もすこいおっちょこちよいだよ!!」

永「なんで穂乃果ちゃんは自慢気なの・・・?」

それぞれフォローを入れる。

永「花陽ちゃん。」

永夢が花陽に話かける。

永「彼女達がプロのアイドルだったら、きつと失格だろう。だけど、これはスクールアイドル。それだったら、自分がやりたいって気持ちがあれば誰でもできる。そう思わ

ない？」

永夢がそう言う。

永「大事なものは、できるかどうかじゃない。やりたいと思う気持ちだよ？」

穂「だからほんのすこしでもやりたいてって気持ちがあるなら、やってみようよ!!」

穂乃果がもう一度誘う。

海「最も、練習は厳しいですが。」

永「海未ちゃん・・・それ今言う？」

海「おや、失礼。」

永夢の言葉を聞いた花陽の心中は、少しだがやりたいという気持ちが高まった。

第12話 ブレイブ レベルアップ

© side

放課後。

学校の中庭にあるベンチには花陽が座っている。

なにやら落ち込んでいる様子だ。

花「はあく」

理由としては、先ほどの英語の授業。

先生に当てられ、教科書を読んだのだが、声を大きくした所で噛んでしまったのだ。

花（やつぱり・・・私にアイドルなんて・・・）

そんな花陽のところに真姫と飛彩が近く。

真「何してるの？」

話しかける真姫。

その声に花陽は顔を上げる。

花「西木野さん・・・それに鏡君も・・・」

飛「さっきの授業でのことですか？」

飛「出せたじゃないか。大きい声が。」

花陽は自身が大きい声を出せた事に気づく。

真「ね？気持ちいいでしょ？」

真姫が笑ってそう言う。

花「うん！」

するとそこに、

凜「おい、かーよちーん！」

花陽を呼びながら凜がやってくる。

凜「あれっ？西木野さんに鏡君？どうしてここに？」

花「励ましてもらったんだ。」

真「わ、私は別に・・・／＼」

凜「それより、今日こそ先輩達のところに行つて、アイドルになりますつて言わなきや

!!

そう言つて花陽の手の引つ張る凜。

花「う、うん・・・」

真「そんな急かさない方がいいわ。もう少し自信をつけてからでも・・・」

凜「なんで西木野さんが凜とかよちんの話に入ってくるの!？」

真姫が止めようとするが、凜は敵意剥き出しで返してくる。だが、真姫は怯まずに、

真「別に、歌うならそっちの方がいいって言ってるだけ!!」と返す。

凜「かよちゃんはいつも迷ってばかりだから、ぱって決めてあげた方がいいの!!」

真「そう? 昨日話した感じじゃそうは思わなかったけど?」
だんだん二人の言い合いが発展していく。

凜「むっ!!」

花「あ、あの・・・喧嘩は・・・」

花陽が止めようとするが、全く効果がない。

凜「むむむむっ!!」

真「んー!ー!ー!!」

それを見ていた飛彩も止めようと声をかける。

飛「おい、喧嘩は」「飛彩（鏡君）は黙ってて!!」・・・」
が、二人の気迫に何も言えなくなる。

凜「かよちん行こう!!先輩達帰っちゃうよ!!」

凜は花陽を引っ張って行こうとする。

花「えっ!?でも・・・」

真「待って!!」

そんな凜を再び真姫が反対の手を引つ張って止める。

真「どうしても行くって言うなら、私が連れて行くわ!!音楽に関しては、私の方がア
ドバイスできるし、μ'sの曲は私が作ったんだから!!」

花「えっ!?そうなの!」

真「あっ!?・・・いや・・・えつと・・・」

自ら墓穴を掘った真姫。

そんな真姫を飛彩は呆れた顔がみる。

真「!!・・・と、とにかく、行くわよ!!」

そう言つて花陽を連れて行こうとする真姫。

真姫とは反対の手を掴んで、凜は花陽を照れて行こうとする。

凜「待って!!連れて行くなら凜が!!」

真「私が!!」

凜「凜が!!」

二人は自分が連れていくと言い合いをしている。

肝心の花陽の意見を聞かずに。

そんな花陽は二人にズルズルと引っ張られて行く。

花「ダレカタスケター!!」

その様子を見ていた飛彩は・・・

飛「やれやれ、俺も行くか。」

3人について行くことにした。

◎ side out

・・・・・・・・

永夢 side

僕達が屋上で練習をしていると、突然ドアが開き、中から真姫ちゃんと凜ちゃん、二人に両腕を掴まれた花陽ちゃん、その後ろから飛彩君の四人がやってきた。

穂「つまり、メンバーに入るってこと？」

話を聞くと、どうやら花陽ちゃんをμ'sに入れるためにきたようだ。

・・・・花陽ちゃんは全然喋ってないけど。

凜「はい! かよちゃんは昔からずっとアイドルになりたいって思ってたんです!!」

真「そんな事はどうでもよくて!! この子、結構歌唱力があるんです!!」

凜「どうでもいいってどういう事!?!」

真「言葉通りの意味よ!!」

永「ふ、二人とも、落ち着い」「黙っててください!!」・・・はい・・・

二人を落ちかせようと声をかけたが怒鳴られた・・・

飛彩君の方を見ると同情してるとような顔でこつちを見ていた。

・・・君もか。

花「わ、私はまだなんというか・・・」

どうやら花陽ちゃんはまだ決心できてないようだ。

凜「もう!!いつまでうじうじしてるの!?絶対やった方がいいよ!!」

真「それについては賛成!!やりたいと思ってるなら、やった方がいいわ!!」

花「で、でも・・・」

真「さっきも言ったでしょ!?声に出すなんて簡単な事だつて!あなたならできるわ

!!」

凜「凜、知ってるよ!?かよちゃんはずーっと昔からアイドルになりたい」って思ってい

る事!!」

花「凜ちゃん・・・西木野さん・・・」

凜ちゃんと真姫ちゃんが花陽ちゃんに激励の言葉をかける。

凜「大丈夫!!凜はずっとかよちゃんの事、応援するから!」

真「言ったでしょ?少しくらい応援してあげるって。」

二人はそう言つて花陽ちゃんを解放する。

花「あ、あの・・・私、小泉・・・」

oooooooooooooo

下も向いてモジモジしていた花陽ちゃんの中を凜ちゃんと真姫ちゃんが優しく押す。

花「・・・っ！私！小泉花陽と言います！一年生で背も低くて声も小さくて人見知りで得意な事もなくて・・・でも！アイドルへの想いは誰にも負けないつもりです！だから、私を・・・μ'sに入れてください!!」

花陽ちゃんは想いを言い切つた。

穂「こちらこそ!!」

そんな花陽ちゃんに、代表として穂乃果ちゃんが歩み寄り手を差し出した。

花陽ちゃんは穂乃果ちゃんの手を握る。

凜「ぐすつ・・・よかつたね、かよちん・・・」

真「全く、人騒がせな人ね．．．。」
そう言う二人の目は涙で潤んでいた。

凜「あつ、西木野さんも泣いてるー!!」

真「泣いてなんかいいわよ！」

涙目で否定する真姫ちゃん。

二人とも花陽ちゃんの事を思っていたんだね．．．。

その時、ことりちゃんが

こ「それで、二人は？」

と、凜ちゃんと真姫ちゃんに聞く。

凜・真「「えっ?」」

海「まだまだ、メンバーは募集中ですよ？」

ことりちゃんに続き、海未ちゃんも二人に声をかける。

凜「凜は、その．．．髪も短いし．．．女の子っぽくないし．．．」

真「私も、別にアイドルなんて．．．」

二人は断ろうとする。

だが、

飛「二人共。」

そんな二人に飛彩君が声をかける。

飛「お前達は本当にやりたくないのか？違うだろ？実際はやりたいと思っっている。小泉は前に進んだ。今度はお前達が前に進む番だ。」

先ほど花陽ちゃんに激励の声をかけた二人に、今度は飛彩君が激励の言葉をかける。見ると、凜ちゃんはその言葉を聞いたためか、決心した顔になっている。

凜ちゃんの方は大丈夫そうだ。

だが、真姫ちゃんの方は・・・

真「飛彩だったら知っっているでしょ？私の音楽はもう終わってるって・・・」

飛「それはお前が諦めているだけだろ？お前が言っただじやないか。やりたいと思っ
ているならやった方がいいって。」

真「そうだとしても・・・もう、私は音楽は・・・!!」

真姫ちゃんがおかを言おうとしたその瞬間、真姫ちゃんは突然うずくまる。

飛「!真姫!」

永「真姫ちゃん大丈夫!」

僕と飛彩君が急いで声をかける。

真「う・・・ううう・・・」

だが、真姫ちゃんは返事ができず、代わりに苦しそうな声が聞こえ、同時に体にはノ

イズのような物が見え始める。

永「!こ、これって!」

次第に真姫ちゃんの体はオレンジ色の粒子に包まれ、巨大化していく。

永「バグスターウイルス!!」

飛「こ、これが・・・!?!」

真姫ちゃんの体は完全に包まれ、巨大なバグスターユニオンへと変わる。

海「これ、あの時の・・・!」

穂「えっ、えっ!?!」

こ「な、なにこれ?」

凜「西木野さんが・・・」

花「きよ、巨大化した・・・!?!」

海未ちゃんは前に見たことあるが、初めてのメンバーは何が起こっているかわからず慌てる。

急いでバグスターを切り離さないと・・・!

永夢 side out

© side

永「飛彩君、ドライバーはある？」

飛「はい。ガシャットと一緒にここに。」

永「よし。ならすぐにオペを開始しよう。海未ちゃん！みんなをお願い。」

海「わ、わかりました!!」

永夢は海未にみんなのことを頼み、永夢と飛彩君はお互いのゲーマドライバーとガシャットを取り出し腰にまく。

そしてガシャットのボタンを押す。

『MICHTY ACTION X!!』

『TADDLE QUEST!!』

永「患者の運命は、俺が変える!!」

永夢と飛彩はいつもと同じ動きをする。

永・飛「変身!!」

『ガシャット!!』

『レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャゲーム？I、m a 仮面ライダー!!』

永夢は前の、飛彩は左側のパネルを押し、エグゼイド・レベル1とブレイブレベル1になる。

エ「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

ブ「これより、バグスター切除手術を開始する。」

『stage select』

永夢が横のホルダーのスイッチを押し、場所を変える。

その場所は教会だった。

『ガシャコンブレイカー』

エ「いくぜいくぜ！」

エグゼイドはガシャコンブレイカー・ハンマーモードを装備してバグスターユニオンに攻撃を加えていく。

ブ「メス。……！！」

ブレイブも武器を装備しようとするが、前回をゲムムとの戦いの際に剣が折れてしまっている。

そのため、実質ブレイブは武器なしのような状況だ。

ブ「くそっ！」

ブレイブは剣の柄を捨て、バグスターユニオンに蹴りで攻撃していく。

エグゼイドもガシャコンブレイカーだけじゃなく、ブレイブと同じように蹴りでも攻撃していく。

バグスターユニオンの攻撃をエグゼイドは側転でよけ、ブレイブは左手に持っている盾で防御する。

エ「これで、終わりだ!!」

エグゼイドがバグスターユニオンの頭部にガシヤコンブレイカーを叩き込む。バグスターユニオンはその攻撃に耐えきれず、感染者と分離する。

それと同時に感染者である真姫が落ちてくる。

ブ「真姫!」

ブレイブが落ちてくる真姫をキャッチし、安否を確かめる。

エ「ブレイブ! まだ終わってないぞ!!」

ブ「!!」

エグゼイドの言葉にブレイブは前を向く。

そこには真姫から分離したバグスターウイルスが形を作っていった。

オレンジ色の頭部をした大量のバグスターウイルスと、白い体に杖を持ったバグスター、アランブラバグスターが現れた。

「我はタドルクエストのバグスター、アランブラ!」

ブ「お前が真姫に感染しているバグスターか・・・」

エ「待てブレイブ。」

ブ「？」

エ「お前は今武器を持っていない。だが、あれが見えるか？」

エグゼイドが指をさした方には大量のバグスター、その後ろには剣が刺してあった。

エ「あれは伝説の剣。ファンタジーRPGゲームの王道とも言える武器だ。お前はあれを手に入れる。その間、俺が奴らの相手をする！」

そういつてエグゼイドはドライバーのレバーを開く。

エ「大変身!!」

『ガッチャ〜ン』

『レベルアップ!』

『マイティジャンプ!マイティキック!マイティマイティアクションX!!』

『ジャツキーン』

エグゼイドはレベル2にレベルアップし、ガシャコンブレイカーのAボタンを押して剣モードにする。

ブレイブも両腕を前に立てる。

ブ「術式レベル2。」

そしてブレイブもレバーを開く。

『ガチャ〜ン』

『レベルアップ!』

『タドルメグル タドルメグル タドルクエスト』

ブレイブもレベル2にレベルアップする。

それは水色と黒の体を持つ、騎士のような姿だった。

胸にはエグゼイドと同じ、ライダーゲージがある。

エグゼイドがバグスターウィルスを攻撃し、注意を引いていく中、ブレイブはまっすぐ剣のところに走っていく。

それに気づいたバグスターウィルスがブレイブの邪魔をしようとするが、それに気づいたエグゼイドが近くの宝箱を開け、高速化のエンジューアイテムを使う。

『高速化!』

エ「はっ、はっ、おりゃ!」

エグゼイドはブレイブに向かっていくバグスターウィルスを高速で斬りつけていく。

バグスターウィルスはエグゼイドの攻撃で徐々にその数を減らしていく。

そうこうしている内に、ブレイブは剣のところに辿り着き、剣を引き抜く。

ブ「はあああああ・・・はっ!!」

すると、剣は徐々にヒビが入っていき、砕けて真の姿を見せる。

『ガシヤコンソード』

ガシヤコンソード・炎モード。

エグゼイドが使うガシヤコンブレイカーと同じようにA Bボタンがあり、ブレイブと同じ水色のコントロールパネル、炎のような形をした刃が存在する。

エ「あれが伝説の剣、ガシヤコンソードか！」

ブ「ふっ、はああああ!!」

ブレイブはガシヤコンソードでバグスターウィルスを斬りつけていく。

切られたバグスターウィルスは徐々に燃えていき、やがて燃え尽きる。

先ほどまでのエグゼイドの攻撃によって数が少なくなっていたバグスターウィルスはブレイブの攻撃でいなくなり、残りはアランブラだけとなった。

「ば、バカな・・・我が僕どもが・・・」

エ「あとはお前だけだぜ、アランブラ！」

ブ「貴様を倒し、真姫を救う！」

「くっ、ならば我が魔法を喰らえ！トマーレ！」

エ・ブ「!?!」

アランブラが持っている杖、アランブラスタッフを突き出し、呪文を唱えるとエグゼイドとブレイブの動きが止まる。

エ「う、動けねえ・・・」

ブ「どうやってる……」

「ふっ、ふっ、ふっ……次の魔法も喰らえ！モエール!!」

エ・ブ「ぐわああ!!」

再びアランブラが呪文を唱える。

今度はエグゼイドとブレイブのところに爆発が起こる。

ブ「くっっ・負けてられるか!!」

ブレイブは近くにあるエナジーアイテム、透明化を使い、アランブラにバレないように近く。

『透明化……』

ブ「はっ!!」

「ぐわあっ!!」

ブレイブがガシャコンソードでアランブラを切りつける。

そしてガシャコンソードのBボタンを押し、炎剣モードから氷剣モードにする。

氷剣モードは先ほどの炎剣モードと違い、刃は氷のような形になっている。

ブ「ふっ、はっ!!」

「ぐはああああ!!」

ブレイブが攻撃していくとアランブラの体が一瞬体が凍り、すぐに砕ける。

ブ「はあああ……はあっ!!」

今度はガシヤコンソードを地面に突き刺すと、地面を伝ってアランブラが全身凍っていく。

ブ「これで終わりだ。」

完全に凍ったことを確認すると、ブレイブはドライバーからガシヤットを取り、ガシヤコンソードのガシヤットスロットに挿入する。

『ガシヤット!!』

『キメワザ!!』

ブレイブはガシヤコンソードを構える。

『TADOLU CRITICAL FINISH!!』

ブ「はああああ……はああ!!」

ブレイブは駆け出し、凍っているアランブラにすれ違いざま斬り、すぐに振り返って再び斬りつける。

そして何度も斬りつけ、凍っているアランブラは手も足も出さず、とうとう爆発する。

『会心の一発!!』

『ゲームクリア!!』

……

無事にバグスターを倒し変身を解除した後、ゲームスコープで確認して真姫に感染しているバグスターウイルスがなくなっている事を確かめる。

真姫が救えた事に安堵する永夢と飛彩だったが、すぐに穂乃果達の質問攻めにあう。

穂「あれて何!？」

こ「二人とも変身?したよね!？」

凜「説明するにやー!？」

花「どういう事!？」

あまりの勢いに狼狽える二人。

だが、海未はすでに知っていたため、今は眠っている真姫を診ている。

穂「どうして海未ちゃんはそんなに落ち着いているの!？」

そんな海未にも穂乃果が質問する。

海「なぜって言われなくても・・・私はすでに聞いていましたので・・・」

穂「うそ?!いつ!？」

海「初めて永夢と会った時ですね。」

こ「それって結構前じゃ・・・?」

真「う、ううくん・・・」

海未が穂乃果の質問に答えていると、真姫が目覚める。

飛「!真姫!」

真「ひ、飛彩・・・?」

永「容態はどう?真姫ちゃん。」

真「宝生先輩・・・。」

永「今から君の身に何があつたか説明する。それはみんなの質問の答えでもあるよ。」
そう言つて永夢は過去に海未にした説明と同じ事を説明する。

永「・・・つていう事なんだ。」

真「つまり、私にはそのバグスターウイルスというのが感染していて、ゲーム病が発症したけど、飛彩と宝生先輩が戦つて助けてくれた・・・という感じですか?」

飛「まあ、だいたいそんな感じだ。」

こ「そんな病気があつたなんて・・・」

花「は、初めて知りました・・・」

穂「えつ、ええつと・・・?」

凜「ゲーム病・・・?バグスター・・・?」

真姫、ことり、花陽は理解できたみたいだが、穂乃果と凜は理解できなかつたみたいだ。
永「簡単にいうと、悪いウイルスをやっつけるために、僕達に変身して戦っているつ

て事。」

そんな二人を見て、永夢が簡単に説明する。

穂「なるほど！」

凜「それならわかるにや〜！」

永（大丈夫かな？この子達。）

永夢はやつと理解できた二人の事を心配する。

永「とにかく、今日は家に帰って安静にして？飛彩君、後はよろしくね？」

飛「その前に、真姫。さっき説明した通り、バグスターウイルスは感染者がストレスを感じた時に発症する。真姫に発症した時、その時お前は自分の音楽は終わっていると言ってアイドルにやる事を断ろうとしていた。その話をしていたときに発症したという事は・・・真姫、お前はアイドルをやりたいだろうか？」

真「っ!？」

飛「自分の気持ちに正直になれ真姫！お前は一人じゃない、俺もついてる！小泉や、星空だっている！さあ、真姫・・・」

真「・・・・・・・・」

飛「お前はどうしたいんだ!？」

真「!!」

飛彩の激励の言葉に真姫は自分の気持ちを考える。

そして、想いを口にする。

真「私は・・・やりたい・・・！音楽を続けたい・・・！」

そんな真姫に穂乃果が近づき、花陽の時と同じように手を差し出す。

穂「だつたらやろうよ！私達と!!」

穂乃果は笑顔で真姫に声をかける。

真姫も同じように笑顔でその手を握る。

永「飛彩君。」

飛「？」

永「あそこまで真姫ちゃんに言つてたんだ。当然・・・君も入るよね？」

飛「はい。当然です！」

永「これからもよろしくね！」

飛「こちらこそ！」

・・・・・・・・・・

翌日。

凜と真姫、飛彩の3人は神田明神に来ていた。

凜「うう……。朝練ってこんなに朝早くからやんなきゃいけないの……。？」

真「当たり前でしょ？しっかりしなさいよ。」

そうこう話してる内に境内の入り口に着く。

中にはすでに花陽が到着してストレッチをしていた。

凜「あつ、かよちゃん！おはよう!!」

凜が花陽に挨拶する。

その声に反応し、花陽は凜達の方を向く。

花「凜ちゃん、西木野さん、鏡君。おはよう。」

花陽はいつもの眼鏡を外し、コンタクトレンズをしていた。

それを見た凜と真姫は驚きの表情をしていた。

凜「かよちゃん……。眼鏡、外したの……。？」

花「うん。コンタクトにしてみたんだけど……。変かな？」

凜「ううん！すっごい似合ってるにや!!」

真「そうね、いいんじゃないかしら。」

飛「ああ。俺も二人と同意見だ。」

花「ありがとう、凜ちゃん、西木野さん、鏡君。」

真「ねえ、眼鏡を取ったついでに、私の事、名前で呼んでよ。私もあなたたちの事……」

名前で呼ぶから、凜、花陽。」

それを聞いた花陽は

花「うん！よろしくね、真姫ちゃん！」

と返事した。

凜「真一姫ちゃん！真姫ちゃん真姫ちゃん真姫ちゃん!!」

凜は何を思ったか、真姫に名前を連呼する。

凜「真姫ちゃん真姫ちゃん!!」

そして真姫に近づき、頬をスリスリする。

真「う、うるさい!!」

真姫は恥ずかしがっているが、満更でもないような顔をしている。

その後、永夢や穂乃果達二年生組が到着し、練習が開始された。

こうして、μ'sは8人になった。

第13話 ポッピーピポパポによるバグスターとゲーム病の説明

◎ side

とある休日。

μ'sメンバーは永夢の家に集合していた。

厳密には家の地下に存在するCRにだ。

花「こんな所があつたんだ……」

凜「広いにや〜」

真「なんか……病室みたいね……」

飛「確かにな。」

初めて来た一年生組はそれぞれ思っている事を言う。

そして家につながっている階段とは別の階段を登り、モニターがたくさんある部屋に移動する。

永「ありがとね。今日は来てくれて。」

海「それで、今日はどうしたんですか？」

ポ「私のもう一つの姿に変わるね♪コスチュウムチェンジ♪」

ポッピーピポパポは人間としての姿、仮野明日那に変わる。

穂「あ、明日那さん!」

明「この姿だったら知っていますでしょ?でも、一年生組は初めてか。私は仮野明日那。この家に居候しているの。そして・・・コスチュウムチェンジ♪」

再びポッピーピポパポの姿に変わる。

ポ「これが私の本当の姿♪名前はポッピーピポパポ♪ドレミファビートのバグスター
なんだ♪改めてよろしくね♪」

花「バ、バグスター!」

飛「なんでバグスターがここに!」

みんなが思った事を、花陽と飛彩が代表して言う。

永「みんな落ち着いて。その事も含め、今からポッピーが説明してくれるから。」

ポ「うん♪任せて♪」

永夢に言われ、一旦落ち着く6人。

それを確認してからポッピーが説明を始める。

ポ「まずは私を含めたバグスターから。と言っても、以前永夢から説明された事がほとんどで、バグスターウイルスは人間に感染するコンピューターウイルスなんだ。もと

もとはゲームのプログラムから生まれたコンピュータウイルスで、それが何らかの理由で人間に感染する未知のウイルスに進化したんだ。その理由に関しては私にもわからないんだけど……」

凜「ゲームのプログラムから生まれた……?」

ポ「そう。だから私達バグスターはゲームに登場するキャラクターの姿をしているんだ。だからバグスターウイルスに感染した病気をゲーム病っていうの。」

穂「ふくん……」

永「ここまででは理解できた?」

飛「今の所はNo problemだ。」

真「ええ。私はゲーム病の事を詳しく知りたいのだけど……」

ポ「それも今から説明するね。ミクロサイズのバグスターウイルスが人に感染して、体内で増殖するとゲーム病が発症するんだ。バグスターウイルスは、感染者がストレスを感じると増殖するの。」

花「どうしてストレスを感じるとなんですか?」

永「それは……」

真「その理由はおそらく、ストレスを感じると人の免疫力が下がるからね。」

永「……僕が言おうとしたのに……」

ポ「真姫ちゃんの言う通り。ストレスを感じると人の免疫力が下がるから、その時にバグスターウイルスが増殖するんだ。」

こ「ほえ〜・・・」

凜「さっすが真姫ちゃん!!」

真「こ、このぐらい当たり前でしょ!」

凜に褒められてる真姫。

ポ「説明を続けるね。ゲーム病を治すにはまず、患者とバグスターを分離させ、分離したバグスターを倒さないといけないの。そして、今の所それができるのが永夢と飛彩の二人だけ。」

真「それが仮面ライダー・・・」

ポ「そう。永夢が変身する仮面ライダーエグゼイドと、飛彩が変身する仮面ライダーブレイド。二人以外にゲーム病を治せる人は今の所いないから、もしもゲーム病が発症している人を見かけたら、必ず二人のどちらかに連絡して。」

花「は、はい・・・」

海「わかりました。」

ポ「これでバグスターとゲーム病の説明は終わり。最後に、ゲーム病の治療方法を説明するね。コスチュームチェンジ♪」

明日那の姿に戻るポツピー。

明「まずゲーム病が発症して体がバグスターユニオンに乗っ取られた時。この時は最初にバグスターと患者を分離させることが必要なの。ここで注意して欲しいのは、バグスターと患者を分離できるのはレベル1だけって事。バグスターユニオンと戦うときはレベル1で戦って。あとはいつもと同じ。分離させたらレベルアップして倒す。これだけ。」

永「分離させるのはレベル1じゃないとできないのか・・・」

飛「初耳だな・・・」

明「二人はこの事を特に覚えておいて。さらに言うと、変身している時に左胸にゲージがあると思うんだけど、もしそのゲージが0になってしまったら変身者は消滅してしまふの。0にならないければ消滅する事をないからね。ゲージには注意しながら戦ってね。説明は以上。何か質問はある？」

誰も質問をしない。

明「よし、ならこれで説明はおしまい。今日は集まってくれてありがとうね。」

海「いいえ、私達も勉強になりました。」

真「医者を目指す私にとっても、知っておいて損はないしね。」

穂「今日はありがとう！」

こ「それじゃあ、このあとどうする？」

永「それじゃあ、みんなでゲームでもしよう！」

穂「やった〜！」

凜「負つけないにや〜！」

こうして、ポッピーピポパポ、明日那の説明は終わった。

このあと、みんなでゲームをして永夢が一人で無双したというのはまた別の話。

第14話 にこ、襲来!

© side

μ'sが四人から八人に増えて数日。

境内のことはことりが一人でストレッチをしていた。

そんなことりを社の影から見一人の人影が。

ことりは視線を感じたのか、いきなり後ろの見る。

だが、その時には見ていた人影は引っ込んで見えなくなっていた。

こ「うくん……?」

ことりが訝しげに首を傾げていると、穂乃果と永夢がやってくる。

穂「ことりちやくん! お待たせ〜!」

永「早いねことりちゃん!」

こ「ううん、私も今来たばかりだから。海未ちゃんは弓道の朝練があるんだって♪」

穂「あはあく、そっかく!」

こ「……!?!」

再びことりは後ろを向く。

穂「ことりちゃん？」

永「どうかした？」

こ「穂乃果ちゃん、永夢くん、さつき後ろに誰か居なかった？」

穂「後ろ？」

ことりの言葉を聞いた穂乃果は社の壁に背をつけて、誰かがいると思われる場所に向かう。

穂「・・・さっ！・・・ささっ!!・・・さささっ！」

穂乃果は顔をのぞかせるが、そこには誰もいなかった。

穂「あれ〜？」

穂乃果は歩き出す。

しばらくすると、穂乃果は誰かに足を掴まれる。

穂「あわ!!あわわわわっ!!」

穂乃果は転びそうになるが、腕立て伏せの要領で踏みとどまる。

だが、それは手首に負担がかかる。

穂「ぐぐ・・・!!いったーい!!」

穂乃果は座って手首を振る。

ふと横を見ると何かが迫っていた。

穂乃果は思わず目を瞑る。

だが、いつまでたっても思っていた衝撃が来ない。

恐る恐る目を開けると、目の前にはデコピンの形をした手があった。

そして、その手は穂乃果にデコピンをして、穂乃果は後ろに倒れる。

穂「ふがつ！」

こ「穂乃果ちゃん!？」

永「だ、大丈夫!？」

それを見たことりと永夢がすぐに穂乃果に駆け寄る。

永「気絶しているみたいだね・・・」

永夢が穂乃果をみて、落ち着いて容態を確認する。

そんな二人の前に、誰かが立つ。

そこには厚着のコート、サングラスにマスクをつけた、ツインテールの不審者少女がいた。

それを見たことりは怯え。永夢は啞然とした。

そんな二人を見た不審者少女は唐突にマスクを取り、こちらを指差す。

「あんだ達・・・」

こ「は、はい・・・!」

「とつとと解散しなさい!!」

そう言つて去つて行つた。

こ「今の……誰？」

永「さ、さあ？」

……

朝の一件から時間が経ち、今は放課後。

マネージャーを抜くμ，sメンバーは廊下に集まっていた。

穂「それでは！新しくメンバーを加えた新生スクールアイドル！μ，sの練習を始めようと思います！」

海「……いつまで言っているのですか？もう二週間前の話ですよ？」

穂「だって嬉しいんだもん！」

穂乃果は嬉しさからか、ここ最近同じ事を言っている。

穂「なので恒例の1！」

こ「2！」

海「3！」

真「4！」

凛「5！」

花「6！」

と号令をとる。

すると、穂乃果は体をくねらせる。

穂「くうくう!! 6人だよ、6人! アイドルグループみたいだよね〜! いつか穂乃果達が神6とか仏6とか言われるのかな〜!」

花「仏だと死んじやつてるみたいだけど・・・」

花陽がツツコム。

凜「毎日同じ事で感動できるなんて、羨ましいにや〜」

凜がさりげなく穂乃果をバカにする。

だが穂乃果はそれを聞かず、指で数えながら

穂「私、賑やかなのが大好きでしょ? それに、沢山いれば歌が下手でもバレないでしょ

?あと、ダンスを失敗しても・・・」

海「穂乃果?」

穂「じよ、冗談だよ・・・冗談・・・」

穂乃果の言っている事に海未がツツコミを入れる。

こ「そうだよ! ちゃんとやらないと、今朝見たいに怒られちゃうよ?」

穂「ああ・・・」

ことりの言葉を聞いて、穂乃果は今朝の事を思い出す。

『解散しなさい!』

海「つて、言われたんでしたっけ?」

凛「でも、それだけ有名になったって事だよね!」

真「それより、練習・・・どんどん時間がなくなるわよ。」

凛「おー!真姫ちゃんやる気満々!!」

真「べ、別に!私はただ、早くやって帰りたいだけ!!」

真姫はそういうが、

凛「またまたく、お昼休み見たよ?一人でこっそり練習してるの!」

凛が真姫の恥ずかしいところを暴露する。

真「あ、あれはただ!この前やったステップが格好悪かったから、変えようとしてたのよ!あまりにも酷すぎるから・・・」

そんな事を言う真姫の後ろには、

海「そうですか・・・あのステップ、私が考えたのですが・・・」

と、髪を弄りながらとても暗い雰囲気を出している海未がいた。

凜「気にすることないにや！真姫ちゃんはただ照れくさいだけだよね」
凜はそう言いながら階段を登る。

凜の方向を見ていた残りのメンバーは凜の後ろをみて暗い顔をする。
気になった凜もみんなと一緒に方向を見る。

穂「雨だ・・・」

先ほどまで曇りだった外が、今は雨が降っていた。

・・・

一方その頃。

マネージャー組は理事長室に来ていた。

永「今度はなんだろう・・・」

飛「前は俺が来た時でしたよね。」

永「そうそう。ファーストライブの日だったよね。」

飛「そうですね。まあ、今は関係のない事です。とにかく中に入りましょう。」

二人は理事長室の扉をノックする。

永「理事長、宝生です。」

『どつどつ』

永・飛「失礼します。」

永夢と飛彩が同時に中に入る。

中には理事長だけでなく、黒髪に白が混じった髪型の男と、黒髪で少しチャラ男じみている男がいた。

その二人は音ノ木坂の男子用制服を来ていた。

「わざわざ来てくれてありがとう。今日は二人に彼らを紹介しようと思って呼んだのよ。」

永「理事長、もしかして彼らは・・・」

「ええ。永夢君の想像通り、彼らは二人と同じ試験生です。それでは自己紹介をお願いします。」

すると、白が混じった髪型をしている方から先に話し始める。

「俺の名は花家大我。次の月曜からこの学校に通い始める。ちなみに学年は3年生だ。」

「自分、九条貴利矢。大我と同じく次の月曜から通い始める2年生だ。」

二人が自己紹介を終えてから、永夢と飛彩が話し始める。

永「僕の名前は宝生永夢です。学年は貴利矢さんと同じ2年生です。」

飛「俺は鏡飛彩です。学年は1年生です。」

二人の自己紹介が終わってから、大我と貴利矢が立ち上がり永夢と飛彩の元に行く。

大「これからよろしくな。」

貴「よろしく」

永「こちらこそよろしくお願いします。貴利矢さん、大我先輩。」

飛「こちらも。貴利矢先輩、大我先輩。」

大「そんな堅苦しくしなくと良い。呼び捨てで構わない。」

貴「そうそう。飛彩君・・・だっけ？自分のことも呼び捨てでいいよ」

永「そういえば飛彩君、僕のこととさん付けで呼ぶよね。ついでに僕も呼び捨てでいいよ。」

飛「えっ・・・しかし、3人は先輩でして・・・」

大「本人がいいって言ってるんだ。気にすんな。」

飛彩が戸惑っていると、大我が気にしないように言う。

飛「そ、そうですか・・・でしたらそうさせてもらいます。」

永「やりましたね！大我さん、貴利矢さん！」

貴「君もだよ？永夢・・・だったよね。」

永「えっ？」

大「飛彩も呼び捨てにするって言ったんだ。お前もそうしろ。」

永夢にも取るように促す大我と貴利矢。

永「あぁ・・・僕にとってはさん付けの方がなぜかしっくりくるので・・・この

ままでいかせてもらいます。」

貴「ま、お前がそう言うならいいか。」

「自己紹介が終わったところで、いいかしら?」

理事長の声が聞こえ、全員そっちの方を向く。

「大我君と貴利矢君は、今日はあくまで私への挨拶だけだし、もう帰ってもらっても構わないわ。永夢君と飛彩君もわざわざ来てくれてありがとうね。部活に戻ってもらって構わないわ。」

永「そうですね・・・」

大「でしたら、今日のところは帰らせてもらいます。」

貴「自分も。」

そう言つて、二人は理事長室から出て行つた。

飛「それでは、俺達もいかせてもらいます。」

永「失礼しました。」

こうして、二人も出て行つた。

その後、二人はμ sメンバーと合流するが、そこにはなぜかびしょ濡れになつてい
る穂乃果と凜がいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

真姫達が階段を下りている時、その階段のすぐ近くの廊下の角に希はいた。

希は、階段とは逆の方向から来た一人の少女に話しかける。

希「どうやらあの子達・・・辞める気はなさそうやで。にこつち。」

希が話しかけたその少女こそ、今朝の不審者少女、「矢澤にこ」だ。

に「・・・ふん!!」

◎ side out

・・・・・・・・・・

永夢 side

今日は雨が降り練習が中止になったため、僕らはハンバーガーショップに来ていた。

ちなみになぜ穂乃果ちゃんと凜ちゃんがびしょ濡れだったのか海未ちゃんに聞いたところ、雨が少し弱くなって練習できると外に飛び出したそうで、凜ちゃんがアクロバティックな動きをしポーズした瞬間、狙ったかのように再び雨が強くなったらしい。

だから外にいた穂乃果ちゃんと凜ちゃんの二人はびしょ濡れになったと・・・

聞いたらとてもバカらしく思えた。

風邪でも引いたらどうするつもりだったんだ？

そんな穂乃果ちゃんは今、不満気な顔をしてポテトを食べている。

海未ちゃんがそれを注意する。

海「穂乃果・・・ストレスを食欲にぶつけると、大変なことになりますよ?」

穂「雨・・・なんで止まないの!？」

海「私に言われなくても・・・」

確かに今の問題はこの雨だ。

僕達の練習場所が全て外のため、雨が降ってしまふと練習ができなくなってしまう。

どうするか考えていると、隣から「うるさいっ!!」と声が聞こえて来た。

穂乃果ちゃんにも聞こえたらしく、隣の席をみる。

すると丁度、ことりちゃんと花陽ちゃんが戻って来た。

こ「穂乃果ちゃんー。予報見たら明日も雨だつて〜。」

穂「え〜!？」

穂乃果ちゃんはことりちゃんの言葉にひどく落ち込む。

穂「はあ〜」

穂乃果ちゃんはため息をつき、ポテトを食べようとする。

だが、穂乃果ちゃんの持っている容器の中には、すでにポテトはなく、穂乃果ちゃんの手は虚しく空を裂く。

穂「あれ?なくなつた・・・海未ちゃん食べたでしょ!!」

穂乃果ちゃんはなくなくなつた事に気づき、前の席に座っている海未ちゃんに疑いの目を

向ける。

海「自分で食べた分も忘れたんですか!?! っ、穂乃果こそ!!」

今度は海未ちゃんのポテトがなくなる。

今、隣の人が取ったような

だが、海未ちゃんはそれに気づかず、穂乃果ちゃんを疑う。

穂「わ、私は食べてないよ!!」

永「はあ、二人共、僕のあげるから落ち着いて。」

穂「ありがとう永夢君♪」

海「ありがとうございます永夢。」

僕が穂乃果ちゃんと海未ちゃんに自分の分のポテトをあげる。

真「そんな事より練習場所でしょ? 空き教室とか借りれないの?」

真姫ちゃんが疑問の声を上げる。

その疑問にことりちゃんが答える。

こ「うん、前に先生に頼んだんだけど、ちゃんとした部活じゃないと許可できないっ

て」

ことりちゃんが言った通り、以前先生に頼んだ時に許可をもらえなかつた。

ちゃんとした部活にするには、部員を五人以上集める必要があるのだ。

……ん?五人以上?

僕は現在のメンバーの人数を、マネージャーも合わせて数える。

今現在、僕達は合計8人。

もう部活を作るのに必要な人数は集まっている。

他のみんなも気づいたのか、お互い顔を見合わせる。

すると、急に穂乃果ちゃんが立ち上がる。

穂「そうだ、忘れてた!部活申請すればいいんじゃない!!」

「忘れてたんかーい!!」

なんか隣から声が聞こえて来たんだけど……

真「それより忘れてたってどういう事?」

穂「いや〜。メンバー集まったら安心しちゃって!」

真「駄目かもこの人達……」

返す言葉もないです……

穂乃果は安心したのか

穂「よおし!早速明日部活申請しよう!これで練習場所が貰えるよ〜!はあ、ホット

したらお腹空いて来ちゃった〜、さあ〜て……」

穂乃果ちゃんが自分のハンバーガーを見ると、隣の人とそのハンバーガーを取ろうと

しているのを目撃する。

ちなみに穂乃果ちゃんだけでなく、全員がだ。

その人は手に取っていたハンバーガーを置いて、静かにこの場を立ち去ろうとする。

穂乃果ちゃんはすぐに追いかけて、捕まえる。

穂「ちよつと!!」

「か、解散しろって言ったでしょ!？」

花「解散!？」

花陽ちゃんが驚く。

穂「そんな事より食べたポテト返して!!」

永・花「そこおお!？」

僕と花陽ちゃんの声がハモる。

「アーー」

その女の人は口を開けてみせる。

穂乃果ちゃんはその女の人の頬を引っ張って、

穂「買って返して!!」

と言う。

「あんた達、歌もダンスも全然なってない!!プロ意識が足りないわ!!」

穂「へ?」

彼女は穂乃果ちゃんの手も振りほどく。

「いい!? あんた達がやっていることはアイドルへの冒涇! 恥よ! とつとと辞めることね!!」

そう言つて彼女は去ろうとする。

だけどその前に僕は彼女の前に移動する。

永「帰る前に君が食べた二人のポテト代、返してもらおうか?」

「いっ!?!」

すると、彼女の後ろからは飛彩君が

飛「あんたが解散どうこう言うのは勝手だが、あんたが盗み食いた分の金は返してもらおう。」

と言う。

二人から言われた彼女は、

「わ、わかったわよ! これでもいいでしょ!!」

と、テーブルの上にお金を置いて去って行った。

永夢 side out

.....

穂乃果 side

ハンバーガー店の一件から数時間後。

私は店の手伝いで店番をしていた。

外は雨が降り続けている。

だからか、あまりお客さんは来ていない。

しばらくレジの場所で待っていると、お店のドアが開く。

穂「いらつしやいませ〜！」

入って来た人は、アロハシャツに赤いジャケットを羽織っていてサングラスをかけている、私と同じぐらいの男の子だった。

貴「初めまして。自分、この間から隣の家に住む事になった、九条貴利矢です。これからよろしく。」

彼、貴利矢君はそう挨拶して、私の方に手を差し出した。

穂「そうなんですか。私は高坂穂乃果！これからよろしくね！」

私が貴利矢君の手を掴み返し、自分の名前を言うと、中からお母さんが出てくる。

「穂乃果、誰か来たのー?」

穂「あ、お母さん！隣に引越して来た人が挨拶に来たの！」

貴「初めまして。九条貴利矢です。よろしくお願いします。」

貴利矢君がお母さんにも挨拶する。

「あら、こんにちは。こちらもよろしくね。」

お母さんは笑顔で挨拶する。

貴「すみません。少し挨拶も遅くなりましたし、特にお土産とかがあるわけじゃないですが……」

「気にしないで。だったら代わりにウチの商品でも買って行って。」

穂「おすすめはこの『穂むらまんじゅう』、略して『穂むまん』!」

私はこの店の名物、『穂むまん』をおすすめする。

貴「じゃあ、その穂むまんを一つください。」

穂「はい!」

私は穂むまんを一個、袋に詰める。

穂「はい、どうぞ!」

貴「ありがとう。」

貴利矢君は袋を受け取る。

すると、お母さんが

「そうだ! 貴利矢君、夕飯の予定ある? なんだったら、家で一緒に食べない?」

と貴利矢君を今日の夕飯に誘う。

貴「えっ？いいんですか？」

「もちろん！」

穂「そうだよ！一緒に食べようよ！」

私も貴利矢君を誘う。

貴利矢君は少し考えてから、返事をする。

貴「それじゃあ、お邪魔させてもらいます。」

「うん、了解！それじゃあ穂乃果、貴利矢君を家の中に案内して。」

穂「うん！わかった！」

お母さんは中に戻っていく。

穂「それじゃあ貴利矢君、付いて来て。」

私は貴利矢君を家への玄関に案内する。

穂「ここが、家の出入り口だよ。さ、入って！」

貴「お邪魔しまゝす。」

私は貴利矢君をリビングに案内する。

穂「ここがリビング！ここで待ってて！」

貴利矢君に座ってもらって、待つように言う。

すると、二階から雪穂が降りてきた。

雪「お姉ちゃん、誰かきたの〜?」

穂「あ、雪穂!」

貴「妹さん?」

穂「うん!」

雪「あの〜、あなたは?」

雪穂は警戒しながら貴利矢君に聞く。

貴利矢君は立ち上がって雪穂の質問に答える。

貴「初めまして。自分は九条貴利矢。この間から隣の家に住み始めたんだ。今日は夕食に誘われてね、それでお邪魔してるんだ。」

貴利矢君は丁寧な答える。

雪「そうでしたか。私は高坂雪穂です。よろしくお願いします。」

雪穂も納得したのか、警戒を解いて挨拶する。

この後、夕飯の時間になり、貴利矢君も一緒に食べてこの日は終わった。

明日は部活の申請に忘れずに行かなきゃ!

第15話 レーザー初陣！

永夢 side

僕たちは今、音ノ木坂学院のアイドル研究部の前にいる。

そこで、昨日の少女と会い、お互い固まった。

どうしてこうなったのかと言うと、昨日話した予定通り、部活の申請をするために必要な書類を持って生徒会室に行ったところ、なぜか拒否された。

理由を聞くと、どうやらこの学校にはすでに『アイドル研究部』が存在すると。

そして、廃校になる可能性がある今、むやみに部活を増やしたくないらしく、似たような部活が存在する以上申請を認めないと。

そういうことなら最初に言ってもらいたかったよ。

生徒会長はこれで話を終わりにしようとしたんだけど、副会長が

希「アイドル研究部と話をつけてくることやね。」

と言つて来たので、アイドル研究部の場所を聞いてここに来たわけなんだけど……

穂「あ、あなたがアイドル研究部……!?」

穂乃果ちゃんが驚きの声をあげる。

まあ、驚くよね。僕も驚いてるもん。

すると、突然彼女は腰を低くする。

に「フニヤアアアアア!!」

いきなり威嚇をして、すぐに部室の中に入って中から鍵を閉める。

あまりにも突然のことだったため、僕たちはしばらく呆然としたが、すぐに何があったか理解する。

穂「部長さん！開けてください！」

穂乃果ちゃんがドアをドンドン叩きながら叫ぶ。

だけど、扉は開く気配がなく、逆に中からは荷物を動かしている音がする。

すると、凜ちゃんが案を出してくる。

凜「外から行くにや〜！」

そうやって外に向かって走って行く。

すると、中からも窓を開ける音がする。

その場で少し待っていると、凜ちゃんが部長を捕まえて戻って来た。

・・・なんか、臭いんだけど。

・・・

部長が目覚めてから鍵を開けてもらい、中に入る。

中はどこもかしこもアイドルグッズで、思わず見回す。

凜「A—RISEのポスター！」

真「あつちは福岡のスクールアイドルね。」

海「校内にこんなところがあつたなんて・・・」

永「すごい・・・」

飛「よくもまあここまで集めたな。」

に「あまりジロジロ見ないでくれる？」

そんなこと言われてもな。

いやでも目に入っちゃうし。

花「こ、これは・・・!?」

花陽ちゃんが何かを見つけたのか、驚愕の声をあげる。

手には、何かのDVDボックスを持っている。

そして、部長の方を向く。

花「伝説のアイドル伝説DVD全巻ボックス！持っている人を初めて見ました！」

とても興奮した様子で言う。

なんかキャラが変わっている気がするんだけど・・・

部長もなんか引いてるし。

に「そ、そう?」

花「すごいです!」

に「ま、まあね・・・」

穂「へえ、そんなにすごいんだ。」

穂乃果ちゃんがとても能天気と言う。

すると、花陽ちゃんは穂乃果ちゃんに凄い勢いで迫る。

花「知らないんですか!？」

あまりの勢いに穂乃果ちゃんもたじろいでいる。

花陽ちゃんはパソコンの前に座り、キーボードを叩きながら

花「伝説のアイドル伝説とは、各プロダクションや事務所、学校等が限定生産を条件に歩み寄り、古今東西の素晴らしいと思われるアイドルを集めたDVDボックスで、その稀少性から伝説の伝説の伝説、略して伝伝伝と呼ばれる、アイドル好きなら誰でも知っているDVDボックスです!!!」

と早口で説明してくる。

・・・よく嘯まずに言えたね。

穂「は、花陽ちゃん・・・キャラ変わってない・・・?」

永「いや、変わりすぎだよ。」

飛彩君とか呆然としているよ。

花「通販、ネットに注文が殺到するボックスを二つも持っているなんて……尊・敬……」
に「家にもう1セットあるけどね。」

部長が自慢する。

花「ほんとですか!?!」

穂「じゃあ、皆で見ようよ!」

穂乃果ちゃんが提案するが、

に「ダメよ!それは保存用!」

部長に却下される。

保存用って……

花「ガン……!」

花陽ちゃんが机に突っ伏す。

花「で……伝伝……ぐす……」

花陽ちゃん、本気で落ち込んでるね。

凜「かよちゃんがいつになく落ち込んでるにや〜。」

飛「どれだけ見たかったんだ。」

それね。

ふとことりちゃんの方を見ると、上を方に顔を向けていた。

に「ああ、気づいた？」

こ「あつ・・・」

何か様子がおかしいような・・・

に「秋葉のカリスマメイド、ミナリンスキーさんのサインよ。」

永「ことりちゃん、知ってるの？」

こ「あつ・・・いや・・・」

に「まあ、ネットで手に入れたものだから、本人の姿は見たことないけどね。」

こ「あつ、ふう〜」

ことりちゃんは胸を撫で下ろし、安心している。

こ「と、とにかくこの人すごい！」

に「それで、何しに来たの？」

部長のその言葉に全員席につく。

穂乃果ちゃんが切り出す。

穂「アイドル研究部さん。」

に「にこよ。」

穂「にこ先輩！実は私たちスクールアイドルをやっております・・・」

に「知ってる。どうせ希に部にしたいなら話をつけてこいとか言われたんでしょ？」

穂「おお！話が早い！」

に「まあ、いずれこうなるんじゃないかって思ってたからね。」

穂「なら・・・」

に「お断りよ。」

穂「えっ？」

に「お断りって言ってるの。」

はつきりと断られた。

なんか今日断られてばかりな気がする・・・

海「私達はμ'sとして活動できる場所を必要としているだけなんです。なので、こ

こを廃部にして欲しい訳ではなく・・・」

海未ちゃんが補足する。

に「お断りって言ってるの！」

だが、部長・・・にこ先輩は頑なに断り続ける。

に「言ったでしょ!? あんたたちはアイドルを汚してるの！」

穂「でも、ずっと練習して来たから、歌もダンスも・・・」

♪にここに♪って、覚えてラブにこ♪」

ブルツ

い、今凄い寒気がした……!!

部室の中の空気はかなり冷たくなっている……!!
他のみんなの反応は、

穂「……………」

海「これは……………」

こ「キャラというか……………」

真「私無理」

凛「ちよつと寒くないかにや〜?」

飛「星空に同意だ。」

花「ふむふむ……」

などなど様々だ。

つて、凜ちゃんと飛彩君、それ言っちゃったら……

に「そのあなた達……今寒いって……」

やっぱり。

凜「えっ、あつ、いえ！すいません！凄く可愛かったです！最高です！」

永「もう遅いよ……」

凜ちゃんを切っ掛けに、他のメンバー（マネージャー以外）もフォローをするが、に

こ先輩は怒り、「出て行って！」と、僕たちを追い出す。

穂「にこ先輩〜」

穂乃果ちゃんが声をかけるが、当然中からの返事はない。

そこに、副会長がやって来る。

希「やっぱり追い出されたみたいやね。」

永「やっぱり……？副会長はこうなるとわかっていたんですか？」

希「さあ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

穂「スクールアイドル!？」

海「ここ先輩が？」

希「一年生の時やったかな……。同じ学年の子と結成してたんよ。今はもう、やってないんやけどね……………」

僕たちは今、副会長からここ先輩の過去を聞いている。

それを聞いた僕たちは驚きを隠せなかった。

まさかここ先輩がスクールアイドルをやっていたなんて……………」

こ「やめちやったんですか？」

希「ここち以外の子がね……………。アイドルとしての目標が高すぎたんやろうね……………。他の子についてはいけず、一人辞め……………二人辞めて……………。だから、あなた達が羨ましかったとちやう？歌にダメ出ししたり、ダンスにケチつけたりできるって事は、それだけ興味があつて、見てるって事やる？」

そう言つて副会長は去つて行つた。

副会長の言つた事も一理ある。

だけど、僕たちは何をすればいいのか……………」

そんな事を考えながら、僕は海未ちゃん、穂乃果ちゃん、ことりちゃんと傘をさしながら帰っていた。

こ「なかなか難しそうだね。にこ先輩。」

永「うん・・・」

海「先輩の理想は高いですから・・・。私たちのパフォーマンスじゃ、納得してくれそうにありませんし・・・。説得に耳を貸してくれそうにありませんし・・・。」

僕たち3人はとても悲観的だったが、穂乃果ちゃんだけが違った。

穂「そうかな? にこ先輩はアイドルが好きなんでしょ?」

永「そうだけど・・・」

穂「それでアイドルに憧れてて・・・。私達にもちよつと興味があるんだよね?」

こ「うん・・・」

穂「それって、ほんのちよつと何かあれば、上手く行きそうなんだけど・・・」

海「具体的に乏しいですね・・・」

穂「それはそうだけど・・・ん?」

永「あれ?」

貴「よつ、穂乃果、永夢。」

永・穂「貴利矢さん(くん)!?」

悩んでいるとき、僕たちの目の前にはなぜか貴利矢さんがいた。

海「二人共・・・知り合いですか？」

穂「うん！家の隣に住んでいるんだ！」

永「この間、ちよつとね。でもなんで？」

貴「ただの散歩さ。後ろの二人は初めましてだな。自分の名前は九条貴利矢。よろし

く」

海「私は園田海未です。よろしくお願いします。」

こ「私は南ことり。こつちもよろしくね！」

貴利矢さんに合わせて、二人も自己紹介をする。

貴「それで、なんか悩んでたけどどうしたん？」

永「それが・・・」

僕は悩んでいた事を簡単に伝える。

内容を聞いた貴利矢さんは顔をうなずかせる。

貴「なるほどね。それでどうすればいいか悩んでたわけか。」

穂「そうなの・・・どうすればいいと思う？」

穂乃果ちゃんに聞かれた貴利矢さんは少し考え、

貴「それに関しては詳しい事は言えないが、多少は強引に行つた方がいいぜ。それ

にほら、あそこを見てみる。」

永「ん?」

貴利矢さんが指差した方向には、見慣れたツインテールの少女がいて、ここを去って行った。

こ「今の・・・多分・・・」

海「もしかすると・・・」

穂「・・・」

こ「声かけると、また逃げちゃいそうだし・・・」

穂「うくん・・・あつ!・・・ふふっ。」

穂乃果は少し唸ったが、何か思いついたのか、不敵に笑う。

永「何か思いついたの?」

穂「うん!これって海未ちゃんと一緒じゃない!」

永「?」

海「へ・・・?」

何を言っているのかさっぱりわからない。

穂「ほら、海未ちゃんと知り合った時・・・」

どうやら、穂乃果ちゃん達が海未ちゃんと初めて会った時の事が、今回の件で使える

らしい。

海「そんな事ありましたっけ？」

穂「あの頃の海未ちゃん、恥ずかしがり屋さんだったから〜」

永「それは今もじゃない？」

海未ちゃんは恥ずかしがる。

海「それと、今の状況が関係あるんですか!？」

穂「うん!ねっ!!」

穂乃果ちゃんはことりちゃんに同意を求める。

こ「あー、あの時の!」

穂「そうそう!!」

どうやらことりちゃんには思い当たる部分があるらしく、穂乃果ちゃんに同意する。

対して海未ちゃんは頭に?を浮かべている。

まあ、穂乃果ちゃんの解決策にかけてみるか・・・

そう考えていると、

『ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ』

永・海・穂・こ・貴「!!!!!!」

急にゲームスコープが鳴り出す。

しかも二つ分。

どこからか考えていると、僕の隣に立っていた貴利矢さんが懐から僕が持っているのと同じ、ゲームスコープを取り出した。

永「!? ……まさか、貴利矢さんも ……?」

貴「まさか永夢もだとはなあ。早く行こうぜ、患者が待っているしな。」

貴利矢さんはゲームスコープで患者の場所を確認し、その場所に向かう。

永「あつ、ま、待つてください!」

僕は急いで後を追う。

その僕の後ろを、海未ちゃん達も走る。

………

現場に着いた僕たちは周囲を確認し、苦しそうにしている人を見つめる。

永「大丈夫ですか!」

僕らはすぐに駆け寄り、ゲームスコープで確認する。

案の定、彼からはバグスターウイルス反応が検出された。

それを確認した僕と貴利矢さんはゲームドライブとガシヤットを取り出す。

貴利矢さんのガシヤットは黄色のガシヤットだ。僕らがドライブを腰に巻き、ガシヤットを押そうとすると患者に異変が起こり、急に苦しみだしたかと思うと、その体

はバグスターユニオンに変えていく。

その様子を見た僕たちはガシヤットを押す。

『MICHTY ACTION X!』

『爆走バイク!』

僕はいつもの動作を、貴利矢さんはその場で一回転する。

永・貴「変身!」

ガシヤットをドライバーに挿入する。

するとパネルが出現し、僕はいつものを、貴利矢さんは前に来たパネルを蹴って押す。

『レッツゲーム!メツチャゲーム!ムツチャゲーム!ワツチャゲーム!I、m a 仮

面ライダー!』

俺はエグゼイド、貴利矢は両腕にタイヤを持つ、頭にハンドルのような物が付いている姿に変わった。

仮面ライダーレーザー・レベル1

エ「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!」

レ「さあて、ノリノリでいくぜ!」

永夢 side out

.....

◎ side

エグゼイドとレーザーはタイヤの形をしたバグスターユニオンに向かっていく。

『ガシャコンブレイカー』

エ「うおおりゃ!」

レ「オラオラ!」

エグゼイドはガシャコンブレイカー・ハンマーモードで、レーザーは両腕に持っているタイヤから銃撃を行い、攻撃していく。

バグスターユニオンは転がって攻撃してくる。

エグゼイドとレーザーはそれぞれ横によけ、攻撃を与えていく。

エ「これでも喰らえ!」

『マッスル化!』

エグゼイドはマッスル化のエンジーアイテムを取り、ガシャコンブレイカーで思いっきり叩く。

上からはエグゼイド、下からはレーザーの銃撃をくらい、バグスターユニオンは爆発する。

そして、分離した患者が落ちてくる。

エ「よっと」

落ちてくる患者をエグゼイドはブロックを出して空中でキャッチする。

エ「患者を頼む」

海「わかりました。」

穂「任せて！」

こ「うん！」

患者を海未たちに任せ、エグゼイドとレーザーは分離したバグスターを見る。

そのバグスターはバイクに乗っている、金と銀、青色の体をしている。

「ブンブブーン！俺様はモータス！着いて来てみやがれ！ブブーン！」

そのバグスター、モータスはそういうとバイクを動かして逃げようとする。

エ「逃がすかよ！大変身！」

レ「よっしや行くぜ〜！二足！」

エグゼイドはいつもの動作で、レーザーはその場で一回転してレバーを開く。

『ガッチャ〜ン！』

『レベルアップ！』

『マイティアクションX！』

『爆走!独走!激走!暴走!爆走バイク!』

エグゼイドとレーザーはレベル2になる。

が、レーザーの見た目は座席部分にゲーマドライバーが巻かれたバイクそのものだった。

エ「え?」

海「ぼ、バイク・・・?」

こ「バイク・・・だよね?」

穂「バイクだー!」

レ「あー、見た目に関しては気にするな!永夢!乗れ!」

エ「あ、ああ、わかった!」

エグゼイドはレーザーの上に乗し、モータスを追いかける。

それと同時に、レーザーのキメワザスロットのスイッチを押し、場所を変える。

『Stage select』

エグゼイドが選んだ場所はレース場。

下手に障害物もないため、モータスを見失うことなく追いかける。

「ブンブーン!オラオラ遅えぞ!」

レ「おい永夢!もっとスピード出せ!」

エ「おう！」

レーザーに言われスピードを上げるエグゼイド。

レース場のコースに存在するカーブを難なく曲がって行くエグゼイドとモータス。

カーブを曲がる瞬間、エグゼイドはうまくモータスの横を通り、前に出る。

「んなっ！」

エ「よっしやー!!」

レ「ナイスだ永夢!!」

モータスを抜かしたエグゼイドはそのままゴールに向かって走って行く。

そんなエグゼイドとモータスの前に巨大なジャンプ台が現れる。

レ「よし、そろそろ決めるぞ、永夢！」

エ「ああ、Finishは必殺技で決まりだ！」

エグゼイドはレーザーに装着されているゲームドライバーから爆走バイクガシャットを抜き、レーザーのキメワザスロットに入れる。

『ガシャット！』

まずエグゼイドが、その次にモータスがジャンプ台で飛ぶ。

飛んだ瞬間、エグゼイドはキメワザスロットのスイッチを押す。

『キメワザ！爆走 CRITICAL STRIKE！』

レーザーのモーター部位から勢いよく炎が吹き出し、モータスに直撃する。
「ぐあああ!」

モータスはハンドルから手を離し、地面に向かって落下して行く。

その間にエグゼイドは地面に着地し、ゴールに向かう。

モータスが落下し、爆発したと同時にエグゼイドはゴールする。

エ「よっしゃー!」

レ「やったな永夢!」

『ゲームクリア!』

.....

次の日、外では雨が降っている中、にこは一人で部室に向かっていた。

その表情は少し暗かった。

部室の前に着き、にこは扉を開ける。

「「「「「お疲れ様です。」」」」」

マネージャーを含めたμ'sメンバー全員が部室の中にいた。

予想外の展開に動きが止まるにこ。

穂「お茶です、部長!」

に「部長!?!」

こ「今年の予算表になります、部長！」
に「なっ！」

凜「部長！、ここに置いてあったグッズ、邪魔だったんで棚に移動しておきました。」
に「あつ、こちら！勝手に・・・」

真「さ、参考にちよつと貸して。部長のおすすめの曲。」

花「な、なら迷わずこれを！」

花陽はそう言つて伝伝伝のボックスを見せる。

に「あー!?だからそれは！」

それを見て身を乗り出すにこ。

そんなにこの肩に手を乗せる穂乃果。

穂「ところで次の曲の相談をしたいのですが、部長！」

海「やはり次は、さらにアイドルを意識した方がいいかと思ひまして・・・」

こ「それと、振り付けも何かいいのがあったら・・・」

穂「歌のパート分けもよろしく願ひします!!」

色々な事が一度に起こり、しばらくには口を開け呆然としていたが、状況を理解する。
る。

に「こんな事で押し切れると思つてるの？」

それに対して穂乃果は、

穂「押し切る？ 私はまだ相談しているだけです。音ノ木坂アイドル研究部所属の、μ Sの7人が歌う、次の曲を！」

に「……7人？」

穂乃果たちはここに笑顔を向ける。

に「こんな穂乃果たちを見回すが、やがて諦めたのか、
に「……厳しいわよ。」

穂「分かっています！ アイドルへの道が厳しい事ぐらい！」

に「分かかってない！ あんたも甘々、あんたも、あんたも、あんた達も！」

そう言つて穂乃果たちを指さしていくにこ。

に「……いい？ アイドルっていうのは、笑顔を見せる仕事じゃない、笑顔にさせる仕事なの！ それをよーく自覚しなさい！」

・
・
・
・
・
・

生徒会室。

アイドル部が一つの部活になった紙を見て渋い顔をする絵里。

そんな絵里に希は、

希「エリチ……見てみ……」

外を見ながら話しかける。

そこには、

希「雨・・・止んでる♪」

振り続けていた雨が止んで、青空が見え始めていた。

・・・・・・

新たににこを加えたμ'sメンバーは屋上にいた。

にこは穂乃果たちを指を差す。

に「いい!? やると決めた以上、ちゃんと魂を込めてアイドルになりきってもらおうわよ

!!分かった!」

「「「「はい!!」」」」

に「声が小さい!」

「「「「はい!!」」」」

そしてにこが後ろを向いている最中に、穂乃果たちは

こ「上手くいって良かったね♪」

穂「うん!」

海「ほんとにそんな事ありましたっけ?」

こ「あつたよ!あの時も穂乃果ちゃんが・・・」

〈回想〉

とある公園で遊ぶ穂乃果とことり。

そんな二人を木の影から見てる海未。

次の瞬間遊んでた穂乃果と覗いてた海未の目が合う。

海未はとつさに木の影に隠れる海未。

だが、穂乃果は

穂『見ーつけた!!』

海『ひゃう!』

海未に声をかける。

海未は怯えていたが、

穂『次、あなたが鬼だよ!』

海『え?』

穂『一緒に遊ぼ!』

と誘う。

海未はポカンとしていたが、次第に笑顔になり、

海『はい!!』

と、穂乃果たちと遊び始めた。

こうして、幼馴染3人組ができた。

〈回想終了〉

◎ side out

・・・・・・・・・・

永夢 side

今、μ'sは屋上でにこさん指導の元、とある特訓をしていた。

まあ、その内容は・・・

に「にっこにっこにー!!・・・はい!」

「「「「にっこにっこにー!!」」」」

に「全然ダメ!もう一回!にっこにっこにー!!・・・はい!!」

「「「「にっこにっこにー!!」」」」

に「つり目のあんた!もつと気合い入れて!」

真「真姫よ!」

・・・この「にっこにっこにー」の練習ばかり。

そろそろアイドルらしい歌やダンスの練習を・・・と思っただけ、指導しているにこさんの顔は昨日では考えられないほど笑顔だった。

第16話 センターは誰だ!?

永夢 side

穂「あ、あの……」

希「はい、笑って♪」

穂「え、えへ……」

にこさんがμ'sに加わって早数日。

僕達は今中庭にいる。

そこで、穂乃果ちゃんが副会長の指示に従い笑う。

そんな穂乃果ちゃんを凜ちゃんがビデオカメラで撮影している。

今現在何をしているのかと、部活紹介のためのPVの撮影をしている。

ここにいるメンバーは僕と穂乃果ちゃん、海未ちゃん、ことりちゃん、凜ちゃんと副会長。それから、数日前からこの学校に通い始め、今ではアイドル研究部の部員の一人になった貴利矢さんだ。

凜「じゃあ、決めポーズ!」

穂「え、えええ!……じゃあ、はい!!」

凜ちゃんに言われて、ポーズを決める穂乃果ちゃん。

希「これが音ノ木坂に誕生したμ'sのリーダー、高坂穂乃果。その人だ。」
ちなみに副会長はナレーターをしている。

凜「はい、OK!!」

凜ちゃんからOKが出て、穂乃果ちゃんは決めてたポーズを解く。

こ「あの、これは？」

凜「じゃあ、次は海未先輩ね！」

穂乃果ちゃんの撮影が終わり、次は海未ちゃんにカメラを向ける凜ちゃん。

海「え……。な、何なんですか!?!。ちよつと待つてください!!失礼ですよ、いきなり！」

カメラを向けられた海未ちゃんは恥ずかしがって僕の後ろに隠れた。

永「ちよ、海未ちゃん!？」

貴「ノリが悪いよ、そこは乗って行こうぜ。」

凜「でもその恥じらう姿もいいね♪」

そんな海未ちゃんにそのままカメラを向け続ける凜ちゃん。

凜ちゃんの方はノリノリだね。。。。。

希「ごめんごめん。実は、生徒会で部活動を紹介するビデオを撮影することになって、

各部を取材してるところなんよ。」

穂「取材?」

成る程ね……。

事情は把握できた。

つて、穂乃果ちゃんは知らずに撮影してたの!?

凛「ね!ね!面白そうでしょ!?!」

希「最近スクールアイドル流行ってるし、μ'sとして悪い話では無いと思うんやけど……。」

副会長の話には納得できるが、それでも海未ちゃんは隠れたままだ。

海未ちゃんは顔だけを出して言う。

海「わ、私は嫌です!カメラに映るなんて……」

海未ちゃんが取材を拒否してるのに対して、反対に穂乃果ちゃんの方は、

穂「取材……。なんてアイドルな響き……。」

心を躍らせていた。

確かに穂乃果ちゃんはこういうのが好きそうだしね。

海「穂、穂乃果!?!」

そんな穂乃果ちゃんの反応をみて、異議を申し立てる海未ちゃん。

穂「オツケーだよね！海未ちゃん！これを見た人がμ'sのこと覚えてくれるし！」

こ「そうだね、断る理由はないかも！」

海「こ、ことり!?!」

穂乃果ちゃんだけじゃなくことりちゃんも賛成し、狼狽える海未ちゃん。

凜「取材させてくれたら、お礼にカメラ貸してくれるって！」

希「そしたら、PVとか撮れるやろ？」

穂「・・・PV？」

凜「ほら、μ'sの動画って、まだ3人だったときのしかないでしょ？」

そういえばそうだ・・・。

μ'sの動画はあの一本しかないし、それ以降も撮ってない。

そもそも、あの動画でさえ誰が投稿したのか未だに分かってない。

穂「あく。あの動画って撮ってくれたのが誰か、まだ分からないままだし・・・。」

こ「海未ちゃん、そろそろ新しい曲やった方がいって言ってたよね？」

永「そういえば、そうだね。」

ことりちゃんの言葉に目を泳がし始める海未ちゃん。

穂「決まりだね!!」

貴「観念しな、海未。」

貴利矢さんの言葉に海未ちゃんは、

海「ああ、……もう!」

観念したみたいだね。

穂「よし、他の人にも言ってくる〜!」

そう言つて、穂乃果ちゃんはことりちゃんと海未ちゃんと一緒に走つて行つた。

さーて、僕たちも頑張りますか!

・・・・・

現在、部室で教室での穂乃果ちゃんの動画を見ていた。

と言つても、まさか授業中ほとんど寝てるとはね……。

動画では、授業中は寝て、お昼に起きて、そして再び寝ると言うなんともだらしない姿の穂乃果ちゃんが映っていた。

希「……これが高坂穂乃果のありのままの姿である。」

穂「ありのまますぎるよ!」

貴「こりや、自業自得だぜ。穂乃果。」

永「貴利矢さんの言う通りですね。」

穂「貴利矢君も永夢君も酷いよ!?! 慰めてよ!?!」

貴「そりや無理な話だな。」

穂「つていうか、いつの間に撮ったの!？」

永「それは僕も気になった。」

穂乃果ちゃんの文句に僕も同意する。

凜「上手く撮れてたよ、ことり先輩!!」

こ「ありがと。こつそり撮るのにドキドキしちゃった♪」

永「えっ、これことりちゃんが撮ったの!？」

ことりちゃんはとてもうつとりしながら言う。

穂「ええ!?!ことりちゃんが!?!酷いよ!!」

海「普段だらけてるからこうなるんです。」

海未ちゃんが穂乃果ちゃんに注意するが、すでに穂乃果ちゃんは別の行動に移って、

穂「流石海未ちゃん♪」

海未ちゃんの動画を見ていた。

少しは話を聞きなよ・・・。

今見てる動画には、弓道着を着て弓を構える海未ちゃんが映っていた。

穂「真面目に弓道の練習を・・・」

貴「穂乃果とは大違いだな。」

穂「ちよつと貴利矢くん!」

何やってるの、この二人は……。

ふと動画を見たら、矢を発射した後、鏡の前で笑顔を作っている海未ちゃんの姿が。
……もしかして、笑顔の練習?

そう思った瞬間、カメラの画面を誰かの手が遮った。

海「プライバシーの侵害です!!」

海未ちゃんか……。

よほど恥ずかしかったんだね。

穂「よし、こうなったら……」

急に穂乃果ちゃんが立ち上がり、ことりちゃんの鞆を漁り始めた。

穂「ことりちゃんのプライバシーも……ん?なんだろ、これ?」

こ「ひっ!!」

穂乃果ちゃんが何かを見つけたみたいだけど、それを確認する前にことりちゃんが素早く鞆のジッパーを閉め、鞆を背に隠し、部室の隅に移動する。

動き早いね……。

穂「ことりちゃん、どうしたの?」

こ「ナンデモナイノヨ。」

穂「え?でも……」

こ「ナンデモナイノヨナンデモ。」

おまけにすごい早口だし……。

穂「そういえば永夢くんや貴利矢くんのは？」

こ「一応あるよ。」

永・貴「「え？」」

僕たちも撮られてたの？

全く気づかなかったよ……。

穂「それじゃあ、二人のも見てみよ〜♪」

そう言つて動画を再生し始める穂乃果ちゃん。

動画には、普通に授業を受けている僕と貴利矢さんが映つていた。

穂「お〜、二人も真面目に……」

貴「穂乃果がだらしなさすぎるんだ。」

穂「そんなに何回も言わないでよ、貴利矢くん!!」

海「あなたたちは何回似たようなやりとりを繰り返すんですか。」

こ「ははは……。」

海未ちゃんのツツコミに苦笑いすることりちちゃん。

まあ、僕も思ったけどね。

希「完成したら、各部にチェックしてもらおうから、問題があつたらその時に・・・」
穂「でも、その前に生徒会長が見たら・・・」

絵『困ります。あなたのせいで音ノ木坂が怠け者の集団に見られるのよ。』

永「まあ、あの動画見たら言うだろうね。」

貴「あのお堅い生徒会長じゃあな。」

穂「うううう」

穂乃果ちゃんが唸るが、こればかりは仕方ない。

もし僕が生徒会長の立場でも同じ事を言うと思うし。

希「まあ、そこは頑張ってもらおうとして。」

穂「ええー！希先輩なんとかしてくれないんですか!？」

希「そうしたいんやけど、残念ながらウチが出来るんは、誰かを支える事だけ。」

永「支える・・・?」

どういう事だろう・・・?

希「まあ、ウチの話はええやん。さあ、次は・・・」

その瞬間、部室のドアが開き、にこさんが入ってきた。

に「はあはあ」

穂「にこ先輩?」

に「取材が来るって、本当!？」

こ「もう来てますよ。ほら!」

ことりちゃんが副会長を手で示す。

するとにこさんが、

に「にっこにっこにー♪みんなも元気にニコニコニーの、矢澤にこでーす♪えつとく、

好きな食べ物はく．．．」

ぶりっ子しながらそう言っていると

希「ごめん、そういうの要らないわ。」

副会長に止められる。

に「えええ．．．」

凜「部活動の生徒たちの素顔に迫る感じにしたいんだって!!」

に「素顔．．．ああ、OK、OK。そっちのパターンね．．．」

永「どういうパターン？」

に「ちよつくと、待つてね。」

無視された．．．

にこさんは後ろを向いて、しゃがんで頭のリボンを解き始めた。

．．．．．なんか嫌な予感がして来た。

永「みんな、ここは先に行こう。」

海「え？ですが・・・」

永「この後の展開、なんとなく読めるでしょ？」

海「え、ええ・・・まあ・・・」

貴「確かに出た方がいいな。みんな行こうぜ。」

「「「「うん・・・」」」」

僕たちは黙って部室から出る。

しばらく歩くと、部室から「つていないし!？」つて言う声が聞こえて来た。

・・・・・・・・・・

花「た、助けて・・・」

部室から場所を変更、今は中庭に来ていた。

そこで残りの一年生組の飛彩君、真姫ちゃん、花陽ちゃんと合流した。

そして、まず初めに花陽ちゃんのインタビューを開始したのだが、開口一番で助けを

求めていた。

ちなみに今は僕が撮影をしている。

永「花陽ちゃん、落ち着いて？」

希「後で編集するから、どれだけ時間が掛かっても大丈夫だよ。」

花「で、でも……」

凜「凜もいるから、頑張ろう！」

凜ちゃんが花陽ちゃんを励ましながらカメラに写りこむ。

凜「真姫ちゃんもこつち来るにゃ〜！」

渡り廊下で髪をくるくる回している真姫ちゃんの方にカメラを向ける。

真「私はやらない。」

飛「行つて来い、真姫。」

真「嫌よ。」

凜「もお……」

飛彩君が勧めるが、真姫ちゃんは断り、凜ちゃんが不満そうな声を漏らす。

希「ええんよ、どうしても嫌なら無理にインタビューしなくても……」

副会長はそこまで言つて、僕にウインクして来る。

それで何となく副会長が言いたい事が分かり、無言で真姫ちゃんの方にカメラを向ける。

希『真姫だけはインタビューに応じてくれなかった。スクールアイドルから離れれば、ただの多感な15歳。これもまた自然な……』

真「つて、何ナレーション被せてるのよ！」

副会長がナレーションを被せていたが、途中で真姫ちゃんが撮られてるのに気づき、撮影を止めさせた。

ただ、止めるためにこちら側に来てしまったため、そのまま一年生組の撮影に参加させられた。

希「ではまず、アイドルの魅力について聞いていこうと思います。」

やつとインタビューらしいインタビューが始まったよ……。

希「ではまずは花陽さんから。」

花「え、えつと……」

副会長は初めに花陽ちゃんに話しを振り、花陽ちゃんが戸惑っていると、

凜「かよちゃんは昔からアイドルが好きだったんだよね〜!」

花「は、はい!」

さすが幼馴染、ナイスアシストだ。

希「それでスクールアイドルに?」

花「はい、えつと……」

次の質問に花陽ちゃんが答えようとしたが、なぜか笑いを堪えるように口を抑えた。

花陽ちゃんと同じ方向を見ている凜ちゃんと真姫ちゃんには原因がわかったみたい

で、凜ちゃんは花陽ちゃんと同じように笑いを堪える。

真「ちよつと止めて!!」

真姫ちゃんに言われてカメラをいったん止めて顔を上げる。

二人が笑い出した原因が気になり、二人が見ていた方向、つまり僕の後ろ側を見る。そこには、口を窄ませていた穂乃果ちゃんがいた。

永「穂乃果ちゃん・・・何してるの?」

穂「いやあ、緊張してると思つて、解してあげようと思つて。」

真「ことり先輩も!!」

こ「頑張っているかね?」

穂乃果ちゃんの後ろではひよつとこの仮面を被っていることりちゃんの姿が。

永「その仮面、どこにあつたの?」

真「全く、これじゃあμ'sがどんどん誤解されていくわ!!」

穂「おお!真姫ちゃんがμ'sの心配をしてくれた!!」

真「なつ、べ、別に私は・・・。」

結局、撮影もそんなに進まず、この時間はお開きになった。

.....

放課後、普段の態度はだらしないうところが多いという事で練習風景を撮影することにした。

しばらく練習し休み時間になった時に、副会長のもとに行く。

永「どうですか？練習の様子は。」

希「やっぱりスクールアイドルなだけあって、練習は迫力が違うね。」

貴「そりゃ、練習までいつもと同じだったら問題あるでしょ。」

希「ただ……」

永「？」

希「リーダーって……誰なん？」

永「えっ？」

……

昨日はあの後解散し、副会長と凜ちゃん、貴利矢さんの3人は穂乃果ちゃんの家に行つてインタビュウの続きをしたみたいんだけど、そこで再び副会長からリーダーは誰なのか聞かれたらしい。

そこで、今は部室でリーダーを改めて決める会議を行っている。

に「リーダーには誰が相応しいか……だいたい私が部長についた時点で考え直すべきだったのよ。」

こ「私は穂乃果ちゃんがいいと思うけど・・・」

に「ダメよ！今回の取材ではつきりとしたでしょ？この子はリーダーにまるで向いてない。」

真「それはそうね。」

確かにみんながやっている事を考えると、穂乃果ちゃんはリーダーとは思えないほど何もやってない。

に「この際、はつきり決めましょう。P.Vの撮影だつてあるし。」

飛「それもそうだな。」

に「リーダーが変われば、必然的にセンターも変わるでしょ？次のP.Vは新リーダーがセンター！」

に「さんはそこまで言つて、後ろにあるホワイトボードを裏返す。

そこには、『リーダーとは？』と書かれていた。

に「リーダーとは！まず第一に、誰よりも熱い情熱を持っていて、みんなを引っ張つていける事！次に！精神的支柱になるだけの懐の大きさを持った人間である事！そして何より！メンバーに尊敬される存在である事！この全ての条件を兼ね備えたメンバーとなると！」

うん・・・なんか自分がそうだつて感じがしているけど、にさんは違う気がする

んだよな。

そんな事を考えていると、凜ちゃんが

凜「海未先輩かにや？」

貴「ぶっ！」

に「なんでやねーん!!」

海未ちゃんを推し、それを聞いたにこさんはツツコム。

そして貴利矢さんはそれを聞いて吹き出す。

海「わ、私ですか!？」

海未ちゃんか・・・

確かにいいかもね。

穂「そうだよ海未ちゃん！向いてるかもリーダー！」

海「それでいいのですか？」

穂「えっ、なんで？」

海「リーダーの座を奪われようとしているのですよ？」

穂「ふえ？それが？」

海「・・・何も感じないのですか？」

穂「だって、みんなでμ'sをやって行く事一緒でしょ？」

かなりあつげらんとして言う穂乃果ちゃん。

花「でも！センターじゃなくなるかもですよ!？」

花陽ちゃんがそう言うが、穂乃果ちゃんは

穂「おー、そうか。ま、いつか!」

「「「「「えええええ!!」「「「「「」

貴「さすが穂乃果だな!」

海「そんな事でもいいのですか!？」

穂「それじゃあ、リーダーは海未ちゃんと言う事で……」

海「ま、待っててください!」

永「?」

海「私には、無理です／＼／＼」

あー……

海未ちゃん、恥ずかしがり屋だったね。

真「面倒な人。」

花「じゃあ、ことり先輩?」

こ「え?私?」

花陽ちゃんはことりちゃんを推薦する。

だけど・・・

永「ことりちゃんんはリーダーというより、副リーダーじゃない?」

貴「確かにね。」

ことりちゃんはおっとりしてる。

ことりちゃんの脳トロボイスで『気合入れて行く♪』なんて言われても、気合なんて入らない。

逆に力が抜けていく。

凜「じゃあ、永夢先輩?」

永「マネージャーがリーダーはおかしいでしょ?」

貴「俺もだぜ。」

花「でも・・・一年生がリーダーって訳にはいかないし・・・」

に「仕方ないわね」

こ「やつぱり穂乃果ちゃんがいいんじゃない?」

に「仕方ないわね」

真「私は海未先輩を説得した方が早いと思うけど?」

に「仕方ないわね」

貴「どうする?多数決でも取るか?」

に「しくかくたくなしくわくねく！」

永「にこさん、うるさいです・・・」

みんながにこさんをずっとスルーするから、におさんが拡声器を使い始めた。

凜「で、どうするにや？」

飛「どうするか・・・」

結局、放課後に秋葉に行って決める事になった。

時間、かかりそうだな・・・

第17話 決定!μ'sのリーダー!

永夢 s i d e

放課後。

僕は予定通り、秋葉原のカラオケに来ていた。

なぜカラオケかって?

それについてはにこさんに聞いてほしい。

僕も分かってないんだから。

に「歌とダンスで決着をつけようじゃない!!」

こ「決着?」

凜「みんなで得点を競おうって事かにや?」

なるほど。

確かにアイドルには歌をダンス能力は必須。

それらが一番優れている人がリーダーになって事か。

に「その通り!一番、歌とダンスが上手い者がセンター!どう?これなら文句ないで

しょ?」

にこさんはマイクを持って歌う気満々で宣言している。

そんなにこさんと逆に海未ちゃんと真姫ちゃんは、

海「でも、私カラオケは・・・」

真「私は特に歌う気はしないわ。」

と、あまり乗り気ではない。

それに対してにこさんは、

に「それなら歌わなくて結構。リーダーの権利が消失するだけだから。」

そう言った直後、にこさんは後ろの向いてしやがみ、小声でボソボソ言う。

に「ふっふっふ・・・こんな事もあるうかと、高得点が出やすい曲は既にピックアップ

済み・・・これでリーダーの座は確実に・・・！」

全部聞こえてるんだよな・・・。

永「にこさん・・・？」

僕が少し威圧的に声をかける。

声をかけられたにこさんは、

に「さ、さあ、始めるわよ！」

冷や汗をかきながら開始を宣言した。

だが、そのやりとりの間に他のメンバーは「カラオケに来るの久しぶりだよね」と

か、「何歌おうかな?」とか話していた。

に「あんたら、緊張感なさすぎ!」

.....

全員が歌い終わる。

結果から言えば全員90点以上だった。

みんな歌のスキル高いな.....

に「こいつら、化け物か...!?!」

にこ先輩は一人戦慄していた。

貴「それじゃ、全員歌い終わつたし、次行くか?」

貴利矢さんがそう言つて締めくくろうとした時、穂乃果ちゃんが爆弾を投下した。

穂「ええ!貴利矢くん達も歌つてよー!」

貴「はっ?」

穂乃果ちゃんの言葉に、貴利矢さんだけでなく僕や飛彩くんも固まってしまった。

そんな僕達の気も知らず、他のみんなは話を進める。

海「いいですね!」

こ「永夢くん、一曲歌つて!」

凜「凜も賛成にゃ!」

真「飛彩たちの歌も聞いてみたいわ。」

に「マネージャーにも歌唱力は必要よ！」

とかみんなで色々言つて来る。

ていうか、最後のにこさんの言葉に関しては意味が分からない。

花陽ちゃんも声に出してはいないが、さつきからチラチラと僕らを見てくる。

永「い、いや・・・でも、僕達が歌う必要なんてないでしょ？」

貴「そうそう。これはあくまでリーダーを決めるためにやつてる事なんだから。」

飛「俺達マネージャーはリーダーになる事はないんだから、わざわざ歌つて時間をロスするような事をする必要なんてないだろう。」

僕らでそう言つて説得するが、

穂「ええー!? 3人の歌も聞きたいよー!」

穂乃果ちゃんが我儘を言い、他のみんなも色々言ってきたため、結局歌う事になった。僕ら3人が歌つた後、別の場所に移動した。

あ、ちなみに点数は全員95点以上で、飛彩君に至っては100点を出していた。

その結果を見てにこさんはまた戦慄してたけどね・・・。

.....

に「次はダンスゲームよ!!」

カラオケから移動し、秋葉にあるゲーセン。

その中にあるダンスゲーム機の前でにこさんが宣言した。

まあ、穂乃果ちゃんところりちゃん、凜ちゃんに貴利矢さんはクレインゲームに夢中だけどね。

穂「頑張れ! 貴利矢君!!」

貴「よし、後もうちよい・・よっしや! 取った!」

こ「やったね穂乃果ちゃん!」

凜「凄いにゃ〜!」

なんかちやうど景品が取れたみたいだね。

に「だから緊張感持ちなさいよ!」

凜「だって凜、運動は得意だけど、ダンスは苦手だからなく・・」

こ「これ、どうやるんだろう?」

みんなどこか不安を感じながらプレイして行く。

に「プレイ経験ゼロの素人が挑んで高得点なんて取れるわけがないわ。くっくっく・・・。カラオケの時は焦ったけど、これはもらったわね。」

まただよ・・・。

にこさんがよからぬ事をぶつぶつ言っていると、

凜「なんかできちゃった。」
に「なっ!?!」

最初にプレイしていた凜ちゃんがりげなく最高ランクの一つ下のAAを叩き出していた。

凄いな……。

他のみんなのプレイが終わった後、当然のように僕らマネージャーも参加させられた。

まあ、今回はゲームだし……。

永「よっしゃや！天才ゲームマーの力、見せてやるよ！」

そうやって俺もゲームをプレイする。

結果は当然最高ランクのAAAだ。

海「なんか……マネージャーのみんなの方が強くないですか……?」

……

次は秋葉でチラシ配り。

に「さんが言うには、アイドルにはオーラも必要らしく、チラシ配りをしてそのオーラを競うらしいのだが……

こ「ふう……」

ことりちゃんは結構早くに終わっていた。

僕も含めたマネージャー組も、なぜか勝手に減っていった。

ふとにこさんの方を見ると、その背中から哀愁を感じられた。

こんな感じで、この日は解散する事になった。

・・・・・

翌日、部室にて。

貴「ほら、これが昨日の集計結果だ。」

貴利矢さんが集計結果の紙を見せる。

そこには、にこさんの点数が他の人に比べて以上に高かったり、逆にダンスで高得点をとった凜ちゃんやんの点数が低かったりと、明らかにおかしい事が書かれていた。

に「うそ!？」

海「ど、どう言う事ですか!？」

真「この集計結果、おかしくない!？」

みんなも疑問に感じたのか、次々と疑問を述べていく。

にこさんのみ、少なからず喜んでるようだが・・・。

そんな事を考えていると、貴利矢さんが、

貴「ああ、それ昨日暇になった時に自分が適当に書いたやつだわ。本物の集計結果は

こつち。」

つて言つて、別の紙を取り出した。

これにはみんなガクツとした。

貴「あれれ、もしかしてみんなノせられちゃったく？」

に「は、はらたつゝ……」

そんな一騒ぎがあつた後、あらためて本物の集計結果を確認する。

穂「はあ、結局みんな同じかく……」

海「そうですね……。ダンスの点数が悪い花陽は歌が良くて、カラオケの点数が悪いことはチラシ配りの点数が良くて……」

永「結局、みんな同じつて事だね。」

飛「お互いがお互いの悪い所をカバーしあっているという事か。」

凜「にこ先輩も流石です！みんなより、全然練習してないのに同じ点数だなんて！」
に「ははは……当たり前でしょ……」

喝いた笑いを出すにこさん。

その顔は引きつっているけど……。

真「でも、どうするの？これじゃあ決まらないわよ？」

花「そ、そうだよ。で、でもやっぱりリーダーは上級生の方が……」

に「仕方ないわね〜」

凜「凜もそう思うにや〜!」

真「私はそもそもやる気ないし」

に「・・・あなたたち・・・ブレないわね・・・」

結局リーダーを誰にするか考えていると穂乃果ちゃんが驚きの発言をした。

穂「それじゃあ、いいんじゃないかな? いなくても。」

「「「「「ええっ?」「」「」「」」」」

貴「穂乃果? どういう事だ?」

穂「リーダー無しでも、全然平気だと思うよ。みんなそれで練習してきたし、歌も歌っ

てきたんだし!」

海「ですが・・・」

に「そうよ!リーダー無しのグループなんて聞いた事ないわよ!」

真「だいたい、センターはどうするの?」

海未ちゃん達の疑問に穂乃果ちゃんは答える。

穂「それなんだけど、私考えたんだ! みんなで歌うってどうかな!」

飛「ん?」

に「みんな?」

穂「家でアイドルの動画見ながら思ったんだ。なんかね、みんなで順番に歌えたら、素敵だなんて！そんな曲、作れないかな？」

花「順番に？」

穂「そう！無理かな？」

穂乃果ちゃんがみんなに聞く。

海「まあ、歌は作れなくはないですけど……」

真「そういう曲、無くはないわね！」

穂「ダンスはそういうの無理かな？」

こ「ううん、今の七人ならいけると思うけど。」

ことりちゃんの言葉を聞くと、穂乃果ちゃんは両手を広げて立ち上がる。

穂「じゃあ、それがいいよ！みんながリーダーで、みんながセンター！」

穂乃果ちゃんがそう宣言すると、

貴「はっはっは！いいじゃねーか、それ！自分はノるぜ！」

貴利矢さんはいつも通りノリノリで賛成する。

永「僕もかまいません。なんか、新鮮ですし。」

飛「それはそれで面白いかもな。」

こ「私もそれでいいと思う！」

真「好きにすれば・・・」

凜「凜もソロで歌うんだ」

花「わ、私も!？」

海「作るのは大変そうですが・・・」

にこさん以外のみんなが賛成する。

そして、みんなにこさんを見る。

にこさんはため息をつき、

に「しようがないわね・・・。ただし、私のパートは格好良くしなさいよ!」

こ「了解しました♪」

賛成の意を示す。

こうして会議が終わった後、階段を駆け上がっていく穂乃果ちゃんの後ろを歩きながら、

永「でもまあ、なんだかんだ言ってやっぱリーダーは・・・」

真「不本意だけど・・・」

海「何事にも囚われなくて、一番やりたい事、一番面白そうなものに、怯まずまっすぐに突き進んでいく。それは、穂乃果にしかないものなのかもしれないね。」

海未ちゃんがそこまで言うのと穂乃果ちゃんがこつちに振り返り、

穂「さあ！練習しよう！」

そう言ってきた。

こうして、μ'sのリーダーが決定し、新たなPVが完成した。

曲名は「これからのsomeday」だ。

永夢 side out

.....

© side

ちようど、永夢達がリーダーを決めるために秋葉で歌っていた頃。

音ノ木坂学院の近くにある廃工場にそれらはいた。

永夢達と同じように腰にゲーマドライバーを装着し、紺色の体を持ち、頭には「ST

G」の文字。

右目の部分は前髪のような物で隠されており、首から蛍光イエローのローブを装備している。

その手には銃のような武器を装備しており、その銃にはABボタンが存在している。

彼もまた、仮面ライダーと呼ばれる存在だった。

それに相対するのは緑色の異形な存在。

以前、パラドと呼ばれた青年と一緒にいたバグスター、グラフィイトだ。

手には龍の牙を模した双刃の武器、「グラファイトファング」がある。

グラファイトはグラファイトファングに赤色のエネルギーをため、一気に放つ。

グ「激怒龍牙!」

グラファイトが放つ必殺技に、仮面ライダーもドライバーに挿入しているガシヤットを抜き、自身の武器に挿入する。

『ガシヤット!』

『キメワザ!』

『BANGBANG!CRITICAL FINISH!』

ぶつかり合う二つの必殺技。

だが、徐々に仮面ライダーの方の必殺技が押され始め、最終的には仮面ライダー自身に衝突する。

それを見たグラファイトは静かにその場を立ち去って行った。

その戦いを、見ている存在がいた事に気付かずに……。

◎side out

.....

永夢side

新曲、「これからのsomeday」を発表してから数日。

部室で穂乃果ちゃんと海未ちゃん、ことりちゃん、貴利矢さんと話していると、扉が勢い良く開く。

花「た、助けて・・・」

穂「ど、どうしたの・・・？」

花「じゃなくて！大変です!!」

そこには、いつになく真剣な表情をした花陽ちゃんが立っていた。

第18話 地獄の勉強会、スタート!

永夢 side

部室にいる時に急に花陽ちゃんが飛び込んできた。

しかも、かなり慌てて。

永「花陽ちゃん、どうしたの?」

花「大変です!! ラブライブです! ラブライブが開催される事になりました!!」

穂「!? ラブライブ!?」

花陽ちゃんの言葉に穂乃果ちゃんが一番驚いていた。が、

穂「・・・って、何?」

どうやら分かってなかったらしく、すぐに首を傾げていた。

貴「お前・・・なんであんなに驚いてたんだよ・・・」

そんな穂乃果ちゃんに対し、貴利矢さんがツツコム。

そして、花陽ちゃんがすぐにパソコンの前に座って説明を開始した。

花「スクールアイドルの甲子園。それがラブライブです! エントリーしたグループの中から、このランキング上位20組までがライブに出場。ナンバーワンを決める大会で

す。噂には聞いていましたけど、ついに始まるなんて……!!」

穂「へえ〜」

海「スクールアイドルは全国的に有名ですし……」

凜「盛り上がる事、間違いなしにや〜!」

花陽ちゃんの説明を受け、穂乃果ちゃんたちはそれぞれの反応を示す。

花「今のアイドルランキングから上位20組となると、1位のA—RISEは当然出場するとして、……2位3位は……。ま、正に夢のイベント!!チケット発売は何時でしょうか!?初日特典は……」

凄まじい勢いで情報を集め始める花陽ちゃん。

当人は行く気満々らしい。

そんな状態の花陽ちゃんに、穂乃果ちゃんが質問する。

穂「つて、花陽ちゃん見に行くつもり?」

穂乃果ちゃんがそう言った瞬間、花陽ちゃんの目付きが変わり、椅子から勢い良く立ち上がる。

花「当たり前です!!これはアイドル史に残る一大イベントですよ!……見逃せません!!」

穂乃果ちゃんに顔を思いつきり近づけながら言う。

真「アイドルの事になると、キャラ変わるわよね……。」

飛「少し怖いぐらいにな。」

凜「凜はこっちのかよちゃんも好きだよ!」

飛彩君が言うように、恐怖を覚えるぐらいの変わりようだが、凜ちゃんの反応を見るにいつもの事なんだろう。

穂「なあんだ、私でつきり出場目指して頑張ろうって言うのかと思った。」

花「ええええええええええ!!?そ、そ、そ、そんな私達が出場だなんて、恐れ多いです
!!」

穂乃果ちゃんの言葉に、部屋の隅に瞬時に移動して慌てて否定する花陽ちゃん。

真「キャラ変わりすぎ……。」

凜「凜はこっちのかよちゃんも好きにや!!」

海「まるでゲームをしてる時の永夢みたいですね……。」

永「え?僕あんな感じなの?」

正直僕自身もあだとは思わなかった。

自分でも予想外だよ。

それにしても、いつからあんな状態になったんだっけ?

転生する前からだから、結構昔だと思うけど……。

こ「でも、スクールアイドルやってるんだし、目指してみるのもいいかも！」
ことりちゃん言葉にハツとして顔を上げる。

穂「つて言うか、目指さなきゃダメでしょ!!」

真「そうは言っても、現実には厳しいわよ。」

飛「真姫の言う通り、上位20組は、簡単に思えて簡単じゃない。」

海「ですね：、確か、先週見たときは、とてもそんな大会に出られる順位では：、海末ちゃんは言いながら、パソコンで順位を調べる。」

しかし、次の瞬間、海末ちゃんが穂乃果ちゃん達を呼ぶ。

海「あっ！穂乃果、ことり、永夢達も来てください！」

呼ばれてパソコンを見ると、

穂「あっ！凄い！」

こ「順位が上がってる！」

貴「マジかよ・・・」

順位が上がっていた。

飛彩君や真姫ちゃん達も驚いていた。

真「うそ!?!」

飛「まさかな・・・」

凜「どれどれ・・・?」

花陽ちゃんも後ろから覗き込む。

花「あっ!!」

こ「急上昇のピックアップスクールアイドルにも選ばれてるよ!」

穂「ホントだ!!ほらコメントも!『新しい曲格好良かったです。』『7人に増えたんで

すね。』『いつも一生懸命さが伝わってきて大好きです!!』」

穂乃果ちゃんがコメントを読み上げていく。

凜「うわあ、もしかして凜達人気者!?!」

飛「だな・・・」

真「そのせいね・・・」

凜「えっ?」

真「最近、飛彩と帰ると・・・」

そう言つて、真姫ちゃんは話し出した。

〈回想中〉

学校の帰り、真姫と飛彩の二人が帰っていると、

「あの!写真いいですか!?!」

真「えっ!?!」

そう、声をかけられた。

つまり、出待ちというやつだ。

声をかけられた真姫は言い淀む。

真「い……いや……」

おそらく、断られたと思っただろう。

声をかけて来た音ノ木坂中学の女の子は目に見えて落ち込む。

真「……あ……」

それを見て真姫も気まづくなる。

その様子を見ていた飛彩が、ため息をつきながら女の子に声をかける。

飛「はあく……、ほら携帯を貸せ。」

「えっ?」

飛「真姫、お前はそこに立て。」

真「ヴェエエエ!? な、なんでよ!」

飛「いいから、早くしろ。」

真姫は飛彩に言われて、仕方なく女の子の隣に立ち、飛彩が写真を撮った。

〈回想終了〉

こ「出待ち!」

穂「ウソ!？」

場所を移動して屋上。

真姫ちゃんの話聞いてことりちゃんも驚き、穂乃果はショックを受けていた。

穂「私、全然ない・・・」

花「そう言う事もあります!!アイドルというのは残酷は格差社会でもありますから

!」

凛「でも、写真を撮らしてくれるなんて、真姫ちゃんも変わったにや〜!」

真「わ、私は別に・・・!」

凛「あつ!赤くなってるにや!」

真「むう・・・」

からかわれた真姫ちゃんは無言で凛ちゃんにチョップをかます。

凛「にや!痛いにや〜・・・」

真「あんたが悪いのよ。」

その時、勢い良く扉が開き、にこさんが入ってくる。

に「みんな!聞きなさい!重大ニュースよ!」

穂「あつ、にこ先輩!」

に「ふつつつふ、聞いて驚くんじやないわよ。今年の夏、ついに開くことになったの

よ！スクールアイドルの祭典！」

こ「・・・ライブですか？」

に「あ、知ってるの・・・」

ことりちゃんに先に言われて、テンションが下がるにこさんだった。

・・・

場所を変えて、生徒会室前。

なぜここに来たのかというと、ライブにエントリーするには学校側の許可が必要だからだ。

・・・だけど、

穂「・・・」

真「どう考えても答えは目に見えてるわよ」

真姫ちゃんの言う通り、あの生徒会長の事だ。

絶対に首を縦に振る事はないだろう。

凜「学校の許可あ？認められないわあ」

貴「結構似てんなあ、そのモノマネ」

穂「だよね。・・・だけど、今度こそ生徒を集められると思うんだけど・・・」

すると、後ろの教室のドアが開き、にこさんが顔を出す。

に「そんなの、あの生徒会長には関係ないでしょ。私らの事、目の敵にしてるんだから。」

花「ど、どうして私達ばかり・・・」

に「それは・・・あつ!もしかして学校内の人気を私に取られるのが怖くて・・・!」

飛・真「それは無い(わ)」

に「ツツコミ早!」

に「皆さんに素早くツツコミを入れた真姫ちゃんは、二人を指差すに皆さんを無視して扉を閉める。」

真「もう許可なんて取らずに勝手にエントリーしてしまえばいいんじゃない?」

真姫ちゃんがそう提案してくる。

だけど・・・

花「ダメだよ!!エントリーの条件に、ちゃんと学校に許可を取る事って書いてあるもん!!」

花陽ちゃんが言ったように、エントリー条件に学校の許可を取る事ってしつかり書かれている。

だから、勝手にエントリーする事は出来ない。

永「やっぱり、腹をくくるしか無いよ。」

そう僕が口にした時、

大「なんだ？ どうした、お前ら？」

『!?!』

生徒会室のドアが開き、中から三年生に転入して来た大我さんがいた。

永「大我さん!?! どうしてここに!?!」

大「俺は一応生徒会に入っているからな。」

貴「そうだったのか。どうりで同時期に転入して来たわりに見かけないわけだ。」

貴利矢さんの言う通り、普段大我さんを見かける事が無い。

生徒会の仕事をしていたのか。

海「あの〜」

大「？」

海「あなたは・・・？」

そういうえば海未ちゃん達は大我さんに会うのは初めてだったね。

大「ああ、そういうえば初対面か。俺の名前は花家大我。三年生に試験生として転入して来た。これでも一応生徒会所属だ。よろしく頼む。」

海「は、はいっ！」

穂「よろしく願います！」

大「それで、お前達はどうしてここに？」

永「ああ、そうでした、実は……」

僕が事情を説明すると、大我さんは代案を出して来た。

大「だったら、直接理事長に許可をもらいに行けばいい。その行為自体は禁止されないからな。」

穂「えっ?! そんな事できるんですか!？」

海「確かに、部の要望は原則生徒会を通じて、と書いてありますが、直接理事長の所に行く事が禁止されている訳では……」

成る程……

永「でも、いいんですか? 生徒会がそんな事提案しても……」

大「大丈夫だ。問題は無い」

真「この方法ならなんとかなるかもね。なんたって、親族もいるわけだし♪」
真姫ちゃんがそう言うのと全員で一斉にことりちゃんを見る。

こ「ほえ?」

……

さらに場所を移動して理事長室前。

僕達はその前に立っていた。

穂「さらに入りにくい緊張感が……！」

貴「そんな事言つてたら、いつまでたつても進まないぜ」

貴利矢さんがそう言つた直後、理事長室の扉がいきなり開いた。

希「あれ？お揃いでそうしたん？」

中から副会長が顔を出し、その後ろから生徒会長も出て来た。

穂「うわ……生徒会長……」

に「タイミング悪！」

後ろにいるにこさんが呟く。

絵「何の用ですか？」

真「理事長に話があつて来ました」

生徒会長の言葉に、真姫ちゃんが強気な発言をする。

絵「各部の理事長の申請は、生徒会を通す決まりよ」

真「申請とは言つてないわ！ただ、話があるの！」

飛「真姫、相手は上級生だぞ」

真「うっ……」

真姫ちゃんがタメ口で言つたが、飛彩君が止める。

永「それに、生徒会の許可なら大我さんが出してくれました」

絵「なっ!?!」

永「生徒会を通してから来ましたし、特に問題は無いのでは?」

絵「……………」

僕が生徒会長に先ほどの事を言うと、生徒会長は何もいえなくなっただのか何も喋らなくなっただのか。

そこに、誰かがドアをノックする音が聞こえた。

「どうしたの?」

ドアの方を見ると、理事長が微笑みながらそこに立っていた。

こ「お母さん……………」

「話なら中で聞いわ」

……………

理事長室には、二年生組と三年生のにこさん。それと、なぜか生徒会長と副会長もいる。

残りの一年生組は外で待機している。

「へえ、ラブライブね」

理事長にはラブライブの動画を見てもらった。

海「はい。ネットで中継される事になっています」

こゝもし、出場できたならみんなに学校の名前を知ってもらえる事になるともうの!」
海未ちゃんのことりちゃんが発言する。

だけど、そこに・・・

絵「理事長、私は反対です」

予想通り、生徒会長が反対してくる。

絵「理事長は学校のために、学校生活を犠牲にする事はすべきでは無いとおっしゃいました。であれば・・・」

生徒会長は自分の意見を言ってくるが、理事長はそれを遮るように

「そうねえ、でもいいんじゃないかしら? エントリーするくらいなら」

穂「本当ですか!?!」

「ええ」

理事長の発言に穂乃果ちゃん達は喜び、僕と貴利矢さんは驚きを隠せなかった。思ったよりもすんなり許可をもらえたからだ。

絵「ちよつと待ってください! どうして彼女達の肩を持つんです!?!」

「別にそんなつもりは無いけど?」

絵「なら、生徒会も学校存続のために活動させてください!」

「んっ・・・それはダメ」

絵「意味がわかりません!」

「そう?簡単な事よ?」

絵「.....」

生徒会長はしばらく理事長を見るが、やがて部屋を出て行った。

希「エリチ.....」

に「ふん!ザマア見ろつての!」

に「こさんが生徒会長をバカにし、穂乃果ちゃん達は未だに喜びに溢れていた。

が、そんなムードも理事長の発言で崩れ去った。

「ただし、条件があります」

永「条件.....ですか?」

「勉強が疎かになつてはいけません。今度の期末試験で1人でも赤点を取るような事があれば、ラブライブへのエントリーは認めませんよ?いいですね?」

貴「ああ、成る程」

こ「ま、まあ!流石に赤点は無いから大丈夫かとおく.....あれえ?」

後ろを向くと、穂乃果ちゃん、凜ちゃん、にこさんの3人が床に突っ伏していた。

永「ええく.....」

.....

穂「申し訳有りません！」

凜「ません！」

今現在、部室の机に三本指をつけて、謝る穂乃果ちゃんと凜ちゃんの二人。

海「小学生の頃から知ってはいましたが・・・穂乃果・・・」

穂「数学だけだよ！ほら、小学校の頃、算数苦手だったでしょ？」

貴「自慢気に言われてもなあ・・・」

花「 4×7 ？」

穂「・・・ 26 ？」

『・・・・・・・・・・』

貴「まさか数学じゃなくて、算数ができないとはな・・・」

貴利矢さんの言う通り、まさかここまでだとは思わなかった・・・

花「凜ちゃんは？」

凜「英語！凜はどうしても英語だけは肌に合わなくて・・・」

飛「勉強は化粧品じゃないんだがな・・・」

花「た、確かに難しいよね」

凜ちゃんは英語か・・・

確かに英語は難しいね。

僕も昔は苦手だったし。

凜「そうだよ! だいたい凜達は日本人なのにどうして外国語を勉強しなくちゃいけないの!？」

真「屁理屈はいいの!」

凜「にやゝ・・・真姫ちゃん怖いにやゝ・・・」

飛「落ち着け、真姫」

真「せっかく生徒会長を突破したつてのに、テストの点数が悪くてエントリー出来なかつたら、恥ずかしすぎるわよ!」

貴「それは俺もやだな」

凜「そうだよねえ・・・」

凜ちゃんもそこは理解してるんだな。

に「ま、全くその通りよ」

に「皆さんの声が聞こえ、そっちの方向を見るが、見た瞬間に全員ジト目になった。なにせ持っている教科書が上下逆さまだったからだ。

に「あ、赤点なんて絶対に取っちゃダメよ!」

永「にこさん・・・教科書逆さます・・・」

海「動揺しすぎです・・・」

まさか、1年、2年、3年からそれぞれバカな人が選出されるとは……。

海「とにかく、試験まで穂乃果には私とことり、永夢と貴利矢が、凜には花陽と真姫、飛彩がついて、弱点教科をなんとか底上げしていく事にします。」

真「まー……それはそうだけど、にこ先輩は？」

希「それは、ウチが担当するよ。」

大「それと俺もな」

永「副会長。それに大我さんも」

に「皆さんには誰がつくか考えていると、副会長と大我さんが入ってきた。

穂「いいんですか？」

に「い、言ってるでしょ！にこは赤点の心配なんて……」

すると、副会長がいきなり両手は上に上げ、にこさんの胸を掴んだ。

に「ひっ！」

希「嘘つくと、ワシワシするよ〜？」

に「わ、わかりました……。お、教えてください……」

希「はい、よろしい♪」

軽く脅迫だね……。

永「すいません。大我さんにまで手伝ってもらっちゃって……」

大「心配すんな。生徒会の方も問題はねえ。俺はお前達の事をなるべく支えていきたいからな」

永「そうですか、ありがとうございます。」

こうして、期末試験までの地獄（バカ3人のみ）の勉強会がスタートした。

第19話 エリーチカ

永夢 side

さて、勉強会が始まったわけなのだが・・・

凜「ううう・・・これが毎日続くのかにやう・・・」

真「当たり前でしょ！」

まだそんなに時間が経ってないにも関わらず、すでに根を上げている凜ちゃん。すると、いきなり窓の方を指差し、

凜「あゝ！白いご飯にやう！」

花「ええ！どこ、どこ!?!」

飛「おい、小泉・・・」

凜ちゃんの馬鹿らしい行動にまんまと引つかかる花陽ちゃん。

真「私がそんな手に引つかかると思う？」

まあ、真姫ちゃんに効かないから、全く意味は無いけどね。

ただ、花陽ちゃんは未だに探してるけど・・・

一方穂乃果ちゃんと言うと、数学の教科書とにらみ合っていた。

穂「ことりちゃん……貴利矢君……」

こ「なあに？後、一問よ。頑張って！」

貴「どうした？穂乃果。」

穂「おやすみく……」

こ「あつ！穂乃果ちゃん！穂乃果ちゃん！」

貴「……俺も寝させてもらうわ。じゃ、あとよろしく……」

こ「あつ！貴利矢君まで！！」

穂乃果ちゃんは寝たふりをし、それと同時に貴利矢さんも寝始めた。（おそらく本気で）

海「はあ……全く。ことり。永夢。私は弓道部の方に行かなくてはいけないので、後はお願います。」

こ「うん！分かった！穂乃果ちゃん起きてく」

永「ほら、貴利矢さんも起きてください！再開しますよ！」

貴「はあく……仕方ねえくなく……」

僕が貴利矢さんを起こしてから、にこさんの方を見る。

希「じゃあ、この問題は？」

に「えつとく……に、につこにつこにく？」

大「はあ・・・東條、やれ」

希「OK！覚悟！」

に「や、やめて希！それはダメ〜！」

永「はあ・・・」

この状況に、僕はため息をつくしかなかった。

・・・・・・

あれから時間が少し経ち、僕は一足先に帰る事にした。

校門に向かうと、そこには海未ちゃんが立っていた。

おそらく部活が終了したのだろうけど、どうしたのだろうか？

永「海未ちゃん？どうしたの？」

海「あつ、永夢」

僕が声をかけると、海未ちゃんも一回僕の方を見て、再び先ほど見ていた方向に顔を向けた。

永「？」

気になった僕も同じ所を見ると、そこには金髪の中学生在が門に寄りかかって音楽プレイヤーを手にして口ずさんでいた。

しかもその曲はμ'sのファーストライブの曲、『START：DASH』だった。

少女が持っている音楽プレイヤーの画面には動画が写っていたのだが、その動画にはネットにアップされて無い所が写っていた。

海「サイトに上がって無い所まで……」

海未ちゃんも気づいたのか、プレイヤーを覗き込んでいる。

それにより少女の方も気づいたのか、一瞬「うわあ!」と驚いたが、すぐに

「あ! 貴方達はμ'sの園田海未さんと、マネージャーの宝生永夢さんですよね!」

そう聞いてきた。

海未ちゃんはいきなりで驚いたのか、

海「え!? い、いえ、人違いです!」

そう言ってしまった。

少女の方は見るからに悲しそうに落ち込んだ。

永「海未ちゃん、いくら驚いたからって、嘘をついちやダメだよ。」

海「は、はい……すいません。私が園田海未です……。」

「ですよね!」

海未ちゃんの訂正の言葉を聞いた瞬間、一気に元気になる少女。

海「い、いえ……それよりも、その映像……」

「はい! ライブの映像です! 亜里沙は行けなかつたんですけど、お姉ちゃんが撮影して

きてくれて！」

永「お姉ちゃん？」

「はい！」

少女、亜里沙ちゃんは元気に答える。

ちようどその時、亜里沙ちゃんを呼ぶ声がした。

「亜里沙〜！」

「あ！お姉ちゃん！」

亜里沙ちゃんもその声に反応し、手を振った。

絵「貴方達……」

海「生徒会長……」

そこには生徒会長がいた。

永夢 side out

.....

◎ side

永夢達は場所を移動して公園に来ていた。

絵里は妹の亜里沙にお金を渡し、飲み物を買に行かせた。

亜「お待たせしました！」

しばらくして亜里沙が缶を手に戻って来て、一人一人に渡していく。

永「ありがとうございます」

海「ありがとうございます」

缶を受け取った永夢と海未はその缶を見て驚愕する。

永「・・・おでん？」

亜里沙が持つて来た缶には『おでん』と書かれていた。

絵「ごめんなさい。向こうの暮らしが長かったから、まだ日本に慣れてない部分があつて」

海「向こう？」

絵「ええ、祖母がロシア人なの。亜里沙、これは飲み物じゃないの」

亜「えっ?・・・ハラシヨ」

そこにいたのは普段の厳しい生徒会長としてではなく、一人の姉としての絵里がいた。

再び亜里沙に飲み物を買に行かせてから、絵里が口を開く。

絵「それにしても、貴方達に見つかってしまふなんてね」

海「前から穂乃果達と話してたんです。誰が撮影して、ネットにアップしてくれたんだらうって。でも、生徒会長だったなんて・・・あれがなければ、私達は今こうしてな

かったと思います。あの動画があったから、見てくれた人も増えだし、だから……」

絵「やめて」
海「えっ？」

絵「別に貴方達の為にやった訳じゃないから。むしろ逆。貴方達のダンスや歌が、いかに人を惹きつけられないか、活動を続けても意味が無いか、知ってもらおうと思って。だから、今のこの状況は想定外。なくなるどころか、人数が増えるなんて」

絵里は海未達に厳しい話をする。

絵「とても人に見せられるようなものになつているとは思えない。そんな状態で学校の名前を背負つて欲しく無いの。だからこれ以上邪魔はしないで。話はそれだけ」

絵里はベンチを立ち、その場から離れようとする。

海未が何かを言おうとベンチから立ち上がったその時、

「キヤアアアアアア!!」

「!?!」

公園内から叫び声が聞こえた。

それと同時に、永夢のカバンの中にあるゲームスコープが鳴り始める。

永「まさか、バグスター!？」

永夢は急いで声が出た方に走り出す。

海「あつ、え、永夢！」

絵「ちよつと、貴方達！」

海未が永夢を追いかけ、絵里も一緒に追いかける。

永夢達が走った先にはすでに発症していて銃のような形をしたバグスターユニオンと、腰が抜けて動けないのか、座り込んでいる亜里沙がいた。

絵「亜里沙!!」

永「危ない！」

バグスターユニオンは動けないでいる亜里沙を見つけると、そのまま攻撃しようとする。

永夢がゲームマドライバーを取り出すが、到底間に合いそうに無い。

バグスターユニオンの攻撃はそのまま無慈悲に放たれ……。亜里沙に直撃する前に飛んできた何かとぶつかった。

永夢はその間に亜里沙を救出する。

海「い、一体何が……」

亜里沙を救出した後、永夢はバグスターユニオンと衝突したものが飛んで来た方向を見た。

そこには、エグゼイド達のレベルと同じボディ、右目は隠され、頭には『STG』の文字が書かれている紺色の仮面ライダーがいた。

永「新しい、仮面ライダー？」

その仮面ライダーはゲーマードライバーに挿入しているガシヤットを抜き、変身を解除する。

永「!!大我さん!？」

海「彼が・・・仮面ライダー・・・？」

変身を解除したことにより変身者の素顔が見えた。

そこにいたのは、永夢達の先輩でもある花家大我だった。

永「た、大我さんが仮面ライダー!？」

絵「大我!!」

大「よっ、大丈夫か？お前ら」

永「大我さん、仮面ライダーだったんですか!？初めて知ったんですけど!？」

大「そりゃ、言っていないからな」

永夢の驚愕の声に大我は当たりまえに事を返す。

大「とにかく、今は話してる暇はない。さっさと終わらせるぞ」

そう言うのと、大我は持っているガシヤットを銃を構えるように持ち、前に向ける。

そして、引き金を引くようにガシヤットのスイッチを押す。

『BANG BANG SHOOTING』

持ち手部分を指に引つ掛け、ガシヤットを回転させながら手前側に持ってくる。

大「変身！」

そのまま回転させながらガシヤットを腰に装着しているゲームドライバーに挿入する。

『ガシヤット！』

『レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャゲーム！I, m a 仮面ライダー！』

出てきたパネルに内、前に出てきたパネルを手を銃の形にして押す。

そこにいたのは、先ほどバグスターユニオンを攻撃したライダーがいた。

仮面ライダー スナイプ・レベル1

ス「ミッション開始！」

『ガシヤコンマグナム!』

スナイプは銃に形をした武器、ガシヤコンマグナム・ハンドガンモードを装備してバグスターユニオンに攻撃を開始した。

永「あつ、ぼ、僕も!」

『MICHTY ACTION X』

永「変身!」

『I, m a 仮面ライダー!』

『ガシヤコンブレイカー!』

永夢もエグゼイドに変身してガシヤコンブレイカー・ハンマーモードを装備して攻撃に参加する。

エ「おりや!」

ス「ふっ、はっ!」

エグゼイドはハンマーで叩き、スナイプはハンドガンで銃撃していく。だが、バグスターユニオンもただ攻撃されるだけではなく暴れまくる。

エ「うお!」

上にいたエグゼイドはバグスターユニオンが暴れまわった事により振り落とされる。地上にいたスナイプはその場から少し離れ、ジャンプする。

すると、スナイプ自身が巨大な銃弾になり、バグスターユニオンに直撃して貫通する。その瞬間、バグスターユニオンは爆発する。

エ「おいおい、今の攻撃ありかよ……」

ス「ちゃんとした攻撃なんだ、ありだろ。それよりも……」

スナイプが見る方向には、爆発したバグスターウィルスが形を作り始めていた。

「ふっふっふっふ……我が名はリボル！ 貴様らライダーを倒し、自分は完全な存在になる！」

そこには、全身が手榴弾などの重火器で構成されたような姿をしているバグスター、リボルバグスターがいた。

「さあ行け！ 我が部下達よ！」

リボルがそう言うのと、周りに戦闘服を着てライフルなどの重火器を持ったバグスターウィルスが出現した。

エ「そう簡単に負けてたまるか！ 大変身！」

『ガツチャーン』

『レベルアップ！』

『マイティアアクションX！』

エ「ノーコンティニューで、クリアしてやるぜ！」

ス「ふつ、第貳戦術」

『ガツチャッン』

『レベルアップ!』

『ババンバン!バンバンバン!バンバンシューティング!』

エグゼイドと同じように、スナイプもレベルアップする。

レベル1とは違い、エグゼイドやブレイブと同じような等身大の姿で、蛍光イエローのローブを装備している。

仮面ライダースナイプ・レベル2

ス「ミツシヨン、再開!」

エグゼイド、スナイプはそれぞれの武器のAボタンを押して、変形させる。

『ジャツキッン!』

『ズツキュッン!』

ガシャコンブレイカーはブレードモードに、ガシャコンマグナムはライフルモードに変わる。

ス「ふっ！」

スナイプは敵が密集している場所をよく狙い、そこ目掛けて狙撃する。

銃弾は敵一体に当たるが、その着弾時に強烈な爆風が発生し、その周辺にいた敵も吹き飛ばした。

エ「ふっ、はっ、おりゃ！」

エグゼイドの方は敵に近づいていき、ブレードで切り裂いていく。

「まずはエグゼイドを狙え！狙撃！」

リボルの命令でバグスターウィルス達は一齐にエグゼイドに向かって狙撃するが、エグゼイドはすぐに近くにあったブロックを壊し、出てきたエナジーアイテムを使用する。

『鋼鉄化！』

鋼鉄化の能力により、エグゼイドの体は鋼鉄のように硬くなり、全くダメージが通らなくなる。

ス「油断大敵だな」

エグゼイドに気を取られていたりボル達バグスターはスナイプが狙っている事に気づかず、Bボタンを押されたフルチャージショットが直撃する。

「ぐわあああ!!」

その攻撃により、リボル以外のバグスターウイルスは爆発し、残ったのはリボルのみとなった。

エ「へへっ、そろそろFinishと行こうか！」

『ガツシュ〜ン』

『ガツシャット！』

『キメワザ！』

エ「はあああ・・・はっ！」

エグゼイドは高く飛び上がり、リボル目掛けてブレードを振り落とす。

『M I C H T Y ! C R I T I C A L S T R I K E !』

エ「おりゃー！！」

「がああああー！」

エグゼイドの攻撃を受け後方に大きく吹き飛ばりリボル。

そして、そのリボルを狙う人物がもう一人・・・。

『ガツシャット！』

『キメワザ！』

だんだんとエネルギーが充填されていく。

リボルは自身の能力、ステルス能力でその場から立ち去ろうとする。

が、スナイプの目は誤魔化せない。

『BANGBANG! CRITICAL FINISH!』

ス「ハッ!」

スナイプは必殺技は放つ。

それは、見事に透明になっていたりリボルに直撃する。

「そ、そんな・・・バカなーーーーー!!」

リボルは断末魔を上げ、爆発した。

『Game Clear!』

◎side out

.....

永夢side

リボルを無事に倒した後、大我さんは生徒会長達と一緒に帰っていった。

見た感じ生徒会長は事情を知っているみたいだったし、多分大我さんが話したんだら

う。

帰り際、亜里沙ちゃんは僕達に近づき、こう言って行った。

亜「あの、亜里沙、μ's、海未さん達のこと、応援してます!」

持っていたおしるこを渡してから、生徒会長達の後に着いて行った。

・・・おしるこ？

永夢 side out

・・・

大我 side

リボルを撃破した後、俺は公園を後にした。

大「なんでお前もついてきてるんだよ」

俺の隣には絵里が歩いていった。

絵「別にいいじゃない。どうせマンションは同じなんだし」

確かに俺の家は絵里と同じマンションにある。

絵「それに・・・」

大「？」

絵里が言葉を濁す。

それに気になって、俺は絵里の方を見る。

絵「色々心配なのよ、大我が。この間のように、一人で無茶しそうで・・・」

大「・・・」

絵里の言葉に、俺は何も言えなかった。

俺はこの間、一人であるバグスター、グラフィイトと戦った。

だが、結果は惨敗。

俺は戦いに負け、気絶してしまった。

次に俺が目覚めた時には、見知らぬ家にいた。

周りを見渡すと、絵里の姿が確認できた。

そこで絵里の話聞き、俺は初めてあの戦いを絵里が見ていた事を知った。

当然絵里は俺に質問をした。かなりの量のな。

だから、仕方がなく俺は事情を説明した。

絵里が言ってるのは、俺がまたグラフィイトと戦った時のように無茶をすと思うて
いるのだろう。

大「ふっ・・・安心しろ、できる限りは無茶しねえからな」

絵「できる限りじゃなくて、やめなさい」

大「そいつはなんとも言えねえな」

俺が苦笑しながら返事すると、後ろから亜里沙が来た。

亜「言っちゃった・・・」

絵「えっ？」

亜「亜里沙ね、来年音ノ木坂入学したら・・・」

絵「うん？」

亜「ううん、なんでもない」

亜里沙は何かを言いかけていたが、すぐに話すのやめ、持っていたおでん缶を開けた。

亜「ハラシヨー・・・」

中を覗き込んで驚いたのか、最近よく耳にするようになったロシア語を言った。

絵「何？」

亜「おでんは飲み物じゃないの？」

絵「そうね、食べ物よ」

亜「カレーは飲み物なの？」

ちよつと待て。

一体誰だ変な知識入れたのは。

大「カレーも飲み物じゃなくて、れっきとした食べ物だよ」

亜「でも、言ってたよ。テレビで」

絵「ほんと？」

大「カレーを飲み物だと言うのはごく一部の人のみだよ」

俺達は他愛もない話をしながら、帰路についた。

大我 side out

.....

永夢 side

生徒会長がどうしてあそこまで言えるのか。

僕達は気になり、一番生徒会長の事の知っている可能性のある人物、副会長に話を聞きに行くことにした。

着いたのはとあるハンバーガー店。

貴利矢さんに電話したら、場所を移動して勉強しているらしい。

それがこのハンバーガー店だと。

中は広く、探すが大変だと思ったが、意外に近くに見つかった。

に「にっこにっこにー♪」

希「次ふざけたら、ワシワシMAXやって言っただはずやん！」

に「待って！違う！ふざけてるんじゃないやなくて、こうすると答えが思いつくの！」

希「本当に？」

に「そ、そうなの！キャラチェンジすると脳が活性化すると言うか……にここです♪よくし、今日はこの問題を解いちゃおうかな♪えーと、これにこれを代入してく……」

そこで、机に突っ伏すにこさん。

希「……して？」

に「えーと、えーと……にこ、分かんないよ〜!」

次の瞬間……

に「ひっ!」

副会長が胸をワシワシし始めた。

希「お仕置きやね♪」

に「ひっ!や、やああああ!!」

……何してるんだ?この人達は。

そこで、こっちの存在に気づいたのか、顔を上げる二人。

海「聞きたい事があります」

海未ちゃんの雰囲気から何かを読み取ったのか、副会長はすぐに席を立ち上がる。

希「それじゃあ、今日はこれくらいにしよっか」

にこさんに声をかけてから、僕達の方に来る。

希「場所、変えようか」

そう言つて歩き出す副会長。

僕達も黙つて着いて行く事にした。

……

希「そんな事があつたんやね」

神田明神に場所を移して、公園内の出来事を話した。

当然、バグスターの事は伏せてだが。

永「ごめんなさい。急で・・・」

希「ええんよ、別に。それよりもエリチの事なったね」

海「はい・・・」

希「口で説明するより、これを見てもらった方が早いかな？」

副会長はそう言つて、巫女服の袖口からミュージックプレーヤーを取り出す。

その中の動画ファイルの一つを選んで、僕達に見せてくる。

そこには、一人の小柄な金髪の少女がバレエの衣装を着て、縦横無尽に踊っていた。

彼女が生徒会長だと理解するのに、そこまで時間はかからなかった。

希「・・・これで分かったやろ？」

海「はい・・・」

海未ちゃんは相当ショックを受けたみたいだ。

永「副会長、今日はありがとうございました。海未ちゃん、帰ろう」

海「はい・・・」

やつぱり、相当堪えてるな・・・。

今まで基本一人でダンスを考えていた海未ちゃんにはキツイか・・・。

永「それじゃあ、今日はこれで・・・」

希「うん、また明日ね」

そして、僕らはそれぞれ帰路についた。

・・・・・・

永「ねえ、ことりちゃん・・・」

こ「なあに？永夢君」

永「あの3人はどこ行つたの？」

翌日の部室にて。

今日も続けて勉強会なのだが、いつまでたつても穂乃果ちゃん、凜ちゃん、にこさんの3人が来ない。

貴「逃げたな、こりゃ」

飛「はあ・・・」

その時、部室のドアが開き、穂乃果ちゃんと凜ちゃん、にこさん、副会長と海未ちゃんが入って来た。

先に入ってきた3人は何やら疲れ切った顔をしていた。

副会長の肌はなんかツヤツヤしてるし・・・。

これは何があつたか聞かないでおこう・・・。

そう言つて部室を出て行く。

やけに思い詰めた顔をしてたけど、おそろく昨日の事だろう。

貴「永夢、海未のやつ、どうかしたのか？」

貴利矢さんが僕に聞いてくる。

永「……さあ？とりあえず、僕達はやるべき事をやろう」

だいたいの予想はつくが、ここで話たらいつまでたつても勉強が進まなそうだから、一旦ごまかす事にした。

僕の言葉で、それぞれが勉強に取り掛かる。

周りを見ると、副会長もいなくなつていた。

おそろく、海未ちゃんを追つて行つたのだろう。

だったら、海未ちゃんは副会長に任せよう。

僕はそう考え、勉強に取り掛かった。

.....

しばらくすると、部室のドアが勢いよく開き、海未ちゃんが入ってくる。

その顔は、どこか吹っ切れたような顔だった。

海「穂乃果!!」

穂「……海未ちゃん？」

先ほどよりも、疲れ切った顔をした穂乃果ちゃんが弱々しく答える。

そんな穂乃果ちゃんに構わず、指を差し、

海「今日から、穂乃果の家に泊まり込みます!!」

そう宣言した。

穂乃果ちゃんは当然驚く。

穂「えっ!?!」

海「勉強です!!」

穂「鬼いゝ・・・」

穂乃果は涙目になっているが、それに構っている暇はない。

永「頑張つて、穂乃果ちゃん!」

とりあえず応援だけでもしとこう。

・・・

それから数日。

今日は全ての試験結果が返ってくる日。

今の所、全員セーフ。

後は、穂乃果ちゃんの結果だけとなった。

そう思っていると、穂乃果ちゃんが入ってくる。

真「どうだった？」

海「今日で、全教科が帰ってきましたよね？」

花「・・・！」

こ「穂乃果ちゃん！」

それぞれが穂乃果ちゃんに声をかける。

凜「凜はセーフだったよ！」

に「あなた！ 私達の努力を水の泡にするんじゃないでしょうね!？」

最後にみんな

『どうなの!?!』

と声を合わせて聞く。

穂乃果ちゃんは鞆から試験用紙を出しながら言う。

穂「う・・・うん・・・。もうちよつと良い点だと良かったんだけど・・・、じゃーん!!」

試験用紙を見せながら、笑う。

書かれていた点数は53点。

つまり、赤点ギリギリセーフだった。

それを見た全員が喜ぶ。

永「これで、無事にライブライブにエントリーができますね」

貴「いやー、ここまで長かったな」

飛「それはともかく、早く出ますよ」

貴「おっと、そうだった」

僕らマネージャー組は急いで部室から出る。

なぜかって？

みんなが着替えるからだよ。

すると、思ったよりも早く出てきた。

穂「よろし、今日から練習だー!!」

花「ラ・・・ライブ!!」

真「まだ早いわよ。目指せると決まっただけよ」

そう言いながら、理事長室まで走って行く。

赤点回避の報告のためだ。

しかし、着いた瞬間、

絵「そんな！説明してください！」

そんな慌ててる生徒会長の声が聞こえてきた。

気になって中を覗くと、

「ごめんなさい、でもこれは決定事項なの。音ノ木坂学院は、来年度より生徒募集をやめ、廃校とします」

理事長が廃校宣言をしていた。

第20話 やりたいことは

永夢 side

「音ノ木坂学院は、来年度より生徒募集をやめ、廃校とします」

試験結果を伝えるために理事長室に来た僕達を待ち受けていたのは、理事長による廃校宣言だった。

穂「そんな……。今の話、本当ですか!？」

廃校の言葉を聞いて居ても立っても居られなくなったのか、理事長室の中に飛び込んで行く穂乃果ちゃん。

絵「あなた達……」

生徒会長は僕達の入室に驚いていた。

外から見た時は気づかなかつたが、中には大我さんもいた。

穂乃果ちゃんは理事長の前に立つ。

「……本当よ」

こ「お母さん! そんな話、聞いてないよ!」

ことりちゃんも理事長に詰め寄る。

穂「お願いします！後、もうちょつとだけ待って下さい！後一週間・・・いえ！後二日でなんとかしてみせますから！」

穂乃果ちゃんの発言に理事長は目をパチクリさせている。

そんな中、大我さんが教えてくれる。

大「落ち着け。別に今すぐってわけじゃない」

「そうよ、高坂さん？廃校にするというのは、オープンキャンパスの結果が悪かったらの話よ？」

穂「オープン・・・キャンパス？」

理事長の言葉がイマイチよくわからなかったのか、首を傾げる穂乃果ちゃん。

大「要するに、見学に来てもらった近隣の中学生にアンケートを取ってもらって結果が芳しくなかったら廃校、ってことだ」

「その通りよ」

大我さんの説明に理事長が肯定の意を示す。

穂「なあんだ、よかつたあゝ・・・」

絵「安心している場合じゃないわよ？オープンキャンパスは二週間後の日曜日。そこで結果が悪ければ本決まりなのよ？」

成る程・・・オープンキャンパスで結果をを残せなかつたら、本当の意味で終わり・・・。

穂乃果ちゃんも急に慌て出す。

穂「どど、どうしよう貴利矢君！」

貴「落ち着け、今慌ててもどうしようもない」

貴利矢さんが慌てる穂乃果ちゃんを落ち着かせる。

絵「理事長、オープンキャンパスのイベントの内容は、生徒会で決めさせてもらいます。」

「……止めても聞きそうにないわね」

理事長の方が折れ、生徒会長に許可を出す。

絵「ありがとうございます」

そう言つて生徒会長は理事長室を出て行つて、副会長と大我さんも追いかけるように出て行つた。

永夢 side out

.....

◎ side

穂「なんとかしなくちゃ！」

そう意気込む穂乃果。

だが、実際に穂乃果達にできる事はオープンキャンパスに向けて練習する事ぐらい

だ。

穂乃果達は一年生組に説明する。

花「そんな・・・」

凜「じゃあ、凜達は下級生がいない高校生活!？」

に「そうなるわね・・・」

真「まっ、私はそっちの方が気楽でいいけど」

花陽と凜の問いに答えるにこと、髪をくるくるしながら言う真姫。

穂「とにかく、オーブンキャンパスでライブをやろう!それで、入学希望者を少しでも増やすしかないよ!」

貴「つつても穂乃果。オーブンキャンパスでライブできるのか?内容は生徒会が決めるんだろ?」

永「とにかく、今はできると考えて行動しましょう」

こうして、穂乃果達スクールアイドルは練習をすることにした。

.....

一方その頃、生徒会室では。

絵「これより、生徒会は独自に動きまわります。なんとかして、廃校を食い止めましょう」

絵里がそういうが、何か言いたそうな生徒会のメンバー達。

希「ん？」

絵「何か？」

「あつ……いえ……」

希「言いたい事があるなら、言った方がええよ」

希が言うように促す。

その言葉で、徐々に言い始めるメンバー達。

「はい……」

「あの、これって、この学校の入学希望者を増やすために何をするかの話し合いですよね？」

絵「ええ」

「だったら！楽しい事を一杯紹介しません？学校の歴史や先生がいつて言うのも大事だと思うんですけど、ちょっと今までの生徒会は少し堅苦しい気がして……」

大「まつ、そうだな」

そう呟いて絵里の方を見る大我。

「例えば、ここの制服って、可愛いって言ってくれる人、多いんですよ！」

「それいいね！そういうのアピールしていきましょよ！」

「スクールアイドルも人気あるよね！」

「いいね！うちの学校にもいるし！」

「μ'sだっけ？その子達に頼んで」

「ライブしてもらおうよ！」

「「いいね!!」」

色々と言つて盛り上がる生徒会の後輩メンバー。

絵「他には!？」

だが、絵里の一言により、一気に黙り込み、

「・・・他には?」

と声を揃える。

・・・

そして生徒会メンバーが来たのはアルパカ小屋。

それを見た絵里は、

絵「・・・これですか？」

あまり芳しくない反応。

大「アルパカ飼つてる学校つて、普通ないよな」

大我の反応は至つて当たり前の反応である。

「はい！他校の生徒にも意外と人気があるんですよ！」

絵「これでは……」

絵里はアルパカを見続けるが、却下的な言葉に、茶色の方のアルパカが唸り、絵里に唾を吐く。

「あわあわあわあわ……」

後輩メンバーはハンカチで急いで絵里を拭く。

そこに、アルパカの餌を持った花陽と凜が来る。

花「生徒会長さん……?」

大「よお……」

その二人に気づく大我。

絵「あなた達……」

「ああ!!スクールアイドルの!!」

花「は……はい……」

他のメンバーも徐々に気づき、声をかけていく。

「今度オーブンキャンパスがあるんだけど、よかつたら……」

絵「待ちなさい!」

生徒会の一人がライブをしてもらおうと頼もうとしたが、その前に絵里に止められる。

絵「まだ何も決まってるじゃないでしょ!？」

「……………はい……………」

大「おい、絵里……………」

大我が絵里に声をかけるが、その前にこの場を去っていく。

そんな絵里の後を追って、生徒会メンバーもこの場を去って行った。

……………

放課後、穂乃果達は屋上でライブに向けて練習をしていた。

海未がリズムを取り、穂乃果が声を出して練習をしている。

穂「1、2、3、4、5、6、7、8……………よし!」

ラストの決めポーズが決まり、ガッツポーズをする穂乃果。

穂「おー!完璧!!」

こ「よかった!これならオープンキャンパスに間に合いそうだね♪」

真「……………でも、さっき貴利矢先輩も言ってたけど、本当にライブなんてできるの?」

真姫が汗を拭いながら聞いてくる。

真「生徒会長に止められるんじゃない?」

こ「それは大丈夫。部活紹介の時間は必ずあるはずだから」

真姫の心配に、ことりが答える。

こ「そこで、歌を披露すれば・・・」

海「まだです・・・」

こ「とりが話そうとするが、途中で海未が言葉を遮る。

海「まだ、タイミングがずれています・・・」

穂「海未ちゃん・・・分かった！もう一回やろう！」

穂乃果ちゃんの言葉にそれぞれが準備に入る中、永夢だけが海未の事を見ていた。

永「・・・」

穂「完璧!!」

真「そうね！」

こ「やつとにこのレベルに追いついたわね！」

穂乃果の言葉に真姫は頷き、にこははしやぐが、海未の反応は変わらなかった。

海「・・・ダメです、これじゃあ・・・」

「「「「「え!」」」」」

凛「うう・・・もうこれ以上上手くやれる気がしないにや・・・」

普段はあまり弱音を吐かない凛だが、珍しく弱音を吐く。

海「ダメです・・・これでは全然・・・」

そればかり言ってる海未に、真姫が詰め寄る。

真「何が気にいらなの!?!はつきり言いなさいよ!!」

飛「落ち着け、真姫」

そんな真姫を落ち着かせる飛彩。

そこで、さつきまで黙っていた永夢が口を開く。

永「海未ちゃん・・・話そうよ、あの事・・・」

穂「？」

永夢の発言に首を傾げる穂乃果。

永「このまま同じ練習を続けていたって、何も変わらないよ。あの人のレベルに追いつくことなんて、なおさらね」

貴「どういう事だ?永夢」

永夢が誰の事を言っているのか、検討もつかなかったのか直接聞く貴利矢。

永「・・・今日はもう遅いので、また後で話します。ただ、一つだけいうとしたら・・・」
永夢の言葉を聞き逃すまいと、みんな耳をすませる。

永「感動できないんです。今の状態じゃ・・・」

この日は、そのまま解散となった。

.....

その夜、永夢達はラインの通話機能を使って、話していた。

海未と永夢は生徒会長が昔バレエをしていた事を語った。

そして、そのダンスがいかにすごかったのか。

それを聞いて穂乃果はある意見を出す。

「「ええ！生徒会長に!?!」」

その意見に一年生組が驚く。

穂「うん。生徒会長にダンスを教わろうと思うの！海未ちゃんも同じ意見なんでしょ

？」

海「は、はい」

に「話があるって、そんな事？」

花「でも、生徒会長・・・私達の事・・・」

凛「嫌ってるよね、絶対!」

に「っていうか、嫉妬してるのよ、嫉妬!」

一年生組とにこはそれぞれの考えを口にする。

が、

永「ですが、生徒会長のダンスは今ままで一番凄いものでした。少なくとも、僕が今ま

で見てきたダンスと比べて・・・」

花「そんなに凄かったんだ・・・」

真「私は反対！潰されかねないわ！」

真姫がはつきりと反対意見を出す。

に「そうね。三年生ならここで間に合ってるわ」

花「生徒会長……ちよつと怖い……」

凜「凜も楽しい方がいいなあ……」

海「そうですね……」

口々に反対していくメンバー。

そんな中、穂乃果だけは

穂「私はいいと思うけどなあ……」

「「ええ!」」

に「何言ってるのよ!」

穂乃果の発言に再び驚く一年生とにこ。

穂乃果は至って普通に言い放った。

穂「だって、ダンスが上手い人が近くにいて、もつと上手くなりたいから教わりたいたって話でしょ?」

貴「まあ、そうだな……」

穂乃果の確認の質問をして、貴利矢が肯定する。

穂「だったら、私は賛成！」

こ「穂乃果ちゃん・・・」

穂「頼むだけ、頼んでみようよ！」

穂乃果が海未の提案に賛成する。

に「ちよっ！待ちなさいよっ!!」

こ「でも、絵里先輩のダンス、ちよっと見てみたいかも！」

花「あつ、それは私も!!」

にこが異を唱えようとするが、それよりも早くことりと花陽が意見に賛同する。

貴「しゃくない、ノセられてやるか」

永「僕は当然、賛成です」

二人を筆頭に、次々と賛同していく。

に「どうなっても知らないわよ・・・」

◎side out

・・・・・・

大我side

俺は今、絵里の家の来ている。

なんでも、今度のオープンキャンパスの時に音ノ木坂の説明を絵里がするため、リ

ハーサルとして聞いてほしいらしい。

それで聞いているのだが、まあ・・・かなり眠くなってくる。

今現在、俺の周りには実際に演説している絵里の他、亜里沙の友達2人も来て聞いている。

だが、絵里の説明を聞いている亜里沙はかなり不満顔だ。

さらにいうと、亜里沙の友達の一人、高坂雪穂は完全に眠っている。

まあ、無理もない。

俺も寝たいからな。

そんな聞いている側の気持ちも露知らず、絵里は

絵「このように、音ノ木坂学院の歴史は古く、この地域の発展にずっと関わって来ました。さらに、当時の学院は音楽学校という側面も持っており、学院内はアーティストを目指す生徒に溢れ、非常にクリエイティブな雰囲気にも包まれていたと言います」と、こんな長つたらしい文章を延々と続けている。

その間、雪穂が段々と頭を後ろに傾け、転げ落ちそうになっている。

そう思っただけだと、

雪「わあっ!!体重増えた!!」

と叫んで飛び起きた。

・ ・ ・ どんない夢を見てたんだ？

周りを見て説明の途中だと気付いたのか、

雪「あつ ・ ・ ・ すいません ・ ・ ・」

顔を赤くしながら謝る。

絵「 ・ ・ ・ ごめんね、退屈だった？」

雪「いえ、面白かったです！特に後半凄い引き込まれました!!」

席を立ち上がって言うが、さすがに無茶だろう。

絵「オープンキャンパス当日までに直すから、遠慮無く言って」

絵里はそう言うが、おそらく今の状態で直しても、あまり大差は無いだろう。

なんて言うべきか ・ ・ ・ 。

そんな事を考えていると、亜里沙が立ち上がる。

亜「亜里沙はあまり面白くなかった」

はつきりと言った。

雪穂が「ちよつと!!」と驚いている。

亜「何でお姉ちゃん ・ ・ ・ こんな話してるの？」

絵「学校を廃校にしたいからよ ・ ・ ・」

亜「私も音ノ木坂はなくなつて欲しくない。 ・ ・ ・ でも ・ ・ ・」

そこで一旦言葉を区切り、次に絵里の顔色が変わる一言を言い放つ。

亜「これが、お姉ちゃんのやりたい事？」

絵「……………」

流石は妹といったところか。

姉の事を誰よりも分かっている。

そこで、俺も前から気になっていた事を絵里に聞く。

大「俺も前から気になっていた事があるんだ。絵里、今お前は自分の心に正直か？」

絵「っ!!」

俺の言葉を聞くと、絵里は顔を俯かせた。

大我 side out

……………

永夢 side

翌日、僕と海未ちゃん、穂乃果ちゃんことりちゃんの4人で生徒会室に行き、生徒会長にダンスを教えて欲しいと頼みに来た。

穂「生徒会長！お願いがあります！私達にダンスを教えてください！」

絵「私に……ダンスを……？」

穂「はい！お願いします！」

僕達も代表して穂乃果ちゃんが要件を出し、頭を下げたので、僕達も頭を下げる。

絵「・・・分かりました。あなた達の活動には理解できませんが、人気があるのは間違いないようですし、引き受けましょう」

穂「本当ですか!!」

生徒会長の了承の言葉を聞き、穂乃果ちゃんことりちゃんが喜びの表情を浮かべる。

絵「ただし、引き受けるからには私が許せる水準まで頑張ってもらおうよ?」

その言葉を聞いて、穂乃果ちゃん、ことりちゃん、海末ちゃんが声を揃えて、

穂・こ・海「はい!!」

元気よく返事をして生徒会室から出ていった。

僕も出て行こうとドアを開けた時、

希「星が動き出したみたいやね・・・」

そんな副会長の声が聞こえた。

永夢 side out

・・・・・・・・

絵里 side

放課後、私は屋上で彼女達のダンスを見ていたのだけれど・・・。

凜「にやつ!!わわわわっ!!」

教えるにはまず彼女達がどれくらい踊れるか知る必要があるので踊ってもらったわけだけど、途中オレンジ色のショートカットヘアの子、確か・・・星空さんだったかしら?が転んでしまった。

何よこれ・・・全然基礎ができてないじゃない。

絵「全然ダメじゃない・・・!よくここまで来れたわね!!」

凜「昨日はできたのにー!」

昨日できて今日できない。

それは基礎ができてない証拠だわ。

絵「基礎ができてないからムラが出るのよ。足を開いてみて?」

凜「こー?」

星空さんが足を開脚して座ったの確認してから、その背中を思いつきり押した。

凜「うぎっ!?!痛いにゃ〜!!」

星空さんの体は驚くほどに固かった。

絵「これで、少なくともお腹が床につくくらいじゃないと話にならないわよ」

凜「ええー!?!」

絵「ダンスは一旦中断。みんなの柔軟性を見せて」

私が言うのと、全員ダンスを中断し、床に座って柔軟体操をし始めた。みんな、比較的体が固い。

この中で合格なのは……

こ「ほっ！」

穂「ことりちゃん凄〜い!!」

こ「えへへ、家で毎日お風呂上がりにやってるんだ〜」

南さんぐらいね。

高坂さんが南さんを見て感心しているが、そんな場合じゃない。

絵「感心している場合じゃないなよ。ダンスで人を惹きつけたいのでしょ？」

少し、言い方はキツイかもしれない。

だけど、学校を救うためにはこうでもしないと伝わらない。

絵「残り10分!!」

筋力トレーニングを挟み、片足立ちをやらせる。

最初の方は良かったが、段々顔が引きつっていく。

花「あっ!？」

すると、一年生の一人、小泉さんが倒れる。

凜「かよちゃん!!」

飛「小泉、大丈夫か？」

小泉さんに、星空さんと一年生の試験生、鏡君が近づくと、

・・・はあ。

絵「もういいわ。・・・今日はここまでよ」

『えっ!?!』

彼女達ではこの学校を救えない。

に「ちよつと!!」

真「いくら何でも、そんな言い方はないんじゃない!?!」

絵「私は冷静に判断しただけよ」

矢澤さんや西木野さんが文句を言ってくるが、私は事実を述べて戻ろうとする。

穂「待つてください!!」

ドアに手をかけたところで、後ろから高坂さんに呼び止められる。

振り向くと、アイドル研究部のメンバーが並び、

穂「ありがとうございます!明日もよろしくお願いします!!」

『よろしくお願ひします!!』

私に向かつて一礼してきた。

その光景に、私は何も言えなかった。

第21話 強敵出現!黒いエグゼイドと竜戦士

絵里 side

私は今日も屋上に来ていた。

だけど、どうしてもドアを開ける事が出来ない。

なぜかは分からないけど、日が経つにつれてこのドアを開ける事にためらいを感じる。

真「覗き見ですか?」

声をかけられ、後ろを向くと、西木野さんと鏡君が来ていた。

絵「あつ……いえ……」

凜「あぁー!!」

返答に戸惑っている、星空さんもやって来た。

凜「そんなところにいないで、早く行くにや〜!!」

星空さんがいきなり私を押しってくる。

凜「にやんにやんにやんにやん♪」

絵「あつ!?ちよつと!」

押し込まれるように入った屋上では、すでに来ていたメンバーが談笑していた。

穂「おはようございます!!」

こ「まずは柔軟ですよね？」

高坂さんが挨拶をし、南さんが練習の確認をしてくる。

絵「・・・辛くないの？」

「「「「「えっ?」」」」」

私が溢した眩きに、全員が反応する。

絵「昨日あんなにやって、今日もまた同じ事をするのよ? 第一、上手くなるかどうかも分からないのに・・・。どうして?」

穂「やりたいからです!!」

高坂さんが間髪入れずに答える。

穂「確かに練習は凄くキツイです。でも、廃校を阻止したい、音ノ木坂学院を救いたいという思いは生徒会長にも負けません! だから、今日もよろしく願います!!」

『お願います!!』

全員が声を揃えて頼んでくる。

彼女達の目は、とても澄んでいた。

ああ、亜里沙がどうしても彼女達の事が好きなのか。

どうして人気があるのか。
やつと分かった気がする。

その真つ直ぐな気持ちに、私は何も言えずに屋上を立ち去る。

絵里 side out

.....

◎ side

屋上から出た絵里はしばらく走り、階段を降りた所でスピードを落とし、歩き始める。

希「ウチなあ」

絵「っ!.....希.....」

そんな絵里に、後ろから声をかける希。

希の声を聞いて絵里も立ち止まる。

希「うちな、エリチと友達になつて、生徒会やつてきて、ずっと思ってたんよ。エリ

チは、本当は何がしたいんだらうって」

絵「えっ?」

希「一緒にいるとわかるんよ。エリチが頑張るのは、いつも誰かのためばかり...。

だから、いつも何かを我慢しているようで、全然自分の事は考えてなくて...」

絵「っ!!」

希「学校を存続させようって言うのも、生徒会長としての義務感やろ!? だから理事長も、エリチの事認めなかつたんと違う!?!」

希は大声を出して、絵里の核心に触れる。

希「エリチの・・・エリチの本当にやりたい事は?」

高校一年生から絵里と一緒に行動して来た希。

そんな希は、絵里の気持ちに気づいていた。

絵「何よ・・・。なんとかしなくちゃいけないんだからしょうがないじゃない!!」

今まで黙っていた絵里が大声で怒鳴る。

絵「私だつて!好きな事だけやって、それだけでなんとかなるならそうしたいわよ!・・・自分が不器用なのは分かつてる。でも!私が今更アイドルを始めようなんて、言えると思う?」

自分の気持ちを曝け出す絵里は、泣いていた。

そこで、絵里は希に背を向け走り去って行く。

希「エリチっ!!」

希の静止の言葉も聞かずに・・・。

絵里が立ち去った後、希が立ち止まっていたが、そこに大我がやってくる。

どうやら、角から聞いていたらしい。

希「花家君……」

大「あれが絵里の本心か……。自分の気持ちに正直になれてないのは分かっていたが、あそこまでためていたとはな……。……」

希はどこか、悲しい表情をしていた。

希「ごめんね……。ウチじゃ、エリチを説得する事はできなかった……。」

大「いや、お前はよくやったよ。あいつを説得しようにも、絵里の本心を知る必要はあつたからな。さて……。……」

そこまで言つて、階段の方を見る大我。

大「そこで聞いてんだろ?出てこいよ」

大我がそう言うのと、階段の方から永夢が出てくる。

永「バレてましたか……。……」

大「気配がダダ漏れだったしな……。……お前は絵里の本心を知つて、どうしたい?」
そう質問する大我。

永夢も大我同様、絵里の本心を最初から聞いていた。

永「……。僕は初めて生徒会長に会つた時、とても厳しそうな人だと思いました。だけど、その表情には少し悲しみや、苦しみのような感情も見えた。だからこそ、僕は……。……生徒会長の、絵里さんの笑顔を取り戻したい!」

絵里を笑顔にしたい。

永夢は、はつきりとそう口にした。

その答えを聞いて、大我は「ふっ．．．」と笑う。

大「だったらすぐにでも行動するぞ。俺は先に絵里のところに行ってるから、二人はあいつらを連れて来てくれ」

そう言つて、大我は絵里が去つていった方向に歩いて行く。

．．．．．

空き教室の一角、後ろの机に絵里は座っていた。

絵里は頬杖をつき、外を眺めていた。

大「何してるんだ？」

絵「?．．．．大我．．．」

そこに大我がやつてくる。

絵「．．．どうして、あの子達があんなに人気があるのか、分かった気がするわ．．．」
大「?」

絵「あの子達は、好きでスクールアイドルをやっている。だからこそ、あんなに人気があるんだって．．．」

大「．．．そうか．．．」

絵里は顔を俯かせる。

大「……なあ絵里。どうして理事長があいつらの活動を許し、絵里の活動を許さなかったのか、今のお前なら分かるだろ？」

絵「……私が、生徒会長の義務感でやっていたから……？」

大「そうだ。その事が分かった今、もう一度、お前に聞かなきゃならない事がある。」
大我はそこで一回止めて、少しためてから質問する。

大「今のお前は、自分の心の正直か？そして、今お前は、何がしたい？」

一昨日、大我が絵里にした質問。

それにもう一つ質問を加え、絵里に問う。

その質問に、絵里は途切れ途切れになりながら答える。

絵「私は……スクールアイドルを……やりたい……!あの子達と……一
緒に……!!」

スクールアイドルをやりたい。

それが絵里の気持ちだ。

大「だったら……」

絵「でも!」

大「?」

大我が何かを言おうとしたが、絵里が遮る。

絵「私は生徒会長なのよ？そんな私が、アイドルなんて・・・！」

大「生徒会長だからとかは関係ねえよ。大事なのはお前自身の気持ちだ。無理に我慢してストレスを溜めるよりも、思いつきり楽しんだ方がいいんじゃないか？」

絵「でも・・・」

大「それによ、あいつらはお前を受け入れてくれるぜ？だってよ・・・」
大我がそこで会話を止める。

絵里が大我の方を向くと、そこにはμ'sメンバーがいて、穂乃果が手を差し出していた。

穂「生徒会長・・・いえ、絵里先輩！μ'sに入ってくださいませんか!？」

穂乃果は絵里を勧誘する。

海「さつき、希先輩と永夢から聞きました」

絵「？」

海末の発言に首を傾げる絵里。

に「やりたいなら素直にそう言えばいいじゃない」

真「ここ先輩が言えた事じゃないけど」

飛「真姫もな」

にこ、真姫、飛彩の発言に、花陽とことりはクスクス笑う。

絵「ちよつ、ちよつと待って!私がアイドルなんて、おかしいでしょう!」

貴「なあくに言ってるんすか、会長さん」

絵里の言葉に、貴利矢が軽い感じで話しかける。

貴「せっかく、自分の気持ちに気づいたんだ。だったら、その気持ちにノッチやいなよ」

穂「さあ、絵里先輩!スクールアイドル、μ'sに入ってください!」

絵「っ!!」

穂乃果達の言葉に、絵里は泣きそうになりながらも差し出された手を掴み、立ち上がる。

こ「これで、8人!」

希「いいや、9人や。ウチも入れて」

『えっ?』

希の発言に全員が驚きの声を上げる。

希「占いに出てたんや。このグループは9人になった時、未来が開けるって……。だから付けたんよ、9人の歌の女神、μ'sって!」

『ええーーーー!!』

再び驚きの声を全員が上げる。

穂「じゃ、じゃあ、あの名前を付けてくれたのって、希先輩だったんですか!？」

穂乃果の問いに、希は「ふふっ♪」と笑う。

絵「希。・・・全く、呆れるわ・・・」

絵里はみんなの横を通って教室を出ようとする。

海「どこへ？」

海末の質問に、絵里は振り返って答える。

絵「決まってるでしょ！練習よ！」

その顔は、今まででは考えられないぐらいの笑顔だった。

穂乃果達も喜ぶを隠せず、マネージャー組は静かに微笑んでいた。

その時だった。

『ステージセレクト』

「「「っ!?!」」」

急に場所が変わって、どこかの廃工場のような場所に転移した。

絵「な、なに?」

に「ちよつと、ここどこよ!?!」

希「な、なにが起きたの!?!」

この現象を初めて体験する三年生組は驚いていたが、マネージャー組は至って冷静に辺りを警戒する。

大「絵里!俺達の後ろに下がれ!!」

絵「え、ええ・・・」

大我に言われ、言われた通り下がる絵里。

その時、自分達のじゃない、誰かの声が響く。

「お前達が仮面ライダーか」

「「「?!?!」」」

マネージャーの四人は一斉に声が出た方を見る。

そこには、民族衣装のような物を身に纏った一人の男が立っていた。

貴「誰だ？あんな」

「答えると思うか？といつても、一人はすでに会った事があるがな」

飛「なんだと？」

その男は、懐から、紫色のパッドのような物を取り出す。

永「あれは、黒いエグゼイドが持っていた！なんであの人を持つてるんだ!？」

そして、そのパッドにあるAボタンを押す。

すると、どこか禍々しい音声が辺りに鳴り響く。

「培養」

そのまま、そのパッドを右手に装着する。

『インフェクション！』

『レッツゲーム！パッドゲーム！デッドゲーム！ワッチャネーム!？』

男の体はパッド、『ガシャコンバグヴァイザー』から広がった粒子に包まれ、その粒子が消えた時には男の真の姿が現れる。

『ザ バグスター！』

手には巨大な牙の模した武器、『グラフィイトファング』を持ち、体の色は緑色、龍も姿を彷彿させる姿。

以前、『仮面ライダースナイプ』と戦い、勝ったバグスター……

『グラフィアイト』が立っていた。

永「バグスター!?!」

絵「あ、あの怪人は!?!」

永夢と絵里の二人が驚く中、大我は下に俯く。

大「……テメエか……グラフィアイト!!」

いきなり大声を出し、グラフィアイトを睨みつける大我。

すぐにゲーマドライバーを装着し、ガシヤットを起動する。

『バンバンシューティング』

大「変身!!」

『I, m a 仮面ライダー!!』

『ガシヤコンマグナム!』

ス「うおおお!!」

周りが見えなくなっただのか、一人で突っ込んでいくスナイプ。

グ「ふん」

そんなスナイプをグラフィアイトは一步も動かずにグラフィアイトファンングで吹き飛ばす。

ス「ぐわあああ!!」

絵「大我!!」

永「大我さん!・・・僕達も行こう!」

飛・貴「「ああ!（おう!）」」

それぞれのゲームドライバーを装着しガシヤットを起動する。

『マイティアアクションX』

『タドルクエスト』

『爆走バイク』

永・飛・貴「「変身!!」」

『I, m a 仮面ライダー!!』

『ガシヤコンブレイカー!』

『ガシヤコンソード!』

エ「ノーコンティニューでクリアしてやる!」

ブ「これより、グラフィイト切除手術を始める!」

レ「ノリノリでいくぜー!」

エグゼイドはハンマー、ブレイブは斬撃、レーザーは銃撃で攻撃していくが、グラフィイトには全く通じず、むしろ攻撃を受けてライダーゲージを減らすだけだった。

エ「ぐっ・・・」

ブ「つ、強い……」

レ「なんだこいつ……」

グ「そんなものか、仮面ライダー共!!」

すでにライダーゲージが半分を切っており、かなりダメージが通っている仮面ライダー達。

ス「だったら、こいつでも受けてみる!」

スナイプは体を高速回転させ、自らを銃弾にしてグラフィイトに突撃する。

だが……

『キメワザー!マイティ!クリティカルストライク!!』

ス「ぐわあああ!!」

エ「!スナイプ!!」

スナイプの攻撃は横からの何者かの攻撃に吹き飛ばされる。

ブ「お前は……!」

スナイプを攻撃した存在の姿を見たエグゼイドとブレイブは驚いた。

そこには、いつの日か二人で戦い、惨敗した相手、『黒いエグゼイド』が立っていた。

エ「黒いエグゼイド!!」

ブ「なんで貴様がここに・・・!!」

黒いエグゼイドは何も答えず、腰のホルダーから黄緑色のガシヤットを取り出す。

レ「?二本目のガシヤットだと?」

黒いエグゼイドはそのガシヤットを起動する。

『シヤカリキスポーツ』

黒いエグゼイドの後ろにゲーム画面が現れ、そこを中心にゲームエリアが新たに展開される。

それと同時に、カラフルなピンク色をした自転車が現れ、黒いエグゼイドの周りを走る。

黒いエグゼイドは一度ゲームマドライバーのレバーを閉じ、左側の装填口に起動したシヤカリキスポーツガシヤットを装填する。

『ガシヤット!』

そして、もう一度レバーを開く。

『ガツチャ〜ン!』

『レベルアップ!』

『マイテイジャンプ!マイテイキック!マイテイ〜アクションX!アガツチャ!シヤ

カリキ!シャカリキ!バッドバッド!シャカつとりキつとシャカリキスポーツ!」

すると、自転車、『スポーツゲーム』が黒いエグゼイドの上から装着されていく。

穂「じ、自転車が鎧になつた〜!」

凜「どうなつてるにや〜!」

真「気にしたらダメだと思っけど・・・」

その光景に、穂乃果達も啞然とする。

黒工「・・・・・・・・」

黒いエグゼイドは装填したシャカリキスポーツガシャットを抜き、キメワザスロットに装填する。

『ガツシャット!』

『キメワザ!』

黒いエグゼイドの右肩に装着されているタイヤが取れ、それを手に取る。

そのタイヤにはエネルギーが溜まっていき、

エネルギーが完全に溜まった時、黒いエグゼイドは再びスイッチを押す。

『シャカリキ!クリティカルストライク!』

黒いエグゼイドはタイヤをエグゼイド達目掛けて投げ飛ばす。

『ぐわあああああ!!』

その攻撃はエグゼイド達に当たっていき、変身が解除される。

黒いエグゼイドとグラフィイトは永夢達を見ると、その場を去っていった。

次の瞬間、ステージセレクトが解除され、元いた音ノ木坂の教室に戻って来ていた。

海「永夢！」

海未も声をきつけかけに、全員がハツとする。

絵「大我！」

希「ひどい傷・・・！」

真「飛彩、大丈夫!？」

凜「にやゝ・・・痛そうにやゝ・・・」

穂「どど、どうしようことりちゃん！」

こ「そ、そんなこと言われてもおろ・・・」

結局、真姫が手当てをし、この日は解散となった。

◎ side out

.....

永夢 side

僕達が黒いエグゼイドとグラフィイトと戦い、負けた日から数日。

オーブンキャンパス当日となった。

今、アイドルの衣装に身を包んだ、『9人』になったμ'sはグラウンドに立てたステージに立っていた。

穂「皆さん、こんにちは!私達は音ノ木坂学院のスクールアイドル・・μ'sです!私達は、この音ノ木坂学院が大好きです!この学校だから、このメンバーと出会い、9人が揃ったんだと思います!これからやる曲は、私達が9人になって出来た曲です!!」

穂乃果ちゃんが代表で、観客に説明をしている。

穂「私達のスタートの曲です!」

そう締めくくると、今度は全員で曲名を言う。

『聞いてください!「僕らのL I V E 君とのL I F E!」』

〈僕らのL I V E 君とのL I F E〉

第22話 永夢の謎と二人の教師

永夢 side

オーブンキャンパスから数日経ったある日、

僕と飛彩君、大我さん、貴利矢さんの4人は僕の家の地下にあるCRに集合していた。

貴「地下にこんな空間があるなんてなあ〜」

大「広すぎねえか？」

永「ははっ・・・僕も初めて知った時は驚きました」

飛「それよりも、早く本題に入りましょう」

飛彩君に言われて、僕達は席につく。

今日、ここに集まった理由は、この間の戦いの事。

黒いエグゼイドが使っていた新しいガシャットの事と、それぞれの情報交換だ。

大「黒いエグゼイドが使ったあのガシャット・・・確か、シャカリキスポーツだっ

たな」

貴「あのガシャットは一体なんなんだ？」

ポ「それについては私が説明するよ〜♪」

部屋の一角にあるゲーム機から、ポッピーポッピーが出てくる。

何気に久しぶりに見た気がする……。

ポ「二人は初めましてだね♪私はポッピーポッピーよろしくね♪」

僕と飛彩君は驚かないが、初対面の二人はいきなり出てきたポッピーに驚いていた。

貴「おい永夢、なんだこいつは？」

永「彼女は僕達に協力してくれているバグスターです。今まで戦ってきたバグスターとは違い、彼女は良性ですので、危害はありません」

大「まさか、こんな所にバグスターがいたとはな……」

僕の説明を聞いて、貴利矢さんと大我さんは警戒をとく。

飛「それよりもポッピー、黒いエグゼイドが使っていたあのガシャットについて説明して欲しいんだが……」

ポ「あ、そうそう！忘れてた！」

その言葉に全員ガクツとなる。

大丈夫だろうか？

ポッピーはモニターの前に移動し、画面をつける。

その画面には、色々なラベルのようなものが映し出せれていて、中にはマイティアクシオンXやタドルクエストなどがあつた。

永「これってもしかして、全てガシャット？」

ポ「さっすが永夢！永夢の言う通り、ここに映し出されているのは全てガシャットになつているゲームなんだ」

するとポッピーは、その内の一つを指差す。

ポ「今これらのゲームには番号が振られているけど、5〜10のガシャットはレベルアップ用のガシャットなの。そして、その黒いエグゼイドが使つていたつていうシャカリキスポーツは9番、使用者をレベル3にアップさせる事ができるんだ」

大「レベル3だと？」

飛「だから、前回戦つた時よりも強く感じたのか」

飛彩君の言う通り、確かに前回戦つた時よりも、黒いエグゼイドは強く感じた。

レベルが前回よりも上がつていたんなら納得できる。

貴「そのレベル3用のガシャット、自分達のはないのか？」

貴利矢さんの言葉にハツとする。

確かに、レベル3になるためのガシャットはシャカリキスポーツだけではないはず。

僕達もレベル3になれば、対抗できる。

ポ「それが、あるにはあるんだけどく・・・」

永「？」

ポ「まだ、調整が終わってなくて……」

ポツピーの言葉に、全員が落胆の表情を浮かべる。

ポ「いや、女神様が言うには、あともう少しで終わるらしいの！全員ぶんままとめて渡すつもりらしいから！」

僕達は思わず、ポツピーをジト目で見る。

ポ「何その目!?!本当だからね!?!嘘じゃないからね!?!」

そこで、僕はある事をみんなに聞いた。

永「そういえば、今ここにいるみんな、仮面ライダーの変身者は全員転生者ですよね？」

飛「何を今更……」

永「いや、今までそう言う事全く話してなかったなあ〜って」

飛彩君の言う通り、確かに今更感はあるけどね。

貴「って事は、全員あの適合手術ってやつに成功したって事か」

永「えっ？」

大「ああ、転生する前から死ぬかと思っただけだな」

どう言う事？

永「あの〜、適合手術って、一体……？」

飛「永夢さんはしてないんですか？あの手術……」

永「う、うん。そんな事した記憶がないんだけど……」

大「そいつは妙だな」

永「な、何がですか？」

貴「俺が受ける時、女神様は『ガシヤットを起動するにはバグスターウイルスの抗体を持つてなきゃいけない』って言ってたぜ」

大「俺の時もそうだった。抗体を持つてないと、ガシヤットの起動もできないってな」

永「で、ですが僕はガシヤットを起動できますよ？」

貴「だからこそおかしいんだよ。ポツピーは何か知らないのか？」

ポ「私はただ、手伝いをしてくれて頼まれただけだから、詳しい事は何も……」

永「……」

結局、新たに謎が増えただけで、この日は解散する事にした。

……

翌日、臨時集会があつて生徒はみんな体育館に集まっていた。

海「珍しいですね。臨時集会なんて……」

永「結構あるの？」

海「いえ、全く。ことりは何か知っていますか？」

こ「ううん。私は何も・・・」

貴「廃校関連じゃなければいいが……。あれ？そういえば穂乃果は？」

貴利矢さんの言葉に、僕は辺りを見渡す。

確かに、穂乃果ちゃんの姿が見当たらない。

海「いつもの様に、寝坊しています」

こ「あはは・・・」

寝坊したの？

まあ、今日は珍しく朝練はなかったけど・・・。

永「朝練がないと寝坊するの？」

貴「ったく」

『それでは理事長先生お願いします』

おっと、僕達が話している間に理事長の話まできた様だ。

前を見ると、この学校の理事長、ことりちゃんのお母さんがステージ上上がっている。

『みなさん、おはようございます。先日のオープンキャンパスはお疲れ様でした。みなさんのおかげで、近隣の中学生の評判は上がり、しばらくの廃校の心配はなくなりました。本当にありがとうございます。さて、今回は臨時集会を開かせていただきました

が、理由としましては共学化する事が決まり、今現在4人の試験生がこの学校に通っているのはみなさんご存知ですよ。みなさんも、試験生の方々もだいぶ慣れてきたところだと思えます。そこで、共学化のためにまた新たな男性の先生を二人、今日からこの学校に勤めてもらう事になりました。』

理事長の言葉に、館内がざわつき始める。

それもそうだ、まさかこのタイミングで男性の先生が二人も来るなんて思わないからね。

僕も顔には出していないが、心の中では驚いている。

『それでは、挨拶をしてもらいます。よろしくお願いします』

理事長の言葉を合図に、ステージ裏から二人の男性が出てきた。

『初めまして。今日からこの学校に勤める事になりました、檀黎斗です。担当教科は数学ですが、どの教科もできます。今日からよろしくお願いします。』

『初めまして。檀黎斗先生と同じく、今日から勤めさせていただきます、小星作です。担当教科は国語です。よろしくお願いします。』

最初に挨拶した先生、黎斗先生は黒髪で髪を真ん中で分けている。

その次に挨拶した先生、作先生は坊主頭だ。

『檀先生は2年生、小星先生は1年生を担当してもらいます。それでは、臨時集会を終わ

りにします。』

・
・
・
・
・
・

臨時集会が終わって教室に戻ると、穂乃果ちゃんが登校していた。

穂「みんなどこに行ってたの!?!急いで来たら誰もいなかったんだけど!?!」

海「今日は臨時集会があつたんです。ですから、体育館に集合していました」

穂「臨時・・・集会?」

臨時集会がわからなかったのか、首を傾げる穂乃果ちゃん。

永「特に予定されてたわけじゃなく、急に集会をする事になったって事」

貴「それほど重要な内容だったって事だ」

穂「ええー!ー!」

教室中に穂乃果ちゃんの叫び声が響く。

海「穂乃果、うるさいです!!」

穂「だって重要な内容だったんでしょ!?!どんな内容だったの!?!」

穂乃果ちゃんはすごい慌ててる。

貴利矢さんはその穂乃果ちゃんを見て笑っているけど。

永「多分、すぐに知る事になるよ」

穂「ふえ?」

穂乃果ちゃんが声を漏らした時、ちょうど教室のドアが開き、黎斗先生が入って来る。
穂「え!? 男の先生!？」

海「今日の集会の内容は男性の先生が今日からこの学校に勤める事になった事で
す」

黎「みなさん、改めまして初めまして。先ほども言いましたが、私の名前は檀黎斗。教科はなんでもできますので、分からない所がありましたらぜひ、聞きに来てください」
黎斗先生が改めて自己紹介をする。

黎「それでは、早速授業を始めましょう」

そのまま、数学の授業が始まる。

・・・・・・・・

穂「黎斗先生、凄かったねえ〜!」

放課後、部室に集まって黎斗先生の話題になっていた。

海「確かに、黎斗先生の授業はとも分かりやすかったですね」

こ「本当に、なんでもできるって感じだったね♪」

絵「そんなに凄かったの？」

永「あ、絵里さん」

そこに、絵里さんが部室に入って来る。

永「やっぱ絵里さんも気になるんですか？」

絵「そりやね、一応生徒会長だし、どんな先生なのかは知っておきたいし」

穂「とても優しそうな人でした！」

永「凄い信頼できる、そう思いました」

絵「そう、なら良かったわ」

その時、誰かが部室のドアをノックする。

海「？誰でしょうか？」

永「飛彩君達だったらノックしないはずだし……」

穂「はい」

穂乃果ちゃんが返事を返し、ドアを開ける。

黎「失礼、ここがアイドル研究部であつてるかな？」

すると、部室に黎斗先生が入って来る。

穂「く、黎斗先生!？」

黎「おや、君は確か……高坂さんだったかな？」

穂「は、はい……。あの、今日はどうしてここに……？」

穂乃果ちゃんが僕も思つた事を聞く。

黎「いや、理事長から君達の事を聞いてね。廃校阻止のために頑張っている生徒達が

いるってね。ぜひとも会っておきたくて」

絵「そうですか」

黎「おや、君は……」

絵「自己紹介が遅れました。私は絢瀬絵里です。この学校の生徒会長をしています。アイドル研究部の一人です」

黎「そうでしたか。私は壇黎斗。よろしくお願いします」

絵「こちらこそ、よろしくお願いします！」

絵里さんが頭を下げて挨拶をする。

黎「さて、私がここに来た理由だが……」

永「？僕達を一目見ておく事じゃないんですか？」

黎「確かにそれもそうだが、聞いた所、この部活には顧問がいらないらしいね」

こ「顧問……ですか？」

そういうえば、この部活に入ってからしばらく経ったけど、顧問なんて見た事ないな。まさかいなかったとは……。

黎「そこで、一つ提案があるのだが、私をこの部活の顧問にさせてもらえないだろうか？」

『えっ？』

黎「無理に、という訳ではない。ゆっくり考えてもらって構わない。今日のところは帰るとするよ。返事はまた後日に頼む」

そう言つて、黎斗先生は部室から出て行つた。

永「……どうする？」

絵「うくん……私達はあの先生の事をあまり知らないけど、顧問がいなのは問題あるし……」

絵里さんが悩んでいると、

穂「私はいいと思うな！」

こ「穂乃果ちゃん？」

穂「あの先生だったら信頼できるし！」

穂乃果の考えを聞いて、絵里さんも考えが纏まったのか、

絵「そうね。とりあえずはにこ達を待つて、話し合いましよう」

その後、にこさん達が来てから、会議を開き、結果、黎斗先生を顧問にするというこ
とで話が纏まった。

第23話　ことりのアルバイト

永夢 side

黎斗先生をアイドル研究部の顧問に入ってもらってから数日。

学校に掲示板には『廃校延期のお知らせ』と書かれた紙が貼られていた。

そんな中、

穂「みんなみんな!!ビックニュースだよ!!」

穂乃果ちゃんが嬉しそうに言う。

永「何かあったの?穂乃果ちゃん」

穂「うん!ほら!隣も部室なんだよ!広くなつたんだよお〜!」

そう言いながら隣のドアを開ける穂乃果ちゃん。

永「わあ〜・・・すごい広くなつたね!」

その部室はとても広く、雨の日とかは練習できるぐらいに広がった。

そんな事を考えていると、

絵「安心するのは早いわよ」

大「まだ全てが終わった訳じゃないからな」

海「ええ。オープンキャンパスも終わって、今までずっと練習ばかりしてましたから、何か用事が溜まっていたりしてたのかもしれないね」

そういえばそうだ。

ここ最近、ことりちゃんは早く帰っている。

まあ、仕方ないけどね。

そんな事を考えていると、黎斗先生が入ってくる。

黎「やあ、諸君。今日も頑張ろうか」

穂「あつ、黎斗先生！」

黎「さあ、早速練習するでしょう」

黎斗先生の言葉を合図に、マネージャー組は先に屋上に行った。

そういうえば、貴利矢さんがさつきから見当たらないけど、どこ行ったんだろ？

永夢 side out

.....

◎ side

永夢達が練習を始めようとした同時刻。

天界では、永夢達を転生させた神様が5本のガシヤットを持って、地上をみていた。

「ふう、なんとか調整が終わりました。あとはこれらを彼らに届けば・・・」

? 「よお、久しぶりだな」

そんな神様に話しかける一人の男がいた。

「おや、あなたは……。本当に久しぶりですね。ちょうど良かったです。これらのがシャツを彼らに届けてもらえますか?」

そう言つて、神様はその男に持っていた5本のガシャツを渡した。

? 「そのぐらいはお安いご用だ。だが、今回ここに来た目的は別にある」

男は渡されたガシャツをポケットに仕舞うと、再び神様を見る。

? 「あんたに聞きたい事があつてな。黒いエグゼイドの事だ」

神様はその言葉を聞くと、その顔を一気に真剣なものに変えた。

.....

一方その頃、地上では。

穂 「ふわぁぁあ、50位!?!なにこれ!?!凄い!!」

屋上での練習の休憩中、穂乃果がパソコンの画面を見ながら、興奮したように叫ぶ。

花 「夢みたいです!!」

穂 「20位にだいぶ近づきました!!」

穂乃果は近くにいた絵里に報告する。

絵 「凄いわね」

海「絵里先輩が加わった事で、女性ファンもついたみたいですよ！」
海未がそういう。

絵「えっ？」

穂「確かに……」

穂乃果は絵里の全体を見るように、首を下から上に動かす。

穂「背も高いし、足も長いし、美人だし、何より大人っぽい！さすが三年生！」

絵「やめてよ……／＼」

照れたのか、顔を赤くする絵里。

次の瞬間、穂乃果の目線は絵里の後ろにいたここに移る。

に「ん？……なに？」

穂「ああ……いえ、なんでも……」

に「ふん！」

そっぽを向くここ。

希「でも、おつちよこちよいな所もあるんよ♪この前なんて、玩具のチョコレートを本物と思って食べそうになったり……」

希が絵里の恥ずかしい話を暴露する。

絵「希!!」

絵里は希を止める。

大「ちよつと、気になるがな、その瞬間……」

絵「知らなくていいわよ！絶対！」

穂「でも、ホントに綺麗！よし、ダイエットだ！」

凜「聞き飽きたにや〜」

永「そのセリフ、何回目だろう……」

穂乃果のダイエット宣言に、凜と永夢がげんなりする。

その時、校舎から穂乃果達のクラスメイトのヒデコ、フミコ、ミカの3人が声をかけてくる。

「おい、穂乃果——！」

穂「ん？」

穂乃果と海未、凜の3人が柵越しに声が出した方を見る。

「頑張つてね〜！」

「ファイトだよ〜！」

「応援してるからね〜！」

3人は応援の言葉をかける。

それに対し、穂乃果は

穂「ありがとー！」
と返す。

絵「知り合い？」

穂「はい!!ファーストライブの時から、応援してくれてるんです!」
絵里の質問に答える穂乃果。

真「でも、ここからが大変よ」

真姫が突然そう言い、みんな真姫の方を見る。

真「上に行けば行くほど、ファンも沢山いる」

穂「・・・そうだよね・・・」

真姫の言葉を穂乃果が肯定する。

穂「20位かあく・・・」

黎「残り30位、何をするべきか・・・」

黎斗が案を出そうと考える。

に「その前にしなきゃいけない事があるんじゃない・・・?」

『ん?』

に「この言葉に残りの全員が首を傾げる。

・・・

場所を移動して秋葉原。

その通りの一つに、サングラスにマスク、この暑い中にコートとマフラーをした集団がいる。

この集団こそ、穂乃果達 μ 'sだ。

どうやらにこが言っていたやらなきやいけない事とは、街中での変装だったらしい。

近くに永夢達マネージャー組と黎斗がいたが、少し距離を置いている。

そんな時、黎斗が手を叩いて穂乃果達を向かせる。

黎「諸君。今現在、『暑い』や『意味がない』などの考えを持った人は今すぐにその変装をやめて良し！」

黎斗がそう言った瞬間、にこ以外の全員がすぐに脱ぎ始める。

に「ちよっ！なんで脱ぐのよ!?!」

にこが抗議するが、すぐに黎斗が注意する。

黎「いいか？矢澤さん。このような街中で、しかもこんな暑い日にコートやマフラーなど、逆に目立ちすぎる。下手すれば通報されておかしくレベルだ」

に「うっ!!」

黎斗に言われ、変装を止めるにこ。

その時、

凜「凄いにや〜！」

凜の叫び声が聞こえてきた。

永夢達は声が出た方に向かうと、そこには最近できたスクールアイドル専門店があった。

凜と花陽は、その店のあるコーナーにいた。

花「うわあああああ!!うわあああああふわあああああ!!」

花陽は興奮のあまり、凄い声を出している。

凜「かよちゃん！これA—R—I—S—Eの!？」

二人がいるコーナーはA—R—I—S—Eコーナーだった。

穂「何ここ？」

穂乃果が疑問を口にする、にこが食いついた。

に「近くに住んでいるのに知らないの!?!最近オープンしたスクールアイドルの専門店よ!!」

にこがそう説明する。

絵「こんなお店があるなんてね・・・」

希「ラブライブが開催されるぐらいやしね」

永「それほど人気って事ですね。スクールアイドルが」

絵里と希、永夢がそれぞれの感想をいう。

に「と言つても、まだ秋葉に数件あるぐらいだけどね」
にこがそう付け加える。

その時、凜が

凜「ねえ、見て見て！この缶バッジの子、可愛いよ!!まるでかよちゃん!そつくりだにや
〜!」

そう言いながらある缶バッジを他のみんなに見せてくる。

確かにそこにはある人がプリントされていた。

永「つていうか、その子・・・そつくりつていうか・・・」

飛「小泉本人だな」

永夢と飛彩が言った通り、その缶バッジにプリントされている子は花陽本人だった。

凜「えええ!?!」

凜は驚きの声を上げる。

大我がその缶バッジがあつたコーナーを確認する。

大「ここ、μ'sのコーナーみたいだな」

『ええええ!?!』

大我がそう口にする、他の全員が驚きの声を上げる。

穂「嘘!? う、う、海未ちゃん! こ、こ、これ私達だよ!!」

海「お、お、落ち着きなさい!」

永「海未ちゃんも落ち着いて・・・」

穂「ミュ、ミュ、μ's についてあるよ! 石鹸売ってるのかな!」

大「そんな訳ないだろ。アイドルシヨップに石鹸なんて・・・」

永夢達がこのようなやりとりをしていると、にこが後ろから掻き分けて前にくる。
に「どきなさい!!」

そのまま自分のグッツを探し始める。

に「あれ!? 私のグッツがない! どういう事!」

そのままグッツを漁るにこ。

そんな中、永夢と穂乃果がある写真を見つける。

永「ん?・・・これって・・・」

穂「・・・ことりちゃんの写真?」

そこには、メイド服を着たことりの写真が置いてあった。

海「こうやって注目されていると勇気付けられますよね!」

絵「ええ・・・」

花「うう・・・嬉しいねえ・・・」

永夢と穂乃果のやりとり気づかず、感動している海未達。
その時、

こ「すいません!!」

店の入り口あたりから永夢達にとつて聞き覚えのある甘ったるい声が聞こえてくる。
店の中にいたメンバー全員が視線を外に向ける。

店の外で商品の整理をしている店員に、たつた今永夢と穂乃果が見つけた写真に写っていたメイド・・・ことが話が話しかけていた。

こ「ここに写真が、私の生写真があるって聞いて。あれは駄目なんです！今すぐ無くしてください！」

穂「ことりちゃん・・・？」

そんなことに穂乃果が声をかける。

声をかけられたことりは、

こ「ひゃあっ!!」

体をビクつかせ、硬直する。

海「ことり・・・何してるんですか・・・？」

ことりは体をロボットのようにつくり後ろを向く。

だが、両目にはガシャポンのカプセルを当てている。

こ「コトリ？ホワツツ？ドナタディスク？」

外人の振りをしているようだが、全く似ていない。

永「いくらなんでも騙されないよ？」

凜「うわ、……外国人？」

永「……」

凜が驚き、そんな凜をジト目でみる永夢。

穂乃果はことりに近く。

穂「ことりちゃん……だよね……？」

こ「チガイマース！」

ことりは目にカプセルを当てたまま、ぎこちなく歩き出す。

こ「ソレデハ、ゴキゲンヨウ。ヨキニハカラエ。……さらば!!」

ことりはメイド服のスカートを掴んで走り出す。

穂「あつ！逃げた！」

穂乃果と海未が走り出す。

海「永夢達も追いかけてください！」

永「えっ？……ああ、うん」

海未に言われて、永夢達も走り出す。

・
・
・

その頃、ことりは裏路地をジグザグに進みながら逃げていた。

こ「はあ・・・はあ・・・逃走ルート決めといて良かった・・・」

疲れてきたのか、裏路地の出口で立ち止まる。

こ「ふう、なんとか逃げ切れたかな・・・」

希「見つけた」

こ「ひい！」

ことりの後ろにあった植木の後ろ側に隠れていた希が声を出しながら姿を現す。

希「これ以上逃げたら、そのふくよかな胸をワシワシするよおう？」

こ「ひいっ！・・・ごめんなさうい・・・」

さすがに逃げられないと判断したのか、すぐに観念した。

◎ side out

・
・
・
・

永夢 side

希さんがことりちゃんを捕まえたらしく、連絡である店に来てほしいと言われた。

指定されたお店に行くと、そこにはメイド喫茶があった。

そのメイド喫茶の中に入ると、すでにことりちゃんと希さんがいた。

そこで、ことりちゃんから事情聴取をしていた。

ことりちゃんはどうぞやらここでバイトをしていたらしく、店で使っている名前を明かしたが、その名前に僕達は驚きを隠せなかった。

『ええー！ー！ー！ー！！』

花「こ、ことり先輩が・・・、この秋葉で伝説のメイド、ミナリンスキーさんだったんですか・・・!!」

花陽の興奮気味な言葉に、ことりちゃんは「はい・・・」と弱々しく肯定する。

バレたからメンバーの反応が怖いのか、さつきから顔を伏せたままだ。

穂「酷いよ、ことりちゃん！そういう事なら教えてよ！」

穂乃果ちゃんがそう言ったため、ことりちゃんはさらに顔を俯かせる。

穂「言ってくれば遊びに来て、ジュースとか奢ってもらったのに！」

永「いや、そこ!？」

穂乃果ちゃんの言葉に思わず僕はツツコんでしまう。

すると、コルクボードに貼られていた写真を絵里さんが見つける。

絵「じゃあ、この写真は？」

こ「店内のイベントで歌わされて・・・。撮影・・・禁止だったのに・・・」
肩を落とすことりちゃんの隣に穂乃果ちゃんが座る。

穂「なんだ。じゃあ、アイドルって訳じゃないんだね？」

こ「うん、それは勿論！」

海「でも何故ですか？」

海未ちゃんが尋ねる。

こ「丁度、4人でμ'sを始めた頃……」

『そんな私……アルバイトなんて……』

『うわあ！可愛い!!』

『いらっしやいませ♪』

最初は断るつもりだったけど、メイド服の可愛さに負け、気づいたら伝説にまでなっていたと……。

大「……ちよろいな……」

これは大我さんの言葉に賛同するしかないよ……。

ことりちゃんは「うう……」というだけ。

こ「自分を変えたいなと思って……。私、穂乃果ちゃんや海未ちゃん達と違って、何もないから……」

穂「何もない？」

穂乃果ちゃんが聞く。

こ「穂乃果ちゃんみたいにみんなを引っ張っていく事もできないし、海未みたいに
しつかりもしてないし・・・」

穂「そんな事ないよ。歌もダンスもことりちゃん上手だよ」

海「衣装だつて、ことりが作ってくれているじゃないですか」

永「ことりちゃんがいるからこそ、μ'sが成り立っているんだよ？」

実際、ことりちゃんのμ'sへの貢献度は高い。

それは、誰の目から見ても明らかだろう。

真「少なくとも、2年の中では一番まともね」

永「ちよつと気になる言葉が聞こえた気がするけど、気のせいかな？」

なんか軽く侮辱された気がするけど・・・気のせいだよね？

まあ、それについては置いといて。

永「ことりちゃん、どうしても自分に自信を持たないの？」

僕が聞くと、ことりちゃんは

こ「私はただ、5人について行ってるだけだよ・・・」

そう答えた。

永「そっか・・・」

それに対し、僕達は何も言えなかった。

大「……あまりいすぎても、店側に迷惑だし、そろそろ帰るか……」

永「そうですね……」

そう言つて、僕達は店を出た。

永「ところで、黎斗先生はどこ行つたの？」

大「ああ、なんか用事があるとかで、アイドルショップを出た辺りから別れたぞ」

第24話 ワンダーゾーン

永夢 side

ことりちゃんのアルバイトが発覚してから数日。

誰もいない教室の中で、ことりちゃんは一人、椅子に座っていた。

こ「・・・チョコレートパフェ、美味しい・・・」

しかも何か奇妙な事を言っている。

こ「生地がパリパリのクレープ、食べたい……。：ハチワレの猫、可愛い……。：

五本指ソックス、気持ちいい・・・」

永「・・・ことりちゃん、何を言ってるんだろう？」

貴「さっぱり意味分かんねえな・・・」

こ「ふえええくん・・・」

あ、壊れたみたい。

こ「思いつかないよお〜！」

そう言つて机に突つ伏すことりちゃん。

そもそも、どうしてこうなったかというと・・・。

〈回想中〉

絵「秋葉でライブよ！」

昼休みに急に絵里さんがそう宣言した。

穂「えっ、それって……」

こ「路上ライブ……？」

絵「ええ」

ことりちゃんの言葉を肯定する絵里さん。

に「秋葉といえば、A—RISEのお膝元よ!？」

希「それだけに面白い！」

真「でも、ずいぶん大胆ね……」

絵「秋葉はアイドルファンの聖地。だからこそ、あそこで認められるパフォーマンスが出来れば、大きなアピールになる！」

成る程ね。

絵里さんの考えは分かった。

この提案に、穂乃果ちゃんのことりちゃんも賛成する。

穂「いいと思います！」

こ「楽しそう!!」

穂乃果ちゃんのことりちゃんは顔を見合わせて笑う。

海「しかし、すごい人では・・・」

永「逆にいいんじゃない?」

に「人がいなかったら、やる意味ないでしょ?」

凛「凛も賛成!!」

花「じゃあ、私も!」

凛ちゃんと花陽ちゃんも賛成する。

飛「いいんじゃないか?」

貴「ノツた」

絵「決まりね!!」

飛彩君と貴利矢さんも賛成し、ライブが決定する。

穂「じゃあ、早速日程を・・・」

絵「その前に」

日程の話をしようと穂乃果ちゃんが話出した直後、絵里さんがそれを遮る。

絵「今回の作詞はいつもと違って、秋葉の事をよく知っている人に書いてもらおうべき
だと思ふの」

永「よく知っている人？」

絵「ええ」

そう言つて、絵里さんはことりちゃんの方を見る。

絵「ことりさん・・・どう？」

こ「えっ!?!私!?!」

絵「ええ」

絵里さんはことりちゃんに作詞ノートを渡しながら聞く。

そのノートを、ことりちゃんは戸惑いながらも受け取る。

絵「あの街で、ずっとアルバイトしてたんでしょ?きつと、あそこで歌うのに相応し

い歌詞を書けると思うの」

穂「それいい!!すごいよ!!」

こ「穂乃果ちゃん・・・」

ことりちゃんの作詞に、穂乃果ちゃんは賛成のようだ。

もちろん、他のみんなも。

海「やった方がいいです。ことりなら秋葉に相応しい良い歌詞が書けますよ!」

凜「凜もことり先輩の、甘々な歌詞で歌いたいやく!」

こ「そ・・・そう?」

に「ちゃんと良い歌詞作りなさいよ！」

真「期待してるわ」

希「頑張つてね♪」

ことりちゃんの作詞に賛同し、応援までしている。

こ「うん．．うん！」

ことりちゃんも不安そうだが、みんなの応援でやる気が出たのか作詞を引き受けた。

〈回想終了〉

つていう事があつたんだけど．．．、

こ「ふくわふくわしくしたものかくわいしくいなく、ハイ！あとはマカロンたぐくきくん並べたら、カラフルで、しくあくわくせく！．．．ルくるくる．．．。やっぱ無理だよお〜！」

駄目だ、こりや。

相当苦戦してるよ。

海「なかなか苦戦してますね．．．」

穂「うん．．．」

貴「ま、そりや今までやった事ない分野だからな」

永「仕方ないですよね」

僕と貴利矢さん、海未ちゃん、穂乃果ちゃんはドアの陰から様子を見ていた。

と、ちょうどその時、

黎「おや、こんな所で何をしているんだい？」

穂「あ、黎斗先生！」

黎斗先生がやってくる。

貴「どうも……」

海「実は、今度秋葉でライブをやる事が決定したんです」

黎「ふむ、秋葉か……。それはまた大胆な事をするね」

永「やっぱり、そう思いますよね」

黎「だが、今現在の技量を測るのであれば、あそこほど適任の場所はない。大胆だが、とても良い考えだ」

穂「おお、流石先生！」

絵里さんの考えはお見通しだった事だね。

ライブの場所を知っただけで、そこまで考えられるなんて。

黎「で、彼女は何をしているんだい？」

黎斗先生が指差す先には、未だに机に突っ伏していることりちゃんがいた。

永「実は、今度のライブで発表する曲を作るのは、秋葉をよく知っている人がいいんじゃないかと言う話になりました、それで今まで秋葉でバイトをしていたことりちゃんが作詞する事になったんですが……」

こ「うう……穂乃果ちゃん……」

永「見ての通り、苦戦してるみたいで……」

あまりの辛さに、泣きながら穂乃果ちゃんの名前を呼び始めたことりちゃん。

その後も、歌詞を考え続けるが、授業中にも考えるため、担任の先生に注意される始末だ。

そして、放課後になって、また一人で考えることりちゃん。

これを延々と繰り返し返している。

永「……どうします?」

貴「流石にこれ以上見られない。助けてやろうぜ」

貴利矢さんの考えは僕も一緒に、二人でことりちゃんの所に行く。

永「ことりちゃん」

こ「うう……ぐす……永夢君? 貴利矢君も……」

貴「つたく、辛いんだったらそう言えっつてんだ。何も絶対に一人で作らなきゃいけ

ねえわけじゃないんだからさ」

穂乃果ちゃんもことりちゃんの所に来る。

穂「そうだよ、ことりちゃん！一緒に考えよう!!とっておきの方法で!!」

とっておきの方法？

・・・・・

僕達5人は今、ことりちゃんがバイトしているメイド喫茶に来ていた。

そこで穂乃果ちゃんと海未ちゃん、ことりちゃんは

こ「お帰りなさいませ♪ご主人様♪」

穂「うお帰りなさいませ！ご主人様!!」

海「お・・・、お帰りなさいませ・・・。ご主人様・・・」

3人揃ってメイド服を着て、並んで接客をしている。

穂乃果ちゃんが言っていたとっておきの方法とは、実際に秋葉に行つて考えると言うものだった。

一方僕と貴利矢さんと言うと、

永「お帰りなさいませ、お嬢様」

貴「お帰りなさい、お嬢様」

何故か執事服を着せられ、海未ちゃん達と同じように接客をさせられていた。

どうしてメイド喫茶に執事服があるんだろう……。
そこに凜ちゃん達もやってくる。

凜「にや〜！遊びに来たよー！」

絵「秋葉で歌う曲なら、秋葉で考えるってことね」

大「なんでお前らまで働いてんだ？ご丁寧に執事服まで着て……」

永「それは僕達が聞きたいことです……」

希さんは面白そうにビデオカメラを向けてくる。

希「ではー、早速取材を……」

海「やめてください！」

まあ、すぐに顔を赤くした海末ちゃんに遮られたが。

海「何故みんなが……」

穂「私と呼んだの」

穂乃果ちゃんが平然として言う。

海末ちゃんの文句が穂乃果ちゃんに向かうが、それを遮るようになこさんが無然と

言った。

に「それよりも早く接客して頂戴！」

になこさんに言われて接客に戻る僕達。

ことりちゃんはもちろん、僕と貴利矢さん、穂乃果はそこそこできるようになっているが、海未ちゃんはまだ慣れていないのか、視線を店内のあちこちの泳がせている。

まあ、海未ちゃんは恥ずかしがりだしね。

このような接客業が上手くできないのは仕方ないだろう。

そうこうしている内に、キッチンに入ってしまった。

すっかりこの仕事に慣れていることりちゃんは、新しく来たお客さんの対応をしていた。

花「流石、伝説のメイド・・・」

凜「ミナリンスキー・・・」

ことりちゃんの接客を初めて見た花陽ちゃんと凜ちゃんが、ことりちゃんに尊敬の眼差しを送る。

店は最初に比べてだいぶ混んで来たが、慌てることなく仕事をこなし、何よりとても楽しそうだ。

永「ことりちゃん、ここにいと楽しそうだね」

こ「え？」

近くで接客をしていた穂乃果ちゃんも会話に加わる。

穂「うん！生き生きしてるよ!!」

ことりちゃんは少しだけ驚いた顔をするが、すぐに
こ「うん！」

と穏やかな笑顔を浮かべる。

こ「何かね、この服を着ていると、できるって言うか……。この街に来ると、不思議と勇気が貰えるの。もし思いつ切って自分を変えようとしても、この街ならきつと受け入れてくれる気がする。そんな気持ちにさせてくれるんだ。だから好き」

ことりちゃんが楽しんでいる様子が嬉しいのか、穂乃果ちゃんも楽しそうに笑う。
そこで、僕はある事に気付いた。

永「ことりちゃん、今のだよ!!」

こ「え?」

永「今ことりちゃんが言った事を、そのまま歌にすればいいんだよ。この街を見て、友達を見て、色んな物を見て、ことりちゃんを感じた事、思った事。ただそれをそのまま歌に乗せるだけでいいんだよ！」

僕の言葉を聞いて穂乃果ちゃんもハツとする。

穂「そうだよ、ことりちゃん! 永夢君の言う通りだよ!!」

それを聞いたことりちゃんは

こ「っ!! うん！」

と元気よく頷いた。

これでなんとか歌詞もできるだろう。

そう思っていると……

『キャアアアアアア!!』

「「「っ!?!」」」

店の外から叫び声が聞こえて来た。

僕と貴利矢さん、飛彩くん、大我さんの4人はすぐに店を出る。

外では、僕らの予想通りバグスターが暴れていた。

ただ一つ、今までと違う部分がある。

永「っ!いきなり分離している!?!」

本来なら、バグスターは最初は患者を取り込んでバグスターユニオンになる。

実際、今までずっとそうで、最初は患者とバグスターの分離からやっていた。

なのに、今日の前にいるバグスターはいきなり分離した状態で暴れていた。

「んん？・・・おお、また会ったな、仮面ライダーよ！」

永「お前は・・・ソルティ！・・・あれ？でも、最初に戦った時と帽子が違う・・・」

「ふっふっふ・・・私はレベルアップしたのだよ！今の私のレベルは3！」

飛「なんだと・・・」

大「とにかく、さっさとバグスターをぶっ倒すぞ」

貴「ああ」

『マイティアクションX』

『タドルクエスト』

『バンバンシューティング』

『爆走バイク』

「「「変身!!」」」

『I, m a 仮面ライダー』

エ「最初からレベルアップだ！大変身！」

ブ「術式レベル2」

ス「第貳戦術！」

『『ガツチャクン！レベルアップ！』』

『マイティマイティアクションX！』

『タドルクエスト！』

『バンバンシューティング！』

俺とブレイブ、スナイプの3人はレベル2にレベルアップする。

レーザーはレベルアップしたらバイクになってしまうから、そのままレベル2だ。

『ガシヤコンブレイカー！』

エ「行くぜえ！おりゃ！」

俺はガシヤコンブレイカーをハンマーモードのまま、ソルティに攻撃する。

そして、その攻撃はソルティに当たった。

だが、全くと言っていいほど聞いていないらしい。

エ「!?な、なに!？」

「ふん。最初に言っただろう。今の私はレベル3だと！」

エ「ぐわああ!!」

俺はソルティに殴られ飛ばされる。

ブ「永夢さん!?!・・・くっ!」

『ガシヤコンソード!』

ブレイブがガシヤコンソードを装備してソルティに立ち向かっていくが、その攻撃は左手でガードされてしまう。

「はっ!!」

ブ「ぐわあ!」

エ「ブレイブ!!」

ブレイブも俺と同じように投げ飛ばされる。

ス「これならどうだ!」

レ「オラオラ!!」

スナイプとレーザーが同時に狙撃していく。

だが、やはりソルティには効いてないらしく、全く怯む様子がない。

「貴様らレベル1や2の攻撃など、今の私に効くわけがないだろう!」

ス「くっ!?!」

レ「やっぱり意味ないか・・・あっ」

スナイプとレーザーの攻撃も効かず、打つ手無しかと思ったその瞬間、レーザーが何かを思い出したかのような声をあげる。

エ「どうしたんだ、レーザー」

レ「すっかり忘れてたぜ、お前らへの渡しものを。ほれ」

そうやって、レーザーは俺とブレイブ、スナイプにガシヤットを投げて渡す。

エ「!ガシヤット!」

ス「なんでお前が持っていたんだ」

レ「まあまあ、いいじゃんその事は。さっさとこの戦いを終わらせようぜ」

レーザーはそういうと、黒いガシヤットを取り出す。

ちなみに、俺に渡されたガシヤットは赤、ブレイブのはレーザーの爆走バイクより明るい黄色、スナイプのはオレンジ色をしていた。

なんでレーザーがこれを持っているのか。

気にはなるが、今はバグスターを倒す方が優先だと考え、ガシヤットを起動する。

『ゲキトツロボッツ』

『ドレミファビート』

『ギリギリチャンバラ』

『ジエツトコンバット』

一度ゲーマドドライバーのレバーを閉じ、起動したガシヤットを空いているもう一つの窪みに装填する。

『『『ガシヤット!!』』』

エ「大大大変身!!」

ブ「術式レベル3！」

ス「第参戦術！」

レ「三速！」

再び、レバーを展開する。

『『『ガツチャ〜ン！レベルアップ!!』』』』

『マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクションX！アガツチャ！ぶっ飛ばせ！突撃！ゲキトツパンチ！ゲキトツロボッツ！』

『タドルメグル！タドルメグル！タドルクエスト〜！アガツチャ！ド・ド・ドレミファソラシド・ソ・ラ・シ・ド！OK！ドレミファビート！』

『ババンバン！バンババン！バンバンシューティング！アガツチャ！ジエツト！ジエツト！イン・ザ・スカイ！ジエツトジエツト！ジエツトコンバツト！』

『爆走・独走・激走・暴走！爆走バイク！アガツチャ！ギリ！ギリ！ギリ！ギリ！チャンバラ〜！』

穂「あつ、食べた!?!」

絵「ハラショー！」

近くで見ていた穂乃果達も驚愕する。

それもそのはず、レベルアップの際、レーザー以外の全員が出てきたゲーマーに食わ

れるように装着していったのだから。

起動時に出現するゲーム画面からそれぞれのゲームマーが出現し、黒いエグゼイドのよ
うに装備されていく。

俺は赤いアーマーが装備され、左手にロボットの拳のようなものがつく。

ブレイブには黄色のアーマーで、右手にディスク、左肩にスピーカー、まるでDJの
ような姿になっている。

スナイプにはオレンジ色のアーマー、背中には翼があり、両手にはガトリング砲が装
備される。

レーザーには黒いアーマー、レベル2とは違い両手両足があり、鎧武者のような人型
になる。

レ「ふうく・・・やくと人型になれたぜ」

ス「これがレベル3か・・・」

ブ「力がみなぎる・・・」

エ「よし、これならいける！」

『ガシャコンスパロー！』

俺とブレイブの二人はソルティの近づき、スナイプは空を飛び、レーザーは弓矢のよ
うな武器を装備する。

俺は左手でソルティを殴り、ブレイブは右手のディスクを操作して音楽を鳴らし、リズムに合わせて攻撃していく。

「くっ!?小癩な!」

ソルティは攻撃しようとするが、上からスナイプの銃撃が降り注ぎ、俺達の後ろからレーザーの狙撃が来る。

「ぐはああ!」

先ほどまで優勢だったソルティは、俺達がレベルアップして事により、一気に劣勢になる。

凜「凄いにや〜!」

真「この調子ならいけるわ!」

エ「よっしゃ!このままゲームクリアだ!」

このまま行けば勝てる。

その場にいた誰もがそう思った。

だからこそ、陰からこの戦いを見ている人物に気づかなかった……。

永夢 side out

.....

© side

永夢達が戦ってる場所のすぐ近く。

そこでは、黎斗がその戦いを見ていた。

彼の腰には、永夢達が使っているゲーマドライバーが装着されていた。そんな黎斗に二人の人影が近づく。

「よお、行くのか?」

黎「パラドとグラフィアイトか。無論、データ収集のためにな・・・」

グ「ふっ、ならば俺も行かせてもらおう」

パ「だったらグラフィアイト、こいつも持っていけ」

そう言つてパラドは、普通のガシヤットと違い、黒い特殊な形状をしたガシヤットをグラフィアイトに渡す。

黎「!?・・・なぜ君がそれを持っている!?!」

パ「お前が保管しているガシヤットの中から拝借してんだよ」

黎斗が驚いたように言うが、パラドはなんでもないように平然という。

パ「それに・・・」

黎「?」

パ「そつちの方が楽しそうだしな♪」

黎「はぁ・・・実に君らしい」

黎斗は一度ため息をつくが、パラドらしいと思い、落ち着く。

グ「そろそろ行くぞ。ソルティもやられかけている」

黎「・・・ああ」

『マイティアクションX』

黎斗は持っていた紫色のガシヤット、『プロトマイティアクションXガシヤット』を起動し、グラフィイトはバグヴァイザーのAボタンを押す。

黎斗はガシヤットを指に引っ掛けるように持ち、前に持つてくる。

黎「変身」

グ「培養」

『ガシヤット!』

『インフェクション!』

『レッツゲーム!メツチャゲーム!ムツチャゲーム!ワツチャネーム!?! I, m a 仮面ライダー!』

『レッツゲーム!バッドゲーム!デッドゲーム!ワツチャネーム!?! ザ・バグスター!』

黎「グレード2」

『ガツチャ〜ン!レベルアップ!マイティジャンプ!マイティキック!マイティ〜アク

シヨ〜ンX!』

レベル2にレベルアップした黎斗が変身しているライダー。

その姿は、今までエグゼイド達の前に現れ、何度も戦いその実力を見せてきた謎のライダー。

黒いエグゼイド、『仮面ライダーゲンム』だった。

ゲンムとグラフィアイトは歩いてエグゼイド達とソルテイの間に割って入る。

エ「!・・・黒いエグゼイド!」

ス「グラフィアイトもか・・・」

ゲ「・・・」

『シャカリキスポーツ』

ゲンムはシャカリキスポーツガシャットを起動し、ゲームドライバーに装填する。

『マイティ〜アクシヨ〜ンX!アガツチャ!シャカリキスポーツ!』

ゲンムもエグゼイド達と同じように、レベル3になる。

グ「これでも喰らえ!はああ・・・」

グラフィアイトは持っていたグラフィアイトファンクにエネルギーを貯めていく。

グ「激怒竜牙!!」

グラフィアイトは十字の剣戟を放つ。

以前、スナイプに向けて放ったものと、同じ技だ。

エ「はっ!？」

ブ「くっ!」

レ「よつと!」

『透明化!』

地上にいたエグゼイド、ブレイブ、レーザーの3人に剣戟が向かって行く。

それを見た瞬間、レーザーは近くにあった透明化のエンジーアイテムを使用する。

それにより、レーザーには当たらず、エグゼイドとブレイブに直撃する。

だが、レベル3にアップした二人の防御力は上がっていて、直撃はしたが倒されることはなかった。

エ「おりや!・・・ふー、なんとか耐えられたぜ!」

ブ「ふっ・・・これより、グラフィイト、及び黒いエグゼイドの切除手術を開始する!」

エ「ああ!ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!」

ス「ミッション開始!」

エグゼイドがゲナムに、ブレイブとスナイプがグラフィイトに立ち向かって行く。

.....

エグゼイドは一人でゲンムと相対している。

エ「今日こそお前の招待を暴いてやる！」

『ステージセレクト』

エグゼイドはステージを選択し、ゲンムもろとも別の場所へと転移する。

エグゼイドが選んだステージ、そこはスクラップ工場だった。

エ「……………」

ゲ「……………」

しばらく睨み合う両者。

その間に沈黙が訪れる。

ゲ「……………！」

先にゲンムが動きだす。

ゲンムは走ってエグゼイドに向かっていき、最初に飛び蹴りをかます。

エグゼイドはそれを左腕の『ゲキトツスマッシュャー』で殴り返す。

エグゼイドの攻撃を受け、ゲンムは少し後退するが、すぐに右肩のタイヤ部分で反撃しようとする。

だが、それも防がれ、再びゲキトツスマッシュャーの攻撃を受ける。

エ「フツ！オリヤ！ハツ!!」

ゲ「・・・！ムッ！くっ！」

エ「ハアアア!!」

再び攻撃を受けるゲンム。

今度は大きく後退する。

攻撃をしたエグゼイドは流れるようにゲキトツロボツツのガシャットをゲーマドライバーから抜き、キメワザスロットに装填する。

『ガシャット!』

そのままゲキトツスマツシャーでスイッチを押す。

『キメワザ!』

それを見てゲンムは腰を低くして構える。

エグゼイドはもう一度スイッチを押す。

『ゲキトツ・クリティカルストライク!』

エグゼイドも腰を低くし、左手の構える。

ゲキトツスマツシャーには赤いエネルギーが溜まっていく。

エ「ハッ!!」

エグゼイドは左手を大きく振りかぶってゲンムがいる方向に突き出す。

すると、ゲキトツスマツシャーはエグゼイドの左手から外れ、ゲンムに向かっていく。

ゲムムはゲキトツスマツシャーに押されていき、壁に激突する。

エ「はああああ・・・」

エグゼイドはゲムムに向かって走っていき、再びゲキトツスマツシャーを殴るように左手にはめる。

エ「はあ!!」

すると、殴られた場所を中心に、大きな爆発が起きる。

エグゼイドの周りは煙に包まれ、しばらく見えなくなる。

やがて煙が晴れる頃にはゲムムがいた場所には誰もいなかった。

エ「はあ、はあ・・・あれ？」

エグゼイドはゲムムがいないことに気がつく、急いで辺りを見渡す。

そこで、自分の後ろにゲームドライバーを装着した一人の青年がいることに気づく。

エ「?お前は・・・?」

その青年・・・パラドはエグゼイドの方を見ると、不敵な笑みを浮かべる。

パ「楽しいゲームだったよ。また遊ぼうな」

そう言つて、パラドはその場を去つて行った。

・・・

ゲームエリアを離脱したパラドはそこから少し離れた場所に移動する。

そこには、ゲンムの正体である黎斗が座っていた。

パ「運命つてのはパズルだ」

その黎斗にパラドは歩きながら話す。

パ「ピースを一つ入れ替えれば、真実すらも闇の中・・・」

パラドはプロトマイティアクションXガシャットを見ながらそう語り、持っていたガシャットとゲームドライバーを黎斗に渡す。

黎「・・・ああ」

黎斗はゲームドライバーとガシャットを受け取りながら返事をした。

・・・

エグゼイドがゲンムと戦っている頃・・・

ブ「ふっ！はっ！」

ス「おらおら！」

グ「ぐっ！はあ！」

ブレイブとスナイプが二人でグラフィアイトに挑んでいた。

ブ「行くぞ」

ブレイブが右手のディスク、『ドレミアアターテーブル』をスクラッチ操作して音楽を流す。

そして、その音楽のリズムに合わせて攻撃していく。

ブ「はああ！」

グ「ぐはっ！・・・くっ、先ほどよりも攻撃力が上がってるだど!？」

ス「おい！余所見してていいのか!？」

グ「!?!・・・くっ!」

グラフィアイトがブレイブに気を取られていると、上空からスナイプのガトリング砲、『ガトリングコンバット』の光弾が降り注ぐ。

ブ「ふっ!」

ス「おら!」

グ「ぐっ・・・ぐわああ!!」

地上からはブレイブの攻撃が、上空からはスナイプの銃撃が来て、グラフィアイトは何もできずにいた。

グ「これが、レベル3の力か!？」

グラフィアイトはただレベル3の力に驚くだけだった。

『コ・チーン!』

ブ「ふっ、はっ!」

ブレイブはガシヤコンソードを氷剣モードにして、地面に刺す。

すると、氷が地面を伝ってグラファイトに近づき、下半身を完全に凍りつかせる。

グ「くっ！・・・何!？」

ブ「そろそろ決める」

ス「これでミッションコンプリートだ！」

『『ガシヤット!』』

ブレイブはドレミファビートガシヤットをガシヤコンソードに、スナイプはキメワザスロットにジェットコンバットガシヤットを装填する。

『『キメワザ!』』

すると、ガシヤコンソードの剣先に音符型のエネルギーが貯まり、スナイプは動けないグラファイトをロックオンする。

『ジェット!クリティカルストライク!』

ス「はあああ・・・はああ!!」

スナイプはグラファイトに照準を定め、一気に射撃する。
グ「ぐっ!ぐわ!ぐはああ!!」

動けないグラファイトは受けるしかなく、最初の方はグラファイトフアングで弾いたが、やがて対処できなくなっていく、最終的には直撃する。

そして、そんなグラファイトを狙う人物がもう一人。

『ドレミファア！クリティカルフィニッシュ！』

ブ「はあああ!!」

グ「ぐわあああああああ!!」

ブレイブの斬撃を受け、グラファイトは倒れ、変身が解除される。

グ「くっ！ここまでか・・・」

そう言つて、グラファイトはその場から消える。

ス「・・・やっとな」

ブ「ああ・・・」

・・・・・・・・

二つの戦いが始まった時、

「あ、あれ？我輩は・・・？」

完全にほつとかれてるソルティがいた。

「むっ？あれは・・・」

そんなソルティは近くで戦いを見ていたμ，sメンバーに今更だが気づいた。

「ちようどいい！奴らを人質にして、仮面ライダーどもを・・・！」

に「？・・・ちよ、ちよつと！私達、狙われてるわよ！」

『ええ!?!』

自分達が標的にされている事にこが気づき、他のみんなが驚きの声をあげる。

「ふっふっふ．．．」

花「い、急いで逃げなきゃ．．！」

凜「でも、どこにや〜!?」

絵「どこでもいいから、今はこの場を急いで離れるわよ！」

絵里がみんなをまとめて、その場を離れようとする。

そんな時．．．

レ「あらよつと！」

「ぐはっ〜！」

穂「あっ！貴利矢君！」

透明化のエナジーアイテムを使って透明になっていたレーザーが姿を現し、ソルティ

に攻撃する。

レ「なあんか、みんな俺の事忘れてなかった？」

『(ぎくっ!)』

レ「その反応．．．凶星だな」

レーザーの言葉に思わずぎくつとするメンバー。

レ「まあいい。俺はさっさとソルティを倒すだけだしな」

「我輩を・・・倒すだど!？」

レ「ああ」

そう言うのとレーザーはガシヤコンスパローのAボタンを押して弓モードから鎌モードに変形させる。

『ス・パーン!』

レ「ああ、俺近接もできるんで」

そう言うのと、すぐに切りつき始めるレーザー。

ソルティはどんどん斬撃攻撃を受けていく。

レーザーは回し蹴りを放ち、ソルティを飛ばす。

レ「さあて、これで終わりだ」

『ズ・ドーン!』

再びガシヤコンスパローを弓モードに変形させる。

『ガシヤット!』

そして、ギリギリチャンバラガシヤットをガシヤコンスパローに装填する。

『キメワザ!』

エネルギーが貯まり始めているガシヤコンスパローをソルティの方に向け、ゆつくりとその引き金を引く。

『ギリギリ！クリティカルフィニッシュ！』

すると、大量の弓矢が一齐にソルティに向かっていく。

「はっ、へっ、ちよっ！」

ソルティが立ち上がった時にはもう遅く、弓矢は目の前まで迫っていた。

「ぐわあああああ!!」

結局、ソルティは何もできずにそのまま爆発した。

『ガッシューン』

貴「ふい〜終わった終わった。お前ら、大丈夫か？」

穂「あつ、うん！私達は大丈夫だよ！」

永「みんな！」

海「永夢！」

大「無事にそつちの戦いも終わったみたいだな」

絵「大我！」

真「こつちも終わった」

真「飛彩・・・」

そこに、それぞれの戦いを終えた永夢達が合流する。

貴「どうやら全員無事みたいだな」

こ「よかった・・・」

全員無事だと分かり、安堵することり。

それは、声にこそ出してないが、他の皆も同じだった。

永「さて、無事に戦いも終わったわけですし・・・片付けでもしましょう」

『ええ・・・』

永「ええ・・・じゃないですよ！なんでこの場所で戦ったんですか!？」

永夢はそうツツコミを入れる。

実際、先ほどの戦いでステージセレクトをしたのは永夢だけで、他のみんなはこの場でそのまま戦っていたのだ。

結局、絵里と海未にも言われ、片付けを始める貴利矢達だった。

◎ side out

・・・・・・・・

永夢 side

あの戦いから数日。

夕焼けの中、ことりちゃんの曲でライブが始まる。

今回のセンターのことりちゃんが歌い始める。

(♪: Wonder Zone)

.....

ライブが終わり、2年生組は神田明神に来て、夕日を眺めていた。

永「ライブ、無事に終わってよかったね♪」

穂「そうだね、ことりちゃんのおかげだよ！」

こ「そ、そんなことないよ……。みんながいてくれたから、みんなで作った曲だから……」

貴「だとしても、あの曲はことりの思いがそのままノッている曲だ。確かに、他のみんなも手伝いはしたが、あの曲を作ったのは他でもない、ことりだ。そこは誇ってもいいと思うぜ」

こ「貴利矢君……そうかな？」

貴利矢さんに褒められて照れることりちゃん。

穂「ねえ、こうやって並んでいると、あの時のこと思い出さない？」

永「あの時？もしかして、ファーストライブの時のこと？」

穂「うん！」

貴「ああ、俺がまだいなかったときか」

永「貴利矢さんは転校してくる前でしたからね」

海「そうですね。あの時は穂乃果に私、ことりと永夢しかいませんでしたからね……」
海末ちゃんの言葉に同意するように頷く穂乃果ちゃんとことりちゃん。

こ「私達つて、いつまで一緒にいられるかな……？」

海「ことり……？」

穂「ことりちゃん？ どうしたの急に？」

ことりちゃんの突然の発言に驚く僕達。

こ「だって後2年も経たない内に高校生活も終わっちゃうでしょ？」

海「それは仕方のないことですが……」

穂「大丈夫だよ！ ずーっと、一緒だよ！ だって私、これからもずつとずつと、ことりちゃんや海末ちゃんと一緒にいたいと思ってるもん！ 大好きなんだもん！」

穂乃果ちゃんがことりちゃんの肩を掴んで、そう叫ぶ。

こ「穂乃果ちゃん……」

海「穂乃果……」

穂「これからもずーっと一緒だよ！」

こ「……うん！」

海「はいっ！」

穂乃果ちゃんの言葉に、元気よく頷くことりちゃん和海未ちゃん。僕も、この幸せがいつまでも続いて欲しいと思つた。

だけど、そううまくいかない事を僕らはまだ知らなかつた。

この幸せを引き裂く、悪夢のような出来事が起こる事を・・・。

第25話 強襲!ダークグラフィイト!

永夢 side

秋葉でのライブから早数日。

今日は海未ちゃんと穂乃果ちゃんがCRに遊びに来ていた。

ことりちゃんやんはバイトがあり、貴利矢さんも用事があるらしくて来ていない。

ここ最近、貴利矢さんがいない事が多いけど、どうしたんだろう？

海「CRに来るのは久しぶりですね」

穂「相変わらず広いね」

海未ちゃんの言う通り、二人はCRに来るのはかなり久しぶりだ。

明「二人共、久しぶりね」

海「明日那さん、お久しぶりです」

穂「こんにちは〜!」

明「この間のライブ、見に行つたわ。すごくよかつたよ!」

穂・海「ありがとうございます!」

ライブの前日に、僕が明日那さんに伝えといたため、秋葉でのライブに来ていたのだ。

他にも観客はたくさんいた。

数日前に戦いの場になった場所だったけど、それでもかなりの人が来ていた。

明「そういえば永夢、この間の戦いでレベル3のガシヤットを使ったんだって？ どうだった？」

ふいに、明日那さんがそう聞いて来る。

永「レベル3ですか？ そうですね・・・明らかに今までとは違うって感じでした。当たり前ですけど、レベル2よりも力が出て来ました。だけど、その分レベル2より、多少体に負担がかかっていますかね」

僕の言葉を聞くと、明日那さんは納得したように頷く。

明「確かに、レベルが上がると、その分体に負担がかかるわ。でも、それを自覚できてるのなら良かった。あまりその力に過信しすぎると、いずれ足をすくわれるからね」

明日那さんの言葉に僕は納得する。

黒いエグゼイドと同じようにレベル3の力を手に入れたけど、それでもまだあつちの方が強い・・・。

この間は勝てたけど、多少手加減されてた気がする。

これからも、しっかり特訓はしないとね・・・。

永「あつ、そういえば……」

僕は懐からあるガシヤットを取り出す。

そのガシヤットは、いつものガシヤットとは違い、下の部分がドラゴンの頭のような形状になっている金色のガシヤットだった。

ラベルには『ドラゴナイトハンターZ』と書かれている。

このガシヤットは、この間の戦いの後、貴利矢さんが渡して来た。

なんでも、レベル3のガシヤットと一緒に渡されたらしい。

結局、誰からもらったのかは言ってくれなかったけど、おそらく神様だろう。

海「永夢、そのガシヤットは？」

永「さあ……? 貴利矢さんが渡して来たんだけど、まだ使った事はないし……。なんでも、『レベル5』の力が秘められてるらしいんだ」

穂「普段のガシヤットと形状も違うね。なんかカッコいい!」

穂乃果ちゃんも興味津々みたいで、すごく見ている。

と、その時……

『ムムムムムムムム』

永「!?!? ゲーム病反応!?!」

持っていたゲームスコープが鳴り出し、ゲーム病患者の場所を示す。

永「これは……UTX学院!」

穂・海「「ええええ!」」

明「と、とにかく急いでいかなきゃ!」

永「あ、ああ、そうだった。行つて来る!」

海「あつ、私も行きます!」

穂「待つてよ、海未ちゃん!」

明「えつ、ちよつ、二人共!」

僕が急いでCRから出て、海未ちゃんと穂乃果ちゃん、明日那さんも付いて来る。

・
・
・
・
・
・
・
・

永「はあ、はあ……着いた!」

海「見た所、以上は見当たりませんが……」

穂「ふ、二人共……早いよ……」

海「だらしないですよ、穂乃果。普段から走つてるでしょう!」

穂「だ、だからつて、遠すぎるよ……」

明「二人共、今はそれよりも患者を探して!」

CRから走って数分。

僕達はUTX学院に到着した。

周りを見ても特に以上は見当たらない。

『きゃああああああ!!』

永「!?」

穂「い、今の悲鳴、どこから!？」

海「こつちです!」

悲鳴が聞こえた方向に海未ちゃんが走っていく。

追いかけると、目の前に階段が現れる。

永「もしかして、地下から?」

穂「だから地上じゃ分からなかったんだね」

明「話してる暇なんかないでしょ!急いで行くよ!」

永「あつ、はい!」

僕達は急いで階段を降りる。

そこでは、一人の少女を襲っているバグスターウイルスに襲われていた。

永「危ない!」

『マイティアクションX』

永「変身！」

『I, m a 仮面ライダー!』

エ「大変身!!」

『マイティマイティアクションX!!』

エ「おりゃ!!」

俺は急いでバグスターウイルスを蹴飛ばし、襲われていたおでこが出ている少女に声をかける。

エ「急いで逃げろ!とにかくここから離れるんだ!」

「えっ、あつ、はい!」

俺がそう言うと、すぐに走り去って行く。

「来たのはエグゼイドか……」

エ「!……グラフィイト……」

声が出た方を見ると、人間態のグラフィイトがいた。

グ「ふっ……まあい。お前に俺の新たな力を見せてやる!」

そう言うと、グラフィイトは懐から黒いガシヤットを取り出す。

そのガシヤットは、ドラゴナイトハンターZガシヤットと同じ形状をしていた。

エ「?……なんだそのガシヤットは?」

明「あれは……まさか、プロトガシヤット!?!」

グ「ふっ……」

『ドラゴナイトハンターZ』

グラフアイトがガシヤットのスイッチを押すと、後ろにモノクロの画面が現れる。

グ「培養!」

グラフアイトは起動したそのガシヤットを自分に差すように取り込む。

すると、グラフアイトの体は粒子に包まれ、やがて晴れて怪物の姿になる。

だが、姿こそは今までと変わらないが、その色は緑色から黒色に変わっていた。

エ「!?!? ……なんだその姿は!?!」

グ「今の俺の名は、ダークグラフアイト!」

グラフアイトはそう宣言すると、グラフアイトフアングを高らかに掲げる。

グ「行くぞ……エグゼイド!」

その瞬間、グラフアイトは一気に俺に近づく。

エ「なっ、早い!?!」

グ「ふん!」

グラフアイトは俺を横に切り裂く。

エ「ぐあ!」

俺は攻撃を受け横に飛ばされる。

グ「まだまだ！ふん！」

エ「ぐっ！ぐはああ！」

グラフィイトは俺に隙を与えないように、連続で攻撃して行く。

エ「くっ！こうなったら・・・」

『ゲキトツロボッツ』

エ「大・大・大変身!!」

『マイティマイティアクションX！アガツチャ！ゲキトツロボッツ！』

エ「これならどうだ！」

俺はゲキトツロボッツガシヤットを使ってレベル3になり、グラフィイトを殴る。

グ「・・・ふん」

エ「なっ、何!？」

俺の攻撃は確かにグラフィイトに命中したが、グラフィイトはなんでもなしのように平然としている。

グ「今の俺に、レベル3の力は通用しないぞ！はあ！」

エ「ぐっ！」

俺は頬を殴られ飛ばされる。

海「永夢!」

海未が駆け寄ってくる。

明「レベル3が通用しないなんて……!」

穂「ど、どうすれば!」

今のグラフィイトにレベル3は通用しない。

それが分かった今、このまま戦っても意味がない。

そこで、俺はあるガシヤットの事を思い出し、取り出す。

海「!……永夢、それは」

エ「……海未、危険だから離れてろ」

海「は、はい……」

俺の言葉を聞くと、海未は穂乃果達のところに行く。

エ「レベル3がダメなら、このガシヤットならどうだ!」

俺はそういうと、取り出したガシヤット、『ドラゴナイトハンターZ』を起動する。

『ドラゴナイトハンターZ』

すると、後ろのゲーム画面から、ドラゴンの姿をしたゲーマー、『ハンターゲーマー』が出現する。

『ガッシュン!ガシヤット!』

俺はゲーマドライバーからゲキトツロボツを抜き、代わりにドラゴナイトハンターZガシヤットを装填する。

エ「大・大・大・大・大変身!!」

『ガツチャ〜ン! レベルアップ!』

レバーを開くと、デイスプレイが現れ、俺を通過すると同時に上空を旋回していたハンターゲーマーが分解されて両腕、両足、胸、顔に装着されていく。

『マイティジャンプ! マイティキック! マイティマイティアクシオンX! アガツチャ! ド・ド・ドラゴ! ナ・ナ・ナ・ナ・ナ! ドラ! ドラ! ドラゴナイトハンター! Z!』
右腕にはブレード、左腕にはガン、両足にはクロー、頭部にはフアングが装備され、ドラゴンのような外見になる。

エ「・・・くっ、ぐはっ、ぐわあああああ!!」

変身が完了した瞬間、俺の体に電気が走り、苦しみだす。

『永夢(君)!!』

その光景に、海未達は驚くしかなかった。

グ「ふっ、どうやらまだレベル5の力を制御できてないみたいだな」

エ「くっ、ぐっ!」

俺はどうか体を動かそうとするが、体は言う事を聞かず、暴れ出す。

明「!危ない!!」

穂・海「「きや!!」」

グ「ふっ、そろそろ終わりにしてやる」

グラフィイトはグラフィイトフアングを振り回し始める。

グ「喰らえ!ドドド黒龍剣!!」

グラフィイトフアングから飛ばされた黒いカッターが連続で飛んできて俺に直撃する。

エ「ぐわあああああ!!」

『ガッシューン』

その瞬間、変身が解除され、意識が薄れていく。

グ「この程度か。まだまだだな・・・」

薄れゆく意識の中、最後に見たのはそう言って去っていくグラフィイトだった。

第26話 先輩禁止！

永夢 side

グラフィイトとの戦いに敗北してから数日。

ここ最近は暑い日が続いてる。

ニユースの天気予報でも、連日猛暑を伝えている。

だけど、そんな日が続いてもμ'sの練習はなくなるならない。

練習場所は屋上のままなので、僕達マネージャー組はμ'sメンバーの熱中症対策をしなければならぬ。

だけど……、

に「あつつい……」

穂「そうだね……」

なにぶんこの暑さ。

日陰がない屋上は日が直接当たっていて、地面は日光を吸収していて通常よりも熱くなっている。

そんな状態の屋上に最初に出たにこさんと穂乃果ちゃんは、入り口の所で引きつった

笑みを浮かべて、猫背になっている。

に「つていうか、バカじゃないの!?!この暑さの中練習とか!?!」
にこさんが最もな文句を言ってくる。

絵「そんな事言つてないで、早くレッスンするわよ!」

花「は・・・はい・・・」

絵里さんの言葉に、花陽ちゃんが凜ちゃんの後ろに隠れる。

絵「あつ・・・。花陽、これからは先輩も後輩もないんだから。ね?」

花「はい・・・」

絵里さんそう言うが、そう簡単には抜けきらないものだ。

穂「そうだ!合宿行こうよ!」

突然穂乃果ちゃんがそう提案する。

永「合宿?」

に「急に何言い出すのよ?」

穂「ああ!!なんでこんな良い事早く思いつかなかつたんだろう!!」

手を合わせながら言う。

凜「合宿かあ・・・。面白そうにや!」

希「そやね!」

飛「それでしたら、真姫なら別荘持っているんで、いけるんじゃないですか?」

真「ヴェエエ!」

飛彩君が代案を出し、矛先を向けられた真姫ちゃんが驚きの声をあげる。

当然、穂乃果ちゃんはすぐに真姫ちゃんの所へ。

穂「えっ!?! 本当!?! 真姫ちゃん、おねが〜い!」

穂乃果ちゃんは真姫ちゃんに頬ずりしながらお願いする。

真「ちよつと待って! なんでそうなるの!?!」

絵「そうよ。いきなり押しかけるわけにはいかないわ」

真姫ちゃんと絵里さんが待ったをかける。

ちようどその時、飛彩君はどこかへかけていた電話を切る。

飛「今、真姫のお父さんに聞いたら、構わないらしい」

穂・凜「やった〜!!」

真「ちよつ、飛彩! 何勝手に・・・!」

飛「許可はもらったんだ。問題ないだろう」

真「そ、そうだけど・・・、ああ! もう、分かったわよ!」

結局、真姫ちゃんが折れた。

絵「フフ♪ あつ、そうだ。・・・この機会にやった方が良くいわね♪」

その言葉を聞いて、全員が絵里さんの方を見るが、絵里さんは「ふふ♪」と笑うだけだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

合宿が決定してから数日。

僕達は今東京駅のドームの中に集まっていた。

穂「えええええ!?先輩禁止!?!」

穂乃果ちゃんがそう叫ぶ。

その原因は、絵里さんの提案だ。

絵「前からちよつと気になっていたの。先輩後輩はもちろん大事だけど、踊っている時にそういう事を気にしちや駄目だから」

絵里さんのこの言葉に同意したのは、

海「そうですね」

海未ちゃんだ。

海「私も三年生に合わせてしまうところがありますし」

に「そんな気遣い全く感じないんだけど」

に「こさんが不満気に言う。」

凜「それはにこ先輩が上級生って感じがしないからにや」

凜ちゃんがさらりと言ってしまった。

に「上級生じゃなきゃなんなのよ」

凜「んく……後輩？」

穂「ていうか、子供？」

希「マスコットかと思つてたけど」

に「どういう扱いよ!？」

凜ちゃん、穂乃果ちゃん、希さんの答えにツツコミを入れるにこさん。

正直、あまり先輩感はないけどね……。

絵「じゃあ早速、今から始めるわよ……穂乃果」

早速、穂乃果ちゃんにふる絵里さん。

穂「はい。いいと思います。え……絵里ちゃん!」

それを聞いた絵里さんは満足そうに頷く。

穂「ほお……なんか緊張……」

穂乃果ちゃんはホツと胸を撫で下ろす。

凜「じゃあ、凜も!」

拳手した凜ちゃんは深呼吸する。

凜「ことり……ちゃん?」

こ「はい。よろしくね、凜ちゃん。真姫ちゃんも・・・」

ことりちゃんと言うと、真姫ちゃんにみんなの視線が集まる。

真姫ちゃんは顔を赤くしながら腕を組む。

真「べ、別に、わざわざ呼んだりするもんじやないでしょ？」

どうやら真姫ちゃんは恥ずかしいようだ。

あまり無理強いするわけにもいかないの、絵里さんは視線を真姫ちゃんから僕らに変えた。

絵「それじゃあ、宝生君達も。つと言つても、宝生君は今まで通りでも特に問題はないわね。他の二人にやってみたらおうかしら。できれば、名前でね」

僕は普段から名前で呼んでいるので今まで通りだが、貴利矢さんと飛彩君の二人は普段苗字で呼んでいたの、絵里さんは二人の方を見る。

貴「何？絵里？」

貴利矢さんは掛けていたサングラスを下にずらして絵里さんの名前を呼ぶ。

飛「絵里？」

飛彩君も問題無く普通に名前を呼ぶ。

絵里さんは満足そうに頷く。

大「ああ、そうだ。先に言っておくが、俺達マネージャー組はお前達が練習をしてい

る間、少し離れた場所で特訓をさせてもらう」

絵「えっ? 特訓?」

大「ああ。なんでも、敵も新たな力を身につけてたらしいからな」

大我さんが言ってるのは、おそらくグラフィットの事だろう。

この間の戦いの事はすでに伝えた後だからね。

絵「そう。分かったわ。・・・それでは、今から合宿に行きます。まずは顧問の黎斗先生から」

絵里の言葉に、みんなが後ろにいた黎斗先生を見る。

黎「先ほどから話掛けられなかったから、忘れられてるのかと思ったぞ・・・。さて、諸君。私は学校の仕事が残っているから合宿にはついていけないが、十分に気をつけて行つてきてくれ。私からは以上だ」

黎斗先生はそう締めくくる。

絵「それじゃあ、次に・・・部長の矢澤さんから一言」

突然振られたにこさんは

に「えっ!?! 私!?!」

戸惑いながら自分を指差す。

にこさんは僕達を中心に歩いていき・・・

に「しゅ、しゅっぱーっ!!」

それだけ言って、沈黙が訪れる。

穂「・・・それだけ?」

に「考えてなかったのよ!」

ですよね・・・。

そのまま黎斗先生に見送られながら、僕らは電車に乗った。

永夢 side out

・・・

© side

永夢達を見送った後、黎斗は歩きながら不敵な笑みを浮かべる。

黎「クツクツク・・・どうやら計画は順調なみたいだな・・・」

黎斗は懐から、ラベルも何も描かれてない白いガシヤットを取り出す。

黎「君達にはもつと役立ってもらおうぞ。・・・私の夢のために・・・!」

黎斗はそのガシヤットを天に掲げた。

◎ side out

.....

永夢 side

電車で揺られて数時間。

僕は目的地の別荘に到着したのだが……、大きすぎない？

その別荘はかなりの大きさを持っていた。

驚いているのは他のメンバーを同じで、みんな口を開けている。

唯一開いてないのは、おそらくすでに知っていたであろう飛彩君のみだ。

『おお〜』

に「ぐぬぬぬぬ……」

に「さんは何故か悔しがっていた。

穂「凄いよ真姫ちゃん！」

凜「さすがお金持ちだにや〜！」

真「そう？このぐらい普通でしょ？」

飛「それはあくまでお前の感覚だとだ、本来ならば全く普通じゃない」

飛彩君がいうように、これは全然普通じゃない。

普通なら目の前にプライベートビーチがある別荘なんて、なかなか見られないよ……。

そんなこんなで別荘の中に入り、それぞれが寝泊まりする部屋を案内してもらって荷物を置き、別荘の前に集まる。

そこで、海未ちゃんが練習メニューを発表していたんだけど……。

海「これが練習メニューになります！」

海未ちゃんが窓に貼った練習メニューの紙を指しながら言う。

練習メニューには、遠泳10km、ランニング10km、精神統一や腕立て、腹筋20セットと書かれていた。

これは……流石に……。

並んでいるメンバーの中で穂乃果ちゃんと凜ちゃん、にこさんの3人はすでに水着に着替えて遊ぶ気満々だった。

まさかこれから練習をするとは思ってもみなかったのか、不服そうな顔をしていた。

穂「つて海は!？」

海「……私ですが？」

海未ちゃん……流石にそのボケはないよ……。

永「海未ちゃん……海未じゃなくて海だよ？」

僕は海を指差しながら言う。

海「ああ、それでしたらここに」

海未ちゃんは満面の笑みを浮かべて遠泳10kmのところを指差す。

穂乃果ちゃんにとこさんは10kmという数字を見て顔をひきつらせる。

そりやそらだよね。

僕だつて嫌だし。

大我さんでさえ顔が引きつってるよ。

海「最近基礎体力をつける練習が減っています。折角の合宿ですし、ここでみつちりした方がいいかと！」

永「流石にみんなの体力が持たないんじゃないや……」

海「大丈夫です！熱いハートがあれば！」

永「どこの熱血の人？」

海未ちゃんってこんな性格だったけ？

流石に暑苦しいよ。

に「やる気スイッチが痛い方向に入っちゃってるわね……。ちよつと、どうにかしなさいよ」

穂「わかったよ……。凜ちゃん！」

凜「わ、分かったにや！」

3人は何か話し合うと、凜ちゃんが海未ちゃんの手を引き、空に何かあると指差す。

その隙に、穂乃果ちゃんとにこさん、ことりちゃんと花陽ちゃんが海に向かって走っていく。

海「ちよつ……待ちなさい！」

絵「仕方ないわね」

永「いいんですか？絵里さん」

絵「μ'sはこれまで、部活の側面も強かったから、こうして遊んで先輩と後輩の垣根を取ることも重要な事よ？」

大「それに、合宿はまだ始まったばかり。時間はまだある。今日くらい許してやれ」
絵里さんの言葉にイマイチ納得してなさそうな顔をした海末ちゃんだが、大我さんに言われて「それもそうですね」と考えを改めた。

海末ちゃんが絵里さん達について行って、僕も行こうとした時に貴利矢さんに呼び止められる。

貴「永夢、ちよつといいか？」

永「貴利矢さん？どうしたんですか？」

貴利矢さんは他の誰にも聞かれたくないのか、別荘の中に移動する。

貴「ちよつと、お前に聞きたい事があつてな。檀黎斗の事だ」

永「？……どういう事ですか？」

貴「永夢は、以前あの教師の事を信頼できるって言ったよな。どうしてそう思った？」
正直、質問の意味が理解できなかった。

永「……貴利矢さんは信頼できないんですか？ 黎斗先生の事……」

貴「……ああ。正直にいうとな。だからこそ、知りたいんだ。どうしてそこまで信頼できるのか。何を根拠にそう思ったのか」

僕はそれを聞いて、昔から思っていた事を言う。

永「僕は、人を信じるのに根拠は必要ないと思います」

貴利矢さんはそれを聞くと、少し考える顔をする。

貴「……そうか。悪かったな、呼び止めて」

貴利矢さんはそのまま別荘を出て行った。

永夢 side out

.....

大我 side

久しぶりの俺視点だな。

結局遊ぶ事になった俺達は水着に着替え、ビーチに行く。

そこでは、すでにμ'sメンバーが泳いだり、水鉄砲などで遊んでいた。

永夢と飛彩は競争でもしてるのか、一緒に泳いでいる。

ビーチにはパラソルも用意されており、そこでは真姫がイスに座って本を読んでい
る。

その横ではアロハシャツを着ている貴利矢がグース力寝ている。

・・・あいつ電車の中でも寝てなかったか？

俺自身は特にやる事もないから、砂浜に座ってこれからの事を考える事にした。

俺達は今現在レベル3の力を扱う事ができる。

だが、今はそれが限界だろう。

永夢の話を聞く限り、レベル5の力は相当やばい代物だろう。

だが、新たな力を得たグラフィイト・・・ダークグラフィイトってたな。

そのダークグラフィイトにはレベル3は一切通用しなかったらしい。

ならば、どうしてもレベル5を扱える様になる必要がある。

明日からの特訓で何をするべきか・・・。

俺は寝つ転がりながら考えていると、海の方から絵里が来る。

絵「何難しそうな顔してるのよ、大我」

そのまま、俺の隣に座り込む。

大「いや、ちよつと今後の事をな・・・」

絵「今後の事？」

大「ああ。俺達マネージャー組はμ'sを支えると同時に、バグスターと戦う必要がある。だが、その戦いも勝てるかどうか分からない状態だ。相手も新たな力を身につけたらしいからな」

絵「それって、グラフィイトのこと？でも、この間は勝てたじゃない」

大「あの時は俺と飛彩の二人で、しかもレベル3で戦ったからだ。永夢の話だと、レベル3は通用しないらしいからな」

俺はそう言うのと、絵里が深刻そうな顔をする。

絵「……死なないわよね？みんな……」

大「……さあな。死ぬかもしれないし、死なないかもしれない。戦いつてのはそういうもんだ。もつとも、死ぬつもりもないがな」

俺はそう言うって笑う。

絵「……」

だが、絵里の顔は変わらない。

どうするか……。

そこで、俺はある考えを口にする。

大「しようがない。戦いが終わったいつかまた来るか？海に。今度は亜里沙も一緒に」

それを聞くと、絵里の顔も明るくなる。

絵「ええ!!」

ちよūdōその時、

穂「おーい、絵里ちやーん、大我さーん!」

希「そんなところでイチャついてないで、こつち来なよー!」

すると、絵里が顔を赤くしながら思いつきり立ち上がる。

絵「い、イチャついてなんかないわよ!!」

仕方ないと、俺も立ち上がる。

大「行くぞ? 絵里」

絵「あつ、ちよūtōと待ってよ大我!」

歩き出す俺の後を、絵里が付いて来た。

大我 side out

.....

飛彩 side

海で遊んだ後、別荘に戻ってリビングに集まっていたが、少し困った事が起こった。

なんでも、食材がないらしくて買い出しに行く必要があるらしい。

永「全くないの?」

希「無い事はないんやけど、どうしても今日の晩御飯だけで無くなっちゃうみたいで……」

成る程……。

どちらにせよ、買い出しは必須という事か。

希「そんなでな? 真姫ちゃんの話だと、ここからスーパーも遠いらしくて……」

真「別に、私一人で行って来るからいいわよ。それに、みんなスーパーに場所、誰も分からないでしょ?」

確かにそうだが……。

何も一人で行かなくても……。

希「じゃあ、うちがお供する!」

真「うええ!?!」

希「たまにはええやん? この組み合わせも」

東條s……希の提案に、真姫は小さく頷く。

飛「荷物持ちも必要だろう? 俺も行くぞ」

希「そうやね。それじゃ、行って来るね」

……

希「おおく、夕日が綺麗やねえ」

買い物を終えて、別荘への帰り道。

買い物袋を持って俺と希が歩き、その少し前を真姫が歩いている。すると、突然真姫が立ち止まり、後ろに振り向く。

真「ねえ・・・」

希「ん？ どうしたん？」

真「どういうつもり？」

希「別に？ ただ、真姫ちゃんは面倒くさい人やなあつて・・・」

真「・・・飛彩も、どうして私に構うの？」

真姫は俺にもそう聞いてきた。

飛「・・・俺はただ、恩返しがしたいだけだ」

真「恩返し？」

飛「ああ。まあ、自己満足みたいなものだがな」

真「何よそれ・・・。私なら別に普通に・・・」

希「そうそう。そうやって素直になれないんやね・・・」

真「つていうか！ どうして私に絡むのよ！」

真姫が声を荒げる。

希「放っておけないんよ。うちも真姫ちゃんみたいなタイプ・・・、よく知ってるか

ら」

おそらく、絵里の事だろう。

素直になれなかったのは彼女も同じだ。

真「・・・何それ」

真姫は何も言えなくなったらしい。

希「まつ！たまには無茶してみるのもええんとちやう？なつ、飛彩君！」

飛「そうだな。まあ、あくまでたまにだが・・・」

俺がそう言うのと、どうやら希は満足したらしく、

希「立ち話もこの辺にして、そろそろ戻ろつか。もしかしたら、みんなお腹すかせて

待ってるかもしれないな？」

伸びをしながら言う。

飛「それもそうだな。さっさと帰るか」

再び、別荘に向けて歩き出す。

この世界に来て出会った仲間達。

昔は一人でいる事がほとんどだったのにな。

それでも、あいつはそんな俺と一緒にいてくれたな。

今頃、どうしてるのだろうか・・・。

また、会いたいよ．．．

小姫．．．

第27話 枕投げ

永 side

飛彩君達が買い出しから帰って来て、テーブルの上にはカレーライスとサラダ、さらにドレッシングがたくさん置かれている。

「けど、何故か花陽ちゃんのはカレーとご飯が別々に装われていた。

絵「なんで花陽だけお茶碗にご飯なの？」

花「気にしないでください」

貴「いやいや、気になるだろ……」

貴利矢さんの言う通り、気にするなという方が無理だ。

穂「それじゃあ、みんな手を合わせてー！」

穂乃果ちゃんの号令に、みんなが従って手を合わせる。

『いただきますーすー！』

全員で声を揃えて食べ始める。

穂「美味しい！」

大「……確かに」

貴「にこつて料理上手かったんだな。正直予想外だわ」
に「ふふふ、当たり前よ！」

確かに、美味しい。

作つたにこさんは当たり前かのようにドヤ顔する。

こ「あれ？でもお昼に料理した事なんてないって言つてなかったけ？」

永「え？」

ことりちゃんがそんな事を言い出し、それを聞いた瞬間、にこさんは冷や汗を流しはじめた。

飛「そうなのか？」

真「確かに言つてたわよ」

どうやら真姫ちゃんも聞いていたらしい。

すると、いきなりにこさんは持っていたスプーンを膝下まで下ろし、両手で握る。

に「にこ、こんな重いの持てな〜い」

大「はっ？」

貴「何言つてんだ？」

にこさんの言動に、全員が呆れた顔をする。

まあ、当たり前だよな。

に「うるさいわね！これからのアイドルは料理の1つや2つ作れないと生き残れないのよ！」

穂「開き直った!？」

とまあ、こんな事があつたがそのまま食べ終わり、穂乃果ちゃんはすぐにソファになる。

それを見た海未ちゃんが、

海「太りますよ」

と言つて、穂乃果ちゃんはすぐに

穂「お母さんみたいな事言わないでよ」

文句を垂れる。

凜「よーし」

すると、いきなり凜ちゃんが立ち上がる。

凜「じゃあ、花火をするにや〜！」

花「その前に、ご飯の後片付けしなきゃ駄目だよ」

花陽ちゃんがそういうが、ことりちゃんが挙手する。

こ「それなら私がやつとくから、行つて来ていいよ」

永「駄目だよ、そんなの」

絵「そうよ、そういう不公平は良くないわ。皆も自分の食器は自分で片付けて」

海「それに、花火よりも練習です」

海未ちゃんが予想外のことを言い始める。

に「うえ・・・これから？」

海「当たり前です。昼間あんなに遊んでしまったのですから」

こ「でも・・・そんな空気じゃないっていうか・・・。特に穂乃果ちゃんはもう・・・」

ことりちゃんのその言葉に、全員が穂乃果ちゃんを見る。

ちようどその時、穂乃果ちゃんが寝返りを打つ。

穂「雪穂く、お茶く」

海「家ですか!？」

穂乃果ちゃんの寝言?に海未ちゃんがツツコむ。

その間に、真姫ちゃんは自分の食器を持って立ち上がる。

真「じゃあ、これを片付けたら私は寝るわね」

凜「え?真姫ちゃんも一緒にやろうよ、花火」

海「いえ、練習があります」

永「本当にやるつもりなの？」

凜「そうにや。今日は皆で花火やろう?」

海「そういうわけにはいきません」

凜「かよちゃんは思う？」

凜ちゃんの花陽ちゃんに意見を求める。

花「わ、私は・・・お風呂に・・・」

に「第3の意見出してどうするのよ」

に「こさんが指摘する。」

どうするのか考えていると、希さんが第4の意見を出す。

希「じゃあ、今日は皆寝ようか。皆疲れてるでしょ？練習は明日の早朝。それで、花

火は明日の夜することにして」

凜「そっか、それでもいいにや」

海「確かに、練習もそちらの方が効率がいいかもしれない」

「どうやら海未ちゃんも凜ちゃんも納得したらしい。」

希「じゃあ、決定やね」

.....

先のμ's組がお風呂に入り、その間にマネージャー組が食器を洗って片付け、皆が出てきたら入れ替わりで入る。

出てくると、リビングには13枚の布団が敷かれていて、穂乃果ちゃんと凜ちゃんが

転がっていた。

貴「これはどういう事？」

こ「今日は皆で寝ようって事になったんだ」

ことりちゃんが説明してくれた。

既に13枚敷かれている以上、断る事もできないな。

それぞれ寝る場所を決め、布団に入る。

貴「んじゃ、電気消すぞー」

貴利矢さんが声をかけてから電気を消す。

普段のベットとは違い、布団もなかなか心地よい。

偶にはこういうのもいいなと思っていたが、だんだん周りが騒がしくなってきた。

何だろうと目を開けた瞬間、目の前を四角い何かが過ぎった。

永「……え？」

穂「えーい！」

貴「ぼはあ！」

凜「そりゃー！」

どうやら枕投げをしていたらしく、僕と海末ちゃん、大我さんと飛彩君以外の全員が参加していた。

こんな夜に皆元気だね・・・。

だけど、この枕投げが最悪の事態を招いた。

海「ふぐっ!?!」

「「「「あっ!?!」」」」

誰かが投げた2つの枕が寝ていた海未ちゃんの顔にヒットした。

海未ちゃんは顔に乗っている枕を掴み、ゆっくりと立ち上がる。

海「・・・何事ですか・・・?」

貴「あー・・・、これつてもしかしてやばいんじゃない?」

穂「もしかしなくてまずいよ!」

海未ちゃんの様子を見て貴利矢さんは危機を感じ、穂乃果ちゃんが肯定する。

次の瞬間には貴利矢さんは布団に入って寝始めていた。

・・・あいからわず寝るまでが早い・・・。

こ「ええつと・・・」

ことりちゃんが戸惑いながらも説明しようとする。

真「ち、違つ・・・狙って当てたわけじゃ・・・!」

穂「そうだよ!そんなつもりは全然・・・」

どうやら当てたのは真姫ちゃんと穂乃果ちゃんだったらしく、言い訳を始める。

海「明日、朝から練習するって言いましたよね．．．？」

こ「う．．．うん．．．」

ことりちゃんが声を震わせながら返事をする。

海「それをこんな夜遅くに．．．ふふ．．．ふふふふ．．．」

海未ちゃんが壊れたように笑い出す。

穂「あわわわ．．．。ど、どうしよう!？」

こ「海未ちゃん、寝てる時に邪魔されると、すごく機嫌が．．．!？」

ことりちゃんがそう言った瞬間、僕の目の前を枕が物凄いスピードで横切った。

次の瞬間、

に「ぶはあ!!」

その枕がにこさんの顔面にヒットした。

凜「に、にこちゃん!?!．．．駄目にや．．．もう手遅れにや!」

花「ちよ、超音速枕．．．」

絵「ハラショー．．．」

どうやらあの枕は海未ちゃんが放つたらしい。

海「ぐっふふふ．．．覚悟はできてますね?」

こ「どうしよう、穂乃果ちゃん!？」

穂「貴利矢君、何か考えは……って寝てる!？」

貴「zzzz」

自分の身に危険が迫つてるとわかつた瞬間、一瞬で寝始めていた貴利矢さん。

穂乃果ちゃんは今気づいたみたいだね。

穂「くっ!生き残りには戦うしか……あう!」

穂乃果ちゃんが戦う決心をして枕を構えたが、次の瞬間には枕が顔面ヒットする。

絵「ごめん海未……むぐうう!」

絵里さんも投げようとしたがその前に枕がヒット。

海未ちゃんも次の標的を定め、花陽ちゃんと凜ちゃんと迫っていく。

花「凜ちゃん……」

凜「かよちゃん……」

花・凜「ダレカタスケテー!!」

流石に不味いと思いい立ち上がろうとした瞬間……

大「バン」

海「ぐっ!?!……ぬう」

いつ起きたのか、大我さんが投げた枕が海未ちゃんに当たり、そのまま熟睡した。

大「つたく、お前からこんな夜中にまで何をしてんだ?」

花・凜「大我君！」

希「はあく……助かったでー大我君！」

大「それで？一体誰が始めたんだ？」

大我さんが聞いてくる。

あいにく始まった時は僕はまだ寝ていたから知らない。

凜「最初は真姫ちゃんにや！」

真「ち、違うわよ！あれは希が……」

希「うちは何もしとらんよ？」

真「あんたねえ……」

希「えい♪」

希さんが再び真姫ちゃんに枕を投げる。

真「つて何するの希！」

希「自然に呼べるようになったやん、名前」

真「え……あ……」

自分が希さんの事を名前前で呼んでいる事に気づく真姫ちゃん。

僕も今気づいたが、凄く自然に言っていた。

真「べ、別に頼んでなんかいないわよ！」

真姫ちゃんは顔を赤くしながら枕を投げ、布団に入って行った。

大「希も随分荒っぽい方法を使ったな」

希「ま、結果オーライかな」

永「被害が凄いですけどね・・・」

希「あれ？永夢君起きてたん？」

永「だいぶ前に起きましたよ・・・」

まさか気づいてなかったとは・・・。

大「とにかく、今日はさっさと寝るぞ」

そう言つて、大我さんは電気を消した。

・・・

翌朝、目が覚めると真姫ちゃんと希さんの姿がなかった。

外を見ると、二人の姿がある。

何をしているのか考えていると、だんだんと皆が起き始める。

砂浜に行くと、二人は何か話していた。

穂「おい！真姫ちゃん！希ちゃん！」

穂乃果ちゃんが呼ぶと二人とも振り返る。

そして、μ'sメンバーが横一列に並び、その後ろに僕達マネージャーが並ぶ。

第28話 Dragonをぶつとばせ!

大我 side

大「そんじゃあ、今日はμ'sメンバーは海未と絵里を中心に練習、俺達は特訓だ」
合宿二日目。

昨日遊んだ分、今日はしっかりと練習、並びに特訓をするつもりだ。

永「でも大我さん。特訓といっても何をするんですか？」

永夢がそう聞いてくる。

大「まずこの特訓で何を目指すか、目標はレベル5の力を上手く扱えるようにする事だ」

それを聞くと、永夢は懐から特殊な形をしたガシャット、ドラゴナイトハンターZガシャットを取り出す。

レベル5の力がどんなものか、俺は知らないが聞いた話から考えると相当やばい代物だろう。

暴走するぐらいだからな……。

永「ただ……」

貴「?どうした?」

永「あ、いえ・・・気のせいかもしれないんですけど、一人で使った時に少し違和感があったんです」

飛「違和感?」

他のガシヤットと同じようにしつかりと調整されてるはずだから、違和感があるのはおかしい。

なら、永夢が感じた違和感はなんだ?

俺達がそれぞれ考えていると・・・

永「あっ・・・」

永夢が何かを思いついたらしく、声を出す。

貴「永夢?何か思いついたのか?」

永「はい。もしもこの考えが正しければ・・・」

永夢は何かを決心したような顔をする。

永「みなさんに頼みがあります。これから僕がレベル5になります。そしたら、3対1で戦ってください」

貴「は?」

永夢がそんな事を言い出した。

確かに、実際にレベル5と戦う事は考えていたが、それでも1対1と考えていた。まさか、3対1で戦うとは……。

大「それでその違和感の正体がわかるのか？」

永「僕の予想が正しければですけど……。それでも、試す価値はあると思います」
大「そうか……」

仮にも永夢は天才ゲーマー……。

ゲームに関しては永夢を信じるしかない……か。

大「分かった。だが、やるからには本気でやる。そのつもりでいろ」

永夢は頷くとゲーマードライバーを腰に巻く。

それを見て、俺達も同じようにゲーマードライバーを巻く。

『マイティアクシオンX』

『タドルクエスト』

『バンバンシューティング』

『爆走バイク』

『変身!』

『I, m a 仮面ライダー!!』

レベル1に変身した後、俺とブレイブ、レーザーはレベル3用のガシャットを、エグ

ゼイドはドラゴナイトハンターZを取り出す。

『ドレミファビート』

『ジエツトコンバット』

『ギリギリチャンバラ』

『ドラゴナイトハンターZ』

ブ「術式レベル3!」

ス「第参戦術!」

レ「三速!」

エ「大・大・大・大・大変身!!」

『ガシャット!ガツチャ!レベルアップ!』

『タドルクエスト!アガツチャ!ドレミファビート!』

『バンバンシューティング!アガツチャ!ジエツトコンバット!』

『爆走バイク!アガツチャ!ギリ・ギリ・チャンバラ!』

『マイティアクションX!アガツチャ!ドラゴナイトハンターZ!!』

エグゼイドは現れたドラゴンをその身に纏った。

ス「それがレベル5……。その姿はフルドラゴンと言った所か。・」

ブ「これより、エグゼイド切除手術を始める」

レ「ノリに乗ってるぜ〜！」

ス「ミツション開始！」

大我 s i d e o u t

・・・・・

永夢 s i d e

俺は暴走しそうになる体をなんとか動かしながらブレイブ達に攻撃する。

ブレイブ達もそれぞれの武器を装備して俺の攻撃を弾いたり、攻撃してきたりする。

その間も、俺の体には電気が走る。

ブ「ふっ！」

ブレイブが斬撃を繰り出す。

それは俺に当たるが、跳ね返して右手のブレードでブレイブに攻撃する。

エ「おりや！」

ブ「何!?!ぐあっ！」

そのまま後ろから攻撃しようとしていたスナイプもブレードで弾き、後ろにいたレーザーの攻撃も振り向き様に左手で防御、体を掴んで奥に吹き飛ばす。

ブ「くっ……これなら……！」

ス「覚悟しろ……」

レ「同時にだ……！」

ブレイブ、スナイプ、レーザーはそれぞれの武器のBボタンを押し、攻撃力を高める。

『はっ!!』

同時に放たれた攻撃は、全て俺に直撃する。

エ「ぐわっ!ぐううう……」

すると、俺に装備されていたハンターゲームーが離れていき、空と飛び始める。

エ「今だ……はあ……はあ……あいつを攻撃しろ……！」

ブ「何?」

レ「なんのつもりか知らないけど、とにかくやってみつか」

『ガシャット!キメワザ!』

ブレイブ達はガシャットを武器に装填し、必殺技の態勢になる。

『ドレミファ・ジェット・ギリギリ!クリティカルフィニッシュ!』

『はああああ!!』

それらの攻撃は全てハンターゲームーに当たり、光が落ちてくる。

その光は俺に近づくと、ゲームドライバーに装填されていたドラゴナイトハンターZ

のガシヤットと一体化、勝手に外れ、宙に浮き始める。

すると、ガシヤットはいきなり一本から四本に変化した。

エ「やっぱりな……」

ス「どういう事だ？」

ブ「あれは……？」

突然分離したガシヤットを見ながら、驚きの声をあげるブレイブとスナイプ。

俺は立ち上がりながら、答える。

エ「四人同時ブレイブ用の、仮想ガシヤットだろう」

ス「四人ブレイブ？」

エ「ああ、ドラゴナイトハンターZのジャンルはハンティングゲーム。ハンティング

ゲームの醍醐味といえば、四人同時ブレイブだ！」

俺は飛び上がり、四本の内の一本を手取る。

すると、残りのガシヤットもブレイブ、スナイプ、レーザーの元に行く。

レ「よつと……」

ブ「成る程な……」

ス「このガシヤットは一人じゃなく、分割して使えって事か……」

エ「ああ、そういう事だ」

俺が感じた違和感が一人で使っていたからだと分かったちようどその時・・・
 『きやああああ!!』

エ「!?この声は!?!」

ス「あいつらに何かあったのか!」

レ「とにかく急ぐぞ!」

永夢 side out

.....

◎ side

永夢達がドラゴナイトハンターZの真の力に気づいた頃。

穂乃果達μ'sメンバーは休憩をしていた。

穂「あゝ・・・疲れたゝ・・・」

凜「でも、海が近いからか涼しいにやゝ!」

絵「そうね」

希「合宿はいい案やったなゝ」

永夢達とは真逆で平和に過ごしていた。

が、すぐにその平和も壊れる。

グ「こんな所にいたとはな・・・」

「「「「「「?!」」」」」」

穂乃果達が声が見る方を見ると、そこには人間態のグラフィイトが立っていた。すぐに逃げようとするが、場所は砂浜。

砂に足を取られてうまいように走れない。

グ「仮面ライダー共はいないのか。ちようどいい・・・」

グラフィイトはプロトガシヤットを取り出す。

『ドラゴナイトハンター乙』

グ「培養!」

起動したガシヤットを自らの体に突き刺し、変身する。

グ「貴様らにバグスターウイルスを感染させれば、仲間が増えるかもしれないな」
そう言いながらゆっくりと歩き出すグラフィイト。

穂乃果達は走り出すが、グラフィイトとの差は広がらない。

そこで、花陽が転んでしまった。

花「きゃ!」

凜「かよちん!!」

希「あかん！凜ちゃん行っちゃ駄目や！」

凜「でも、かちゃんが！」

転んでしまった花陽を助けようとする凜。

だが、花陽のすぐ近くにはグラフィイトがいて、そのまま行くと凜まで犠牲になってしまう。

そう思い、希は凜を止める。

それでも、このままでは花陽が犠牲になってしまう。

花「ひっ……い、いや……」

怯える花陽に、グラフィイトは容赦無くウイルスを感染させようとする。

花「きやあああああああ！」

花陽が耐えきれず、叫んだその時！

レ「こいつでも喰らつとけ！」

ス「バンバン！」

グ「!?何?!…ぐわ!!」

穂乃果達の所に駆けつけたスナイプとレーザーの遠距離攻撃を喰らい、グラフィイトは少し後退する。

エ「おりゃ！」

ブ「ふっ!!」

グ「ぐっ!!ぐはああ!!」

そこに、エグゼイドとブレイブの斬撃が決まり、さらに後退する。

海「永夢!」

花「え、永夢さん・・・飛彩君・・・」

凜「かーよちーん!!」

花「わっ、凜ちゃん!」

凜「大丈夫かよちん!? 怪我とかしてない!」

花「う、うん・・・大丈夫・・・」

エ「大丈夫か? 花陽。凜、花陽を連れて早く離れろ」

凜「分かったにや!」

エグゼイドに言われ、花陽を連れてすぐにその場を離れる。

グ「くっ、仮面ライダーか・・・」

ブ「まさかこんな所にまで現れとはな」

ス「こいつらを襲ったんだ。それ相応の報いは受けてもらおうぜ」

エ「特訓の成果、見せてやる!」

エグゼイドはそう言うのと、ドラゴナイトハンターZガシヤットを取り出す。

グ「ん?・・・ふっ、またそのガシヤットか。貴様はまだその力を扱えていないぞ!」
グラファイトはそう言う。

エ「ふっ、そいつはどうかな!」

エグゼイドがそう言うと、ブレイブ、スナイプ、レーザーの3人もドラゴナイトハンターZガシヤットを取り出す。

グ「!?な、何!?!」

それを見て、グラファイトは驚いていた。

驚いたのはグラファイトだけでなく、海未達も同じだった。

海「同じガシヤットが、四本?」

に「ちよつと、どういう事よ!」

真「私に聞かないですよ!」

そんなやりとりをしていたが、気にせずにそれぞれガシヤットを起動する。

『ファング!』

『ブレード!』

『ガン!』

『クロー!』

そして、レバーを閉じてガシヤットを装填する。

『ガシヤット!』

ス「第碁戦術!」

ブ「術式レベル5!」

レ「五速!」

エ「大・大・大・大・大・大変身!!」

『ガツチャ〜ン! レベルアップ!!』

『マイティジャンプ! マイティキック! マイティマイティアクションX! アガツチャ!

ド・ド・ドラゴ! ナ・ナ・ナ・ナ・ナ〜イト! ドラ! ドラ! ドラゴナイトハンター!』

今までと変わらずエグゼイドに装備されていくハンターゲーマー。

だが、一度装備された後、頭部の部分だけを残して、残りの装備がブレイブ、スナイプ、レーザーの所へ。

ブレイブには右手と右足に、スナイプには左手と左足に、レーザーには両腕と両足がついて人型になる。

『エグゼイド!』

『ブレイブ!』

『スナイプ!』

『レーザー!』

ここに、レベル5の力を持った仮面ライダーが四人誕生した。

穂「す、凄い凄い！」

絵「ハラショー!!」

こ「かつこいいい！」

μ、sメンバーも驚きを隠せずにした。

グ「成る程な……。いいだろう、かかってこい!!」

そう言ってグラフィアイトフアングを構えるグラフィアイト。

エ「行くぜ!!」

『おお!!』

エグゼイドの言葉を合図に、一斉に走りだす仮面ライダー達。

それぞれが順番に攻撃し、グラフィアイトは弾き返したり、躲したりしている。

ブ「ふっ、はああ！」

レ「おら、おりや！」

ス「ふっ、はっ！」

エ「ふっ、ほっ!!」

ブレイブが右手のブレードで攻撃し、グラフィアイトがグラフィアイトフアングで弾き、そこをエグゼイドが蹴りで攻撃、後退したグラフィアイトに右手のブレードで攻撃する

レーザー。その攻撃をグラフィイトフアングで止めるグラフィイトだが、すぐにブレイブとエグゼイドが追撃を加え、二人の間から蹴りでグラフィイトに攻撃するスナイプ。

グ「くっ、ふん！」

レ「おっと、そりゃ!!」

グラフィイトは後退しながらもグラフィイトフアングを横に振るが、レーザーはそれをしゃがんで避け、グラフィイトに攻撃する。

再び後退するグラフィイトに飛び込んで剣先をぶつけるブレイブ。

そのブレイブを飛び越え、銃弾を放つスナイプ。

レ「ん？永夢？何をしてんだ？つて、ちよつ、ちよつと待て！」

エ「はあああああ・・・はああああ!!」

レ「うお、あぶね!!」

エグゼイドが炎をため、グラフィイトに放つ。

二人の間にいたレーザーはギリギリで避ける。

レ「おいおい、危ねえだろ！」

エ「へへ、悪い悪い！」

エグゼイドの攻撃で大きく後退したグラフィイト。

グ「くっ、おのれえ・・・」

そして、グラファイトファンクにエネルギーを溜め始める。

グ「喰らえ！ドドド黒龍剣!!」

グラファイトは黒いカタター状のエネルギーを四人に向かって飛ばす。

そのエネルギーを、四人同時に攻撃して相殺する。

グ「!?何!?!」

自分の必殺技が破られると思ってなかったのか、驚きを隠せないグラファイト。

エ「さあ、フィニッシュだ!!」

エグゼイドがそう言うのと、四人共キメワザスロットにドラゴナイトハンターZのガシャットを装填、スイッチを押す。

『ガシャット！キメワザ!』

グ「俺が負けるはずがない！はっ!」

そう宣言すると、グラファイトファンクを一度天に掲げ、地面につけてから構えるグラファイト。

そのグラファイトファンクには、先ほどよりも強いエネルギーが集まっていた。

「二二はあああああああ……二二二」

エグゼイドは顔に、ブレイブは右手、スナイプは左手、レーザーは両腕にエネルギーを貯め、もう一度スイッチを押す。

『ドラゴナイト！クリティカルストライク!!』

「はああああ!!」

すると、一斉に、しかも何発もそのエネルギーが放たれる。

グ「ふっ、はっ!」

グラフィイトはその攻撃をグラフィイトファンクで落としていくが、エネルギーも強く、それが何発も放たれる為、だんだん対処仕切れなくなっていく。

グ「ぐっ、ぐわあ!!」

ついに攻撃が当たり、後ろの飛ばされるグラフィイト。

すでにグラフィイトの体には電気が走っていた。

グ「ぐわあああああ!!」

断末魔をあげ、グラフィイトは大爆発を起こした。

穂「うわあああ・・・」

凜「やったにや〜!」

こ「凄い凄い!!」

希「流石やね〜!」

絵「ハラショー!!」

真「ふう〜・・・」

花「ふわああ〜！」

に「はあ〜・・・」

海「やりましたね、永夢！」

この戦いを見ていたμ、sメンバーも、安堵の息を漏らしたり、喜んだりしている。

エ「ふう〜・・・」

『ゲームクリア!!』

・・・・・・

グラフィイトが倒され、さほど離れていない場所に落ちたプロトガシヤット。

そのガシヤットに近づき、手に持つ青年、パラド。

パ「ご苦労さん、グラフィイト」

そう言つて、プロトガシヤットを持ってその場を去つて行つた。

◎ s i d e o u t

・・・・・・

海未 s i d e

永夢達がグラフィアイトを無事に倒した日。

その夜、私はある夢を見ました。

暗闇の中、たくさんの怪物達が目の前にいるところに現れる3人の人影と、一台のバイク。

彼らは、それぞれ武器を構え、怪物達に怯えずに立ち向かおうとしている。

この時、私は思いました。

彼らこそ、本物の『ヒーロー』だと！

第29話 Who's 黒い仮面ライダー？

永夢 side

合宿から数日。

休日に僕は一人、ゲームセンターに向かっていた。

理由は一つ、ただの息抜きだ。

μ'sが9人になってから、どうも戦いが多くなっている気がする。

それも強敵との戦いだ。

この間の戦いでグラフィアイトは攻略できたけど、まだ全てのバグスターを攻略できなかったわけじゃない。

だから、息抜きも必要だろう。

そう考えた僕は、部活の練習が終わってから一人でゲームセンターに向かっているんだ。

つと、そうこうしている内に着いたね。

それじゃあ、今日は何をしようかな。

永夢 side out

.....

◎ side

永夢がゲームを楽しんでいる頃、とある部屋。

そこは、色々な書類や機械が乱雑に置かれていた。

そんな部屋の中には二人の人影が。

檀黎斗とパラドだ。

パラドは椅子に座ってゲームを楽しんで、黎斗はパソコンに何かの機械を繋げてキーボードを打っていた。

その機械には、ラベルも何も書かれていない白いガシヤットが装填されていた。

パ「調子はどうだ？ゲーム」

ゲームを終わらせたパラドが黎斗に話しかける。

黎「問題はない。だが、このガシヤットを完成させるにはあと一つ、足りない物がある」

黎斗はそう言ってガシヤットを取る。

パ「足りない物？」

黎「ああ、死のデータだ」

ガシャットの完成に必要な物、それは死のデータと呼ばれる物だった。だが、それはそう簡単に入手できる物ではない。

黎「さて、私は出かけるとしよう」

パ「どうやって死のデータを手に入れるんだ？」

黎「それに関しては問題ない。すでに考えてある」

黎斗はそういうと、外に出て行った。

◎ s i d e o u t

・ ・ ・ ・ ・

永夢 s i d e

いや、遊んだ遊んだ！

久しぶりに来たから色々なゲームをやったよ！

クレインゲームもやって沢山景品も取ったけど、これどうしよう？

僕が悩んでいると、

海「永夢？」

声をかけられ、そっちの方を見ると、海未ちゃんがいた。

永「海未ちゃん、どうしたの？」

海「いえ、少し出かけようと思って街に来たら永夢がいたので。その荷物は？」

そう言つて僕が持っている大量の荷物（クレーンゲームの景品）の見る。

永「ああ、これ？さつきまでゲームセンターに行つてたんだけど、久しぶりでちよつとやりすぎてね。これは全てクレーンゲームの景品だよ」

そう答えると、海未ちゃんは驚いた顔をする。

海「こ、これ全て景品ですか!？」

永「?う、うん・・・そうだけど・・・」

海「多すぎませんか？」

そうかな？

まあ、確かに取りすぎたかなとは思つたけど・・・。

普段はこれより少しだけ少ないくらいだし・・・。

永「そういうえば、海未ちゃんは何か目的があるの？」

海「いえ、特には・・・」

永「そつか。じゃあ、ちよつと買い物に付き合つてもらつてもいいかな？」

海「買い物・・・ですか？」

永「うん。夕飯の材料をね」

今、家にはあまり食料がないからね。

買わないと何も作れない。

海「そうですね・・・この後、特にやることもないですし、私も行きましょう」

永「ごめんね？ありがとう」

海「いえ、全然構いませんよ」

こうして、海未ちゃんと一緒に近くのスーパーに行くことになった。

・・・・・・・・

スーパーからの帰り道。

僕と海未ちゃんは人通りの少ない道を歩いていた。

永「ごめんね？付き合わせちゃって・・・」

海「大丈夫ですよ」

永「そうだ！この中から好きな物を持って行っていいよ」

そう言つて僕は景品の袋を見せる。

海「え？ですが・・・」

永「僕も取つたはいいけど、どうしようか悩んでたから」

海「そうですか？それじゃあ・・・」

海未ちゃんは袋の中を確かめる。

「うう……」

近くから、呻き声のようなものが聞こえた。

どうやら海未ちゃんにも聞こえたらしく、周りを見ている。

永「海未ちゃんも聞こえた？」

海「はい、確かこの辺りから……」

海未ちゃんは声が聞こえたあたりの角を覗き込む。

海「!?だ、大丈夫ですか!？」

永「海未ちゃん?どうしたの?」

海「大変です!人が倒れてるんです!」

永「!?」

海未ちゃんの言葉を聞こえた僕も急いで見ると、確かに人が倒れていた。

永「大丈夫ですか!？」

「?……君達は……?」

永「この近くを通りかかったんです。そしたら、呻き声が聞こえて、確認したらあな

たが……」

僕がそこまで言った所で、視界の端に異様な人影が映る。

海「え、永夢、あれ!!」

永「ば、バグスター!?でもどうして?」

そこにはオレンジ色の頭のバグスターウイルスが数体がいた。

永「と、とにかく、海未ちゃんはその人をお願い!」

海「分かりました!」

海未ちゃんに倒れている人を頼み、僕はバグスターと対峙する。

「き、危険だ・・・早く逃げなさい・・・!」

海「大丈夫です。永夢なら」

「え?」

海未ちゃんが何か話しているが、それを気にせずガシャットを取り出す。

『マイティアクションX』

永「変身!」

『ガシャット! I, m a 仮面ライダー!』

エ「大変身!!」

『ガツチャ〜ン! レベルアップ! マイティアクションX!!』

エ「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!」

早速レベル2にレベルアップしてバグスター達に向かっていく。

バグスターも槍を構えて向かってくる。

「あ、あれは……?」

海「仮面ライダーエグゼイド。私達を守ってくれる、ヒーローです」

永夢 side out

.....

◎ side

数体のバグスターと戦うエグゼイド。

だが、数はそんなに多くなく、いるのもオレンジ頭のザコ敵だけのため、苦戦することもなく倒していく。

エ「よし、これでラスト!」

そうこうしている内にバグスターは全滅する。

だが、それで気を抜いたため隙ができてしまった。

海「!永夢、後ろ!!」

エ「え? ..ぐわ!」

エグゼイドが後ろを向いた瞬間、何者かの攻撃を受ける。

そこには、レベル3のゲムがいた。

先程の攻撃は、ゲムの右手に装備されているバグヴァイザーの銃撃だったようで、銃口がエグゼイドに向けられている。

エ「くっ、黒いエグゼイド・・・」

エグゼイドはゲムの姿を確認する。

エ「今日こそは逃さない！」

そう言うと、エグゼイドはドラゴナイトハンターZを取り出す。

海「そのガシヤット、一人で使って大丈夫ですか!？」

海未がエグゼイドに聞く。

それもそのはず、海未はエグゼイドが暴走した時に立ち会っている。

それに、この間扱えたのだって、他のライダーと同時に使用したため負担が減ったから、扱う事が出来たのだ。

今回はエグゼイドしかないため、暴走する危険性がある。

海未はそれが分かって、エグゼイドに声をかけたのだ。

エ「あいつと戦うには、これを使うしかない！」

『ドラゴナイトハンターZ』

結局、エグゼイドはガシヤットを起動する。

『ガシヤット！』

エ「大・大・大・大・大変身!!」

『ガツチャ〜ン！レベルアップ！マイティアクションX！アガツチャ！ドラゴナイトハンター！Z!』

エグゼイドがレベル5になったのを見ると、ゲンムはバグヴァイザーをチェインソーモードにする。

『ギユ・イーン!!』

ゲンムはバグヴァイザーで攻撃、それをエグゼイドは両腕の武装を振り回して防ぎながら攻撃する。

だが、すぐに電気が走る。

それでもなんとかゲンムを攻撃するエグゼイド。

さすがのゲンムもレベル5には敵わないのか、攻撃を受けるたびに大きく後退する。エグゼイドはそのまま両腕の武装で攻撃をしていく。

だが、限界がきたのか先程よりも強い電気が走る。

すると、背中にドラゴンの翼が出現、空を飛び回る。

エ「ぐっ、ま、待て・・・！」

すでにエグゼイドにはコントロールができない状況らしい。

エ「おい、落ち着け！・・・くっ、ぐわあ、ぐわああああ!!」

結局最後までコントロールができず、最終的には近くに建物に衝突する。

ゲ「・・・・・・・・」

それを見たゲムは無言でその場を去っていく。

海「あっ！・・・はあく」

海未はそれを見て、思わずため息をついた。

◎ s i d e o u t

・・・・・・・・

永夢 s i d e

あの後、倒れてた人を手当てのためにCRに運んだ。

ちなみに海未ちゃんの来ている。

そこで、驚きの事が事実が発覚した。

永・海「衛生省!?!」

どうやら、助けた人は衛生省の衛生大臣官房審議官だったらしい。

「ああ、私の名前は日向恭太郎だ。この度は助けてくれた事に感謝する」

永「あ、いえ……」

正直予想外だったため、僕も海未ちゃんも驚きを隠せないでいた。

恭「それで話を聞きたいのだが、いいか？あの怪物と、君の事だ」

やっぱりか……。

まあ、どちらにせよ聞かれるだろうとは思ってたしね。

永「分かってます。まずは、あの怪物の事から」

僕は日向さんに説明する事にした。

……

恭「成る程。あれは、進化したコンピューターウイルスなのか。何故人類に感染するようになったかは不明だが、それを知れただけでも十分な収穫だ。そして、君のあの姿が、唯一あのウイルス……バグスターウイルスと言ったね、に対抗する手段である」と

永「はい、だいたいそのような感じですよ。そして、仮面ライダーに変身できるのは僕以外にも4人確認させています。その内の一人は身元が不明ですけど……」

恭「まさか、こんな事になっていたとはな……」

永「という事は、やはりまだ知らなかったんですね」

恭「ああ。今日初めて知ったよ」

まだ、国はバグスターの存在を確認できてなかったのか……。

まあ、だからこそ今までそんなニュースも流れなかったんだろう。

永「とにかく、検査した結果、バグスターに感染してる訳でもないようなので、今まで通りの生活ができると思います。ですが、何かありましたらこのCRに連絡をください」

実はこのCR、様々な所と連絡がとれ、モニターを使えばテレビ通話のようにもできる。

海「それにしても、まさか衛生省の方だったとは……」

永「やっぱ海未ちゃんも思ったよね……。僕も驚いたよ……」

恭「そんなに驚きか？」

永「そうですね。助けた人がまさか衛生省の人間だったなんて……」

海「しかも、衛生大臣官房審議官なんですよ？驚かない訳がありませんよ」

恭「はは！そうか！」

日向さんは笑う。

何が面白かったのだろうか？

恭「いやあ、すまない。君達があまりにも驚いているからついな」

海「そ、そうですか・・・」

永「ま、まあ、元氣そうで何よりです」

恭「ああ、ありがとう。今日は、この辺りで帰るとするよ」

永「あ、気をつけてくださいね！」

恭「ああ、注意する。それじゃあ」

そのまま、日向さんは帰って行った。

そういえば、どうしてあの場所にいたのだろうか？

聞くのを忘れていたよ。

海「と、とりあえず、私も帰りますね」

永「あ、送ろっか？もう暗いし」

海「いえ、大丈夫です。そんなに遠くもないですし。それじゃあ、また明日」

永「うん。また明日」

そのまま海未ちゃんも帰って行った。

・・・・・・・・

次の日の放課後、僕達はいつも通り屋上で練習をしていた。

海「1、2、3、4、5、6、7、8・・・」

海未ちゃんがリズムを取って、みんながそれに合わせて踊っている。

その最中、僕は昨日の事を考えていた。

永（昨日、どうしてバグスターが現れたんだろう？確かめたけど、特にゲーム病が発症した訳ではなかったし・・・）

今日他の3人にも確認したけど、ゲーム病が発症した事はなかったらしいから、僕のゲームスコープの故障という訳でもない。

海「永夢、どうかしましたか？」

海未ちゃんが声をかけてくる。

どうやら考えてる内に休憩時間になっていたらしい。

永「いや、ちよつと昨日の事をね。どうして、バグスターがいたんだろうって」

海「そういうえば、そうですね。今までは必ずボスキャラと言えるバグスターと一緒にいましたから」

永「でも、昨日はそんなバグスターはいなくて、ゲーム病が発症した訳でもなかった」

海「確かに、不思議ですね」

穂「二人ともなんの話？」

そこに穂乃果ちゃんが話しかけてくる。

見ると、穂乃果ちゃんの後ろでことりちゃんもこつちを見ていた。

永「いや、昨日の午後出かけた時にバグスターと遭遇してね。戦って勝ったんだけど、ゲーム病を発症している人はいなかったんだ」

穂「え!?! そうだったの!?!」

海「はい。近くにそれらしき人はいなかったですし、倒れている人はいましたが、特
に以上は見られませんでした」

こ「どうか・・・」

永「？」

ことりちゃんが僕達の話の聞くと、躊躇いながら言う。

こ「永夢君と海未ちゃん、一緒にいたの？海未ちゃん、やけに詳しいけど・・・」

海「え!?!」

急に海未ちゃんが慌てだす。

どうしたんだろう？

穂「どうなの、海未ちゃん!?!」

海「なんでそんなに食いついてるんですか!?!」

永「まあまあ、落ち着いて。昨日町に行った時に偶然会っただけだよ」

穂「なあんだ。そうなんだ」

海「そ、そうですよ！さ、早く練習を再開しますよ！」

穂「え!? もう!？」

そう言つてさつさと練習を再開させる海未ちゃん。

なんだつたんだらう・・・？

ちようどその時、屋上のドアが開く。

黎「みんな、調子はどうだい？」

永「あつ、黎斗先生」

穂「調子はバツチリです!!」

黎「そうか。私はこの後用事があるから席を外すが、頑張ってくれ。目標はラブライ

ブ、なのだろうか？」

『はい!!』

黎斗先生も質問にみんな元気良く答える。

それを聞いた黎斗先生は満足そうに頷き、屋上から去つて行った。

絵「さ、練習を再開するわよ」

永夢 side out

.....

© s i d e

永夢達が屋上で練習をしていた頃。

秋葉原はいつもと同じように人々で溢れかえっていた。

それは秋葉ではごく普通の日常だった。

だが、そんな町に異変が起こる。

空からオレンジ色の粒子が降り注ぎ、それらは人の形になる。

人々は驚き、我先にと逃げ出す。

その様子を建物の屋上から見ている一人の男がいた。

檀黎斗だ。

その右手にはバグヴァイザーが装着されてる事から、どうやらバグスターを撒いたの

は彼のようだ。

ふと、黎斗の視線がずれる。

その方向には、騒ぎを聞きつけて駆けつけた永夢達の姿があった。

飛「なんでいきなりバグスターが・・!?」

永「それに、昨日と同じようにゲーム病が発症した訳でもない・・！」

大「とにかく、今は手分けしてぶっ倒すぞ」

『マイティアクションX』

『タドルクエスト』

『バンバンシューティング』

『爆走バイク』

「『変身!!』」

『I, m a 仮面ライダー!!』

エ「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!」

ブ「これより、バグスター切除手術を開始する」

ス「ミツション開始」

レ「ノリノリで行くぜえ〜!」

エグゼイド達は変身後、様々な場所に移動してそれぞれ戦闘を開始する。

.....

エ「よし、あらかた終わったか・・・」

ブレイブ達と別れて戦っていたエグゼイドは、すでにバグスターを倒し終えていた。

海「ええ、そうですね。近くには見当たりませんし・・・! 永夢、あそこ!」

海未がある方向を見ながら指差す。

エグゼイドもそつちを見ると、ゲームがレベル3の状態で歩いてきていた。

エ「っ！・・・黒いエグゼイド・・・」

エグゼイドはドラゴナイトハンターZを取り出す。

海「!?永夢、駄目です！また暴走したら、どうするんですか!?!」

海未がエグゼイドを止めようとするが、エグゼイドはその忠告を聞かずにガシヤットを起動する。

『ドラゴナイトハンターZ』

エ「いいから海未は下がってろ！」

『ガシヤット!』

エ「大・大・大・大・大変身!!」

『マイティアクションX!アガツチャ!ドラゴナイトハンター!Z!』

『ギユ・イーン!』

エグゼイドがレベル5になるのを見たあと、ゲームはバグヴァイザーをチェーンソーモードに変えてエグゼイドに向かって行く。

エ「お前の目的はなんなんだ!」

エグゼイドが戦いながら疑問をぶつける。

すると、今まで喋らなかつたゲナムが口を開く。

ゲ「・・・我が目的は、死のデータだ」

その声は変声機のようなもので変えていて、機械のような声だった。

エ「死のデータ?・・・まさか、昨日と今日のバグスターは・・・!」

ゲ「そうだ、私が撒いたのだ。死のデータを手に入れるためにな」

エ「くっ!・・・なんなんだ、その死のデータつてのは・・・!」

ゲ「ふん。貴様を知る必要はない!」

エ「ぐわああ!!」

エグゼイドはゲナムの攻撃を受けて吹き飛ぶ。

エ「くっ、・・・ふざけるな・・・そんなもののために、大勢の人々を巻き込んで・・・」

ゲ「ふっ、私にこの事を指示した人物を君達は昨日あつているはずだ」

エ「?・・・昨日?」

その言葉を聞いたエグゼイドと海未は、ある一人の人物が頭に思い浮かぶ。

海「もしかして、日向さん!」

エ「そんなはずはない!あの人はそんな事をする人じゃない!」

ゲ「残念ながら、それが真実だ。君が信用した男は、この世界を破滅に導こうとして

いるんだよ」

エ「・・・嘘だ・・・嘘だああ!!」

そこで、エグゼイドの目が怪しく光り、電気が走る。

エ「くっ・・・ぐわあ！」

エグゼイドは暴走し、ゲンムはエグゼイドから離れる。

暴れまわるエグゼイドを見て、ゲンムは車輪と掴んでエネルギーを貯める。

海「!?危ない!!」

その様子を見ていた海未が叫ぶが、エグゼイドは体を自由に動かせない。

そして、ゲンムがエネルギーが溜まっている車輪をエグゼイドに向かって投げる。

レ「いよっと！」

ゲンムの攻撃がエグゼイドに当たる寸前、駆けつけてきたレーザーがエグゼイドを突き飛ばして避けさせる。

レーザーは倒れながらも暴れかけているエグゼイドを上から押さえつけて語りかける。

レ「おい、永夢！お前、前に言ったよな。人を信じるのに根拠なんて必要ないって！
だったら誰にんと言われようとぶれんな！自分自身の心を信じろ!!」

すると、次第にエグゼイドの体に走っていた電気がなくなり始め、完全になくなった

と同時に目が赤く光る。

次の瞬間には、エグゼイドは自分の体をコントロールできるようになっていた。

海「暴走が・・・止まった！」

エ「ありがとう、レーザー！」

レ「いいっていいって！気にすんな！」

エ「うおおおおおおお!!」

エグゼイドはレーザーにお礼を言った後、ゲンムの方を見て高らかに叫び、走っていき

エグゼイドとゲンムはぶつかりあい、ゲンムの方が後ろに吹っ飛ばされる。

ゲ「ぐうう・・・」

ちようどその時、バグスターを倒し終えたブレイブとスナイプも駆けつける。

ブ「後はこいつだけだ！」

ス「俺も参加させてもらうぜ」

穂「海未ちゃん！」

海「！穂乃果、みんな!!」

レーザーやブレイブ達と行動していたμ'sメンバーもやってくる。

エ「じゃあ、四人同時ブレイと行こうか！」

『フアング！』

『ブレード！』

『ガン！』

『クロー！』

仮想ガシヤットが出現し、ブレイブ、スナイプ、レーザーの元に行く。

ブ「術式レベル5！」

ス「第伍戦術！」

レ「五速！」

『ガツチャ〜ン！レベルアップ！』

エグゼイドが装着している武装から、両腕と両脚の武装が外れる。

『アガツチャ〜！ドラゴナイトハンター！』

『ブレイブ！』

『スナイプ！』

『レーザー！』

『エグゼイド！』

レベル5になったエグゼイド、ブレイブ、スナイプ、レーザーは悠然と構える。

ゲ「ぬああああ!!」

ゲムムはエグゼイドに攻撃しようと突撃するが、エグゼイドは避けて後ろにいたレーザーが攻撃する。

レ「おりゃ！」

ゲ「ぬあ・・・」

ブ「ふっ！はっ！」

ゲ「ぐはあ！」

レーザーの攻撃を受けたゲムムを切り裂くブレイブ。

さらに、そこにスナイプの攻撃も加わる。

ス「はっ！」

ゲ「ぐわあ！」

スナイプの攻撃を受けたゲムムをエグゼイドとレーザーが蹴る。

ゲ「ぐわあ！・・・ぬう・・・」

蹴り飛ばされたゲムムをブレイブが一閃。

さらにもう一度横に切りつける。

さらにブレイブの後ろからスナイプが狙撃、ゲムムに命中する。

レ「永夢！」

エ「OK！」

エグゼイドとレーザーがタイミングを合わせ、同時に飛び蹴りをする。

その攻撃はゲンムに命中し、後方に吹き飛ぶ。

『ガツシユ〜ン!』

その拍子にゲームドライバーに装填されていたシャカリキスポーツガシャットが抜ける。

ゲ「ぬっ……ぐっ……ぐああ……」

ゲンムに装着されていたスポーツゲーマーが消失し、ライダーゲージが残り二つになる。

穂「やった!」

凜「黒いエグゼイドん勝ったにや!」

希「やったやん!」

穂乃果と凜、希の3人が喜びの声を出す。

残りのメンバーも声には出してないが、喜んでいた。

ブ「もうよせ」

レ「ライダーゲージが0になったら、ゲームオーバーで死んじゃうぜえ〜」

ス「おとなしくガシャットを俺達に渡せ」

スナイプがゲンムに歩み寄る。

だが、ゲナムはスナイプではなく、近くにいたμ'sメンバーを見る。ゲ「今こそ、死のデータを手に入れる時！」

ゲナムはどこからカラベルのない白いガシヤットを取り出し、バグヴァイザーに装填する。

『ガシヤット！』

そして、近くに落ちていたシャカリキスポーツを拾うと、キメワザスロットに装填、スイッチを押す。

『ガシヤット！キメワザ！』

ゲナムは飛び上がると、もう一度スイッチを押し、キックの体勢になる。

ゲナムが向かう方向には、μ'sメンバーがいた。

に「ちよ、ちよつと、こっちに来てるわよ！」

絵「は、早く逃げるわよ！」

気づいたにこと絵里が逃げるよう促す。

だが、

海「きゃ！」

こ「！海未ちゃん！」

足がもつれたのか、海未が転ぶ。

ことがそれに気づくが、今からでは間に合わない。

『シヤカリキ！クリティカルストライク！』

ゲ「はああああああ！」

海未は目を瞑る。

エ「！やめろ!!」

海未の状態に気づいたエグゼイドが高速で移動し、海未の前に立つ。

エ「はっ！」

エグゼイドは向かってくるゲンムをハンターゲームの尻尾で吹き飛ばす。

ゲ「ぬっ！ぬお！」

目を瞑っていた海未はいつまでもこない衝撃を疑問に思い、目を開ける。

海「！永夢！」

エ「大丈夫か？海未」

海「あつ、は、はい・・・ありがとうございます・・・」

海未の安否を確認するエグゼイド。

ゲ「ぬっ！・・・ぬううう・・・」

ゲンムがゆっくと立ち上がる。

だが、その体には電気が走っていて、ノイズがかかっていた。

胸のライダーゲージが0になり、警告音のような音が鳴る。

エ「はっ・・・」

ス「ん？」

レ「おいおい・・・あんた・・・！」

ブ「ライダーゲージが・・・0に・・・」

ライダーゲージが0になったのにも関わらず、ゲムムは落ち着いていた。

『ゲームクリア！』

先程エグゼイドにゲムムが吹き飛ばされた時に抜け落ちたシヤカリキスポーツがエグゼイドの手に落ちてくる。

エ「はっ・・・！」

その時、ゲムムはいきなり自分自身にバグヴァイザーを向け、銃口部分を自身の体に当てる。

ゲ「ふん！」

すると、ゲムムを黒い霧が覆い、その霧はバグヴァイザーに吸収されていく。

吸収し終わると、バグヴァイザーの画面に『D A N G E R O U S Z O M B I E』という文字が出てくる。

ゲ「はあ・・・」

希「嘘やろ・・・」

に「どういうことよ・・・」

絵「ハラショー・・・」

μ「sメンバーも予想外の人物に驚きを隠せなかった。」

貴「やっぱりな・・・」

貴利矢だけは、知っていたようで驚かなかった。

永「どうして・・・？僕達に協力してくれたあなたが、なんで!?」

永夢が声を荒げる。

無理もない。

今まで自分の先生であり、部活の顧問でもあった彼のことを永夢は信頼していた。

黎「ふっ・・・データ集取のためのテストプレイヤーとして、君達を利用させてもらっ

た。・・・全ては、究極のゲームを作るため!!」

黎斗は声を張って宣言する。

大「究極のゲーム?」

永「・・・ゲームってなんですか?・・・なんでこんな事を!」

近づこうとする永夢にバグヴァイザーの銃口を向ける黎斗。

黎「君達に教えてあげよう。この世界に蔓延しているバグスターウイルスは、全て私

が前世で作ったものだ」

飛「なんだと・・・!?」

黎「同時に、君達が使うガシヤットやドライバーも、私が作り上げたものだ」

永「どういうことですか・・・？」

黎「ふっ・・・私が教えられるのはここまでだ」

バグヴァイザーを構えながら語られた話に、永夢達は驚きを隠せなかった。

貴「あんた・・・まじで死ぬぞ・・・」

黎斗は永夢を見渡しながら宣言する。

黎「ドクター諸君、私達のゲームはまだ始まったばかりだ！・・・バグスターウィルスは、すでに大勢の人々の体の中に潜伏している。つまり・・・いつ誰が発症してもおかしくない」

永「えっ・・・!?」

黎「揃えた10本のガシヤットで、人々を救う事ができるか・・・。君達次第・・・」

黎斗は永夢達に向かって光弾を発射する。

永夢達は避けるが、顔を上げた時には黎斗の姿はどこにもなかった。

・
・
・
・
・
・
・
・

様々な資料が散乱している部屋の中。

パラドは一人でゲームをしていた。

そこに入ってくる、一人の男。

黎斗がボロボロの状態に戻ってきたのだ。

黎「はあ・・・はあ・・・」

呼吸が荒い状態だが、黎斗はバグヴァイザーに装填していた白いガシヤットを抜く。

抜いた瞬間、白かったガシヤットにラベルが出現、紫色に発光する。

それを見た黎斗は笑顔になる。

黎「完成した・・・！全ては計画通り!!」

さつきまで黙っていたパラドが口を開く。

パ「自分の体を使って死のデータを取るなんて・・・ほんつと恐ろしい男だな、お前

は」

パラドは立ち上がって黎斗に近く。

黎「・・・プロトガシヤットを使いすぎたせいで、どの道私の体は長く持たなかつ

た・・・。これは必然だ!」

パ「・・・心が躍るなあ!いよいよニューゲームの、スタートだ!」

第30話 最高のライブ

© side

黎斗が正体を明かし、その場を去った後。

しばらく呆然としていた永夢達だったが、徐々にその場を去って行った。

全員、何がなんなのか分からないといった顔だった。

そして、貴利矢もその場を去ろうとした時……

永「待ってください！」

永夢が貴利矢に声をかけ、貴利矢は立ち止まる。

永「黎斗先生が正体を明かした時、貴利矢さん言っていましたよね？ やつぱりって……」

貴利矢は先程の事を思いだし、

貴「ああ、確かに言ったな」

肯定する。

永「もしかして、貴利矢さんは知っていたんですか？ あの仮面ライダーが先生だった

事……」

貴「ああ……結構前から。確証はなかったが、なんとなく気づいてはいた」

永「どうやって気づいたんですか？少なくとも、不審なところはなかったはずですが……」

永夢の疑問に、貴利矢は笑って答える。

貴「これでも一応、監察医を目指してるんでな。観察眼は他の人よりはいい方だけ？それに、俺にはあの転生特典もあるからな」

永「転生特典？」

貴「ああ、詳しい事はまた後日教えてやる。とりあえず今は、これからどうするか考えろ」

そう言つて貴利矢は帰つていく。

永「……はい！」

……

場所を移動してCR。

そこには永夢以外に海未、飛彩、真姫、ポッピーがいた。

ポ「ええく!! 黒い先生が新任のエグゼイド!？」

飛「違う! 新任の先生が黒いエグゼイドだ！」

衝撃すぎたのか何言ってるのか分からなくなるポツピー。

すぐに飛彩が言い直したが……。

海「データ収集のために私達……というより永夢達を利用してみたいで……。その目的は究極のゲームを作る事」

真「そもそも究極のゲームって何よ？」

ポ「も〜！ピポパニックだよ!!」

後ろのモニターには、先日永夢達が助けた衛生省大臣官房審議官である日向恭太郎が映っていた。

恭『話は聞いたよ。こちらでも確認をとったところ、すでに檀黎斗は行方を眩ましている。彼の家も、もぬけの殻だった』

海「そうですか……」

恭太郎の言葉を聞いて全員顔が暗くなる。

恭『こちらでも調査を続ける。何か分かった事があれば、連絡する』

そこまで言って、画面が消える。

真「……ふう〜、なんか緊張した〜……。つていうか、海未も永夢も、いつの間にあんな人と知り合ったのよ？」

永「この間バグスターに襲われていたところを助けたんだよ」

海「そのあと、多少お話したぐらいです」

永夢と海未は平然というが、普通なら真姫のように緊張するはずだ。

飛「とにかく、檀黎斗のことは衛生省に任せよう。学生である以上、下手に動けないからな」

飛彩がもつともな意見を言う。

永「そうだね・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

次の日、永夢達が教室で自分の席に座っていると、ヒフミトリオが穂乃果にサインをねだってきた。

穂「えっ？サイン？」

「これから有名になるんだから、記念に一枚書いてよ♪・・・・・・・・さつき園田さんにも書いてもらったんだけど・・・」

穂「えっ、どこに？」

そう言っつて色紙を見る穂乃果。

永夢も気になったのか、席を立って一緒に見る。

海未のサインは、色紙の隅っこの方に小さく書かれていた。

穂・永「ちっちゃ!!」

「でしょ? 恥ずかしいから、これが限界だって……。だから、穂乃果は大きく書いて!」

穂「えっ? じゃあ・・・」

穂乃果は色紙いっぱい書いていく。

その結果・・・

穂「ごめん、入りきらなかった」

「ホント、あんた達極端よね・・・」

永「確かにね」

永夢も同意見らしく、頷く。

「さっき、矢澤先輩にも頼んだんだけど・・・」

に『すいません。今プライベートなんで』

「って・・・」

永「プライベートって・・・別に芸能人ってわけでもないのに・・・」

ごもつともな永夢の意見である。

永「そういえば穂乃果ちゃん。今日、貴利矢さんは?」

今日はまだ貴利矢の姿を見ていないらしく、永夢は穂乃果で聞いた。

穂「ああ、なんかやる事があるらしくて、今日は休むって」

永「ふくん……。あれ？ことりちゃんは？」

永夢が周りを見ると、ことりの姿がなかった。

穂「そういえば……」

.....

ちょうどその頃、ことりは廊下である封筒を見てため息をついていた。

その封筒は、留学案内の封筒だった。

.....

さらに同じ時、貴利矢は自分の家にいた。

貴「さて、そろそろ話を聞きに行くか……」

そうとうと、貴利矢はるガシヤットを取り出した。

そのガシヤットには、『HEAVENS DOOR』と書かれていた。

そのガシヤットを起動すると、貴利矢の目の前に光の扉が現れる。

貴利矢がその扉を潜ると、真っ白い空間へと移動する。

「また来ましたか」

貴利矢に話しかける一人の人影……永夢達を今の世界に転生させた女神様だ。

貴「ああ、また聞きたい事も増えたしな。それに、これが俺の特典の一つだしな」

貴利矢は先程のガシヤットを見せる。

貴利矢の転生特典の一つ、『いつでも女神と会い、話せる権利』だ。

あのガシヤットは、そのために通る扉を開くためだけなものだ。

「それで、今回は何が聞きたいんですか？」

貴「あんたはもう知ってるだろうけど、檀黎斗が正体を明かした」

「ええ、知っています。見てましたからね」

貴「その時にあいつが言っていた言葉……『前世でバグスターやゲーマドライバー、

ガシヤットを作った』って言っていた。それはどういう事なんだ？」

貴利矢は知りたいたい事をいきなり聞く。

貴「前世って事は、あいつも俺達と同じ転生者だって事だ。……あいつを転生さ

せたのもあんたなのか？」

「……………」

貴利矢の質問に、女神は何も答えない。

貴「あんたは俺達を転生させる時、『神の手違い』でバグスターウイルスがあの世界に流れたって言うていた。それは本当なのか？・・・実際は、あんたがあの世界にバグスターを流したんじゃないのか？」

「・・・・・・・・はあ〜」

貴利矢の質問を全部聞いた女神は最初は黙っていたが、やがてため息をつく。

「そうですね・・・・。そろそろあなたには話すべきかもしれませんね。事の真相を・・・・」

◎ side out

・・・・・・・・・・

永夢 side

現在、部室にて。

穂「うわあぁ〜!! 出場したら、ここで歌えるんだ〜!!」

凜「凄いにや〜!」

穂乃果ちゃんも凜ちゃんがパソコンの画面を眺めてうつとりしていた。

に「何うつとりしているのよ!」

に「ごさんがそう言うが、だんだんとウルウルしてくる。」

に「ら……ライブ出場くらいで……うぐぐ……」
そこまで言つて後ろを向く。

に「ぐす……やったわね!……ぐす……ニコ!」

大「お前も似たようなもんじゃねえか」

大我さんがツツコンだが、すぐに後ろに振り向く。

に「喜ぶのはまだ早いわ! 決定したわけじゃないんだから!!」

大「切り替え早えなおい!!」

でも、ここでふとある疑問を思い浮かべる。

永「でも、本当に出場するんですか? ラブライブ。あんな事があつたのに……」

僕が口にする、みんな固まった。

今現在、黎斗先生は行方知らずで、学校に姿を見せていない。

絵「確かに、私も思ったわ。どうすればいいんだらうって。でも、私達も最終目標は
廃校の阻止。ここで立ち止まるわけにはいかないと思うの」

絵里さんが自分の考えを言ってくる。

永「確かに、そうですね」

に「よーし! 気合い入れて行くわよ!!」

絵「みんな、ちよつとこれ見てくれる?」

絵里さんはノートパソコンを操作し、みんなに画面を見せる。

そこに写されていたのはUTX高校のホームページ。

そこには、ある事がデカデカと書かれていた。

穂「七日間連続ライブ!?!」

凜「そんなに!?!」

A—R—I—S—Eのページには、ラブライブ出場に向けての活動などが詳しく書かれていた。

希「ラブライブ出場チームは2週間後の時点で20位以内に入ったグループ。どのスクールアイドルも最後の追い込みに必死なん」

絵「20位以下になったところも、まだ諦めていないだろうし・・・今からなんとか追いついてなんとか出場を勝ち取ろうとしているスクールアイドルもたくさんいる」

真「つまり、ここからが本番ってわけね」

絵「ストレートに言えばそう言う事・・・喜んでいる暇はないわよ」

絵里さんが立ち上がって言う。

穂「よおし!!もつと頑張らないと!」

絵「とは言え、特別な事を今からやっても仕方ないわ。まずは、目の前にある学園祭で精一杯いいステージを見せる事。それが目標よ」

近々、学園祭をやる事になっていて、アイドル研究部はそこでライブを披露するつもりだ。

まずは、そこでいいライブを見せようっていう事だ。

に「よし！そうと決まったなら、早速この部長に仕事を頂戴!!」

絵「じゃあ、にこ。うってつけの仕事があるわよ」

に「……え？何？」

……

「居合道部！午後2時から一時間の講堂の使用を許可します！」

「やった〜!!」

居合道部と思われる二人が手を握り合って喜んでいた。

永「……あのく……これは？」

絵「昔からの伝統らしくて……」

絵里さんが言うには、学園祭の講堂の使用権は毎年くじ引きで決めているらしい。当たりは金色のボールで、それ以外の色だった場合は講堂を使用できないらしい。

次はアイドル研究部の番。

引くのは部長であるにこそんだ。

穂「にこちゃん、頑張って!!」

穂乃果ちゃんの応援を受けながらズンズンと進んで行くにこそさん。

「それではアイドル研究部さん!どうぞ!」

に「見てなさい・・・」

にこそさんがガラガラを回し始める。

そして、ボールが転がってきた。

そのボールの色は・・・!!

・・・・・・・・

場所を移動して屋上。

穂「どーーーーーしよーーーーー!!

穂乃果ちゃんが頭を抱えて叫んでいる。

に「だ、だつてしょうがないじゃない!!くじ引きで決まるなんて知らなかったんだから!!」

にこそさんが言い訳じみた事を言う。

凜「あー！開き直ったにやー!!」

に「うるさーい！」

花「うう・・・なんで・・・なんで外れちゃったのお!？」

花陽ちゃんはフェンスにしがみついて泣いている。

真「まあ、予想されたオチね」

真姫ちゃんはいつも通り。

希「にこつち・・・うち信じてたんよ・・・?」

希さんは珍しく膝を抱えて座っていた。

に「うるさいうるさいうるさーい!!悪かったわよ!!」

にこさんが引いた色は白。

つまり外れだ。

よって、アイドル研究部は学園祭で講堂が使用できないことが決定した。

だから屋上で悲壮感に明け暮れているのだ。

絵「気持ちを切り替えましょう。使用できないのに、いつまでも悲観しててもしょうがないでしょ？」

絵里さんが手を叩いてこの空気をどうにかしようとする。

海「でも、どうするんです?グラウンドも体育館も運動部が使用すると思います

し・・・」

今の僕達の問題、どこでライブをするか。

その疑問を立ち直りが早かった海未ちゃんが言う。

に「・・・部屋とか・・・？」

部屋で踊る情景を思い浮かべる。

大「狭いな」

に「むぐぐぐ・・・」

今度は穂乃果ちゃんが案をだす。

穂「あつ！じゃあ、廊下は!？」

廊下でライブしている様子を想像する。

穂『μ's!ミュージック・・・スタート!!』

永「いや、おかしいでしょ」

即却下する。

に「そうね」

穂「にこちゃんがクジ外すから、必死で考えてるのに!？」

永「ねえ、それだったら・・・」

僕は考えた場所を口にする。

永「屋上でやればいいんじゃないかな？」

穂「あつ！そうだよ！ここで簡易ステージを作ればいいんじゃないかな!?お客さんもたくさん入れるし！」

希「屋外ステージって事？」

こ「確かに人はたくさん入るけど・・・」

ことりちゃんが渋るが・・・

穂「何よりここは、私達にとつてすごく大事な場所！ライブをやるのに相応しいんじゃないかな!？」

穂乃果ちゃんが自分の考えを述べる。

希「確かに、それが一番μ'sらしいライブやね」

凜「よーし！凜を大声で歌うにや〜！」

絵「それじゃ、各自歌いたい曲の候補を出してくる事。それじゃあ、練習を始めるわよ！」

他のメンバーも賛同し、屋上でライブする事が決定した。

でも、この時は誰も考えていなかった。

このライブで・・・

あんな悲劇が起こる事を・・・。

・・・・・・・・・・

絵「え？曲を？」

翌日の部室。

打ち合わせの会議をしていると、穂乃果ちゃんがある提案をしてくる。

穂「うん。昨日、真姫ちゃんの新曲を聴いたら、やっぱり良くて。これ、一番最初にやったら盛り上がるんじゃないかなって」

絵「まあね。でも、振り付けも歌もこれからよ？間に合うかしら？」

穂「頑張ればなんとかなると思うの」

絵里さんが心配そうに言うが、穂乃果ちゃんは迷う事なく答える。

海「でも、他の曲のおさらいもありますし」

花「私、自信ないな・・・」

花陽ちゃんが海未ちゃんに続けて言う。

穂「μ'sの集大成のライブにしなきゃ。ラブライブの出場がかかってるんだよ」

希「まあ、確かに一理あるね」

穂「でしょ？」

希さんの言葉に、穂乃果ちゃんが嬉しそうにする。

穂「ラブライブは今の私達の目標だよ。そのためにここまで来たんだもん」

花「ラブライブ・・・」

穂「このまま順位を落とさなければ、本当に出場できるんだよ！たくさんのお客様

の前で踊れるんだよ！」

穂乃果ちゃんは立ち上がり、メンバーを見渡す。

穂「私、頑張りたい。そのためにやる事は全部やりたい。・・・駄目かな？」

絵「・・・反対の人は？」

絵里さんが代表してみんなに聞く。

それに異を唱える人は誰もいなかった。

穂「みんな・・・ありがとう！」

みんなは呆れたような顔をしているが、どこか嬉しそうな表情だった。

絵「ただし、練習は厳しくなるわよ。特に穂乃果。あなたはセンターボーカルなんだから、みんなの倍はキツイわよ。分かってる？」

穂「うん！頑張る！」

穂乃果ちゃんは元気良く答える。

本当に大丈夫だろうか・・・？

穂「いいから、やるのー!!」

にこさんが柵にしがみつき、穂乃果ちゃんが立ち上がらせようとしていた。いつもとは真逆の光景だ。

永「ねえ、穂乃果ちゃん。そろそろ休みなよ」

穂「大丈夫!私、燃えてるから!」

永「穂乃果ちゃんが大丈夫でも、他のみんなはそうじゃないんだよ?ほら」
穂乃果ちゃんに他のみんなの様子を見せる。

みんな、肩を上下に揺らしていた。

一年生の中で最も体力のある凜ちゃんですら、今は座り込んでいた。

穂「……」

永「分かった?分かったなら、少し休んで」

穂「……うん」

穂乃果ちゃんが休憩に入り、それも見た海未ちゃん達も休憩に入った。

永「ねえ、海未ちゃん……」

海「?どうかしましたか?永夢」

永「うん。ちよつと気になったことがあってね。……ここ最近、ことりちゃんの元

気がない気がするんだけど、何か知らない?」

僕の話の聞くと、海末ちゃんは何か迷った表情を見せた。

永「?どうしたの?」

海「あ、いえ……。やっぱり……。話た方がいいのでしょうか……」

永「?」

海末ちゃんは周りを気にしながら、小声で話して来た。

海「すいませんが、これから話す事はまだ他のみんなには内緒にしておいてくれませんか?」

永「う、うん……。いいけど……」

海「ちよつと、ここでは話にくいので移動しましょう」

海末ちゃんが歩き始めたので、僕はついて行く。

海末ちゃんは周りに誰もいない事を確認してから話し始める。

その内容は、ことりちゃんの留学の件だった。

永「それ、本当?」

海「はい。私も、昨日知りましたが……」

海末ちゃんは、一瞬悲しそうな顔をする。

永「……その事、穂乃果ちゃんは?」

海「まだ知らないはずですよ。本当は私の口から言うのはとも思ってたんですけど……」

応、永夢には・・・」

衝撃の内容に、僕はただ驚くだけだった。

永夢 side out

・・・・・・

貴利矢 side

学園祭の前日の夜。

外は雨だったけど、俺はコンビニに行っていて、その帰りに神田明神の前を通り掛つた時、誰かが階段を走っている音が聞こえた。

貴（こんな時間に・・・しかもこの雨の中で誰だ？）

俺は少し気になり、階段の方に近づいた。

すると、段々走っている人の顔が見えて来た。

貴「はっ!?!穂乃果!?!」

穂「わっ!き、貴利矢君?」

俺が声を出すと、穂乃果はびっくりしたようで飛び上がった。

貴「お前、こんな時間に何やってんだよ!?!明日は本番なんだぞ!」

穂「で、でも……」

貴「でもじゃねえ！お前が風邪でも引いたらどうするんだよ!？」

穂「っ！」

貴「……はあ、つたく、しょうがねえ……」

『爆走バイク』

貴「二速、変身」

『ガッチャ〜ン！レベルアップ！爆走バイク〜！』

俺はレーザー・レベル2に変身する。

レ「乗れ！送ってやる」

穂「う、うん……」

穂乃果は渋々といった感じだったが、サドル部分に乗る。

はあ、……これで明日は大丈夫なのかね……。

貴利矢 side out

……

© side

学園祭が始まる数時間前。

外はあいからわず雨が降っていたが、屋上にはライブステージが出来上がっていた。そのステージの上に貴利矢はいた。

貴「ああ・・・ああ・・・そうだ。俺はここで待ってるから、なるべく早く来てくれ」
貴利矢は誰かと通話していたのか、ゲームスコープを前にかざしていた。

話が終わったのか、貴利矢は通話を切ると、ゲームスコープをしまつて前を見る。

貴「今更あんたがここに何の用だ？・・・檀黎斗」

今、貴利矢の前には行方がわからなくなっていた黎斗の姿があった。

黎「君が色々と知つたみたいだったからね。・・・わざわざここまで来たのだよ」

貴利矢はそれを聞くと、ため息をつく。

貴「・・・はあく、何であんたがそれを知っているのか知らないけど、色々聞いちゃつたぜ？あくんな話や・・・あくんな話・・・」

貴利矢はおちよくなるように語る。

貴「あんたと永夢、前世から接点があつたんだつてな」

貴利矢の言葉を、黎斗は黙って聞いていた。

貴「以前永夢が言つてたけど、何であいつは適合手術を受けずにエグゼイドに変身できたのか。・・・その秘密は・・・」

黎「……君には敵わないな。……どうだ、取引しないか？」

黎斗は貴利矢に取引を持ちかける。

貴「……取引？」

黎斗は、持っていたアタツシユケースを開け、その中身を貴利矢に見せる。

貴「新しいガシヤット!？」

黎「このガシヤットを君にあげよう。……その代わりに……その秘密を誰にも口

外しないでもらいたい……」

少しだけ、二人の間に沈黙が訪れる。

やがて、貴利矢はニヤツと笑って、

貴「……ノツた」

その取引を受けた。

貴「ふくん……」

貴利矢はガシヤットを手に取って見た後、黎斗の方に振り向くと……

回し蹴りをしてアタツシユケースを蹴り飛ばした。

貴「……なくんて」

貴利矢は両手を少しでも横に広げる。

貴「懺悔してもらおうか。ライダー全員に対して……それと、あんたが騙したμsのみんなにもなあ」

『爆走バイク』

貴「変身」

『ガシヤット！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャゲーム！？』
, m a 仮面ライダー！』

レ「じゃあ早速、試し乗りをと……」

レーザーに変身した貴利矢は、先程黎斗から奪ったガシヤットを起動する。

『デンジャラスゾンビ』

『ガシヤット！』

レーザーはゲーマードライバーにガシヤットを装填する。

レ「行くぜ〜」

レーザーはレバーに手をかける。

その瞬間、ガシヤットから紫色の霧が放出、レーザーを包み込むとノイズのようなものが起こり、ライダーゲージが一気に残り二つになった。

レ「ぐわああああ!!…な、何だよ、これ!？」

レーザーは苦しみのあまり、膝をつく。

そんなレーザーに、様子を見ていた黎斗が近づくと、

黎「……………君は知りすぎた」

レーザーのところまで来ると、黎斗はレーザーの頭を掴み、持ち上げる。

黎「違うんだよ」

『ガツシュ〜ン!』

黎斗はレーザーのゲームドライバーからデンジャラスゾンビを抜くと、その顔をおもいつきり蹴る。

黎「このガシヤットはこうやって使うんだよ」

黎斗はどこからか、黒いバツクル……『バグスターバツクル』を取り出し、それを腰に当てる。

すると、バツクルからベルトが出現し、黎斗の腰に巻かれる。

レ「うう……ん?」

さらにバグヴァイザーを取り出すと、それをバツクルに取り付ける。

『ガツチョ〜ン』

取り付けた瞬間、禍々しい音声で鳴り響く。

レ「ドライバー……?」

驚くレーザーを尻目に、黎斗はガシヤットを起動する。

『デンジャラスゾンビ』

黎斗の背後にゲーム画面が出現、ゲームエリアが展開され、ギター音が鳴り響く。

黎斗はガシヤットを持つ手を顔の横に水平になるように持って来る。

そして、手の甲が表にくるように手をひっくり返す。

黎「変身」

黎斗はガシヤットを先程取り付けたドライバー……『バグルドライバー』に装填する。

『ガシヤット！』

装填した後、横についている赤いスイッチを押す。

『バグルアツプ!!』

その音声と共に、黎斗の前にモニターが出現、その後ろから黒い霧が流れ出る。

『デンジャー！デンジャー！（ジェノサイド！）デスザクライシス！デンジャラスゾンビ！（Wooooo!）』

出現したモニターを突き破って、ゲームが姿を表す。

だが、その姿は今までのゲームとは違い、どこか不規則な動きをする。

外見は骨を思わせる白と黒を基調とし、左右非対称の装甲、左目は水色、右目には壊

れた赤いバイザーにより赤色に見える。

ゲ「私は……仮面ライダーゲーム、レベル10!」

レ「はっ?……レベル・10!?!」

レーザーは驚きながら立ち上がる。

『ギリギリチャンバラ』

レ「っ……三速!」

レーザーはなんとかギリギリチャンバラを起動して装填し、レバーを開く。

『ガッチャ〜ン! レベルアップ! 爆走バイク〜! アガッチャ! ギリ・ギリ・チャンバラ〜!』

レ「くっ……うう……」

『ステージセレクト!』

レーザーは屋上から、廃工場のような場所に転移する。

ゲームはそんなことは気にせず、ゆっくりレーザーに近寄り、やがて手を構えて走り出した。

……

一方、その頃アイドル研究部の部室では。

凜「雨にや〜」

外の様子を見ながら呟く凜。

花「お客さん、全然いない……」

飛「この雨だからな……」

絵「私達の歌声で集めるしかないわね」

メンバーがそんな話をしている中、ことりと海未は部室の隅で何やら話し込んでいた。

永「すいません、遅れました……」

大「遅かったな。何かあったのか？」

急いで来たのか、息を切らして部室に入ってくる永夢。

珍しく遅れて来た永夢に、大我が聞いてくる。

永「目覚まし時計の調子が悪くて……」

大「そうか、今後は気をつけろよ」

事情を知った大我は特にそれ以上言わなかった。

永「あ、そうだ。貴利矢さんがどこにいるか知りませんか？」

希「貴利矢君？見てへんけど……」

永「さつき話す事があるからって呼ばれたんですけど．．．どこにいるんだろう？」

絵「ねえ、貴利矢のそうだけど、穂乃果を見なかった？」

永「穂乃果ちゃんですか？まだ、来てないんですか？」

永夢が辺りを見回すが、穂乃果の姿はなかった。

ちようどその時、部室のドアが開いて穂乃果が入ってくる。

穂「おはよう．．．」

絵「穂乃果！」

に「遅いわよ！あんた今まで何してたのよ！」

穂「ごめん、にこちゃん．．．。興奮して眠れなくて．．．」

大「ったく．．．そろそろリハーサルをしなくちゃならねえ時間だ。穂乃果はさつ

さと着替えろよ」

穂「うん！」

絵「それじゃあ、私達は先にリハーサルをやるわよ。穂乃果は着替えが終わり次第、合

流して」

「「「「「はい!!」」」」」」

．．．．．

その後、雨が降る中屋上でライブが始まった。

(♪:No Brand Girls)

中心に『μ's』と書かれている大きな旗の下で、9人の女神が歌って踊っている。雨でもたくさん来たお客さん達は、そんな彼女達に見入っていた。だが、No Brand Girlsが終わる頃に事件が起こった。

.....

μ'sが屋上でライブをしていた頃、廃工場に移動していたレーザーとゲムムは戦っていた。

レ「ぐわああああ!!」

レーザーが吹き飛ばされ、辺りに煙が立ち上る。

その煙の中から、ゲムムが歩いて姿を表す。

レーザーが満身創痍なのに対し、ゲムムは余裕そうだった。

レ「くっ…….……らあ!!」

レーザーはガシヤコンスパローの鎌モードで攻撃するが、ゲムは左手で防御し、右肘をレーザーにぶつける。

ゲ「ふん!」

レ「ぐっ!…….……おりや!」

レーザーがゲムに蹴りをかますが、逆に蹴りを受けて吹き飛ばされる。

レ「ぐあ…….……あ…….……」

レーザーは足はふらついていたが、それでも立ち上がって攻撃する。

だが、その攻撃はゲムに当たる事なく、逆に攻撃を受けていた。

ゲ「はっ!!」

レ「ぐはああああ!!…….……はあ…….……はあ…….……」

吹き飛ばされたレーザーは膝をつき、ギリギリチャンバラガシヤットをガシヤコンスパローに装填する。

『ガシヤット!キメワザ!』

レ「はあ…….……はあ…….……これでも喰らえ!」

『ギリギリ!クリティカルフィニッシュ!!』

レ「はああああ・・・はあ！はあ！・・・おりや!!」

レーザーの必殺技をモロに受けるゲンムだが、全く効いていないようで、平然とする。そして、レーザーの両手からガシヤコンスパローを弾き、後退させる。

レ「ぐわああああ!!」

弾いたガシヤコンスパローはゲンムの両手に落ちてくる。

ゲンムはガシヤコンスパローでレーザーを何回も切りつける。

レ「ぐわあ！ぐはあ！ぐわああああああ!!」

『ガツシューッン!』

ゲンムはガシヤコンスパローに装填されていたギリギリチャンバラガシヤットを抜いて回収する。

ゲ「真実と共に、闇に追放してやる」

ゲンムはバグルドライバーに両手を近づけると、A Bボタンを同時に押す。

レーザーはすでに立つ事すらギリギリの状態だった。

ゲンムは、今度はAボタンだけを押す。

『クリティカルエンド!!』

その瞬間、ゲンムは高く飛び上がり、それと同時に辺りに赤黒い霧が出現する。

そのまま回転してレーザーに迫っていく。

レーザーも回し蹴りをして対抗しようとするが、ゲンムのライダーキックに敵わず、吹き飛ばされる。

レ「ぐわあああああああああ!!!」

レーザーの体には電気が走り、ノイズのようなものが起こる。

レ「ぐううう……ぐあ……」

レーザーの胸にあるライダーゲージが、残り2の状態から0に変わる。

レ「ゲージが……ぐあ!」

次の瞬間にはレーザーの変身が解除され、ステージセレクトも解除、ライブがおこわ慣れている最中の屋上に戻ってくる。

穂「えっ……!?!」

絵「ど、どういう事……?」

永「貴利矢さん!?!」

貴「ぐ……ぐはあ……」

貴利矢は立つ事もできなくなり、膝をつく。

貴利矢の様子がおかしい事に気づいた永夢達が、貴利矢に近づこうとした時、別の方
向から貴利矢に歩み寄る一つの人影に気づいた。

貴利矢は自分の目の前まで来たゲンムの体を掴んで、恨めしそうに見ながら立とうと

する。

だが、その途中でゲムムは貴利矢の手を払う。

支えを失った貴利矢は力なく倒れこむ。

貴「はあ・・・はあ・・・ごめん・・・みんな・・・」

ゲムムは近くにいた永夢達を見ると、その場から去っていった。

大「あいつは・・・」

観客は突然の事に呆然としていた。

永「貴利矢さん！」

倒れこんでいる貴利矢に永夢達マネージャー組とμ'sメンバー、このライブを見に

来ていた雪穂と亜里沙が駆け寄る。

永「貴利矢さん！大丈夫ですか!？」

穂「貴利矢君！」

永夢達が声をかける中、貴利矢の体はノイズがかかり、徐々に消え始めていく。

永「!？」

に「貴利矢が・・・消えかけている!？」

凜「ど、どうしたこと・・・?」

飛「一体、何があった!？」

大「さっきのやつ……ゲムか？」

貴「……ああ」

大我の問いに力なく答える貴利矢。

貴「少し……悪ノリが過ぎたみたいだ……」

永夢達はみんな信じられないといった顔をする。

希「しつかりして、貴利矢君！」

永「僕達に話す事があるんでしよう!？」

貴利矢は自分の腰につけられていたゲームドライバーを取り、さらに懐から転生特典のガシヤットを取り出す。

貴「……永夢……世界を……人類の未来を任せたぜ……」

貴利矢は永夢を見ながらそう言うと、ゲームドライバーとガシヤットを永夢に押し付けるように渡す。

永夢はそれを受け取る。

貴「忘れんなよ……お前が笑顔でいる限り……お前はお前だ」

貴利矢は永夢にしつかりとドライバーとガシヤットを握らせる。

貴「お前に運命は……永夢……お前が変わる!!」

永夢にそう語りかけた後、貴利矢は他のみんなを見る。

貴「お前ら・・・俺がいなくても、目標目指して突き進め！・・・後の事は・・・任せた!!」

そう言うと、貴利矢はみんなに笑いかけ、倒れる。

『ゲームオーバー』

どこからかそんな音が鳴ると、貴利矢の体は完全に

消滅した。

第32話 ともだち

© side

学園祭から数日が過ぎた。

貴利矢が消滅してからというもの、μ'sメンバーや永夢はどこか心無しといったような感じだった。

貴利矢が消滅した瞬間を目撃した人はたくさんいたため隠せないと言う事になり、結果的に事情を知っている衛生省の日向恭太郎が会見でバグスターウィルスの存在を発表することになった。

そして、その会場。

そこには、たくさんメディア記者が来ていた。

恭「衛生省大臣官房審議官の日向恭太郎です。本日は衛生省より、国民の皆様にご挨拶を申し上げます」

この会見は、街中にあるモニターでも流されていた。

それは、CRでも例外ではなく、μ'sメンバーや永夢達はそこで会見の様子を見て

いた。

恭「今、私達の国は新型コロナウイルスの危機に脅かされています。人体に感染するよう進化を遂げたコンピューターゲームウイルス・・・バグスターウイルスの感染が、広がっているのです。感染すると、感染者のストレスによってウイルスは増殖し、やがてはバグスターウイルス感染症・・・通称、ゲーム病を引き起こします」

この会見を人々はその場で立ち止まって見ていた。

恭「直接、人から人へ感染しない事はないとの確認はとれていますが、感染源については現在調査中であり、予断を許さない状態であります」

会場には、CRの代表として明日那が出席していた。

また、その場所には西木野総合病院の院長・・・つまり、真姫の父親の姿も会った。

恭「ゲーム病を発症すると、感染者の体からバグスターと言われるゲームキャラが生まれ、私達の命を脅かすのです」

その話を聞いた瞬間、会場は騒めき始める。

恭「しかし、ご心配はございません。早期発見と、迅速な治療を行えば、感染者の命は守られます」

モニターには、ゲーマドライバーとガシヤットが映し出される。

恭太郎が国民に注意を促している映像を、薄暗い部屋の中でパラドと黎斗が見てい

た。

パ「衛生省も必死だな。俺達に対する牽制のつもりかな」

そう呟いて視線を手元のゲーム機に移すパラド。

黎「問題ない。私に敵うものなど存在しないのだからな」

黎斗は机に置いていたデングジャラスゾンビガシャットを手に取る。

黎「ゾンビの力も手に入った。そろそろ頃合いだ。仮面ライダーのガシャットを回収する」

その言葉に、パラドは視線を黎斗に移した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

会見後の会場。

恭太郎はその場を去り、隣には明日那がいた。

恭「明日那君。最近、永夢達の様子はどうか？」

恭太郎はそう明日那に聞いてくる。

明日那は少し躊躇ったが、今の永夢達の様子を伝える事にした。

明「この間の学園祭から、みんな心ここに在らずって感じですよ。ボーとしている事も

多くなっています。何より……悲しみが大きかったのでしょうか。彼女達^μは……：
ラブライブの出場を辞退する事にしたそうです」

恭「……そうか……」

恭太郎は、以前永夢達に助けられてから彼らの活動を知ろうとスクールアイドルの事を調べていた。だから、ラブライブがスクールアイドルにとって大事な目標である事も理解していた。

恭「衛生省としても、一人の人間としても、情けなく感じるよ。彼らのような学生に任せるしかできず、結果として一人の学生を消滅させてしまった……」

明「でも、それは審議官のせいでは……！」

恭「それでもだ。……我々が、早くに檀黎斗を発見し、捕獲できていたなら、こんな事にはならなかっただろう……」

「あの……」

そんな時、二人に話しかける人がいた。

恭「君は……」

「お初にお目にかかります。日向審議官。私は西木野総合病院の院長を勤めております、西木野灰馬です」

恭「ああ、君が……。お勤め、ご苦勞様です」

灰「ありがとうございます。ところで・・一つ聞きたい事があるのですが、よろしいですか？」

恭「ええ。答えられる範囲であれば」

灰「ありがとうございます。実は、私の娘がここ最近元気がないんです。この間の学校の学園祭の日から」

その言葉を聞いて、恭太郎と明日那は顔を見合わせる。

明「失礼ですが、あなたの娘さんのお名前は・・・」

灰「はい、真姫です。西木野真姫」

西木野真姫。μ'sのメンバーの一人にして、学園祭の事件を知っている人物の一人だ。

灰「学園祭から帰って来た日から様子がおかしくて、調べて見た所、先程発表があったバグスターウイルスが関係しているような噂が出回っていて・・・」

灰馬の言葉を聞いて、明日那はある事を考える。

明「ここではお話できませんので、別の場所に移動しましょう。構いませんか？審議官」

明日那は恭太郎に確認の了承をとる。

恭「ああ、そちらの事は君に任せる」

そうやって、恭太郎はその場を去って行った。

明「それでは、移動しましょう。ついて来てください」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

場所は替わってCR。

そこには会見の様子を見ていた永夢達がいた。

時間が少し経ってためか、人数は減って残っていたのは永夢、海未、飛彩、真姫、大我、そして絵里の6人だ。

飛「これから、俺達はどうするんだ・・・？」

飛彩の問いに答えたのは大我だった。

大「ラブライブは辞退したが、そもそも俺達の目標は学校の廃校阻止だ。これからもそれ目指してやるだけだろ」

真「でも、あんな事があったのよ？・・・今まで通りにできると思う？」

絵「はつきり言うけど・・・おそらく無理ね・・・」

貴利矢の消滅、ラブライブの辞退。

それらが重なり、μ'sメンバーは気持ちが悪く、ごちゃごちゃになってどうすればいいか

分からなくなっていた。

しかも、海未と永夢しか知らないが、こどりの留学もある。

こどりは学園祭が終わったら報告するつもりだったらしいが、あんな事があつたため言う機会もなく、留学までの日が刻一刻と近づいていた。

その時、CRの扉が開く。

そこから、明日那と灰馬が入って来た。

真「!?パ、パパ!」

灰「真姫!? どうしてここに!」

予想外に人物が入って来た事により、真姫は驚きの声をあげる。

それは灰馬も同じらしく、真姫同様驚く。

海「えつと……真姫のお父さんですか?」

飛「あ、ああ……でも、どうして……」

明「私がここに連れて来たの」

飛彩の疑問に明日那が答える。

絵「明日那さんが? どうしてですか?」

明「彼が、学園祭の事を知りたがつてるからよ」

その言葉に絵里達は驚きの表情を見せる。

明「へたに外で話すよりも、ここで話した方が話が広まる心配もない。そう思って、ここに連れて来たの」

海「そ、そうですか……」

明日那の答えに返事を返す海未。

もはや手遅れでは、とも思ったが、今はまだそこまで情報も出回ってなく、学園祭の事件も噂ぐらいで信じている人は少なかつた。

だが、今回バグスターウイルスを発表したため、少なくとも確信に迫る人は現れるだろう。

そんな人を抑えるために、なるべくそのような話を外でしないようにした方がいい。

海未達も、明日那の意見には同意なのか、それ以上何も言わなかつた。

灰「それで、どうしてここに真姫達が……?」

明「その前に、ここがどのような場所なのか説明しますね。ここは電腦救命センター、通称『CR』と呼ばれている場所で、バグスターと患者が分離して、バグスターを倒せなかつた時、ここに患者を収容します」

灰「そ、そんな場所が……」

明「そして、彼らがここにいる理由ですが、永夢と飛彩、大我こそが今現在唯一ゲーム病の治療ができる人物だからです」

灰「ち、治療って・・・彼らはまだ学生なんですよ!？」

明日那の言葉に、驚きの声をあげる灰馬。

彼からしたら永夢達はただの学生。

そんな彼らがゲーム病に唯一治療できる人物なのだから驚くのも仕方ないだろう。

真「信じられないかもしれないけど本当よ、パパ」

飛「これが証拠です」

そう言って飛彩はゲームドライバーとガシヤットを取り出す。

先程の会見で初めて存在が世間に明かされたゲームドライバーとガシヤット。

それが今日の前にあるため、灰馬は信じるしかなかった。

明「この場所、そして彼らがここにいる理由は分かりましたね？それでは、後はあな
たが知リたがっていた情報です。ですが、このことは内密にしておいてください」

明日那がこの話を持ち出した瞬間、CRの中の空気が重くなる。

明「実は、ゲーム病を治療できる人物は他にもいたのですが、彼はこの間の学園祭
で・・・・・・・・消滅しました」

灰「・・・・・・・・えっ?」

予想外の真実に、灰馬は呆然とする。

バグスターウイルスが関係しているとは思っていたが、まさか一人の命が失われたと

までは思っていなかったらしい。

真姫達は机に置かれていたゲームドライブと爆走バイクガシヤットを見る。

生前、貴利矢が使っていたものだ。

貴利矢が永夢に渡した後、それらはCRで保管することになった。

明「ガシヤットは適合者しか使用することができないため、適合者である永夢、飛彩、大我の3人しか治療ができません。もし、ゲーム病患者を見つけた際には、CRに連絡を入れてください」

そう締めくくると、明日那は部屋から出て行く。

部屋には沈黙が訪れる。

真「……………はあり、いつまでもここであうだうだしてゐる訳には行かないわね。私は帰るわ」

飛「そうだな、俺も帰るとしよう」

灰「えっ？あ、おい」

真「パパも。帰るわよ」

真姫は灰馬を連れて出て行く。

絵「真姫の言う通りね。時間も時間だし私も帰るわね」

大「なら、俺も帰るとしよう。じゃ、また明日な」

絵里と大我也も帰って行く。

CRには永夢と海未の二人が残った。

永「……僕がもつと早く貴利矢さんのところに行つてれば、こんなことにはならなかったのかな？」

唐突に、永夢がそんな事を言い出す。

海「それは……どう言う事ですか？」

永「あの時、僕は貴利矢さんに呼ばれていたんだ。話す事があるから、みんなを連れて来てくれて……」

知らなかった真実に、海未は驚きの表情を見せる。

永「僕が……早く言っていれば……うっ……うっ……うっ……」

後悔の気持ちが強いのだろう、永夢は泣き出した。

初めて見る永夢が泣いていることに、海未は戸惑いを感じた。

自分はどうすればいいのか分からない、そんな表情だった。

海「永夢……」

せめて自分ができる事を……と、永夢の背中をさする。

海「大丈夫……大丈夫ですよ……」

永「うっ……うっ……うわああああ!!」

二人しかいない中、永夢は思いっきり泣け叫んだ。

・・・・・・・・・・

次の日、永夢達が屋上にいると、真姫と凜、花陽が息を切らしながら屋上にやってくる。

穂「ど、ど、どうしたの!？」

凜「た・・・・・・・・」

真「た・・・・・・・・」

花「タスケテ・・・・・・・・」

に「はあ？」

・・・・・・・・

校舎内の掲示板。

その掲示板には、『来年度入学者受付のお知らせ』と書かれた紙が貼られていた。

「「「これって!?!」」」

花「中学生の希望校アンケートの結果が出ただけど・・・」

真「去年より志願する人がずっと多いらしくて」

花陽と真姫が説明する。

永「つて事は・・・」

海「学校は・・・」

希「存続するつて事やん!？」

希も困惑している。

真「再来年はわからないけどね」

凜「後輩ができるの?」

凜が興奮気味に言う。

飛「まあ、そういう事だな」

飛彩が答えると、後輩ができないと思つて残念がつていた凜ははしゃいで喜ぶ。

その時、穂乃果の視界の端にこちらに歩いてくることりが入り込む。

穂「こつとりちやくん!!」

ことりは普段に比べて暗いが、穂乃果は気づいていないのか、明るく声をかけながら抱きつく。

こ「え?え?」

ことりは状況が飲み込めていないのか、突然抱きつかれて慌てる。

そんなことりに、海未が「これ」と掲示板を指差す。

掲示板に視線を向けたことりはそのまま固まる。

穂「やった・・・やったよ。学校続くんだって。私達、やったんだよ・・・」

目を潤ませながら言う穂乃果。

こ「嘘・・・じゃ、ないんだ・・・」

そう溢すことり。

穂「うん!!」

絵「ハラショー・・・」

絵里も感激していた。

© s i d e o u t

.....

永夢 s i d e

学校存続の知らせが届いた次の日。

僕達はアイドル研究部で祝いをあげていた。

正直そんな気持ちにもなれなかったが、貴利矢さんの望みでもあつた廃校阻止が叶えられたから、とりあえず祝おうと言う事になり、参加する事にした。

に「では取り敢えず、につきにつきに〜！」

簡単に飾り付けられた部室の中で、部長のにこさんが音頭をとる。

に「みんなグラスは持ったかな？学校存続が決まったと言う事で、部長のにこにーから一言、挨拶させてもらいたいと思いま〜す！」

「「お〜！！」」

床に敷いたブルーシートに座つて凜ちゃん、花陽ちゃん、穂乃果ちゃんの3人が拍手する。

真姫ちゃんは呆れた視線を送り、その隣では飛彩君がナイフとフォークで黙々とケーキを食べている。

希さんと絵里さんはパイプ椅子に座つて互いに笑みを交わしている。

窓際のベンチには海未ちゃんとかとりちゃんが座り、床に視線を落としている。

に「思えばこのμ'sが結成され、私が部長に選ばれた時から、どのくらいの月日が流れたのであろうか。たった一人のアイドル研究部で耐えに耐え抜き、今こうしてメンバーの前で想いをかた〜り〜」

大「さっさと乾杯するぞ！」

『かんぱーい!!』

に「ちよつと!!」

にこさんが話している途中だったが、大我さんが遮つて乾杯を促し、みんなも持つていた紙コップを掲げる。

にこさんも文句を言つてるが、一緒に掲げている。

テーブルに置かれていたたくさんの料理は、瞬く間に量を減らしていく。

穂「はる・・・お腹空いたー!にこちゃん、早くしないと無くなるよ!」

に「卑しいわね・・・」

花「みんなー!!ご飯炊けたよー!!」

凜「ん!?んー!!」

花陽ちゃんが炊きたてのご飯を持ってきてみんなに見せると、凜ちゃんが真っ先に食いついた。

希「ほつとした様子ね、エリチも」

絵「まあね、肩の荷が下りたつて言うか・・・」

希「μ's、やつて良かったでしょ?」

絵「どうかしらね。正直、私が入らなくても同じ結果だった気もするけど・・・」

大「案外、そうでもないかもしれねえぞ?」

絵里さん達が話していた所に、大我さんが加わる。

絵「大我……」

希「大我君の言う通りや。μ、sは9人。それ以上でも、以下でも駄目やつて、カードも言うとするよ」

絵「……そうかな」

絵里さん達がそんな事を話していると、突然窓際にいた海未ちゃんが立ち上がる。

その表情は、とても険しかった。

海「ごめんなさい。皆にちよつと話があるんです」

食事をしていたメンバーも手を止めて海未ちゃんに視線を向ける。

希「聞いている?」

絵「ううん」

希さんと絵里さんは聞いていないらしい。

だとすると、まさか……

海「実は、突然ですがことりが留学する事になりました。2週間後に日本を発ちます」
やつぱり……

さつきからことりちゃんは顔を俯いたままあげない。

だが、他のメンバーの視線は海未ちゃんからことりちゃんに移動する。

真「何？」

花「え……嘘……」

に「ちよ……どういふこと？」

メンバーから次々と困惑の聲が挙がる。

それも、無理もないだろう。

こ「前から、服飾の勉強したいって思ってた。そしたら、お母さんの知り合いの学校の人に来てみないかって……」

ことりちゃん表情は暗いままだ。

こ「ごめんね。もつと早く話そうって思ってたんだけど……」

ことりちゃんがそこまで言って、続きを海未ちゃんが引き継ぐ。

海「学園祭のライブでまとまってる時に言うのは良くないと、ことりは気を遣っていません」

希「それで最近……」

ことりちゃんの様子がおかしいのは希さんも気づいていたらしく、納得したように洩す。

絵「行つたきり、戻つてこないのね……」

留学って言つても、期間は様々。

数週間の時もあれば、数年帰ってこなかったりする。

ことりちゃんが今まで言うのを躊躇っていたとなると、後者の方だろう。絵里さんも同じ事を考えたらしく、ことりちゃんに聞く。

すると、ことりちゃんは首を縦に振り、肯定する。

こ「高校を卒業するまでは、多分……」

もう音ノ木坂に戻ってくる事ない。

つまり、μ'sとして活動していく事はない。

穂「どうして、言ってくれなかったの……？」

部室に漂っていた沈黙を破ったのは穂乃果ちゃんだった。

その声は普通の彼女からは想像できない、険のこもった声だった。

穂乃果ちゃんは立ち上がり、ことりちゃんへと歩いていく。

海「だから、学園祭があつたから……」

穂「海未ちゃんは知ってたんだ……」

海「それは……」

海未ちゃんが言葉を詰まらせる。

ことりちゃんの前までできた穂乃果ちゃんは身を屈め、ことりちゃんの手自身の手を被せる。

穂「どうして言ってくれなかったの？ライブがあったからっていうのは分かるよ。でも、私と海未ちゃんのことりちゃんはずっと……」

絵「穂乃果」

絵里さんが穂乃果ちゃんを止めようと声をかける。

声色からも、次第に興奮しているのが分かる。

希さんも続けて声をかけるが……

希「ことりちゃんの気持ちもわかってあげな——」

穂「分からないよ!!」

穂乃果ちゃんが叫ぶ。

穂「だって、いなくなっちゃうんだよ！ずっと一緒だったのに、離れ離れになっちゃうんだよ！なのに……」

こ「何度も、言おうとしたよ。でも、穂乃果ちゃんライブに夢中で……、ラブライブに夢中で……。だから、ライブが終わったらすぐ言おうと思ってた。でも、あんな事になって……」

ことりちゃんの目から涙が溢れる。

こ「聞いて欲しかったよ。穂乃果ちゃんには一番に相談したかった。だって、穂乃果ちゃんは、初めてできた友達だよ！ずっと傍にいた友達だよ！そんなの……そんな

なの当たり前だよ!!」

ことりちゃんは穂乃果ちゃんの手を振り払って部室を出ていく。

穂乃果ちゃんは追おうとするも、すぐに立ち止まる。

海「ずっと、行くかどうか迷っていたみたいです。いえ、むしろ行きたがってなかったようにも見えました。ずっと、穂乃果を気にしてて……。穂乃果に相談したら何て言うかってそればかり。……黙ってるつもりはなかったんです。本当にライブが終わったら、すぐに相談するつもりでいたんです。分かってあげてください」

海未ちゃんの言葉が耳に入っているのかいないのか、それは分からないが穂乃果ちゃんは何も言わない。

目を見開いたまま、ことりちゃんが出て行った部室のドアを見つめていた。

.....

ことりちゃんの留学が皆に伝わってから数日。

ことりちゃんは留学の準備で忙しいのか、学校に来ていない。

穂乃果ちゃんと海未ちゃんはあの日からお互いを避けているような感じで話していない。

そうして過ぎていく時間の中、僕達は絵里さんに呼ばれて屋上に向かった。

穂「ライブ?」

絵「そう、みんな話したの。ことりがいなくなる前に、全員でライブをやろうって」
初めて聞いた話だった。

おそらく海未ちゃんを中心に話し合っていたのだろう。

飛「来たからこそにも言うつもりだ」

凜「思いつきり賑やかなのにして、門出を祝うにや!」

に「はしやぎ過ぎないの!」

凜「にこちゃん何するの!」

に「手加減してやったわよ」

凜とにこが騒ぎ、それをみんなで微笑みながら見ていたが、ただ一人、穂乃果ちゃんだけは俯いたままだった。

海「まだ落ち込んでいますか?」

海未ちゃんも気づいたのか、声をかける。

その言葉に、残りの全員も反応する。

穂「・・・私もう少し周りを見ていけば、こんな事にはならなかった」
やつぱり・・・。

穂乃果ちゃんは未だに自分を責め続けている。

花「そ、そんな自分を責めなくても・・・」

穂「自分が何もしなければ、こんな事にはならなかった!!」

花陽ちゃんは慰めようとするが、穂乃果は聞かなかつた。

に「あんたねえ・・・!」

大「そうやって全部自分のせいにするのは傲慢だぞ」

穂「でも!!」

絵「それをここで言つて何になるの?何も始まらないし、誰もいい思いをしない」

真「ラブライブだって、また次があるわ」

に「そつ!次こそは出場するんだから!落ち込んでいる暇なんてないわよ!」

珍しく真姫ちゃんが励ますように笑顔で言う。

に「皆さんも便乗して、自身のやる気を出していく。

だけど・・・」

穂「出場してどうするの?」

穂乃果ちゃんのこの言葉を聞いた瞬間、みんなの動きが止まった。

「……………え？」

穂「もう学校は存続できたんだから、出たつてしようがないよ」

永「ちよつ…………穂乃果ちゃん…………」

穂乃果ちゃんに声をかけるが、穂乃果が止まる気配はない。

穂「それに無理だよ。A—R—I—S—Eみたいになるなんて、いくら練習したつてなれつこない」

に「あなた…………それ、本気で言つてる…………？本気だつたら許さないわよ…………」
穂乃果ちゃんのこの言葉を、一番許せない人がいた。

に「こささんだ。」

この中で誰よりもアイドルが好きで、誰よりもアイドルを目指して来て、誰よりもアイドルの高みに立ちたかつた人だ。

それゆえに、今の穂乃果ちゃんの言葉を許せるはずがなかつた。

に「許さないつて言つてるでしょ!!」

真「ダメえ!!」

に「離さないよ!!」

穂乃果ちゃんに掴みかかろうとしたにこさんを、真姫ちゃんが寸前で止める。

に「にはね! アンタが本気だと思ったから、本気でアイドルやりたいんだって思ったからμ'sに入ったのよツ!! ここに賭けようって思ったのよ!! それを、こんな事ぐらいで諦めるの!?! こんな事くらいでやる気をなくすの!?!」

大「落ち着け、にこ!」

穂乃果ちゃんは何も答えなかった。

そもそも、視界に入れようとしていない。

他のメンバーも黙って見てるしかなかった。

なんて言葉をかければいいのか、わからないのだ。

絵「じゃあ、穂乃果はどうすればいいと思うの? . . . どうしたいの? . . . 答え
て」

絵里さんの問いに、穂乃果ちゃんは決定的な一言を落とす。

穂「辞めます・・・私、スクールアイドル辞めます」

「「「「「・・・えっ?」」」」」

穂乃果ちゃんはただそれだけを言っつて、屋上から出て行こうとする。

そして、ドアノブに手をかけようとした瞬間・・・

パンツツツ
!!!!

海未ちゃんが穂乃果ちゃんの頬を叩いた。

海「・・・あなたがそんな人だとは思いませんでした。・・・最低です。あなたは最低です!!」

そう言っつて、海未ちゃんは屋上を飛び出した。

永「海未ちゃん!?!」

僕は海未ちゃんを追いかけ、屋上を出た。

今、μ'sは最悪な状態を迎えていた。

永夢 side out

.....

© side

「.....まさか、貴利矢がゲームオーバーになつてしまうとは.....」

天界では神様が地上を見ていた。

「このままでは彼らがやられてしまうかもしれないね.....仕方ありません、予定より早いです、このガシヤットを永夢に届ける事にしましょう」

そう言う神様の手には、普段のガシヤットよりも分厚い、二本分の黒いガシヤットがあつた。

第33話 定められたDestiny

◎side

誰もいないCR。

中は薄暗く、隅にあるゲーム機の光が唯一の明かりである。

そんなCRに出現するオレンジ色の粒子。

その粒子は徐々に人の形を形成し、パラドに変わる。

パラドは机に置かれていた手紙を手に取り、内容を確認する。

手紙には、『このガシャットには致死量のバグスターウイルスが含まれておりますので、ご使用の際はお気をつけてご使用ください』と書かれていた。

確認したパラドは不敵な笑みを浮かべて、同じく机に置かれていた黒いガシャットを持ち、再びその場から姿を消した。

・
・
・
・
・
・
・

一方、音ノ木坂学院の永夢達のクラス。

時刻は放課後で、教室の中にはさほど人は残っていないかった。

穂乃果がスクールアイドルを辞める宣言してからすでに2週間が経過。

その間、穂乃果と海未は一切口を聞いてなかった。

永夢がどうにかしようと動いているが、穂乃果がほとんど反応しないため、二人の関係はどんどん悪い方向に向かっていった。

今日も授業が終わってから二人は喋らず、海未はカバンに荷物を詰めると、さっさと弓道部に向かった。

穂「・・・・・・・・・・」

穂乃果は無言で前の席を見る。

それらの机はことりの机だった。

ことりは留学の準備で学校に来ておらず、旅立ちまであと三日というところまで迫っていた。

・・・・・・・・・・

その頃の校門前。

「まだ落ち込んでいるんだ……」

「うん、なんかスクールアイドルを辞めたの、海未ちゃんと喧嘩したのが原因らしくて……」

ヒデコが穂乃果達の様子をフミコ、ミカの二人に聞くと、フミコがそう答える。

「ことりちゃんも留学の準備でずっと休んでるし、永夢君がどうにかしようとしてるみたいだけど、うまくいってないみたい」

「そつかく……それで海未ちゃんと全然話してないのか」

ミカは寂しそうに言い、ヒデコは閃いたように言う。

「じゃあ、こういう時こそ、私達が何とかするしか無いでしょ!」

ヒデコがそう言ったたちよごその時、校舎の方から暗い顔をした穂乃果が歩いてくる。

「穂乃果、偶には一緒に帰らない?」

穂「えっ? うん、いいよ」

穂乃果は一瞬驚いたが、話しかけて来た人物を確認すると、了承の返事をする。

「今日の放課後、空いてる?」

「ちよ、ちよつとヒデコ!?!」

軽々しく話しかけるヒデコをミカが止めようとするが、ヒデコはウィンクをして人差

し指を立てる。

「気にする事じゃない。だって穂乃果は、学校を守ろうと頑張ったんだよ?」

穂「そうだけどろ……」

「学校守るためにアイドル始めて、その目的が達成できたからアイドルを辞めた。何もきにする事じゃない。ね?」

穂「……そうだね」

ヒデコの言葉に穂乃果はそう答える。

アイドルを始めたのは学校を救うため、その目的が達成できた今、アイドルを続ける必要は無い。

そのはずなのに、穂乃果は苦しさを感じた。

「学校の皆、感謝してるんだよ?」

「うんうん! μ's 見てうちの学校を知ったっていうのも、沢山いたみたいだし!」

「そうそう、元気出しなよ」

穂「……うん。ありがとう」

ヒデコ達の励ましに、穂乃果は少しだけ笑顔になる。

その後、穂乃果はヒデコ達に腕を引かれ、秋葉原に移動した。

.....

その頃、秋葉原のファーストフード店。

に「あんた達はどうするつもり？」

凜と花陽はにこに連れられて、ファーストフード店に来ていた。

そこで、にこは二人に質問する。

花「・・・どうするって？」

に「アイドルよ。決まってるでしょ・・・続けるつもりはない？」

「っ・・・」

に「私達だけでも、続けない？」

にこの誘いに、二人の心は揺らぐ。

絵里に活動休止と言われたから仕方なく了承したが、にこは諦めきれず、一年生の二人を誘ってもう一度スクールアイドルをやろうと考えていた。

花「・・・にこちゃん・・・」

にこの言葉に、花陽と凜は食べるのを止める。

すぐには返事ができないのか、少し俯いた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

音ノ木坂の音楽室。

真「・・・ふう」

ピアノを弾き終えた真姫は一息吐くと、窓の方を見る。

そこには飛彩が窓に寄りかかっていた。

飛「こうやって真姫の演奏を聴くのも久しぶりだな」

真「そうかしら？」

飛「ここ最近、μ'sの練習ばかりだったからな」

音楽室でピアノを演奏する、μ'sに加入前はつとやっていた事だが、加入後はいつも練習をしていたため、二人がこうしてここに訪れるのはかなり久しぶりだった。

飛「・・・μ'sが活動停止になって、どう思う？」

真「・・・悲しいわよ。なんか心にポツカリと穴が空いたような感じで、全然埋まらない。やっぱり私は音楽が・・・μ'sが大好きなの！穂乃果やことり達がいるμ'sが！これからも、今まで通りに皆とアイドルをしたい！」

真姫の気持ち聞いた飛彩は、黙って真姫に近づき、その頭を撫でる。

真「ヴェエエ！な、なによいきなり！」

飛「いや、変わったなと思って。μ'sに入る前は、そんな事言わなかったしな。……
とにかく、今は穂乃果や、永夢を信じよう」

真「……ええ」

……

数時間後、ことりの家にて。

こ「あ、海未ちゃん、いらっしやい。遅かったね、練習？」

海「はい」

部活の練習を終えた海未はことりの家を訪れていた。

ことりの部屋に移動した海未は、部屋の中を見て思わず足を止める。

最後に来た時はもっと可愛らしい家具やぬいぐるみが沢山あったが、今はベットと少数の小物だけだった。

こ「海未ちゃんも断ったの？」

海「……はい、続けようとするにこの気持ちも分かりますし、できる事なら……」

こ「じゃあ、どうして？」

ことりの問いに答えながらドアを閉める海未。

にこは海未にも誘いの声をかけていたが、海未は断っていた。

二度目のことりの問いに、海未は俯きながら答える。

海「・・・私がスクールアイドルを始めたのは、ことりや穂乃果が誘ってくれたからです」

こ「っ！・・・ごめんなさい・・・」

海「いえ、人のせいにしたいわけではないんです。穂乃果にあんな事を言ってしまったが、辞めると言わせたのは私の責任でもありません」

こ「そんな事ない！あれは私が言わなかったから・・・！」

穂乃果や海未が辞めた。

その理由を聞いて責任を感じたことりは謝るが、海未は自分の責任でもあると言う。

海「穂乃果とは・・・？」

こ「・・・穂乃果ちゃんとは・・・」

海未の問いに目を逸らすことり。

どうやらここ最近、全く会っていないらしい。

海「・・・もうすぐ日本を発つのですよ？」

こ「・・・うん・・・」

海「・・・ことり、本当に留学するのですか？」

こ「えっ?」

海「私は・・・いえ、なんでもありません・・・」

もうすぐいなくなってしまう幼馴染に、海未は行かないでほしいと言いそうになるが、そんな我儘が通じるわけがないと後ろに振り返る。

こ「・・・無理だよ、今からなんて・・・」

海「・・・分かっていきます・・・」

もう後戻りはできない。

海未は自分に気持ちを押し殺し、ことりの言葉に頷くしかなかった。

・・・

同時刻、神田明神。

ヒデコ達と秋葉原のゲーセンでダンスゲームをした後、3人と別れた穂乃果は一人、神田明神に来ていた。

そこで、穂乃果は練習をしていた花陽と凜の二人と遭遇する。

穂「凜ちゃん、花陽ちゃん」

花「穂乃果ちゃん・・・」

穂「練習、続けてるんだね」

に「当たり前でしょ」

二人に気づいた穂乃果は名前を呼び、花陽と凜は返事をする。

練習をしている二人を見てそう言うと、席を外していたにこが戻って来てそう返した。

に「スクールアイドル、続けるんだから」

穂「え？」

に「悪い？」

穂「いや・・・」

ジト目でツンとした態度をとるにこに穂乃果は少し戸惑うが、にこはそんな穂乃果は関係なしに続ける。

に「μ'sが活動休止したからって、スクールアイドルをやっちゃいけないって決まりはないでしょ」

穂「で、でも・・・なんで？」

に「・・・好きだから」

どうしてアイドルを続けるのか、その答えはとてもしらぬ答えだった。

に「にこはアイドルが大好きなの。皆の前で歌って、ダンスして、一緒に盛り上がる

て、また明日から頑張ろうって。そんな気持ちにさせてくれるアイドルが、私は大好きなの！穂乃果みたくない加減の好きとは違うの!!」

穂「違う！私だって!!」

に「どこが違うの？」

穂「っ!?!」

に「自分で辞めるって言ったでしょ？やってもしようがないって」

穂「それは・・・」

にこの正論に何も言えなくなる穂乃果。

凛「にこちゃん、ちよつと言います・・・」

穂「・・・にこちゃんの言う通りだよ。邪魔しちやつてごめんね」

花「穂乃果ちゃん!」

そのまま帰ろうとした穂乃果を、花陽は呼び止める。

花「今度、私達だけで講堂でライブをやろうと思つて、もし良かったら・・・」

凛「穂乃果ちゃんが来てくれたら、織り上がる事間違いなしにや!!」

に「あんたが始めたんでしょ?・・・絶対来なさいよ」

穂「皆・・・」

皆の誘いに、穂乃果の心は大きく揺らいだ。

.....

神田明神を後にし、穂乃果は家に向かっていった。

その心中には、自分が何をしたいのか、どうすればいいのか、そんな疑問が訪れていた。

スクールアイドルを辞める、自分でそう言った手前、再び始める事に抵抗がある。

それに、もうことがない。

穂乃果にとって、それはかなり辛い事だった。

今までずっと一緒にいた幼馴染の一人がもうすぐいなくなる。

それも、自分にせいで仲違いのまま別れる事になる。

だけど、気持ちの整理が付かず、会いに行く事もできない。

穂乃果自身は気づいていないが、その体には相当なストレスが溜まっていた。

だからこそ、穂乃果の体からある存在が分離した。

突然現れた粒子が穂乃果の体から離れ、人の形を形成していく。

「ふっふっふ．．．待ってるよ、エグゼイド、ブレイブー」

赤い体、白い装束を身に纏い、フードを被って赤い杖を持つているバグスター。

かつてエグゼイドとブレイブに倒された事のあるバグスター、アランブラバグスターは、自らを葬った二人の仮面ライダーに復習を誓いながら、その場から姿を消した。

.....

アランブラバグスターが穂乃果から分離した時、永夢は公園のベンチに座っていた。そこで、CRの白衣を握って悩んでいるようだった。

考えている事は貴利矢の消滅、ことりの留学、μ'sの活動休止、穂乃果と海未の喧嘩。

この短期間で多くの事が起こった。

人々を笑顔にする。そんな目標があつた永夢は穂乃果達を笑顔にしたと思っていた。友達としても、ドクターとしても。

だが、結果はうまくいかず、ことりの留学まで後三日というところまで来てしまった。

永「一体・・・どうすれば・・・」

「辞めちまえよ。そんな小難しい事を考えるのなんて」

そんな永夢に語りかける声。

永夢が声がした方向、後ろを向くと、そこにはパラドが立っていた。

永「?・・・どこかで・・・っ!」

パラドを見た永夢はどこかで見た記憶があり、以前秋葉原でゲンムと戦った時の事を思い出す。

レベル3の力を手にいれて初めてゲンムと戦った時、パラドは永夢の前に現れていた。

永夢は、その時の事を思い出す。

永「お前!・・・ゲンムに成り済ましていたやつ・・・」

パ「俺はパラド。お前とは一度話がしたいと思っていた」

ベンチから立ち上がってパラドから離れる永夢。

パ「人間は一度死んだらそれまで。そんなもん救うなんて、無理ゲーにもほどがあるだろ」

永「・・・」

永夢にも思う部分があるのか、顔を俯かせる。

・・・

その頃、飛彩は真姫と学校を離れ、帰宅路についていた。

ちやうどその時、真姫が前を歩いている海未を見つける。

真「あら？あれは・・・海未？」

飛「・・・ああ、そうだな。声をかけるか？」

真「ええ・・・そうね」

真姫が海未に声をかけようとしたその時・・・

「見つけたぞ、ブレイブ！」

飛「!？」

穂乃果から分離したアランブラが飛彩達の前に現れる。

「ちやうど良い。μ'sの諸君も少なからずいるな。貴様も葬らせていただく！」

アランブラはそう言うや否や、真姫に向かって攻撃を放つ。

飛「真姫!!」

その攻撃が当たる寸前のところで飛彩が真姫を押しして躲させる。

飛「こいつの狙いは真姫達μ'sだ！隠れてろ！」

真姫はすぐにその場を離れる。

海未もすでに気づいていて、少し離れた場所で様子を伺っていて、真姫もその場所に隠れる。

『タドルクエスト』

飛「変身」

飛彩はブレイブに変身し、アランプラに立ち向かって行った。

・
・
・
・
・

パ「お前の大好きなゲームなら、死んだってコンティニューできるし、悪い事があつてもリセットできる。・・・白衣なんて捨てて、もつとゲームを楽しめ」

パラドは笑いながら永夢に語る。

永「・・・ふざけるな！お前達のゲームのせいで・・・貴利矢さんは死んだんだ!!」
パ「落ち着けよ。あいつを殺つたのは・・・ゲムムだ」

パラドは振り返つて永夢を見る。

ちようどその時、永夢のゲームスコープが鳴り始める。

永夢がそれを確認しようとした瞬間、パラドはその手を掴む。

パ「ドクターである限り、人間の死は避けて通れない。あいつらμ'sと一緒にいたつて、今回のようなイザコザがこれからも必ず訪れる。・・・お前にそれを耐えられるのか?」

永夢は顔を俯かせ、悔しそうな表情をすると、パラドに掴まれている手を思いつきり引いて離れる。

永「……耐えられる訳がない。……誰かが、死ぬのなんて……仲が良い人達が、目の前で喧嘩をして、何もできないなんて……」

永夢は言葉を詰まらせながらも、自身の思いを口に出す。

永「もう……誰も死なせたくないし、誰も悲しませたくない」

それを聞いたパラドは呆れながら口を開く。

パ「……人間の命や心すらも、ノーコンティニューで救うってわけか」

パラドはゆつくりと、それでいて素早く永夢に近づき、その肩を掴む。

……

ブ「はあ!」

「むん!」

ブレイブは戦いの場所を森のような場所に移し、レベル3となっていた。

ブレイブの剣戟はアランプラの魔法の杖、『アランプラスタッフV』を使ってその攻撃をいなしていく。

「はああ……はあ!」

アランプラはブレイブの攻撃を避けながら、時々蹴りを入れる。

ブレイブは攻撃を受けながらも、負けじと剣戟を繰り出していく。その戦いは、真姫と海未、さらにもう一人見ていた。

海「真、真姫・・・あちらを！」

真「え?・・・く、黎斗先生!?!」

黎斗は右手に持っていたバグヴアイザーを腰に当てる。

『ガッチョ〜ン!』

大「貴利矢が死んだのは、口封じのためだろ?・・・ゲムム」

その場にやってきた大我は黎斗に話しかける。

大「あいつはエグゼイドや、お前の事、バグスターの事を調べていた。・・・その事

と関係があるんじゃないのか?」

大我の問い掛けに、黎斗はデンジャラスゾンビを取り出しながら答えた。

黎「・・・知る必要はない」

その答えを聞くと、大我は鼻で笑いながらガシヤットを取り出す。

大「そう言うと思ったぜ！」

『バンバンシューティング』

『デンジャラスゾンビ』

大「変身!!」

黎「変身」

『ガシヤット！バグルアップ！！デンジャー！デンジャー！（ジェノサイド！）デス・ザ・クライシス！デンジャラスゾンビ！（Wooooo！）』

黎斗はゲンムに変身するや否や、スナイプに向かっていく。

.....

パ「誰も死なせたくないんだろう？このガシヤットを使い」

パラドはそう言うのと、永夢の手に通常よりも分厚い、黒いガシヤットを握らせる。

パ「そいつでゲンムを倒せ。・・・運命を変えてみせろよ」

パラドはそう言つて、その場から消える。

パラドが去つた後、永夢はそのガシヤットを見ながら貴利矢に言われた事を思い出し
ていた。

貴『忘れんなよ・・・お前が笑顔でいる限り・・・お前はお前だ。お前の運命は・・・
お前が変えろ！』

永夢はガシヤットを握ると、その顔を何かを決心してような表情に変えた。

・・・・・

場所は変わって森の中。

スナイプもレベル3になってゲンムと戦っていたが、ガトリング砲でいくら攻撃しても、ゾンビであるゲンムには全く効かずにいた。

そして、対に懐に入られる。

ゲ「ふん！はっ！」

ス「ぐっ！ぐわあ！」

懐に入ったゲンムはスナイプの胸の部分を肘で突き、さらに蹴りを入れる。

蹴られたスナイプは吹っ飛ばされ、ブレイブ達の近くに着地する。

ブレイブはアランプラに苦戦していて、かなり追い込まれていた。

アランプラの攻撃を受けたブレイブはスナイプの横に吹っ飛ばされ、アランプラはその瞬間に魔法を発動する。

「トマーレー！」

下に魔法陣が出現し、魔法はブレイブだけでなく、横にいたスナイプにもかかり、二

人は全く動きなくなる。

ス「う、動けん……」

「ふっふっふ……はっ！ふっ！」

ブ「ぐわああ！」

ス「ぐわあ！」

アランブラは動けなくなったブレイブとスナイプに歩いて近づき、スタツフで触る。触る瞬間、スタツフに上部が赤く光り、触れたブレイブ達は吹っ飛ばされる。

明「二人共！」

海「あ、明日那さん！」

ちようどその時、その場所に明日那が駆けつける。

明日那が戦いの状況を見ようと前を向くと、ちようどゲンムがガシャコンスパローを鎌モードにしてブレイブとスナイプを切りつけていた。

ゲ「ふん！はっ！」

ブ「ぐう！」

ス「ぐはああ！」

そこに、アランブラの魔法攻撃も加わる。

「モエール！」

アランブラの前に魔法陣が出現、その魔法陣から炎が放出されてブレイブとスナイプに向かつていく。

直撃したブレイブとスナイプは燃え上がり、その瞬間にゲムムが切りつける。

ゲ「せいやつ!!」

ブ・ス「ぐわああああ!!」

攻撃が直撃したブレイブとスナイプは後ろに吹っ飛ばされ、変身が解除される。

真「飛彩!!」

海「駄目です！近づいては！」

真姫が飛彩に駆け寄ろうとしているが海未がそれを止める。

その間にも、ゲムムはガシャコンスパローを弓モードに変えて飛彩達に銃口を向けていた。

ゲ「ふん」

『ス・ドーン!』

永「止める!!」

ゲ「ん？」

ゲムムが向けた瞬間、永夢がその場に駆けつける。

その手には先程パレードから渡されたガシャットが握られていた。

その様子を、パラドは近くの木の上から見ていた。

パ「お前の運命が決まる時だ、永夢」

永夢はガシヤットを一度見て、再び顔を上げる。

永「・・・運命を変えるんだ！」

永夢はガシヤットを構えてゲーマドライバーを装着する。

明「永夢・・・何そのガシヤット？」

明日那は永夢が持っているガシヤットに見覚えが無く、疑問の声を挙げる。

永夢はその質問に答えず、ガシヤットを起動してドライバーに装填する。

『ガシヤット！』

その瞬間、永夢の体内で異変が起きる。

永「っ！・・・う!!」

永夢は突然苦しみ出し、黒い霧が永夢の体内から放出される。

永「うう・・・うわあ・・・ぐうう！うわあああああ!!!」

永夢が叫ぶと同時に、かなりの量の霧が放出される。

飛彩や大我、明日那と真姫は驚愕の顔をし、海未は心配そうに永夢を見ていた。

永「・・・くっ・・・もう、これ以上・・・誰かを・・・死なすなんて・・・！うっ！」

霧が再び永夢の中に入ると、永夢は膝をつく。

永「うう・・・はあ・・・はあ・・・絶対に・・・うあ・・・嫌だ・・・」

永夢が気を失いそうになったその瞬間、目が赤く光り、再び霧が放出された。

永「うわああああああああああ!!」

目も赤かったのが、途中から右目がオレンジ、左目が緑の変わっていた。

目の色が変わったと同時に、霧も同じように変化、右側と左側でそれぞれオレンジと緑に変わる。

永「うわああああああ!!」

その霧は徐々にガシヤットに集まっていく。

飛「何が起きているんだ・・・」

ゲ「まさか・・・」

まるで予想外の状況に、飛彩達は困惑を隠せず、ゲムは驚いていた。

『ガツシュ〜ン!』

全ての霧がガシヤットに集まると、ガシヤットは勝手に抜け、空高く飛ぶ。

立ち上がった永夢がそのガシヤットをキヤツチした瞬間、黒かったガシヤットに色が付き始め、ラベルも出現する。

前半分はオレンジ、後ろ半分は緑色で、ラベルにはオレンジと緑の色をしたマイティが二体描かれていた。

永夢は迷わずガシヤットを起動する。

『マイティブラザーズXX』

永夢の背後にゲーム画面が出現し、そこからオレンジと緑のゲームエリアが展開された。

明「新しいゲーム!?!」

聞いた事も見た事もないゲームに、明日那は驚きを隠せなかった。

永「患者の運命は、俺が変える」

永夢はそう言うのと、いつもの手順でガシヤットを動かす。

永「変身!!」

『ダブルガシヤット!!』

普段はここでパネルが出現するが、永夢はレバーを開く。

『ガッチャくん!レベルアップ!』

レバーを開いたと同時にパネルが出現し、今まで?だったパネルが解放され、永夢に重なる。

『マイティブラザーズ!二人で一人!マイティブラザーズ!二人でビクトリー!X!』

外見はレベルとさほど変わらないが、頭部はオレンジと緑の立て髪で左右に別れていて、ライダーゲージも三本追加されていた。

明「新しいエグゼイド!」

ゲ「あ、ありえない……」

パ「おお……」

明日那達は今までとは違うエグゼイドに驚き、パラドは興味深そうに見る。

エ「ノーコンティニューで、クリアしてやる……ふっ!」

エグゼイドはゲンムに向かってかけていき、殴る。

ゲンムは最初の攻撃が当たるが、二発目は避け、ガシヤコンスパローで矢を数発ほど放つ。

エグゼイドはその矢をバク転して避け、手で地面を押してもとの体勢に戻るとゲンムに飛び蹴りをする。

ゲンムは少しだけ後退したが、エグゼイドは攻撃の手を緩めず、ゲンムを翻弄させながら飛び蹴りを放っていく。

ゲンムもガシヤコンスパローで攻撃しようとするが、エグゼイドの動きについていけず、攻撃を喰らっていく。

エ「ふっ!はっ!はあああ!!」

ゲ「ぬう……むう!ぬあああ!」

蹴り飛ばされて木に激突したゲンムはエグゼイドに向かって走っていく、スパローで

攻撃しようとするが左手で止められ、今度は左手で殴ろうとするが右手で止められ、最終的には両手で強く殴られる。

その威力は高く、ゲナムはかなり後方に飛ばされ、その衝撃でガシャコンスパローを離す。

エ「へっ！」

仰向けに倒れたゲナムはゾンビのようにゆらゆらと立ち上がる。

パ「ゲナムと互角・・・エグゼイドレベル10の登場か！」

戦いの様子を見ていたパラドは状況を分析をしながらも笑っていた。

エ「ゲナム！・・・お前を攻略する」

エグゼイドはそう言うのとレバーを一度閉じて両手を大きく回す。

エ「大ーーーーー変身!!」

『ガッチャーン！ダブルアップ!!』

レバーを開けると、二人のエグゼイドが描かれているパネルが出現してエグゼイドに重なる。

『俺がお前で！お前が俺で！（We are!）マイティ！マイティ！ブラザーズ！（ハイ！）XX!!』

真「え？」

本人達は気づいていなかったのか、お互いの顔を見つめる。

エリ「ふええ？」

第34話 μ, S ミュージックスタート!

© side

穂むらにて。

亜「ほあく……雪穂、これはシュークリーム？」

雪「違うよ。それはあんこ。「豆を煮たものなんだよ」

亜「ハラショー！」

絵里は妹の亜里沙の友達である高坂雪穂を家まで送っていた。

雪穂はお礼と言って穂むまんを渡していた。

亜里沙は饅頭を初めて見るらしく、不思議そうに持っていた。

雪「わざわざ送ってもらってありがたいがとうございます。良かったら上がって行って下さ

い。お姉ちゃんも喜びますよ」

絵「……そうね、じゃあお言葉に甘えて」

絵里は雪穂の誘いを穂乃果の部屋を見ながら頷き、二階に向かっていく。

・
・
・
・
・
・

絵「・・・ごめんね」

穂「あ、いえいえお気になさらず。今お茶を・・・」

絵「違うわ、・・・ μ sを活動休止にしようって言った事。・・・本当は私にそんな事を言う資格なんてないのに・・・。ごめんなさい」

穂「そ、そんな事ないよ・・・、てゆうか、私が辞めるって言ったから」

穂乃果の部屋に来た絵里は突然誤った。

穂乃果はいきなり来たことかと思ってお茶を用意したが、 μ sを活動休止にした事だと絵里は言った。

そうなった原因である穂乃果は暗い顔になり、再び絵里が口を開く。

絵「私ね、凄くしつかりしてて、いつも冷静に見えるって言われてるけど、本当は全然そうじゃないの。・・・いつも迷って、困って、泣き出しそうで、希に実際恥ずかしい所を見られたのよ」

穂「絵里ちゃん・・・」

絵「でも、隠してる。自分の弱い所を・・・、私は穂乃果が羨ましい。素直に自分が思ってる事をそのまま行動に起こせることが・・・」

穂「そ、そんな事・・・」

絵里はそこまで言うと、穂乃果が淹れたお茶を飲んで美味しいと言って一息吐き、再び語り始める。

絵「ねえ、穂乃果。私には．．．穂乃果に何を言っただけがいいか正直分からない。私達でさえ、貴利矢の消滅、ことりがいなくなってしまう事がショックだから、いつもそばにいる海未や穂乃果の事を考えると胸が張り裂けそうになる．．．でもね、穂乃果に、一番大切なものを教わったの。変わる事を恐れないで、その恐怖に立ち向かい、突き進む勇氣」

絵里はそこまで言うと、穂乃果に右手を差し出した。

絵「私はあの時、あなた達の手に救われた」

◎ s i d e o u t

．．．．．

海未 s i d e

私達は今、C R に来ています。

今C Rには私以外に、真姫、飛彩、明日那さ．．．いえ、ポッピーポパポの3人がいます。

永夢は自分の部屋で寝ています。

飛「・・・ポッピーピポパポ、永夢に一体何が起きたんだ」

飛彩が私達が今一番気になっている疑問を、この中で一番知ってそうなポッピーに聞きました。

ポ「それは・・・私にも分からなくて・・・」

それでも、ポッピーも知らないらしく、困った様な仕草をしている。

そこで、私達は今日の戦いを思い出していた。

〈回想中〉

『俺がお前で！お前が俺で！（We are!）マイティ！マイティ！ブラザーズ！（ハイ！）XX!!』

二人に別れたエグゼイドはお互いを見ていた。

飛「どう言う事だ!？」

大「なんで永夢が二人に・・・？」

オレンジ色のエグゼイド・・・エグゼイドRとしよう。は緑のエグゼイド・・・エグゼイドLに向かって叫ぶ。

ER 「お前誰だ!？」

近距離で叫ばれたエグゼイドLは一瞬驚き、すぐに名前を言う。

EL 「僕は宝生永夢です!」

ER 「いや、Mは俺だつて!」

EL 「いや、永夢は僕です!」

ER 「いや、俺!」

EL 「僕です!」

ER 「俺!」

EL 「僕です!」

ER 「俺!」

EL 「僕です!」

すでに何回目かわからないこのやり取り。

二人のエグゼイドは自分こそがM（永夢）だと言い張っている。

ER 「んゝ．．．」

EL 「んゝ．．．」

ER 「んゝ」

EL 「んゝ」

二人のエグゼイドは顔を近づけ、ぶつかっても睨み合っている。

ER「俺」

EL「いや、僕です」

ER「いや、俺!」

EL「僕です!」

そのやり取りを見ていた明日那達は困惑した表情を浮かべていた。

明「どっちも永夢!?!」

海「ど、どう言う事・・・ですか?」

睨み合っていた二人のエグゼイドはめんどくさくなつたのか、Rの方が手を振り払う。

ER「いいよ、もう!ゲナムは俺が攻略してやるぜ!」

『ガシャコンキースラッシュャー!』

エグゼイドRがゲナムの方を向くとパネルが出現して新たな武器が出現した。

だが、ゲナムに向かって走ろうとしていたエグゼイドRをエグゼイドLが前に立って止めた。

EL「ちよつと待ってください!患者の治療が先です!アランブラを倒さないと!」

エグゼイドLはガシャコンキースラッシュャーの剣先をアランブラに向ける。

ER 「おい！ゲームが先だつて！」

Rが剣先を再びゲームに向ける。

EL 「アランブラです！」

が、Lがまたアランブラに剣先を向ける。

目の前で繰り返し広げられている同一人物の喧嘩に、アランブラとゲームは困惑していた。

ER 「おら！」

EL 「あつ！イタタタタタ！」

エグゼイドRはガシャコンキースラッシャーを捨てるとLの右手を掴んで思いつきり引つ張る。

Rはそれに加えLの体を抑えているため、Lは動く事が出来なかった。

ER 「ふん！・・・あ、あれ？」

EL 「え？」

二人のエグゼイドが辺りを見渡すと、すでにゲームとアランブラの姿はなかった。

ER 「おい！・・・ゲームは終わってないぞ！」

エグゼイドRが空中に向かって叫んでいるのに対し、エグゼイドLはため息をついていた。

ER 「おい!逃げんのか!」

『ガツチャクン!ガツシユクン!』

エグゼイドLがレバーを閉じてガシヤットを抜くと、それに連動してRの方でも同じ事が起こる。

ガシヤットが抜かれると、二人のエグゼイドは一箇所に引き寄せられ、一度レベル0に戻ってから変身解除された。

永「うわああ!」

体勢を崩した永夢は先程の事を思い返し、ガシヤットを見つめた。

永「二人の、エグゼイドに・・なれるなんて・・!うあ・いつ!」

その時、突然頭痛が起こり、永夢はそのまま意識を失った。

海「永夢!大丈夫ですか!」

明「ねえ、ちよつと永夢!?!起きて!」

すぐに海未と明日那が駆け寄った。

〈回想終了〉

海未 s i d e o u t

◎ side

黎斗はキーボードを打ちながら、永夢が生み出したガシヤットの事を考えていた。机には、パラドがガシヤットと共に持ってきた手紙が置かれていた。

黎（あのガシヤットは使用した場合、大量のバグスターウイルスに感染して普通の人間なら消滅したはずだ・・・）

パ「お前も知ってるだろ。あいつが他のライダーとは違うつてのを」

パラドはビリヤードで遊びながら黎斗に語りかける。

パ「しかし、俺達すら知らない新しいゲームを生み出すとはなあ。・・・やつぱりあいつを見てると心が踊る」

黎斗はパラドの話を聞きながら、再びキーボードを打ち始める。

黎「いずれにせよ、ゲームマスターはこの私だ。・・・私の許可無く、不正のゲームを生み出す事は認めない。やつのガシヤットを回収し、データを削除する」

.....

数日後。

音ノ木坂学院の講堂に向かってゐる海未の姿があつた。

この日はことりが日本を発つ日。

にもかかわらず、彼女はここにいた。

講堂の扉を開くと、舞台の上にいる穂乃果の姿を確認出来た。

海「穂乃果・・・」

穂「ごめんね。急に呼び出したりして。・・・ことりちゃんは？」

海「いえ・・・今日、日本を発つそうです」

穂「・・・そうなんだ・・・」

久しぶりの海未との会話に、穂乃果は戸惑いながらも話しかける。

それは海未も同じ事だった。

初めに聞いたことりの出立。

別れの挨拶はおろか、全く話せず、仲直りが出来なかつた自分に、穂乃果は腹を立て

たが、すぐに首を横に振り、海未に自分の思いを告げた。

穂「私ね、ここでファーストライブをやつてことりちゃん和海未ちゃんと歌つた時に

思つたの。もつと歌いたいって、もつとスクールアイドルを続けたいって、私・・・辞

めるって言つたけど、気持ちは変わらなかつた」

海「……………」

穂乃果の気持ちを、海未は黙って真剣に聞いていた。

穂「学校の為とか、ライブの為とかじゃ無くて、私好きなの。歌うのが大好きなの…、それだけは譲れない…。だから、ごめんなさい!!」

海「!?!」

突然の謝罪に海未は戸惑うが、穂乃果は構わず続ける。

穂「これからもつと迷惑をかける！夢中になつて気づかなかつたり、色々空回りもすると思う……………。だって、私不器用だもん！でも…………でも！追いかけていたの！だから……………」

海「…………ふふ」

穂「え…………海未ちゃん!?なんで笑うの!?私真剣なのに!」

必死の思いで伝えた気持ち。

それを聞いた海未は突然笑い出し、穂乃果はシヨックを受ける。

海「ふふつ、ごめんなさい。でもね、はつきり言いますが…………穂乃果にはずつと迷惑をかけられていますよ」

穂「…………えっ?」

笑い終える海未は一呼吸吐いて、真剣は表情で穂乃果を見た。

穂乃果は身構えたが、その内容に思わず声を漏らす。

海「ことりとよく話していました。穂乃果と一緒にいると、いつも大変なことになると」

喋りながら穂乃果に向かって歩いて行く海未。

海「大体、スクールアイドルを始めようと言われた時のそうです。私は本気で嫌だったんですよ？ どうにかして辞めようと思いましたが。穂乃果を本気で恨んだりもしましたよ？ 全然気づいていなかったでしょうけど」

穂「……………ごめん……………」

海未の話にショックを受ける穂乃果だが、海未は構わず話を続ける。

海「ですが、穂乃果は連れて行ってくれます。私やことりでは、勇気が無くていけない凄い所に！」

穂「海未ちゃん……………」

海「私が怒ったのは、穂乃果が自分の気持ちに嘘をついていたのが分かったからです。

穂乃果に振り回されるのはもう慣れっこですよ。永夢や花陽、凜、真姫、ここ、希、絵里、飛彩、大我。みんなもう慣れてると思います。だから……………その代わり、連れて行ってください！ 私達の知らない世界へ！それが穂乃果、貴方の凄いところなんです！」

海未に言われ、穂乃果は大きく頷く。

そして、海未は穂乃果の横に立ち、講堂の全体を見渡すと、一呼吸して口を開いた。

海「だって〜可能性感じたんだ〜そうだ〜進め〜」

海未が口ずさむと、穂乃果も一緒に歌い始める。

穂「……後悔した〜くなく〜い目〜の前に」

「僕らの道がある〜」

穂乃果達がアイドルをやると決意し、その時に歌った曲。

海未が歌い始め、穂乃果も歌い、ことりも歌った気がした。

海「……さあ！ことりが待っています！迎えに行つてあげてください！」

穂「ええ!?で、でもことりちゃんは……!」

海「私と一緒にですよ、ことりも引つ張つていつて欲しいんです、我儘を言つて欲しいんです！」

穂「わ、我儘あ!?!」

海「そうですよ。有名なデザイナー学校に選ばれたのに残れだなんて……でも! そんな我儘を言えるのは!」

永「穂乃果ちゃんしかいないってね」

穂「!?!永夢君!それに、皆も!」

突然聞こえた声に穂乃果が講堂の入り口を見ると、そこには永夢と飛彩、大我にことり以外に残りの μ 、sメンバーが揃っていた。

絵「穂乃果の性格には、いつも振り回されてばかりよ」

真「全く同意見ね」

に「本当、疲れるわ」

花「でも、それが穂乃果ちゃんです!」

凜「いつも明るくて、皆を引っ張っていつてくれる!」

希「ウチら μ 、sのリーダー!」

大「行け、穂乃果!」

飛「俺達の仲間を、迎えに行け!」

永「すでに明日那さんが校門まで来てる。空港まで、送っていつていくれるよ!だから……」

永夢はそこまで言うと、一回を間を空ける。

永「ことりちゃんのお顔をやり戻して！」

穂「・・・うん!!」

永夢の言葉をしっかりと聞いた穂乃果は、元氣良く頷いて講堂を飛び出す。

大「さて・・・」

しばらく沈黙が訪れたが、大我がその沈黙を破る。

大「ことりの事は穂乃果を信じるとして、俺達はライブの準備だ」

『ええ（はい）！』

永「あつ、その前に話があるんですけど・・・」

海「？」

ライブの準備に動き出そうとしたところを永夢が止める。

永「今回出現したアランブラ。あの後少し考えたんですけど、今回の感染者は恐らく

μ , sに何かしら関係している人物だと思います」

大「・・・なんだと？」

真「どうして、そう思うの？」

永夢の発言に、大我が驚き、真姫が質問する。

永「まず最初に、飛彩君から聞いたけど、アランブラは μ , sメンバーを狙っていた。

その事から、感染者は μ , sがいなくなるとストレスを感じる人物なんだ。今世間はラ

ブライブの優勝者であるA―RISEの方に気が向いているはず。だから、μ s がいなくなつてストレスを感じる人はかなり絞られる。だとすると……」

飛「μ s の現状を知っている人物が感染者である、と……」

永「あくまでも推測だけだね」

永夢が自分に考えを述べ、飛彩は納得する。

永「恐らくまたアランブラはμ s を狙ってくる。だから……」

永夢は飛彩と大我を交互に見る。

永「飛彩君、大我さん、ライブの方は任せます。僕は……ゲーム病のオペを行います」

永夢はそう言うと、先程の穂乃果同様、講堂を出ていった。

大……悪い、飛彩。少しこの場を任せる」

飛「え？あ、おい！」

飛彩の声を無視して、大我も追うように講堂を出て行く。

……

ことりがいる空港。

こ「……………」

椅子に座り、頻繁に腕時計を確認していることり。

時間になったらしく、他の客が搭乗口に向かつていき、ことりも席を立つて搭乗口に
向かおうとした時……………」

穂「ことりちゃん!!」

こ「っ!!」

穂乃果が空港に到着し、ことりの腕を掴む。

穂「ことりちゃん、ごめん!私、スクールアイドルやりたいの!ことりちゃんと一緒に
やりたいの!いつか、別の夢に向かう日が来るとしても!ことりちゃん、行かないで
!!」

穂乃果はそう言ってことりを抱きしめる。

抱きしめられたことりは徐々に泣き始め、穂乃果の腰にそつと腕を回す。

こ「ううん……私の方こそごめん……!私、自分の気持ち……分かったの
に……!ごめん……ごめんね、穂乃果ちゃん……」

穂「ことりちゃん……ありがとう!……ことりちゃん、行こう!皆の所へ!」
こ「……うん!!」

ことりの言葉に涙する穂乃果だが、涙を拭つてことりに言い、ことりは笑顔で頷いた。

……

音ノ木坂学院から少し離れた街中。

アラランブラは音ノ木坂に向かって進行していた。

だが、そんなアラランブラの前に一つの人影が。

「ぬ?…お前は、エグゼイド!」

永夢はアラランブラの目の前に立ち、その進行を邪魔する。

永「アラランブラ、お前に皆の邪魔はさせない」

『マイティアクションX』

永「大変身!!」

『ガシヤット！ガツチャーン！レベルアップ！マイティアクションX!!』

エ「ノーコンティニューで、クリアしてやるぜ！」

アランプラはスタッフを振るい、エグゼイドはそれを縦横無尽に動き回って避ける。

「我が魔力にひれ伏すがいい！」

アランプラがスタッフをエグゼイドの足元に向けると、そこに魔法陣が出現して電撃が走る。

エグゼイドはジャンプしてその場から離れ、別の場所に移動する。

アランプラはすぐにその場所に魔法陣を移し、同じ攻撃をする。

それをエグゼイドは再びジャンプして避ける。

避けたエグゼイドはアランプラを見据えると、『爆走バイク』のガシヤットを取り出す。

エ「レーザー……力を借りるぜ！」

『爆走バイク』

エグゼイドは爆走バイクを起動してキメワザスロットに装填する。

『ガシヤット！キメワザ！』

「モエール！」

その瞬間、アランプラは呪文を唱え、エグゼイドの足元に魔法陣を出現させる。

その魔法陣から炎が勢いよく吹き上げ、エグゼイドを包み込む。

『爆走！クリティカルストライク！』

音声と共に炎の中からエグゼイドが目がないレーザレベル2に乗って現れる。

エ「はあああああああ！」

「ぬっ!?!・・・トマーっ!」

アランブラは咄嗟に呪文を唱えようとしたが間に合わず、そのまま引かれてバイクに押され続ける。

エグゼイドは気にせず走り続け、場所の船着場まで移動する。

着いた瞬間、エグゼイドに目の前に人が出てきて咄嗟に避ける。

その拍子にアランブラは転げ落ちる。

エ「・・・ゲムム・・・」

黎「・・・九条貴利矢の形見か。・・・乗り心地はどうだい？」

黎斗はエグゼイドの方を向くと、そんな質問を投げかける。

エ「今はお前の相手をしている暇はない！」

エグゼイドはそう答えるが、黎斗は無言でバグヴァイザーとバグスターバツクルを取り出して合体し、腰に取り付ける。

『ガッチョ〜ン!』

『デンジャラスゾンビ』

黎「変身」

『ガシャット！バグルアップ！デンジャー！デンジャー！（ジエノサイド！）デス・ザ・クライシス！デンジャラスゾンビ！（Wooooo！）』

『ガシャコンスパロー！』

変身したゲムムは早速ガシャコンスパローを取り出す。

『ガシャコンブレイカー！』

それを見たエグゼイドはガシャコンブレイカーを取り出して、バイクから降りてゲムムに向かっていく。

ゲ「九条貴利矢の形見で、苦しむがいい」

ゲムムはそう呟くと、エグゼイドに光弾を放つ。

エグゼイドはその光弾を避けながらアランブラに攻撃するが、その攻撃は間に入ったゲムムのガシャコンスパローに止められ、逆に斬撃を受ける。

『ス・パーン！』

ゲムムは後退したエグゼイドを追って攻撃をしていき、エグゼイドはそれをガシャコンブレイカーで受け流したり、時には攻撃をしていくが、ゲムムはゾンビの様にゆらゆら立ち上がり、何事もなかったの様に斬撃を加えていく。

エ「ふっ!はっ!・・・ぐわ!」

エグゼイドは攻撃するが、なかなか当たらず、逆に攻撃を受けていく。

エ「はあ!」

エグゼイドが斬撃を加えようとしたが、ゲムはスパローで受け流し、よろけたエグゼイドにアランブラがスタツフを向ける。

エ「はっ!?!」

「ふっ、シビレール!」

エ「ぐわああああ!!」

アランブラの魔法はエグゼイドに直撃し、大きく後退、ゲムはその隙を逃さず、すぐさま斬撃を加える。

『ズ・ドーン!』

あらかた攻撃したゲムは鎌モードから弓モードに変えて至近距離で光弾を放つ。

エ「ぐわあああ!ぐわああ・・・うぐっ・・・」

『ガツシユ〜ン!』

変身が解除され、永夢の姿に戻る。

ゲ「ゲームマスターである私に許可なく、君は不正なゲームを生み出した。・・・そのゲームは削除させてもらう」

ゲムムは永夢を見てそう言い放つ。

永「・・・ゲーム?・・・何言ってるんだ?」

永夢は笑いながら立ち上がる。

永「俺がやってるのは・・・患者のオペだ!」

永夢はそう叫んで懐から『マイティブラザーズXX』のガシヤットを取り出し、起動する。

『マイティブラザーズXX』

永「患者の運命は、俺が変える!」

永夢は慣れた動きでガシヤットを動かす。

永「変身!」

『ダブルガシヤット!ガツチャ〜ン!レベルアップ!マイティブラザーズ!二人で一人

!マイティブラザーズ!二人でビクトリー!X』

レベル10に変身したエグゼイドはすぐにレバーを閉じる。

『ガツチャ〜ン!』

閉じたと同時に待機音が鳴り始め、エグゼイドは両手を回す。

エ「大~~~~~~~~変身!」

『ガツチャ〜ン!ダブルアップ!俺がお前で!お前が俺で!(We are!)マイティ

！マイティ！ブラザーズ！（ハイ！）XX！』

二人に別れたエグゼイド。

『ガシヤコンキースラッシャー！』

二人のエグゼイドはお互いを見る。

ER「俺はお前だ！」

EL「僕はあなた！」

ER・L「超協力プレーで、クリアしてやるぜ!!」

『ジャジャジャツッキーン！』

Rがゲムムに、Lがアランブラに向かっていき、それぞれ戦闘を始める。

Lは右手でアランブラの攻撃を受け流し、Rはキースラッシャーでゲムムを切りつけていく。

一度相手から離れたエグゼイドは、今度はLがゲムムに、Rがアランブラに向かっていき、Rがアランブラを何度も切りつける。

ER「使え、俺！」

RはLの方を向いてキースラッシャーを投げる。

EL「ありがとう！」

Lはキースラッシャーを受け取り、攻撃してきたゲムムのスパローを受け止める。

受け止めたスパローを弾いてよろけた瞬間を狙い、ゲムムを切りつけていく。

エ L 「はっ！」

Lはキースラッシャーを投げ、それはRのところを一直線で飛んで行った。

エ R 「ナイスパス！」

受け取ったRはアランブラを切りつけてから反転し、後ろでLと戦っていたゲムムをすれ違いざまに切つてLのもとにいく。

RがLのもとまで来ると、Lはキースラッシャーを受け取つて再びゲムムを切りつけていく。

ゲムムはスパローでRに剣戟を加えるが、Rはそれを避ける。

ゲムムはすぐさまRに光弾を放つが、Rはそれをジャンプして避ける。

その様子を見たLはキースラッシャーの黄色いボタンを押してRに投げ渡す。

『ズキュキュキューン！』

エ L 「これを使うんだ！僕！」

エ R 「OK！」

受け取ったRは空中からゲムムを狙撃する。

命中したゲムムはよろけ、その瞬間にLがゲムムを蹴り飛ばす。

エ R 「行くぜ！」

エ L 「はい！」

R と L は二人同時にゲームを蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされたゲームは大きく吹き飛ばされる。

二人のエグゼイドは標的をゲームからアランブラに変え、アランブラに向かって行く。

「あ・・・ああ・・・シビレール！」

アランブラは呪文を唱えるが、その魔法を二人のエグゼイドは物ともせずに向かつて行き、すれ違いざまに切りつけて行く。

「くう・・・モエール！」

アランブラは再び呪文を唱えて魔法を繰り返すが、二人のエグゼイドは肩にあるレベル10の頭部からバリアを発生させて防ぐ。

『スパパパーン！』

R はキースラツシャーのオレンジ色のボタンを押してアランブラに思いつきりぶつける。

当たったアランブラは後方に大きく飛ばされる。

R は空中にブロックを出現させ、アランブラはそのブロックの上に落ちる。

R はジャンプしてブロックの上に行く。

エ L 「あ、なるほど！」

L も何かを思いついたらしく、ブロックの下に移動する。

アラランブラが立ち上がった瞬間、 L がアラランブラが立っているブロックを下から叩く。

エ L 「それ！」

「おわあああああ！」

突然下から叩かれたアラランブラは高く飛んでうまくブロックの上に着地する。

が、そこには R が待機していて、アラランブラを蹴り落とした。

「ぬう……くう……」

エ R 「そろそろフィニッシュだ！」

エ L 「必殺技で決まりですね！」

『ガツチャ〜ン！キメワザ！』

二人のエグゼイドがレバーを同時に閉じると、足にエネルギーがたまり始める。

「おのれ……ならば伝説の魔法で……！」

アラランブラが魔法を使おうとした時、二人のエグゼイドは腰を低くしてレバーを開く。

『ガツチャ〜ン！マイティ！ダブル！クリティカルストライク！』

ER・L 「ふっ！はああ！」

アランプラがスタツフを振るうがすでに遅く、二人のキックはアランプラに直撃する。

二人のエグゼイドは左右からそれぞれ回転蹴りや連続蹴りを放ち、一度離れるとレベル10に戻って右手にエネルギーをため、アランプラにアッパーをする。

空中に飛ばされたアランプラに向かってエグゼイドはジャンプすると、追い越して二人に戻り、アランプラにキックを放つ。

空中でアランプラは避けることができず、直撃して爆発を起こす。

「ぐわああああああ!!」

『ゲームクリア!』

アランプラ爆発と同時に、ゲームクリア音が鳴り響く。

ER 「……どう考えても、オーバーキルだな」

EL 「……そうですね」

二人のエグゼイドがそんな話を話していると、どこからか何かを吸収する音がしてくる。

二人のエグゼイドがそれに気づき、音がする方を見ると、ゲムがバグヴァイザーを向けてウイルスを回収していた。

バグヴァイザーの画面にはアランブラが映し出される。

『あ、あれ？なんだ？……？おい！出せ！』

ゲ「ふん」

ER「今何をした!?!」

ゲ「いくら患者の運命を変えようとも、大いなる運命は変えられない」

ゲムムはRの質問に答えず、その場を去って行く。

その後ろ姿を見た二人のエグゼイドは変身を解除する。

『ガツチャ〜ン！ガツシユ〜ン！』

永「……あつ！うっ！」

変身を解除した瞬間、永夢は激しい頭痛に襲われ、その場で気を失う。

そんな永夢に、隠れて戦いの様子を見ていた大我が近づいて行く。

次に永夢が目を覚ました時にはその場に誰の居なかつた。

永「……！そうだ！ライブは！」

しばらく呆然として居た永夢だったが、ライブの事を思い出してすぐに学校に向かつて走って行った。

そんな永夢を大我は陰から見ている。

その手には、永夢からとった血が付着しているハンカチを持っていた。

・
・
・
・
・
・
・

音ノ木坂学院の講堂。

間も無く始まるライブに、8人は穂乃果達の帰りを待っていた。

花「うう・緊張する・・!」

凛「それより!凛達制服のままだよ!」

真「スクールアイドルらしくていいんじゃない?」

花陽は深呼吸して

凛は自分達が制服の姿でいいのかと言い、真姫がそれに落ち着いて返す。

に「穂乃果達は間に合うの?」

海「絶対に来ます。必ず」

希「って言ってる間に、もうそろそろ時間やけど?」

絵「お客さんを待たせるわけにはいかないわ」

絵里が時計を確認してそう言った時、扉が開いて穂乃果は滑り込んでくる。

穂「うわつとつと!?!痛い!」

こ「間に合った!」

飛「穂乃果！ことりも！」

穂乃果の後ろからことりも入って来く。

永「はあ・・はあ・・ら、ライブは!?!」

大「悪い、遅くなった」

そこに永夢も駆け込んで来て、その後ろから大我也入ってくる。

海「永夢！」

絵「大我！どこ行ってたのよ!?!」

大「ちよつとな。それよりも・・・」

大我は皆を見る。

今この場には、マネージャーも含め、μ'sメンバー全員が集まっていた。

絵「・・そうね。じゃあ、全員揃った事だし」

希「部長さん、一言」

に「ええええええええ!?!?・・・・・なーんてね、ここはもちろん考えてあるわよ！」

突然振られたにこは一瞬驚くが、すぐにそう言っぴてピースを作った手を皆の中心に差

し出す。

皆は頷き、ピースを作った手を繋げて輪を作る。

に「今日皆を！一番の笑顔にするわよ！」

にこの言葉に皆頷き、穂乃果から順にいつもの掛け声を言っていく。

穂「1!」

こ「2!」

海「3!」

真「4!」

凜「5!」

花「6!」

に「7!」

希「8!」

絵「9!」

穂「よし!行こう!!」

穂乃果がそう言って、μ'sの9人は舞台に向かって駆け出す。

舞台の幕が上がり、ライブが始まる。

ファーストライブでは全くなかった観客・・・

それが今では満席になる程の観客が来ていた。

(♪START:DASH!!)

穂「私達のファーストライブも、この講堂でした！」

ライブが終わって、μ'sは一行に並んでいる。

穂「その時、私は思ったんです！いつか、ここを満員にしてみせるって！一生懸命頑張って、今、私達はここにいます。この思いを、いつか皆に届けるって！その夢が今日、叶いました！だから、私達はまた駆け出します！新しい夢に向かって！」

だんだんと歓声が上がっていく講堂。

穂「あつ、そうだ！大事な事を言い忘れていました！」

穂乃果が思い出したように言い、μ'sも不思議そうな顔で穂乃果を見る。

穂「さあ、皆さん！ご一緒に！」

『μ's！ミュージックスタート!!』

.....

μ, sの復活ライブが行われた夜。

とあるマンションの一室で大我は何やら調べていた。

パソコンに横にはDNAと書かれた機械が置かれていて、永夢の血がついたハンカチをスキャンしていた。

パソコンの画面に100%と映し出され、大我は身を乗り出して画面を見る。

大「・・・道理で二体に分離したわけだ」

画面には、『宝生永夢』と書かれていて、その下には『バグスターウイルス反応』と書かれていて、その横には『+』のマークが点滅していた。

大「永夢、お前は・・・」

ゲーム病だ」

第35話 海未の秘密

永夢 side

μ's 復活ライブから早数日。

学校は夏休みに突入していた。

だが、夏休みといえど練習はある。

μ's は屋上でいつものように練習をしていた。

穂「暑い〜」

絵「そんな事言っていないで、早くやるわよ」

永「熱中症の心配もあるから、しばらくは早めに終わらせる予定だから」

屋上は日が当たっていてとても暑い。

以前は暑くて合宿に行つてたけど、また行くわけにはいかない。

でも、こんな暑いで練習しすぎても体調が悪くなつたら困る。

だから、この夏休みの間は普段より早めに終わらせる予定だ。

絵「とにかく始めるわよ」

『は〜い』

絵里さんが手を叩きながらそう言い、皆返事をする。

そんな中、海未ちゃんがボーっとしているのが視界に入った。

永「海未ちゃん？」

海「・・・」

永「おーい、海未ちゃん？」

海「はっ、な、何ですか永夢？」

永「いや、もう練習始めるけど・・・どうしたの？」

海「い、いえ、何でもありません！」

海未ちゃんはそう言って練習に参加していった。

何だったんだろう？

・・・

午後、僕は一人西木野総合病院に向かっていた。

理由は灰馬さんにゲーム病関係の事で詳しく聞きたいと、飛彩君を通して呼ばれたのだ。

って、僕じゃなくて飛彩君に聞けばいいのに・・・。

ま、そういうわけで僕は病院に向かっていた。

地味に遠いんだよね……。

そんなことを考えつつ歩いていると、目的地に到着する。

すると、前方を見覚えのある後ろ姿が病院に入っていた。

永「海未ちゃん？」

気になった僕は追いかけるように病院に入って行く。

見間違えではなかったようで、受付のところには海未ちゃんがいた。

永「海未ちゃん」

海「ひゃ！え、永夢!? 何でここに!？」

永「いや、灰馬さんに呼ばれていて。海未ちゃんこそ、どうしてここに？」

海「そ……それは……」

海未ちゃんは言いづららしく、言葉を詰まらせる。

するとそこで、

「あら？海未ちゃん？」

後ろから海未ちゃんを呼ぶ声がした。

僕が後ろを見ると、そこには髪の毛の長い女性が立っていた。

海「あ、朱美さん！」

朱「やっぱり海未ちゃんだ！久しぶりね！」

その女性・・・朱美さんと海未ちゃんは知り合いらしく、再会を喜んでいた。

朱「この間のライブ、動画でだけ見たわよ！凄かったわ！」

海「あ、ありがとうございます！」

僕も事はすっかり忘れてるようで、話が盛り上がっていた。

永「あ、あの・・・」

朱「？・・・あなたは？」

永「海未ちゃんのクラスメートの宝生永夢です」

朱「あら、そうなの。私は星朱美。海未ちゃんの親戚です。よろしくお願ひします」

永「よ、よろしくお願ひします」

朱「海未ちゃん、お見舞いに来てくれたのよね？ありがとう。あの子も喜ぶわ」

海「い、いえ・・・私も心配でした・・・」

永「お見舞い？」

朱「ええ、まだ小二の娘がいるんだけどね。・・・重い病気にかかっちゃって・・・」

永「あつ、す、すいません・・・辛い事を・・・」

朱「ううん、気にしないで。それじゃあ、早速行きましょう」

朱美さんはそう言って歩き出した。

海未ちゃんが朱美さんを追うように歩き始めたので、僕も一緒に歩き始める。

永「海未ちゃんの様子がおかしかったのは、これが理由？」

海「はい……。朱美さんの娘……。まどかちゃんっていうんですけど……。私が

高校に入る前はよく会ってたんです。昨日、入院したって聞いて、心配で……」

永「それで……」

海「あまり皆に心配をかけさせたくなかったので、黙ってたのですが……」

そんな事を話していると、朱美さんがある病室の前で止まり、中に入る。

僕と海未ちゃんも続いて入る。

中には一人の少女がベットに上半身を起こして座っていた。

ま「お母さん！海未お姉ちゃん！」

海「久しぶりですね、まどか。大丈夫ですか？」

ま「うん！」

海未ちゃんの問い掛けにその少女……。まどかちゃんは元気よく答える。

ま「そこのお兄さんは誰？」

まどかちゃんは僕を見てそう言ってくる。

永「僕は宝生永夢。海未ちゃんの友達なんだ。よろしくね、まどかちゃん」

ま「うん！永夢お兄ちゃん！」

僕が自己紹介をすると、まどかちゃんは笑顔で返事をする。

重い病氣って聞いたけど、今のところは元気そうだし良かった。

永「来たばかりだけど、僕は灰馬さんに呼ばれるから、こちら辺で」

海「あつ、そうでしたね。後で、できたら私も顔を出します」

永「うん、分かった。それじゃあ、またね、まどかちゃん。朱美さんも」

ま「うん！またね！」

朱「今日はありがとう。また来てね」

永「はい」

僕はそう返して病室を後にする。

さて、灰馬さんがどこにいるか聞かなきゃな。

第36話 Newライダーの参戦

永夢 side

今日は屋上での練習の後、マネージャー組と海末ちゃん、真姫さん、絵里さんことりちゃんが残って次のライブについての会議を行っていた。

他のメンバーはバイトやら家の手伝いやらですでに帰っている。

絵「それで、次のライブの曲だけけど……」

絵里さんが仕切って会議が進んでいく。

曲や場所、ダンスなどの話し合いをして、それぞれの意見を出していく。

そのまま話し合いが続き、時間が経っていく。

大「時間もあれだ。そろそろお開きにするぞ」

大我さんの言葉を区切りに、会議が終了する。

飛彩君と真姫ちゃんと別れ、僕と海末ちゃん、ことりちゃん、絵里さんと大我さんは家の方向が同じのため、一緒に帰っていた。

そこで、ことりちゃんがこんな事を大我さんに聞いた。

こ「そういえば、大我さんってどうして髪の一部が白いんですか？」
永「ああ、そういえばそうですね」

今まで特に触れてはこなかったが、大我さんの髪の毛は一部分だけ白い。
ことりちゃんは今更だが気になったらしく、その事を聞いた。

絵「そうね、私も知らないわ。ねえ、大我。どうしてなの？」

絵里さんも便乗して聞く。

大「……お前達を知る必要はない」

絵「……え？」

今までに聞いた事がないくらいに低く、突き放すような声。

大我さんにとって、これは聞かれたくない過去らしく、僕達にそう返した。

絵里さんはその返しに驚いていた。

絵「どういうことよ？何があつたの？」

大「俺の過去なんてどうでもいい。お前が気にする事じゃない」

絵「……何よそれ。どういう事よ!？」

大「言った通りの意味だ」

絵里さんが妙に突っかかり、大我さんは厳しい顔で突き放すように返している。

大「この話はこれで終わりだ。俺は先に帰らせてもらう」

絵「あつ、ちょっと、待ちなさ……っ！」

大我さんが僕達を置いてさっさと帰ろうとした時、絵里さんが急に苦しみます。

永「絵里さん!?大丈夫ですか!？」

異変に気付き、大我さんも戻ってくる。

その時、鞆に入れていたゲームスコープが鳴り出した。

永「まさか……」

僕はすぐにゲームスコープを取り出し、絵里さんに翳す。

結果、絵里さんからバグスターウイルス反応が出た。

永「やっぱりゲーム病……!」

こ「そ、そんな……」

海「永夢!」

永「分かっている。すぐにオペを始める」

そう言ってゲームドライバーを取り出して腰に装着した時、絵里さんから粒子が分離して人の形になっていく。

「ふっはははははははははは!」

大「リボル……!」

永「海未ちゃんことりちゃん絵里さんをお願い」

海「分かりました」

こ「うん！」

海未ちゃんことりちゃん絵里さんを連れて離れる。

「作戦開始！」

リボルの掛け声とともに、周りに戦闘服を着たバグスターウィルスが現れる。

飛「永夢！」

永「飛彩君！」

飛「ゲームスコープが反応してな。今回はリボルか」

駆けつけた飛彩君もゲーマドライバーを装着した。

永夢 side out

.....

◎ side

『マイティブラザーズXX』

『タドルクエスト』

『バンバンシューティング』

「変身！」

『(ダブル) ガシヤット!』

『ガツチャ〜ン! レベルアップ! マイティブラザーズ! 二人で一人! マイティブラザーズ! 二人でビクトリー! X!』

『I, m a 仮面ライダー!』

ブ 「術式レベル2!」

ス 「第弐戦術!」

『ガツチャ〜ン! レベルアップ!』

『タドルクエスト!』

『バン・バン・シューティング!』

エ 「おら! おりゃ!」

ブ 「ふっ! はっ!」

ス 「ふん! はっ!」

エグゼイドは殴り、ブレイブは斬撃で、スナイプは銃撃で応戦していく。

ブレイブとスナイプがバグスターウイルスと戦い、エグゼイドはリボルと戦っている。

エ 「ふっ! おりゃ!」

「くっ！ぐわああ！」

リボルがエグゼイドに殴られて吹き飛ばされた時、後ろの物陰に隠れていた黎斗がエグゼイドに声をかける。

その腰にはすでにバグルドライバーが装着されている。

黎「エグゼイド！君が使っている不正なゲームは削除する」

『デンジャラスゾンビ』

黎「変身」

『ガシャット！バグルアップ！デンジャー！デンジャー！（ジェノサイド！）デス・ザ・クライシス！デンジャラスゾンビ！（Wooooo！）』

『ガシャコンスパロー！』

変身が完了したと同時にスパローを装備するゲーム。

エ「そっちがその気なら！ふっ！」

『ガッチャ〜ン！』

エ「大〜〜〜変身！」

『ガッチャ〜ン！ダブルアップ！俺がお前で！お前が俺で！（We are!）マイティ！マイティ！ブラザーズ！（ヘイ！）XX！』

『ガシャコンキースラッシュャー！』

ER・L 「超協力プレーで、クリアしてやるぜ!!」

RとLに別れたエグゼイドはゲナムに向かって駆け出す。

ER 「俺は右から攻略する!」

EL 「それじゃあ僕は左から!」

Rは右から、Lは左からゲナムを攻めていく。

離れた場所ではブレイブとスナイプがバグスターウイルスを圧倒していた。

ブ 「俺に切れないものはない!」

ス 「前哨戦は終わりだ」

『ガシャット!キメワザ!』

ブレイブはドレミファビートを、スナイプはジェットコンバットをそれぞれの武器に装填する。

『ドレミファ!ジェット!クリティカルフィニッシュ!』

二人の必殺技が炸裂し、辺りにいたバグスターウイルスは殲滅される。

これで、残りはゲナムとリボルだけとなった。

ゲナムも二人のエグゼイドに押されている。

ER・L 「はっ!!」

ゲ 「ぬっ!?!...ぬうう...」

倒れるゲムムだが、すぐに立ち上がる。

ゲ「簡単には攻略できないか……。まあいい。実戦データは取らせてもらった。……ふん！」

ゲムムはスパローでエグゼイド達に光弾を放ち、煙が立ち込めている間にその場を立ち去った。

しばらくして煙が晴れるが、すでにゲムムとりボルの姿は見えなくなっていた。

『ガツチャ〜ン』

『ガツシユ〜ン』

永「うっ！……うう……」

全員変身を解除するが、永夢はすぐに頭を抑える。

大我はそんな永夢を一度見るが、すぐにその場を立ち去った。

飛「どうした永夢？」

飛彩は永夢に声をかける。

永「……いや、何でも無いから……」

永夢はそう返し、すぐに海未達のもとへ歩き出した。

そんな永夢を飛彩は怪訝そうな顔で見ていた。

海「永夢……」

永「絵里さんをCRに」

永夢は海未達の手を借りながら、絵里を担ぐ。

ゲ「……………」

『ガッシューン』

その様子をゲナムは遠くから見ていた。

変身を解除した黎斗はすぐに歩き始める。

大「お前が貴利矢を口封じした理由は、永夢がゲーム病だと知られたからだろ」

近くで隠れていた大我は黎斗に話しかける。

その言葉を聞いた黎斗は立ち止まって大我の方を見る。

黎「…………それが、君の特典の一つかな？」

大「まあな。…………いつから知ってた？」

大我に詰め寄られ、黎斗は近くに腰掛ける。

黎「…………宝生永夢。彼は世界で初めてバグスターウイルスに感染したゲーム病患者

だ」

大「初めて!?!」

予想外の答えに、大我は驚きを隠せなかった。

黎「私も君達と同じ転生者だ。そして、前世で私はテレビの中だけの存在だったバグ

スターを生み出した。世に放ったそのバグスターウイルスに初めて感染したのが、宝生永夢だった」

大「・・・貴利矢の口を封じたわりには、随分とおしやべりだな」

黎「：彼がバグスターウイルスを根絶する手段を解明しようとしていたからな。・・・それに愚かな考えを持つ者は、誰であれ追放する！」

そう言つて黎斗は立ち去つて行つた。

大我もその場から立ち去ろうとするが、その目の前に飛彩が出てくる。

飛「今の話、・・・どういふことだ？」

・・・・・・・・・・

場所は変わつてCR。

ベットには、ゲーム病を発症している絵里が横になっていた。

絵「う・・・うん・・・」

絵里が目を覚まし、起き上がる。

近くで待機していた永夢と明日那が気づき、声をかける。

明「気分はどう？」

絵「ここって・・・CR?」

永「大丈夫ですか?絵里さん」

絵「永夢・・・」

永「まだ、治療は終わっていないので、ここで安静にしていってください」

永夢は声をかけながら絵里を横にする。

明「私がここで見てるから、永夢は海未ちゃん達に伝えてきて」

永「すいません。ありがとうございます」

明日那に言われた永夢はCRの病室から出て、海未のいる部屋に向かう。

海「永夢!絵里は・・・」

永「うん。さつき目を覚ましたよ。今はまだ安静にしてもらうけど」

海「そうですか・・・。良かった・・・」

真「それにしても、どうしてこうなったの?」

こ「実は・・・」

飛彩が合流したときに一緒に来た真姫は事情を知らないため、そんな質問をする。

それにことりが答え、事情を把握する。

真「なるほどね。大我と喧嘩したってことね」

海「まあ、そういうことですね」

その時、CRの扉が開いて飛彩が入ってくる。

飛「永夢、一つ聞きたいことがある。・・・どうしてドクターを目指そうと思った？」

真「飛彩、どうしたの？急に」

飛彩の質問を不思議に思った真姫が聞くが、飛彩は答えなかった。

永「・・・実は、みんなにはまだ話してなかったけど、僕は子供の頃に一回事故にあっ
たんです」

こ「えっ!？」

永「その時に病院で手術を受け、命を救われたんです。それから、ドクターを目指す
ようになったんです。ただ・・・」

海「ただ？」

永「僕なんかが本当にドクターになれるのかわかって悩んで、そうこうしている内に
好きなゲームの腕ばかり上がっちゃって。・・・本格的にドクターを目指そうと思っ
たのは、2年前に高校受験の時なんだ」

飛「!2年前!？」

永「う、うん」

2年前のところに、飛彩は少し驚きの声を上げる。

永「その頃、対戦格闘ゲームの全国大会があつて、優勝目指して、徹夜続きで練習し

たせいで、大会終わって、体を壊して寝込んで……夢を見たんだ。よくは覚えてないけど、多分昔自分が受けた手術の夢を……」

飛「……手術？」

永「うん。その時から、ドクターを真剣に目指し始めて……それで、今に至るんだ」
海「……なんか、大変そうですね」

こ「うん。でも、やっぱり子供の頃からゲームが好きだったんだね」

海未とことりが永夢を話を聞いて思ったことを口にする。

飛「……それは本当に夢だったのか？」

永「え？」

飛「どうなんだ!？」

いきなり声を荒げて問い詰める飛彩。

そんな飛彩に、直接聞かれている永夢だけでなく、近くにいた海未達も思わず身を縮める。

そんなとき、CRに連絡が来て、モニターをつけると大我が映し出された。

海「大我？」

大『永夢、絵里のゲーム病の事で話がある。亜里沙にあいつの荷物をまとめてもらったから、話ついでに回収に来い』

大我はそれだけ言って、モニターを切った。

.....

一方、大我と話した後自身の隠れ家に戻って来た黎斗は、早速エグゼイドについて調べていた。

黎「.....二体のエグゼイドは、やはりレベル10の力を持っている」

パ「へえ、じゃあ二人合わせてレベル20か!!」

パラドはドラムを叩きながらそう楽しそうに返す。

黎「.....やつのガシャットを回収する。時間を浪費するのは本望じゃない.....君の出番だ」

ドラムから離れてピアノで音を出していたパラドは、その言葉に黎斗の方に向く。

黎斗はアタツシユケースを取り出し、机に置くと、パラドはその机に飛びつきアタツシユケースを興味深そうに見つめる。

パ「いいのか!？」

黎「.....仮面ライダークロニクルに備えて、君もそろそろ肩慣らしが必要だろうか?」
そう言いながら黎斗はアタツシユケースを開けて、中身を見せる。

パ「あは♪やつふうう♪」

中身を見て、パラドはとても嬉しそうだった。

・
・
・
・
・

大我に呼び出された永夢と、それに付き添って来た海未と明日那は、指定された廃工場に来ていた。

明「ああゝ．．なんか嫌な予感．．．」

海「だ、大丈夫ですよね？」

明日那と海未は辺りをキョロキョロと見渡している。

大「．．やつと来たか。待ちくたびれたぞ」

永夢達が来た事に気づき、トラックに荷台から姿を見せる。

大「荷物はこれだ」

永「．．ありがとうございます。荷物はCRに持っていくます」

永夢は荷物を受け取ろうとトラックの荷台に登ろうとするが、登っている途中で大我に蹴り落とされる。

永「うわ!？」

明「ちよ、永夢大丈夫!？」

海「どういう事ですか!?!なんで永夢を！」

大我は海未の質問に答えず、ガシヤットを起動した。

『バンバンシューティング』

大「変身」

『ガシヤット! I, m a 仮面ライダー!!』

ス「はっ!!」

スナイプは生身の永夢達に向かって光弾を放つ。

永夢達は光弾を避けながら物陰に隠れ、ガシヤットを起動する。

『マイティアクションX』

スナイプも荷台から降り、レバーを開く。

ス「ミツション開始」

『ガツチャ〜ン! レベルアップ! バンバンシューティング!!』

『I, m a 仮面ライダー!!』

レベル2にレベルアップしたスナイプは着地と同時に光弾を放つ。

レベル1のエグゼイドはその光弾を避けながらスナイプに接近し、掴みかかる。

エ「おい! やめろよ!」

ス「はっ！」

エ「うお！痛い痛い!!」

エグゼイドの静止の声を聞かず、スナイプはエグゼイドの顔を掴んで振り回す。

海「なんでこうなるんですか？」

二人が戦う事に疑問を覚える海未だが、それに答える人はいない。

その時、飛彩が廃工場に入ってくる。

『タドルクエスト』

飛「変身」

『ガシャット！レベルアップ！タドルクエスト〜！』

その音で、海未と明日那はブレイブに気がつく。

明「あつ、飛彩！二人を止めて!!」

明日那にそう言われたブレイブはゆっくりとガシャコンソードを振り上げ、それを
を……

ブ「はああ!!」

エ「ぐわっ!」

エグゼイドの背中に当てた。

明「あつ、ちよつと!」

海「な、何をしてるんですか!?!」

予想外のブレイブの行動に、明日那と海未は驚く。

エ「おい!何すんだブレイブ!」

ブ「・・・悪く思うな」

エ「あく!もう訳分かんねえ!!大変身!!」

『ガツチャ〜ン!レベルアップ!マイティアアクションX!!』

エグゼイドがレベルアップした時、廃工場にリボルが入ってくる。

「ターゲット捕捉、作戦開始!」

パ「待て」

「ん?・・・おわ!?!」

突然声をかけられたリボルは上にパラドがいる事に気付く。

パラドは持っていたチェーンを振り回し、それを投げてリボルを捕獲する。
「な、何を!? おわああ!!」

パラドは下に降りる時にチェーンを使って降り、リボルは上に上げられる。
パ「ちよつと見学と行こうぜ」

「自分は！高いところは!!」

リボルが何か言ってるが、パラドはそれを無視して戦いを見にいった。

ブ「はっ!」

エ「ぐわ!・・・ぐうう・・・」

ス「ふっ!」

エ「くっ! おい! スナイプ、ブレイブ! 落ち着け!」

二対一という状態で、エグゼイドは押されていた。

ス「ふん!」

ブ「はっ!」

エ「くっ! やめろって!」

エグゼイドの声を無視して斬りかかるブレイブ。

エ「なんで攻撃するんだよ!」

ブ「・・・黙ってろ」

ス「ふん！」

エ「なっ！」

ブレイブに後方にいたスナイプはエグゼイドのホルダーの狙って光弾を放ち、ドラゴナイトハンターZに命中する。

地面に落ちたガシヤットをスナイプが回収する。

ス「こいつは俺が使わせてもらうぜ」

エ「なっ！返せ！ぐわっ！」

ブ「はっ！」

ブレイブに切りつけられたエグゼイドは吹っ飛ばされる。

ス「ブレイブ、どっちが先にあいつを狩るか勝負だ」

『ドラゴナイトハンターZ』

ブレイブに勝負を提案したスナイプはガシヤットを起動する。

ブ「臨むところだ」

『ブレード！』

ブレイブも勝負を受け、仮想ガシヤットを起動する。

ス「第五戦術」

ブ「術式レベル5」

『ガシャット！ガツチャーン！レベルアップ！ドラゴナイトハンター！ブレイブ！スナイブ！』

ブ「はああ！」

ス「ふっ！」

エ「くっ！．．．うう．．．」

レベル5にレベルアップしたブレイブとスナイプの攻撃に、エグゼイドは押される。

ブ「はあああ!!」

エ「ぐうう！」

ス「はっ！」

エ「ぐわああああ!!」

二人の攻撃は命中し、エグゼイドは倒れる。

その様子を見ていた明日那と海未は耐えきれなくなり、エグゼイドとブレイブ達の間
に立つ。

海「永夢！大丈夫ですか!？」

明「もうやめて！あなた達が戦う理由なんてないでしょ!？」

ブレイブは思わず顔を背ける。

ス「どけ！」

明「どかない！」

パ「つまんないなあ〜」

ス「ん？」

明日那とスナイプが言い合いをしている時、隠れていたパラドが姿を見せる。

エ「はあ・・・はあ・・・バグスターだ」

明「ええええ!？」

海「あ、あの人が？」

エグゼイドの衝撃の言葉に、明日那はすぐに隠れ、海未は驚いていた。

パ「戦う気がない相手にワンサイドゲームなんて、シラけることすんなよ・・・」

ゆっくりと歩いてエグゼイド達の間に入ったパラドは、ブレイブとスナイプの方を見る。
る。

パ「代わりに、俺が遊び相手になってやるよ」

パラドは懐からガシャットを取り出す。

そのガシャットは普段のガシャットやマイティブラザーズXXとも違い、青色に大きなダイヤルのついた分厚いガシャットだった。

ス「なんだあのガシャットは？」

その様子を見たブレイブは構え、スナイプは疑問を口にする。

パラドはそのガシヤット・・・ガシヤットギアデュアルのダイヤルを時計回しに回す。
『PERFECT PUZZLE』

パラドの後ろに青いゲーム画面が出現し、エナジーアイテムが出てくる。

『What's the next stage?』

パ「変身」

待機音が鳴り響く中、パラドはガシヤットのスイッチを押す。

『DUAL UP!』

同時に、パラドの前に青いライダーが描かれているディスプレイが出現、パラドを通り過ぎていく。

『Get the glory in the chain! PERFECT PUZZLE!』

ディスプレイがパラドを通り過ぎると、そこには描かれていたライダーの姿があった。

パ「仮面ライダーパラドクス、レベル50」

ス「仮面ライダー・・・!?」

明「うえええ!?・・・ファイファイ・・・ファイファイって?」

海「え?」

エ「あつ？五十だよ」

予想外の明日那の疑問に海未とエグゼイドは驚くが、しっかりと答える。

パ「俺のゲームを教えてやろう。・・・こいつらで」

パラドクスはそう言ってブレイブとスナイプに向かっていく。

ブ「なっ！」

パ「はっ！はああああ！」

パラドクスはブレイブとスナイプを掴んで外に追い出す。

パ「はっはっはっはっは！」

ス「ふん！」

パ「はあ！」

ブ「はっ！」

パ「ぬううう！」

ブレイブとスナイプが攻撃を仕掛けるが、パラドクスに全ての攻撃をいなされる。

パ「パーフェクトパズルは、ゲームエリアのあらゆる物質を操るパズルゲームだ。例

えば、バラバラだったお前達のゲームのアイテムを、統一する事もできる。ほくら！」

パラドクスがその場で回転すると、近くにあったブロック、宝箱、ドラム缶が全てエ

ナジーアイテムに変わる。

エ「え？エナジーアイテムに変わった!？」

パ「エナジーアイテムを組み合わせて使う事もね」

パラドクスは肩についている武装『マテリアライズシールド』を使い、近くにあったエナジーアイテムを上空に移動させる。

パラドクスが手を動かすと、それに合わせてエナジーアイテムも動く。

やがて、パラドクスが両手を下ろすと、二つのエナジーアイテムがパラドクスに吸収される。

『伸縮化！ジャンプ強化！』

その瞬間、パラドクスは伸び縮みし、高く飛び上がる。

上空でパラドクスはガシヤットのダイヤルを元に戻し、再び時計回りに回す。

『キメ・ワザ！』

その音声が鳴ると、パラドクスはガシヤットを腰のホルダーに挿す。

『デュアルガシヤット！』

パラドクスは上空で跳躍し、ブレイブとスナイプの背後に移動する。

『パーフェクト！クリティカルコンボ!!』

パラドクスは上空から足を伸ばしてブレイブとスナイプにキックを繰り出した。
ブ「ぐっ！」

ス「ぐはっ!」

「ぐわああああ!!」

『All Clear!』

『ガツシュ〜ン!』

パラドクスの必殺技を受けたブレイウトとスナイプは吹っ飛ばされ、変身が解除される。

パ「はっはっはっは!」

エ「やめろ!」

エグゼイドは飛彩達とパラドクスの間に立つ。

パ「なんで止めんだよ? お前を攻撃した連中だろ?」

エ「・・・誰だろうと、命は命だ!・・・ゲームオーバーにはさせない!」

エグゼイドはホルダーからシャカリキスポーツを取り出し、起動する。

『シャカリキスポーツ』

エ「大・大・大変身!!」

『ガシャット!ガツチャ〜ン!レベルアップ!マイティアアクションX!アガツチャ!シャカリキ!シャカリキ!バット!バット!シャカつと!リキつと!シャカリキスポーツ!!』

ゲーム画面からバイクゲーマーが出現し、エグゼイドに装着される。

パ「エグゼイド・・・俺の心を、滾らせるなよ」

パラドクスはガシヤットを取り出すと、ダイヤルを元に戻し、今度は反時計回しに回す。

『KNOCK OUT FIGHTER』

パラドクスの背後に、今度は赤いゲーム画面が出現する。

明「一つのカシヤットに二つのゲーム!？」

『The strongest fist! Round 1! Knock and fire!』

パ「大変身」

『DUAL UP!』

パラドクスの背中のだイヤルが回転し、顔が前後ろ逆になり、胸に部分が炎が描かれているものに変わり、肩についていたマテリアライズシールドが外れ、拳につく。

『Explosion Hit! KNOCK OUT FIGHTER!』

全体が青から赤のライダーに変わる。

パ「遊ぼうぜ!!」

パラドクスはエグゼイドに接近すると、拳に装備された『マテリアライズスマツ

シャー』で思いっきり殴る。

エ「ぐわあ!!」

殴られたエグゼイドは後退する。

エ「くう……はっ!」

パ「はあああ!」

エ「ぐわああ!」

エグゼイドも負けじと殴り返すが、パラドクスの受け止められ、逆に殴られる。

エ「くう……」

パ「はあああ……はっ!」

パラドクスが拳を振り上げると、炎が出現してエグゼイドに向かっていく。

エ「なっ?!ぐわああ!!」

エグゼイドはぎりぎりで避ける。

パ「ノックアウトファイターは、相手をKOするまで叩きのめす格闘対戦ゲームだ!」

エ「はあああ……はっ!」

エグゼイドは車輪にエネルギーをため、パラドクスに向かって投げる。

パ「ふっ!」

その攻撃は、パラドクスに簡単に弾かれる。

『キメ・ワザ!』

パラドクスはガシャットのダイヤルを元に戻し、再び反時計回ししてホルダーに挿す。

『デュアルガシャット!ノックアウト!クリティカルスマッシュ!』

パ「ふっ!はっ!」

拳には炎が纏わされ、エグゼイドを殴り、さらにアツパーを喰らわせる。

パ「はあ!」

エ「ぐわああああ!!」

パラドクスはエグゼイドが落ちてきたタイミングを狙って思いっきり殴りつける。

『K・O!』

エ「くうう・・・くあ・・・」

『ガッシューン!』

海「永夢!」

変身が解除され、海未がすぐに駆け寄る。

パラドクスも変身を解除する。

パ「・・・いつでも遊んでやるよ。俺も楽しませてくれよ?・・・M」

パラドクスはそう言い残してその場から姿を消した。

海「・・・た、立てますか？永夢」

永「う、うん・・・ぐっ！ぐあ！」

海末の肩を借りて立ち上がろうとする永夢だが、すぐに頭を抑える。

海「だ、大丈夫ですか!？」

明「永夢!?どうしたの!？」

永「あ・・・頭が・・・ぐうう！」

海末と明日那が永夢に声をかける中、その様子を見ていた大我と飛彩は顔を見合わせる。

その二人の脳裏には、黎斗から真実を聞かされた時の事を思い出していた。

〈回想中〉

飛「永夢がゲーム病というのは本当か？」

大「・・・ああ。どうりでエグゼイドに変身できたわけだ」

飛彩の質問に大我は正直に答える。

転生する際に飛彩と大我は適合手術を受けていた。

それは、抗体を持たないとガシヤットを起動できず、バグスターウイルスに感染する

からだ。

だが、永夢は適合手術を受けずに、エグゼイドに変身できていた。

飛「・・・ゲームをする時に、性格が変わるのは・・・その影響ということか」

飛彩はそう呟いて大我に背中を向ける。

大「あいつに告知する気か？・・・自分がゲーム病だと知ったら、どんだけのアスレ

スになるか・・・想像もつかねえな」

大我はそう言つてその場を立ち去り、飛彩も歩き出した。

〈回想終了〉

永「くうう・・・うう・・・」

明「CRに戻ろう。海未ちゃんも手伝つて」

海「はい」

永夢は海未と明日那の肩を借りながら歩き出す。

飛彩と大我はその背中を見るしかできなかった。

第37話 打倒Mのパラドクス

永夢 side

ポ「もろ!!ピプペポパニックだよ!!」

新たに出現した仮面ライダー、仮面ライダーパラドクスとの戦いを終えた僕達はCRに戻ってきていた。

そこで、ポッピーがCRの中を動き回りながら騒いでいた。

ポ「パイロとパイガがペムを攻撃して、新しいパメンパイダーまで乱入してくるなんて!!」

もはや何が言いたいのかわからないが、慌ててるのは確かだろう。

ポ「ねえ、ペム!どうしよう!?!」

永「分かりません・・・」

ポ「ええ・・・」

永「でも、今考えなきやいけないのは、患者の事ですから」

僕はそう言って患者である絵里さんがいる部屋の方を見る。

永「……え？」

絵里さんがいる部屋はこの部屋から小窓を通して見る事が出来るが、その小窓からは本来無いはずのものがピンク色の何かが見えた。

永「何これ？」

僕は近づいて確かめると、それはカーテンのようだった。

でも、なんで？

そう思っていると、いきなりカーテンが開いて中からことりちゃん和穂乃果ちゃんが顔を見せる。

永「うわあ！」

ポ「きゃー！」

いきなりの事で僕は驚き、後ろに飛び退くとポツピーに当たって倒れる。

永「痛って……！」

ポ「うゝ……びよるゝ……」

永「すいません!!」

ポツピーには簡単ではあるが謝り、すぐに下に降りて病室の扉を開ける。

そこで中を見た僕は、驚きのあまり止まってしまった。

ポ「ああ……コスチュウムチェンジ……」

ポツピーは明日那さんの姿になって下に降りてくるが、立ち止まってる僕に気づかず
にぶつかってしまふ。

けど、すぐに体勢を立て直して同じように病室を見る。

病室内にはいたるところに風船が浮いていたり、可愛らしい部屋に変わっていた。

永・明「ええー……!?」

明「可愛い!!」

永「ちよつと、何言ってるんですか!? ああ、もう……これ何!? まさか穂乃果ちゃん
とことりちゃんがやったの!」

僕は視線を椅子に座っている穂乃果ちゃんのことりちゃんに向けた。

穂「うん! そうだよ!」

こ「ほら、殺風景だったから♪」

永「困るよ、勝手に! 真姫ちゃんはどうしたの!? あと穂乃果ちゃんはいつ来たの!」

穂「私はさつき来たばっかだよ? ことりちゃんからの連絡で急いで来たの!」

こ「真姫ちゃんは用事ができたとかで、少し前に病院に戻って行ったよ」

な、なんでよりによって……!!

真姫ちゃんなら二人を止めると思ったら、いないなんて!

永「はあ……」

絵「な、なんかごめんね」

永「いえ、絵里さんのせいでは無いですし……」

永夢 side out

.....

◎ side

真「永夢がゲーム病?!」

CRから西木野総合病院へと戻った真姫は、飛彩から永夢のゲーム病の事を聞かされていた。

真「それは本当なの?」

飛「……大我の言葉を信用するなら……」

真「……そう……」

真姫は一旦落ち着いて椅子に座る。

飛「……永夢の体からバグスターを分離しなければ……」

飛彩がそう言った時、携帯が鳴る。

飛「はい」

『宝生です。飛彩君に聞きたい事があるんだ』

飛「……今から学校の屋上に来い」

飛彩は携帯を仕舞うと、椅子から立って歩き出す。

真「くれぐれも慎重に行動しなさいよ！」

……

場所は変わって黎斗の隠れ家。

パラドはハンモックで寝っ転がりながらガシャットギアデュアルを眺めていたが、黎斗にガシャットを取られる。

黎「なぜエグゼイドのガシャットを回収しなかった!？」

パ「ふっ……おいおい、俺がお前に手を貸してる理由を忘れたのか？」

黎斗とパラドはお互い見合っていたが、しばらくしてパラドが先に視線をずらす。

パ「……究極のゲーム、『仮面ライダークロニクル』のプレイヤーとして、最高にエキサイティングなゲームを楽しむ。そのためにこれを作ったんじゃないか!!」

パラドはハンモックから降りて、黎斗の手からガシャットギアデュアルを奪う。

パ「この俺が楽しむからには、対戦相手もハイレベルじゃ無いと盛り上がりだろ

!!
」

パラドは机の上に立って興奮気味に叫ぶが、黎斗はさんなパラドを呆れ顔で見る。

黎「……それが宝生永夢だと言いたいのか？」

パ「……あいつを倒すのは、俺だ」

黎「勝手にしろ」

イラついているのか、黎斗は机の上の資料を払い落とした。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

飛彩が学校の屋上に着いた時には、既に永夢が待機していた。

飛「要件はなんだ？」

飛彩が声をかける。

永「飛彩君が僕を攻撃したわけを聞きたいんだ」

永夢の質問を聞いて、飛彩は顔を逸らす。

永「何か、理由があつたんだよね？」

永夢がさらに問うが、飛彩は何も答えない。

それもそのはず、飛彩達が永夢を攻撃したのはゲーム病の治療であり、その事を永夢

に言うわけにもいかなかった。

そのため、永夢に理由を話すわけにはいかないのだ。

飛「・・・俺は、ただ・・・」

飛彩は懐から取り出したゲーマドライバーを装着する。

飛「俺のやるべきことをやっているだけだ」

『タドルクエスト』

飛彩がガシヤットを起動し、ゲームエリアが展開される。

飛「変身」

『ガシヤット！I, m a 仮面ライダー!!』

ブ「出て来いバグスター！」

レベル1となったブレイブが永夢に攻撃する。

永「ちよつ、待って！うわっ！」

永夢は避けながら静止の声をかけるが、ブレイブは攻撃をやめない。

永「くっ！仕方ない・・・」

ブレイブが攻撃をやめない事がわかると、永夢もゲーマドライバーを装着し、ガシヤットを起動した。

『マイティアクションX』

永「大変身！」

『ガシャット！ガツチャ〜ン！レベルアップ！マイティアクションX！』

ブ「術式レベル2」

『ガツチャ〜ン！レベルアップ！タドルクエスト〜！』

エグゼイドがレベル2になったのを見たブレイブは同じようにレベル2になる。

『ステージセレクト！』

場所が変わり、周りには洋風な建物がいくつか立っている。

『ガシャコンソード！』

『ガシャコンブレイカー！』

ブレイブはガシャコンソードを、エグゼイドはガシャコンブレイカーを装備してお互いを攻撃する。

ブ「ふっ！はっ！」

エ「くっ……！」

だが、エグゼイドはブレイブに圧され、徐々に防御に回っていた。

エ「くっ……おいブレイブ！なんで攻撃するんだよ！」

ブ「……はあ！」

エグゼイドは防御しながらブレイブに再び問うが、ブレイブは一瞬止まっただけです

ぐに攻撃を再開する。

エ「ぐわっ！」

ブレイブの斬撃が当たり、エグゼイドは吹き飛ばされる。

エ「くっ……ん？……!？」

エグゼイドはすぐに立ち上がるが、そんなエグゼイドの目の前にゲナムが現れる。

エ「ゲナム……」

ゲ「君のガシヤットを回収する」

………

飛彩と別れた真姫は再びCRへと向かっていた。

真（永夢がゲーム病……）

真姫は頭の中は先ほどの飛彩との話の内容がほとんどだった。

あまりの衝撃の事実にも、真姫は驚きを隠せないでいた。

そして、自分でも何かできることがないか考えていたが、何も思い浮かばなかった。

そうしている内にCRに着いてしまった。

真（とりあえず、永夢の事は飛彩達に任せるとして、今は絵里の方ね）

永夢のゲーム病の問題は自分ではどうする事できないと考え、真姫は今の問題である絵里のゲーム病の方に集中しようと考えた。

だが、CRに入った瞬間、真姫は思わず立ち止まってしまった。

穂「あ、真姫ちゃん！」

こ「用事はもういいの？」

中では患者である絵里のほか、穂乃果とことりがいた。

真「な、な、なによこれ！」

中は先ほど永夢が見た時と何も変わっておらず、とても色鮮やかな部屋のままだった。

真「なんでこんな事になってるわけ!？」

穂「いや、ちょっと殺風景だったから、可愛くしてみたの！」

真「・・・はあく・・・」

穂乃果の言葉を聞いて、真姫は思わずため息をついてしまった。

真（この二人・・・特に穂乃果だけ・・・相手にしてたらそれなりにストレスが溜まりそうね・・・永夢が消滅しなきゃいいけど・・・）

真姫は心の中で永夢の心配をするのだった。

.....

場所は変わってゲームエリア。

そこでは未だにゲンムとエグゼイド・ブレイブの戦いが続いていた。

だが、明らかにゲンムの方が優勢で、エグゼイドとブレイブは圧されていた。

ゲンムがエグゼイドの体を強く押し、ブレイブの方に飛ばす。

ブ「何をしている！」

エグゼイドを受け止めたブレイブはキーホルダーに挿してあるドレミファビートガシャットを手に取り、それを見たエグゼイドはマイティブラザーズXXガシャットを取り出す。

ゲ「レベルアップなどさせない」

ゲンムは二人がガシャットを起動する前にバグルドライバーのA Bボタンを同時に押し、すぐにBボタンを押し。

『クリティカルデット!!』

エグゼイドとブレイブの周りに黒い人の形をした影が地面から現れ、二人にまわりついていく。

ブ「なっ！くっ！」

エ「なんだこいつら!？」

二人は離れることができず、そのまま爆発に巻き込まれてしまった。

『ガツシユーン』

永「くわっ!」

飛「くっ!」

二人とも爆発の衝撃で吹き飛ばされ、変身解除される。

ゲンムはゆっくりと歩き出し、飛彩の前に落ちたタドルクエストとドレミファビートのガシヤットを回収する。

ゲ「これで君はもう変身できない」

飛「くっ、返せ!」

ゲ「ふんっ!」

飛「ぐわっ!」

飛彩はガシヤットを取り返そうとするが、ゲンムに蹴り飛ばされる。

ゲンムは視線を永夢に移すと、ゆっくりと近づいていく。

ゲ「君のガシヤットも渡せ!」

永「嫌だ!」

永夢はゲンムの要求を拒否し、ガシヤットを抱える。

ゲ「ふん！」

永「くう・・・やめろ！」

ゲムムは永夢の服を掴んで無理やり立たせ、そのままガシヤットを奪い取ろうとする。

その瞬間、永夢の両目が赤く光った。

永「やめろっ!!」

ゲ「むっ!・・・くっ・・・」

永夢が叫んだ瞬間、衝撃波のようなものが放たれ、ゲムムは吹き飛ばされる。

それを見た飛彩は驚きの表情を隠せなかった。

永夢の両目はしばらく赤かったが、すぐにもとの黒色に戻る。

目が戻った永夢が後ろを向くと、そこにはパラドが足をゆらゆらさせながら座っていた。

パ「ゲムム、約束が違うだろ」

ゲムムも気づき、パラドの方を見る。

パ「俺の楽しみを邪魔する奴は容赦しない。たとえお前でも」

パラドの言葉を聞いたゲムムは顔を逸らす。

パラドは笑顔になって永夢に話しかける。

パ「永夢、次は俺と遊ぼう！なっ？」

パラドはそう言って姿を消し、ゲムも同じように姿を消した。すぐにゲームエリアも解除され、もとの学校の屋上に戻った。

永「飛彩君、大丈夫？」

永夢はしばらく呆然としていたが、飛彩の事を思い出し、駆け寄る。

飛彩は駆け寄った永夢の手をどかして、立ち上がろうとする。

飛「情けなんか・・No thank youだ」

永「飛彩君のガシャットは僕がなんとかする」

永夢は飛彩にそう言うと、すぐに屋上から出て行く。

その後ろ姿を見て、飛彩は確信したように呟く。

飛「間違いない・・あいつはゲーム病だ。あいつの身体にはバグスターが・・・」

だが、飛彩はすぐに俯く。

飛「だが・・ガシャットがなければ・・」

ガシャットをゲムムに取りられた今、飛彩にゲーム病の治療はできない。

飛彩には、今は何もできなかった。

© side out

・ ・ ・ ・ ・
永夢 side

飛彩君と別れた僕はCRに向かっていた。

飛彩君にはああ言ったけど、黎斗さんの居場所を知ってるわけじゃないし、絵里さんの事もあるし・・・。

永「ああ、どうしよう！」

とにかく、まずは絵里さんのゲーム病を治す事を最優先に・・・。

大「おい、永夢」

永「大我さん？ どうしてここに？」

僕は大我さんに少し警戒しながら尋ねる。

大我さんは僕が警戒してると気づくと、

大「そう警戒すんな。今は攻撃するつもりはない」

永「・・・そうですか。それじゃあ、要件は？」

大「・・・絵里のゲーム病の事だ」

永「え？」

大「一応、俺が原因でもあるからな」

永「・・・分かりました。これからCRに行くところですよ。一緒に行きましょう」

そう言って、大我さんとCRに向かおうとした直後だった。

大「!!避ける!!」

永「えっ?・・・うわっ!!」

いきなりどこからか撃たれる。

急いで辺りを見渡すと、僕達がいる場所よりも高い所からこちらに銃を向けているリボル達バグスターの姿があった。

「スナイプを倒して、我輩は完全な存在になる!作戦開始!」

永「バグスター!」

大「・・・永夢、ここは俺がやる」

『バンバンシューティング』

大「変身!」

『ガシャット!I'm a 仮面ライダー!!』

『ガシャコンマグナム!』

ス「ふっ!」

永「えっ?・・・うわっ!!」

後ろを向くと、大我さんは既にスナイプに変身していてガシャコンマグナムを構えて

いた。

次の瞬間には光弾を放ち始め、急いで避ける。

次にスナイプの方を見ると、既に戦い始めていた。

パ「ふっはっはっは！」

いきなり笑い声が聞こえた。

先ほどまでリボルがいた場所を見ると、パラドと黎斗さんが見下ろしていた。

パ「俺と遊ぼうぜ？ 永夢」

黎「スナイプのガシヤットを回収する」

黎斗さんの腰には既にバグルドライバーが装着されており、パラドはガシヤットを取

り出していた。

永「・・・来ると思ったよ」

僕もゲーマドライバーを装着し、ガシヤットを取り出す。

二人はガシヤットを起動する。

『デンジャラスゾンビ』

『PERFECT PUZZLE』

黎「変身」

パ「変身♪」

『ガシャット！テンジヤラスゾンビ！（Wooooo！）』

『Get the glory in the chain！PERFECT PUZZLE！』

永「・・・オペの邪魔はさせない」

僕もガシャットを起動してドライバーに装填する。

『マイティブラザーズXX』

永「変身！！」

『ダブルガシャット！！ガツチャーン！レベルアップ！マイティブラザーズ！X！』

永夢 side out

・・・・・・・・

◎ side

ス「おらっ！！」

エグゼイドがゲナムとパラドクスの二人と戦い始めた時、スナイプは大量の下級バグスターに光弾を放ちながら戦っていた。

ス「ふっ！」

ホルダーからドラゴナイトハンターZガシヤットを手に取り起動する。

『ドラゴナイトハンターZ』

ガシヤコンマグナムを投げ捨て、ガシヤットをドライバーに装填する。

『ガシヤット!』

ス「第五戦術」

『ガツチャ〜ン! レベルアップ! バンバンシューティング! アガツチャ! ドラゴナイトハンター! Z!』

レベル5になったスナイプは炎を撒き散らし、下級バグスターを一掃する。

ゲ「はっ!」

ス「何!? ぐわっ!」

そんなスナイプに、エグゼイドと戦っていたゲナムが攻撃する。

.....

ゲナムがスナイプと戦い始める少し前、エグゼイドもスナイプ同様レベルアップをしていた。

『ガツチャ〜ン!』

エ「大ーーーーー変身!!」

『ガツチャ〜ン! ダブルアツプ! マイティ! マイティ! ブラザーズ! (ハイ!) XX!』

ER・EL「超協力プレーで、クリアしてやるぜ!!」

ER「俺はパラドクスを攻略する!」

EL「それじゃあ僕はゲムを!」

エグゼイドRがパラドクスを、エグゼイドLがゲムにそれぞれ向かって行くが、

パ「おいおい、両方とも俺が相手だぜ?」

RとLの攻撃はパラドクス一人の簡単に止められる。

EL「くっ!」

ER「おい、離せよ!」

パラドクスがRとLを足止めしている間に、ゲムはスナイプへと向かっていった。

.....

『ガシヤコンスパロー!』

ゲ「はっ!」

ス「ぐっ!」

装備したガシヤコンスパローを鎌モードにしたゲムはスナイプを切りつける。

ス「おらっ!!」

スナイプは右手の武装で攻撃するが、ゲムはスパローで攻撃を止め、すぐに攻撃を繰り返す。

スナイプが攻撃をしてはゲムがそれを弾いては攻撃する、その繰り返しだった。

ゲムはスパローのBボタンを押す。

すると、スパローに紫色のエネルギーがたまり、その攻撃を受けたスナイプは大ダメージを受ける。

ゲ「ガシヤットを渡すか、それとも死ねか……」

ゲムが攻撃の手を止め、スナイプに聞く。

スナイプは立ち上がるとそれに対して答えた。

ス「そんな事、どっちもお断りだ!」

『ガシヤット!キメワザ!』

スナイプはドラゴナイトハンターZのガシヤットをキメワザスロットに装填し、スイッチを押す。

『ドラゴナイト!クリティカルストライク!』

ス「はあ!」

スナイプに右手、左手、顔の部分から赤と青のエネルギーが放たれ、ゲンムに直撃する。

ゲ「ぬう・・・はあ！」

ゲンムは倒れるが、すぐにゆらゆらと起き上がる。

ゲ「私は不死身だ」

ス「くっ・・・上等じゃねえか・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

二人のエグゼイドを吹っ飛ばしたパラドクスは、空中にエナジーアイテムを集め、その中から三つのエナジーアイテムを使用した。

『マッスル化！高速化！透明化！』

次の瞬間、パラドクスの姿が消える。

パ「ふっ！」

エL「うわっ！」

パ「はっ！」

エR「ぐわっ！」

パラドクスは透明化しているため、二人のエグゼイドは視認できずに攻撃を食らう。透明になっていたパラドクスが、先ほどまで二人がいた場所に姿を表す。

パ「フツフツフツ・・・」

ER「くっ・・・見えねえ・・・」

パ「はっ！」

ER・L「ぐあ!!」

再び透明化したパラドクスが攻撃を仕掛ける。

『ガツシューン』

エグゼイドの変身が解除され、一人に戻る。

永「うっ・・・」

パ「どうした永夢？もう終わりか？」

パラドクスは倒れている永夢にゆっくりと近づいて行く。

次の瞬間、パラドクスの背中にいくつかの光弾が当たった。

パ「・・・はあ？誰だよ、今俺を撃つたの？」

パラドクスが後ろを振り向くと、そこには左手の武装をこちらに構えているスナイプがいた。

ス「・・・やらせねえよ・・・、絶対にな！」

スナイプが再び光弾を放つが、パラドクスは右手を前に出してパズル型のバリアを張った。

パ「はあ……たくつ、俺の心を滾らせやがって！」

『KNOCK OUT FIGHTER』

パ「大変身」

『DUAL UP! Explosion Hit! KNOCK OUT FIGHTER!』

パズルゲーマーからファイターゲーマーに変わったパラドクスはガシャットを操作する。

パ「俺の邪魔をする奴は誰であろうとぶつ潰す！」

『キメ・ワザー・デュアルガシャット! ノックアウト! クリティカルスマッシュ!』

パ「ふっ! はああ!」

パラドクスは拳に炎を纏わせ、スナイプに向かって行く。

ス「くっ……?」

スナイプが手を前で構えた瞬間、視界にある存在が映った。

ス「へっ! それはこいつにでも喰らわしておけ!」

スナイプは走り出すと、横で戦いを見ていたりボルを掴んでパラドクスの方に蹴飛ば

した。

ス「おら!!」

「ぬお!・・・ぬあああああ!!」

『K・O!』

スナイプの狙い通り、パラドクスの攻撃はリボルに当たり、リボルは爆発した。

ゲ「何!?くっ・・・・・・・・」

ゲムムは急いでバグドライバーからバグヴァイザーを外し、リボルのウイルスを回収してガシヤットを抜き、変身を解く。

『ガツシユ〜ン』

それと同時にパラドクスも変身を解く。

パ「永夢、お前とガチえやり合える日を楽しみにしてるぜ♪」

パラドは笑顔でそう永夢に告げると、その場から去って行く。

永「・・・・・・・・!あっ!ぐうううう!」

しばらく永夢はその後ろ姿を見ていたが、すぐに頭痛に襲われる。

大「おい永夢、大丈夫か?」

永「・・・・・・・・なんか最近、変身するたびに、頭痛が・・・」

大「何?・・・・・・・・」

永夢の言葉を聞いて、大我は永夢がゲーム病である事を考える。

だが、今永夢にその事を伝えるわけにはいかなかった。

大「・・・とにかく、CRに移動するぞ。リボルは倒されたから、絵里のゲーム病も治ってるはずだ」

永「は、はい・・・」

永夢は大我の手を借りて立ち上がり、そのままCRに向かって歩き出した。